評議員
文學博士 萩野由之　文學士 笹川臨風
文學博士 黒板勝美　文學士 菊池謙二郎
文學博士 松本愛重　文學博士 三宅米吉
（イロハ順）

黒川真道編

國史叢書

安見太平記　芳野拾遺物語
櫻木物語　三人法師
細々要記　底倉之記
共全

國史研究會藏版

評議員
文學博士 萩野由之　文學士 笹川臨風
文學博士 黒板勝美　文學士 菊池謙二郎
文學博士 松本愛重　文學博士 三宅米吉
（イロハ順）

黒川真道編

國史叢書

安見太平記　芳野拾遺物語
櫻木物語　三人法師
細々要記　底倉之記　共全

國史研究會藏版

解題

安見太平記　一卷

本書は、後醍醐天皇より筆を起し、後花園天皇御代の始めに筆をとゞめたり。從來坊間に流行せる太平記・後太平記等の書は、何れも大冊にして、容易に一讀すべからず。作者茲に見るところありて、事件の要を摘み、之を簡單に記し、以て兒童をして悟り易からしめたるなり。されば事蹟に於ては、太平記以上の事柄をも記され、所謂安見の題名を冠せたる事、誠によく適當せるものといふべし。本書坊間極めて尠し、珍書といふべし。元祿二年の出版に係る。奧書に據れば、此の後、元祿までをも作らんとの事を記せれど、こは豫定にて、其の事遂に行はれざりしなるべし。又云、此の書一卷なれども、四卷に綴ぢ分けたることあるべし。そは本の柱に一二三四とあればなり。

芳野拾遺物語　三卷

本書は、後醍醐天皇の延元元年より、後村上天皇の正平十三年に至るまで、南朝に奉仕せし隱士松翁といふ者の、己が記憶を、筆に任せて記したるものなり。本書三卷本は、流布本なり。二卷本は、群書類從に採收せり。先輩の說には、二卷本の方を善本と論ぜり。然れども三卷本は、貞享四年既に出版になり、世間に流布せれば、玆には本書を採收せり、或云、三卷本は、後人の加筆に成れるものなりと。但流布本の奧書にも、先輩種々不審の點を論じたれば、今玆に辯ずるの要なし。此の書、固より一の小說なれば、事實に於ては、深く論ずる迄もなく、取捨は讀者の活眼に任ずるものなり。明治卅二年中村秋香氏、二卷本に據り、吉野拾遺詳解一卷を著せり。本書研究上一讀すべきものなり。

櫻木物語　七卷

本書は、南朝の遺臣等が、吉野に尋ね來り、ありし昔を思ひ出て、懷舊の情に堪へずして、己が記憶の儘を語り合ひ、互に胸中の鬱憤を散じたる事共を、書き記したるものにして、南朝の悲慘なる裏面史の一なり。此の書、黒川藏寫本による。

三人法師　二卷

本書も、南朝裏面史の一にして、或る出家遁世者三人が、高野山に出會し、各〻昔の罪惡或は事實を懺悔物語しけるを記したるものにして、其の内一人は、昔尊氏將軍の近侍糟屋四郎左衞門といふ者の戀物語、一人は、三條荒五郎といふ強盜にして、人を切ること三百八十餘人といふ、大惡無雙の者のなれのはて。一人は、楠正成の遺臣篠崎六郎左衞門といふ者、正成死後、正儀が足利氏へ降參せるを憤り、出家入道して、主家を離れたる者。何れも此の三人が、各〻我が記憶を物語したるを記したるもの。實に當時の時勢を窺ひ知るべき材料なり。此の書、萬治二年版を採す。

細々要記　七巻

本書、國書解題に云、

細々要記寫本七巻　僧實嚴

公武に關する史實を、日次的に記錄したるもの、卽ち建武元年甲戌（一九九四）より、永和三年丁巳（二〇三七）に至る事蹟を記せり。いま天正十九年書寫の奥書ある本によりて解題す云々。

今按ずるに、本書奥書に云、

細々要記七冊、興福寺實嚴僧正所記也。其所載建武元年正月に始り、永和三年十月に終る。興福寺金堂什物也。天正十九年十月書寫了

と、此の本、史籍集覧に採收せり。然るに續史籍集覧には、更に眞本細々要記七巻を採收せり。其の奥書に云、

予、編二史籍集覧一、收二細々要記者七巻一、以爲二興福寺僧實嚴之書一。豈圖實嚴所

レ記、別有ニ眞本之在一、則嚮之所レ收南都之僧所レ記、南北時事無名之別本而已。然其書、因實錄可ニ貴重一者、題爲ニ細々要記一誤矣。予、採レ之則重レ誤者也。爲ニ其書一爲ニ其記一者、不レ可レ不レ辨也。史籍集覽所收七卷宜ニ題曰ニ南北時事一。而此書、就ニ興福寺東金堂所藏實嚴原書之副本一、校而收レ之。乃參考太平記所レ引七卷册子是也。井上賴圀云、曾閱ニ原書一題曰ニ七條(帖)草子一。其爲ニ七卷册子一者、恐彰考館改題也。併記焉、

近藤瓶城識

とあり。然らば從來の細々要記は、別本に名を負せたるものにして、續史籍集覽採收の本を以て、細々要記と定むべきなり。近藤氏の說によれば、從來の細々要記は、南北時事と題すべき由をいへり、題名は兎も角も、事蹟は最も參考に備へらるゝものなれば、本書研究者の爲に、玆に採收したるなり。且本書は、亡父眞賴が、他本を以て校合したれば、研究者には、多少便利よき本といふべし。眞本は、建武元年より筆を起し、至德三年に筆をさしおきたれば、從來の本より九年間の後の事までも記されたり。惜むらくは、卷六を闕きたり。從來の細々要記

は、既に奥書にも見えたる如く、天正十九年より流布せるを以て、今假に書名を改むべきに非ず。猶ほ研究を重ねて、改題すべきものなり。よつて一言其の事を辯じおくなり。

底倉之記　一卷

本書は、南朝の遺臣脇屋義陸の末路を記したるものなり。國書解題に云、

底倉之記　寫本一卷

南朝の遺臣脇屋相模守義陸の戰功を詳記したるもの、晩に應永十年癸未（二〇六三）竊に伊勢に上らんとて、義陸、同義行と共に、箱根山まで上りける時、先年の創傷再發せしより、祖父義助の從者木賀彥六左衞門のもとに忍び、足柄郡底倉の溫泉に浴養したりしを、鎌倉の奉行安藤隼人介、人數を向けて捕へんとせし故、二人相刺して、遂に滅亡したることを記したるなり。書名は、其の死處の名を取りて付けたるなり。

と、見えたる是なり。此の書、黑川藏寫本校本を採す。

大正五年二月

黑川眞道識

例言

一、本編には、安見太平記一卷、芳野拾遺物語三卷、櫻木物語七卷、三人法師二卷、細々要記七卷、底倉之記一卷とを採收す。

一、細々要記、底倉之記は、原本共に片假名なるも、今悉く平假名に改めたり。

一、芳野拾遺物語、三人法師は、原本假名書にして、通讀に晦澁なること甚しきを以て、之を漢字に補改したるもの多し。

一、文字の一定を計り、並に語尾を補ひたる等、編輯上に付きての努力は、既刊書と異ることとなし。

目次

卷第一

櫻木物語

目次終

安見太平記

抑人皇九十五代の帝をば、後醍醐の天皇と申し奉る。御諱は尊治、人皇九十代後宇多の法皇第二の皇子、御母は談天門院藤原の忠子、花山院の內大臣師繼の娘、實は參議忠繼が娘なり。此天皇、其始め太宰の帥に任ずる故に、帥の宮と申し奉る。先帝花園院、御位に卽かせ給ふ時、武家よりの計らひにて、東宮に立ち給ひ、文保二年二月に、御讓を受け御卽位し給ふ。時に御年卅一歲。御父帝後宇多の法皇、御政を執行はせ給ふ。此時に鎌倉の將軍は(九代目)守邦親王、執權は(八代目)北條相模守高時なり。三月、(人皇九十三代)後二條院の皇子邦良親王を東宮に立て給ふ。元應元年正月、北條高時を、修理權大夫に任ず。八月西園寺前の相國實兼の娘禧子を、內裏へ召して中宮とす。安野の中將藤原の公廉が娘廉子中宮に從ひて大內へ參る。天皇、之を御寵愛し給ふ。三位の局といふ。後に准后となる。其外宮女多くして、腹々に男女の皇子數多お

北條高資專恣

はします。二年五月、六波羅の北の方北條時敦死す。元亨元年四月、後宇多の法皇、大覺寺の金堂を建てさせ給ふ。五月、當時、大覺寺に行幸おはします。六月、鎭西の探題北條の兼時死す。此年の夏、大いに旱しければ、天皇、檢非違使の別當藤原の經宣に仰せて、粟を出して貧しき民を賑はし、又洛中に富める者の貯へ置ける米を、やすく賣して、飢を救ひ給ふ。自ら記錄所へ出御あつて、訴をあきらめ給ふ。十二月、北條の高時一族常盤駿河守範貞を、六波羅の北の方に置き、北條の英時を鎭西の探題とす。此頃、高時が內管領長崎圓喜入道、老耄に依りて、其職を嫡子高資に讓る。高資誇りて、高時を蔑にして、逆に權威を振ふ。二年正月、天皇、法皇へ朝覲の行幸おはします。管絃の御遊あつて還御。五月、奧州の安藤五郞・同又太郞爭ふ事あり。長崎高資、兩方より賂を取りて、私あるにより、安藤謀叛す。又同じき頃、攝津の渡邊・紀州の安田・大和の越智などといふ者、武家に背けり。承久より以來百年餘、北條家の下知を背く事、此安藤より始まる。天皇、元より武家の恣なるを御憤ある上に、高時が酒色に耽り、高資がさかしまなる權威、皆人倫に外れたりと、叡聞に達し

後宇多法皇大覺寺に入らせ給ふ
元亨釋書を上る
後宇多法皇崩御
惟康親王薨去

給ひ、密に御近習の臣下と、鎌倉を亡さんと謀り給ふ。六月、諸の臣下を召して、五經・三史の論議を聞召し給ふ。此時分、後宇多の法皇、大納言藤原の定房を關東へ遣され、政を當今に任ぜられ、隱居せんと仰せらる。武家別儀なきに依りて、大覺寺へ入らせ給ふ。八月、東福寺の師錬、虎關なり、元亨釋書を奉る。正中元年三月、天皇、石清水へ行幸。四月、賀茂へも行幸。六月、後宇多の法皇崩御まします。御年五十八歲。八月、六波羅南方の北條の惟貞、鎌倉へ歸る。九月、土岐の頼員・多治見國長、天皇の御謀叛に從ひ、鎌倉を亡さんとする謀顯れければ、六波羅の範貞、軍兵を遣して、頼員・國長を討取る。二年五月、日野の中納言資朝・日野の右少辨俊基召捕へられて、鎌倉に赴く。此兩人は、天皇御近習の臣下にて、關東を亡し給はんとする謀を知る故なり。七月、萬里の小路の大納言宣房を、鎌倉へ遣され、告文を高時に賜はり、宥めらる。是に依りて、資朝は佐渡の國へ流され、俊基は許されて、京へ歸る。爰に於て、京・鎌倉無事なり。八月、禪僧疎石夢窓國師を南禪寺の住持とす。天皇、是より禪法に傾き給ふ。十月、前の將軍七代目惟康親王薨ず。年六十二。嘉曆元年三月、東宮邦良薨

北條高時剃髪

久明親王薨去

大塔宮

ず。年廿四。同じき月、北條の高時、病によりて髪を剃り、崇鑑と號す。時に年廿四。其弟左近の大夫泰家に、執權を讓り、金澤の貞顯と連判させんとす。長崎高資同心せず。泰家怒つて、髮を剃り、惠性と名付く。貞顯も同じく髮を剃る。北條の守時・北條の惟貞、連判執權しけれども、高時が旨を受けて執行へり。七月、（人皇九十二代）後伏見上皇の御子量仁親王を、東宮に立て給ふ。天皇の皇子、數多おはしますと雖も、東宮を立て參らする事は、關東よりの計らひなれば、叡慮に任せ奉らず。二年正月、禪僧正澄、元朝より日本へ來る。鎌倉の建長寺の住持とす。正澄は淸拙をいふ。十月、北條の惟貞死す。三年十月、前の将軍（八代日）久明親王（南将軍守邦父）薨ず。年五十五。十二月、天皇の御子尊雲法親王を天台座主とす。此法親王、武勇を好み給ひ、密に鎌倉を討つべき志あり。大塔の宮是なり。元德二年三月、天皇、東大寺・興福寺・比叡山へ行幸。是は密に彼僧徒等を語らひ、武家を討たん御謀なり。大塔の宮、尤も其張本たり。五月、僧圓觀・文觀・忠圓等召捕へられ、鎌倉へ下る。此僧等敕を受け給はりて、武家を調伏する故なり。皆流さる。日野の資朝、佐渡の配所に居けるを、本間

楠正成を召させらる

天皇六波羅に送られ給ふ

といふ武士、高時が仰を受けて、之を殺す。資朝が子阿新といふ童、本間を殺して、父の仇を報ゆ。六月、北條の茂時執權となる。七月、日野の俊基、再び鎌倉へ召寄せられて殺さる。九月、長崎高資が一族高頼に言付けて、高資を殺さんとす。其事顯はれければ、高頼却つて奥州へ流されて、高資いよ／＼奢る。鎌倉の政衰へて、人皆背く。又之を叡聞あつて、鎌倉を謀り給ふ御志あり。元弘元年三月、北山へ行幸。花見の御遊あり。八月、關東の使兩人都へ上る。主上及び大塔宮を流し奉らん爲めなり。主上懼れさせ給ひて、密に笠置山に行幸。萬里の小路の中納言藤房等供奉。花山院大納言師賢は、僞つて、天子の眞似をして、叡山を攻む。此間に、主上は笠置へ入り給ふ。師賢も笠置へ參る。主上、河内の國の武士楠正成を召して、軍の事を任ぜらる。正成、河内へ歸りて、義兵を擧げ、赤坂山に籠る。九月、關東の大軍、笠置を攻め破る。主上、山を出で、逃げさせ給ふ。路次にて捕はれて、六波羅へ入れ奉らる。又軍兵を發して、赤坂の城を攻む。正成、暫く拒ぎて後、密に城を出で、金剛山へ隱る。大塔の宮は、十津河の邊に隱れ給ふ。藤房・季房等の

光嚴天皇御即位

後醍醐天皇隱岐へ流れさせ給ふ。

御近習の臣下、皆捕へらる。一の宮尊良親王以下の皇子、皆生捕へられ給ふ。此代の年號、元應二年・元亨三年・正中二年・嘉曆三年・元徳二年・元弘一年、合せて御在位十三年。

九十六 光嚴院。人皇九十二代後伏見院第一の皇子、御母は廣義門院、西園寺の左大臣公衡の娘なり。元弘元年十月、先帝、笠置より六波羅へ入り給ふ時、武家の計らひにて、西園寺の大納言公宗に談合して、御即位し給ふ。人皇九十三。後二條院の御孫邦良親王の子康仁親王を東宮とす。正慶元年三月、常盤範貞、六波羅の役を辭退す。北條の越後の守仲時・北條左近の將監時益、兩六波羅に言付けられて都へ上る。仲時は北の方にあり、時益は南の方にあり。範貞鎌倉へ歸る。同じき月、高時が使者長井高冬上京し、兩六波羅相談にて、先帝後醍醐天皇を隱岐の國へ流し奉る。一の宮尊良親王は、土佐へ流し、妙法院尊澄法親王は、讃岐へ流し參らする。大塔の宮は、彼方此方へ隱れ、還俗して名を護良と改めて、吉野の城に籠り給ふ。四月、楠正成、又赤坂の城を攻取る。五月、先帝の御近習の臣下、或は殺され或は流さるゝ。同じき

正成千劒破城に籠る

新田義貞兵を擧ぐ

月、正成、天王寺の邊に出張。六波羅より隅田・高橋等を遣し討たしむ。敗軍して歸る。七月、宇都宮公綱、六波羅の旨を請けて、正成と合戰す。八月、赤松圓心、播磨の苔繩の城を構へて、先帝の御方となり、正成、千劒破の城を築きて栖籠る。九月、高時、其一族大佛貞直・阿曾の時治、并に二階堂道蘊等を大將として、大軍を催し、上洛せしむ。二年正月、關東の大勢相分りて、大塔の宮の籠り給ふ吉野の城、正成が籠れる千劒破の城、并に正成が郎等の籠る赤坂の城を攻む。二月、赤坂の城攻落さる。其次に、吉野の城攻落さる。大塔の宮、既に危かりしが、村上義輝并に其子義隆防いて、討死しける間に、大塔の宮免かれて、深山に隱れ給ふ。其後諸方の軍兵、皆千劒破城を取卷きて攻む。數千萬に及べり。正成さまざまの計を運らして防ぐ故、寄手多く討たる。新田義貞も、此寄手の内に加はつてありしが、密に大塔の宮と通じて、上野の國に歸りて、義兵を起さんとす。同じき月、赤松圓心、攝州摩耶の城へ出張。伊豫の國にて、土居得能等義兵を起す。三月、赤松圓心京へ攻上る。是に依つて、新帝六波羅へ行幸。兩六波羅暫く赤松と合戰。此頃筑紫にて、菊池寂阿・少貳

後醍醐天皇隱岐を出でさせらる

名和長年擧兵

光嚴天皇關東へ御遷幸

妙惠・大友具簡、相謀りて、探題北條英時を攻めんとする所に、二人却つて、英時を救ふ故に、菊池討たれぬ。同じき月、先帝後醍醐天皇、「窃に隱岐の國を遁れ出でさせ給ひ、伯耆の國へ赴き、名和の長年を頼みて、船の上山へ入り給ふ。山陽道・山陰道國々の武士、多く來りて從ひ奉る。同じき月、叡山の衆徒、大塔の宮の旨に應じて、兵を起して京へ攻入り、六波羅の武士と合戰。山徒敗軍す。先帝船の上山より、千種の中將忠顯に軍勢を副へて、京を攻めしむ。六波羅と合戰。忠顯軍利あらず。同じき月、高時、其一族名越尾張守高家を大將とし、足利治部大輔高氏を疑ひければ、高氏、其弟直義が謀を用ひて、誓紙を書いて、示すに依り、高時疑はず。上洛の後、高家は赤松と戰ひて討死す。高氏は、先帝の御方となりて、赤松等と心を合す。高氏暫く京を出て、丹波へ赴く。近國の武士從ふ者多し。則ち其勢を率ゐて、五月七日、忠顯・赤松幷に大塔の宮の候人出頭の類といふ法印良中等と、狀を以て言合せ、六波羅を攻破る。八日、兩六波羅仲時・時益、新帝並に後伏見上皇・花園上皇を具し奉り、京を出て、關東へ赴く。時益は流矢に中つて死す。近江の番馬に到る時、敵已に道を遮

天皇捕はれ給ひ御還幸あらせらる

るによりて、仲時以下郎等皆自害す。新帝並に兩上皇、皆捕はれ給ひ、京へ還御。千劒破の寄手も退きて、南都へ落ち行く。同じき月八日、義貞、上野國にて義兵を起して、鎌倉を攻む。高時、弟惠性等を以て防がしむ。武藏の國にて度々合戰。關東の軍勢、皆々高時に背きければ、惠性、終に破れて鎌倉へ歸り、義貞續いで鎌倉へ攻入り、北條の守時・北條の基時自害。守時は長時が孫にて、赤橋と號す。高氏の妻は、守時が妹なり。基時は、六波羅の仲時が父なり。大佛貞直・金澤貞將等、所々にて討死す。長崎高重は、圓喜が孫なり。勝れたる勇士にて、度々戰ふ。力盡きて自害。高時も東勝寺にて自害。廿二日なり。北條の茂時は、執權當職なるに依りて、鎌倉の殿中にて自害。金澤貞顯入道・常葉範貞等の一族、城の圓明・長崎圓喜等の郎等皆自害。同じき日、將軍守邦親王髮を剃る。年廿三。同七月に卒す。高時が嫡子邦時は、生捕られて殺さる。二男時行は、信濃へ落ち行き、惠性は、奥州へ落ち行く。同じき月、筑紫に軍起つて、探題英時も、少貳大友に討たれぬ。長門の探題北條の時直は降參しぬ。其外、國々に居ける北條の一族、或は討たれ、或は逃げ隱れ

高時討たれ北條家滅亡

後醍醐天皇御入洛

尊氏と義貞

後醍醐天皇御重祚

大塔宮征夷大將軍に任ぜらる

て亡びぬ。高時は九歳にて家を繼ぎ、十四歳にて執權。當職、十一年。髮を剃り、其後七年を經て亡ぶ。歳卅一なり。治承四年、頼朝鎌倉に入りしより今年迄、將軍九代・北條執權八代、合せて百五十四年なり。此帝御在位、僅に二年。年號正慶。

後醍醐天皇重祚。正慶二年五月、六波羅攻落さるゝ趣、高氏幷に忠顯・圓心等、船の上山へ註進申しければ、天皇則ち御入洛し給ふ。播磨の書寫山にて、義貞より、高時亡ぶる由を註進す。楠正成、兵庫にて迎ひ奉る。六月、御京着し給ふ。高氏、鎭守府將軍に補し、治部卿に任じ、從四位の下に敍す。直義、左馬頭に任ず。高氏は、源の義家よりは十代、足利左馬の頭義氏が六代の孫にて、淸和源氏の秀なれども、代代北條と內緣を結んで和親しき故、所領は多かりき。義貞は、是も義家よりは十代、新田の義重が七代の孫なり。然れども北條に疎ぜられける故、其家微なりしが、今度勢に乘りて、大いなる功を立てたり。主上既に重祚ありて、元弘の亂に流されし輩、皆召返さる。同じき月、大塔の宮、征夷大將軍に任ぜられ、入洛し給ふ。高氏が天下を望みて、遂には朝敵となるべき勢あるを知りて、急に殺さんとす。主上御許な

大塔宮尊氏を討たんと謀らる

し。高氏懼れて、大塔の宮の繼母准后廉子に賂をして、難を免る。七月、千劒破の城の寄手の大將、數多降參しけるを、皆誅せらる。八月、高氏從三位に敍し、武藏守に任ず。尊の字を賜はりて、高氏を改めて尊氏と號す。主上、既に公家一統の政を施さる。然れども准后廉子等、御寵愛に奢り、口入を申さるゝに依りて、賞罰正しからず。天下却つて、武家を慕ふ。中納言藤房、より〳〵諫め奉れども、御承引なし。十月、北畠の顯家、（親房の子）陸奧の國司に任じて下さるゝ。出羽・陸奧の兩國皆從ひぬ。建武元年正月、尊氏正三位に敍せらる。同じき月、大内裏造らるゝに付、事始めあり。同じき年の春、尊氏に武藏・常陸・下總を賜はる。義貞に、上野・播磨を賜はる。直義に遠江を賜はる。義貞が弟脇屋義助に、駿河を賜ふ。嫡子義顯に、越後を賜ふ。正成に攝津・河内、長年に因幡・伯耆を賜ふ。其外の者に、恩賞猶多し。赤松圓心獨り賞を賜はらず。是に依りて、天皇を恨み奉る。五月、大塔の宮を關東へ流す。直義之を預りて、鎌倉二階堂の籠の中に入れ參らする。繼母准后、尊氏兄弟に賴まれ、讒言せられし故、大塔の宮の候人法印良忠等殺さる。主上の八の宮成良

大塔宮關東へ御流竄

成良親王

征夷大將軍に任ぜらる

藤房遁世

尊氏自ら征夷大將軍と稱す尊氏義貞不和

親王を、征夷大將軍とし、直義を執權として、相模の守に任ぜられ、鎌倉に居らしむ。七月、紫宸殿の上に、怪しき鳥鳴き渡る。隱岐の廣有、之を射る。九月、尊氏參議に任ず。二年二月、內裏へ、出雲國より龍馬進覽す。三月、中納言藤房遁世す。西園寺大納言公宗、北條高時が弟惠性と謀叛す。惠性還俗して、時興と名乘る。高時が子時行は關東に起り、其一族名越時兼は、北國に起る。公宗は、其事顯はれて誅せらる。七月、時行、信濃より起りて、鎌倉を攻む。直義、成良親王を具し奉りて、鎌倉を出づる。此時使を遣して、大塔の宮を殺す。尊氏敕を奉り、時行追討の爲に、東國へ赴く。八月、遠江・駿河・伊豆・相模の間にて、十餘度戰ひて、時行破れて、行方知らず。時兼は、北國にて亡びぬ。是より關東の武士皆尊氏に隨ふ。尊氏自ら征夷大將軍と稱す。年來新田義貞と功を諍うて不和なる故、義貞を討たんと奏聞す。義貞、又尊氏が逆心あることを奏聞す。此時、直義、恣に大塔の宮を殺す。事顯はれしかば、主上逆鱗あつて、義貞を以て、尊氏を討たしむ。十一月、義貞都を出て東に赴く。一の宮尊良親王、東國の管領に任ぜられ、同じく下らる。參河の矢矧・鷺坂・手

義貞敗軍

北畠顯家擧兵

尊氏筑紫へ落つ

越にて、直義と戰ひて、義貞毎度利を得たり。十二月、箱根竹の下の合戰には、尊氏・直義向ふ。官軍討負けて、尊良親王・義貞都に歸りしかば、關東は申すに及ばず、北國・西國・南海所々の武士、尊氏に應ずる者多し。延元元年正月、尊氏・直義大軍にて上洛。義貞・義助・正成・長年等、大渡・山崎・勢田にて、防ぐと雖も、大敵勢强きに依りて、義貞敗軍して都に歸り、主上を叡山へ臨幸なし奉り、夫より尊氏都に入り、内裏・京中燒くる。細川定禪を三井寺へ遣し、叡山を攻めんとす。同じき月、奥州の國司北畠の參議源の顯家、兵を率ゐて、叡山に到る。義貞・顯家・正成等、三井寺を攻破る。定禪都へ歸る。義貞等の官軍、兩三度都へ攻入り、毎度利を得て、尊氏、京都を落ちければ、二月、主上叡山より還幸。此度も正成、樣々の計を運らして、功を立てたり。同じき月、義貞・顯家・正成等、尊氏を追懸け、攝州豐島にて合戰。尊氏討負けて筑紫へ落行く。是に依つて、義貞都に歸る。左中將に任ぜらる。菊池武俊、九州の勢を催し、尊氏を攻む。筑前の多々良の濱にて合戰。菊池討負けて、九州、尊氏に隨ふ。此時義貞、勾當の内侍といふ美人に惑うて、西國下り相延ぶる内に、赤松圓

後伏見院崩御

楠正成討死

尊氏入洛

名和長年討死

尊氏北朝擁立

心を始め、西國の兵尊氏に靡けり。三月、顯家中納言に昇り、鎮守府將軍に任ぜられ、再び奥州へ下る。義貞は、山陽道・山陰道・十六箇國の管領を許され、西國へ下り、先づ播磨の赤松が城を攻む。四月、後伏見院崩御し給ふ。御年四十九。此院崩御以前に、密に尊氏に院宣を賜はる。同じき月、尊氏・直義、大軍を率ゐて、筑前を出づる。五月、義貞退いて兵庫に陣取る。正成に敕して、義貞を救はしむ。正成、謀を奉ると雖も、御承引なきに依りて、兵庫へ赴き、義貞に加はり、尊氏と合戰。正成は湊川にて討死し、義貞は敗北して都に歸り、主上を又叡山へ臨幸なし奉る。又尊氏は都へ入る。花園上皇を東寺へ請じ奉りて、持明院方の皇統を立てんとす。六月、尊氏高の師重等を遣し、叡山を攻めしむ。寄手打負けて、師重生捕となる。七月、義貞度々京を出て合戰すと雖も、毎度官軍利あらず。名和の長年討死す。義貞自ら東寺へ押寄せ、尊氏とぢき〴〵にて、勝負を決せんとす。尊氏從はず。義貞怒りて山へ歸る。八月、光嚴上皇の御弟豐仁、尊氏の計らひにて、京都にて御卽位。建武の年號を用ふ。十日、主上、後醍醐、東宮恒良親王を義貞に附け給ひ、北國へ赴かしむ。

建武式目を定む
吉野へ遷幸
正行參內
光明天皇御即位
金ヶ崎城陷る

主上は尊氏に欺かれ、都へ出て給ひけるを、花山院に押籠め奉る。足利の高經・高の師泰等を北國へ遣し、義貞が籠れる越前の金ヶ崎の城を攻めしむ。十一月、尊氏大納言に任ず。建武式目十七箇條を定む。天下又武家の代となれり。十二月、主上、後醍醐、密に都を逃げ出で給ひ、吉野へ遷幸。楠正成が子正行參りて守護し奉る。古の臣下等來り從ひ奉る。是より吉野をば南朝と號して、帝王二人おはします。

九十七 光明院。人皇九十二 後伏見院第四の皇子、此時、花園上皇をば本院と稱し、光嚴院をば新院と號す。建武四年南朝後醍醐天皇延元二年三月、尊氏の諸將軍、金ヶ崎の城を攻落す。義貞・義助、密に瓜生が杣山の城に隱る。義貞が嫡男義顯自害。尊良親王も自害し給ふ。東宮恒良親王は、京へ歸り給ふ。其後、直義之を害す。八月、奥州の國司顯家、軍を起し、十二月、鎌倉を攻む。義貞が次男義興、是に隨ふ。又北條の時行も相加はる。尊氏の長男義詮、戰負けて、鎌倉を逃げ去る。暦應元年正月、顯家・義興等上洛。路次美濃の青野が原にて、尊氏の大將桃井直常と合戰す。同じき月、義貞・義助、杣山より出てて、越前の府の城を攻取る。足利高經逃げて黑丸の城に入る。義貞、

顯家戰死

義貞戰死

尊氏征夷大將軍に任ぜらる

後醍醐天皇崩御

後村上天皇御卽位

北畠親房

勢北國に振ひ、京都を攻むるの志あり。二月、顯家、吉野へ赴かんとて、路次八幡南都にて、高の師直・桃井の直常等と度々合戰。五月顯家戰破れて、和泉の阿部野にて討死す。年廿一。顯家が弟顯信并に新田義興、八幡に籠る。六月、師直、八幡を攻破る。七月、義貞、越前より狀を叡山へ遣し、山徒と示し合せ、都へ入らんとす。閏七月二日、義貞黑丸の城を攻めて、流矢に當りて死す。年三十七。義助、敗軍の勢を集めて、越前の府に歸る。義興は、東國へ歸り、顯信は、奧州へ赴く。八月、尊氏正二位に敍し、征夷大將軍の宣下あり。直義、從四位の上に敍し、左兵衞督に任ず。高の武藏守師直、武家の執事職に任じて、其弟師泰と、皆權威を振へり。尊氏は政道を自らせず、直義に任せて、執行はしむ。師直兄弟、直義と睦しからず。同じき月、南朝後醍醐の天皇、吉野にて崩御おはします。御年五十一。重祚の後、六年に及べり。則ち第七の皇子義良親王御卽位。後村上天皇是なり。御母は准后廉子なり。北畠の大納言源の親房、南帝の助けたり。洞院の實世・四條の隆資、諸事を執奏す。親房は顯家の父なり。博學才能ありて、書を多く著せり。其子顯信、奧州の國司に

任ぜらる。其次の子顯能、伊勢の國司に任ぜらる。二年七月、脇屋義助、北國の兵を集め、越前黑丸の城を攻落す。城主高經、加勢を乞ふ。京都より大勢赴きければ、義助破れて、美濃へ落行き、夫より吉野へ參る。義助に與せし北國の城々、皆攻落さる。畑の時能といふ勇士、僅か廿七人にて、鷹巢の城に籠りし計り、久しく怺へしが、是も月を經て討たれて、北國等しく治まる。今年南朝、興國と改元す。三年、出雲の鹽谷判官高貞、高の師直が讒言に依りて誅せらる。四月、脇屋義助、南帝の敕

脇屋義助病死

を請けて、南海道へ赴き、四國を平げんとす。五月、義助、伊豫の國にて病死す。尊氏の大將細川頼春軍を起し、義助に隨へる輩を討平げて、四國悉く治まる。今年、禪僧疎石が勸によりて、尊氏・直義、天龍寺を建立す。疎石を開山とす。夢窻國師是なり。康平元年九月、土岐の賴遠、光嚴上皇の御幸に行き逢うて、狼藉に及ぶ。直義怒つて賴遠を誅す。十二月、尊氏の母藤原の淸子卒す。是は上杉賴重が娘なり。此好（よしみ）によりて、上杉の一族、威を振へり。三年正月、尊氏、石淸水へ參詣。九月、直

天龍寺供養

義從三位に敍す。貞和元年八月廿九日、天龍寺供養。尊氏・直義參詣。夢窻國師、尊

師たり。花園の上皇・光嚴の上皇も、御幸あるべき御沙汰ありし所に、山門、南都大いに怒りて、訴ふるに依りて、其日は御延ありて、明くる日御幸あり。同じき年、備前兒島の三宅高德、義助が子義治を取立て、密に京へ上り、尊氏・直義を夜討にせんとす。其事顯はれて、信濃の國へ逃げ去る。二年、南朝、正平と改元す。四年八月、楠正行兵を起して、河內より攝州へ出張。尊氏より、細川顯氏を遣し討たしむ。藤井寺にて合戰。顯氏敗軍す。正行、密に京へ上り、尊氏・直義の館を、俄に攻めければ、尊氏は免れて、近江へ逃げ行き、直義は、兼て地道を掘りて置きける故に、其道より逃げ出づる。正行、河內へ歸る。是に依りて、尊氏・直義は都へ歸る。同じき月、主上御位を、御甥興仁に讓り給ふ。年號建武一年・曆應四年・康永三年・貞和四年、御在位合せて十二年。

九十八　崇光院。人皇九十六　光嚴院の御長子、御母は陽祿門院藤原の秀子、三條大納言公秀が娘なり。御卽位の時、御年十五。花園法皇の御子直仁を、東宮に立てらる。十一月、花園の法皇崩御ましますゆ。萩原の院とも申し奉る。同じき月、尊氏、山名時氏、

四條繩手の戰

正行戰死

細川顯氏を遣して、楠正行を討たしむ。住吉安部野の邊にて合戰し、京勢大いに破れて歸る。十二月、武家の執事高の師直・師泰、大軍を率ゐて、正行を討つ。五年正月、師直、四條繩手にて正行と合戰。正行大軍を討破り、師直既に危かりしが、能く防ぐ故、正行矢に當りて討たれぬ。年廿六。其弟正時幷に其一族、多く亡びぬ。師直進みて吉野へ攻入る。南帝、賀名生へ落ち給ふ。師直は京へ歸る。師泰は、河內の石川河原に陣を取りて、正行が弟正儀と向ひ居る。是より師直、惡逆淫亂にして彌々奢りて、尊氏・直義をも輕しめければ、上杉重能・畠山直宗、之を妬み憎んで、天龍寺の僧妙吉と相語らひ、師直が惡を直義に訴へて、誅せんと謀る。直義同心す。尊氏の落胤の子に、直冬といふあり。尊氏之を疎み、遠ざけけるを、直義、取立て丶、西國の探題とし、己が助と〔す脫カ〕八月、直義、館へ師直を呼寄せ、誅せんとする時、師直悟りて私宅に歸り、師泰を河內より呼返し、軍勢を催し、尊氏・直義を圍む。是に依りて、直義は政道を止められ、重能・直宗は越前へ流され、遂に殺さる。妙吉は行方知らず。十月、尊氏の長男義詮、鎌倉より上洛。直義に代りて政を行ふ。師直權

足利直義剃髮

を恣にす。義詮の弟基氏を、鎌倉の管領とす。高の師冬、上杉憲顯、其家老たり。十二月、直義、髮を剃りて惠源といふ。年四十二。初め尊氏、鎌倉を出でしより以來、大塔の宮を害し、朝敵となり、世を奪ひし事、多くは直義が邪なる謀より出でたり。故に其功に奢り、威も重くして、近年尊氏に代つて、政を執れり。壯年過ぐる迄、子なかりしが、四十に餘り、初めて男子を產めり。是より師直誅伐に事寄せて、密に世を奪ふ志もありけるにや、觀應元年の夏、直冬、筑紫にて義兵を起す。石見の國の侍三角の入道、國中を平げて、直冬に隨ふ。六月、三角退治の爲め、師泰石見へ赴く。八月、義詮參議に任じ、左中將を兼ねらる。十月、直冬誅伐の爲めに、尊氏幷に師直西國へ赴く。義詮、京都の守護たり。直義入道惠源密に京を出て、吉野へ降參す。則ち大將の宣旨を蒙る。二年正月、惠源、南方の軍兵を催し、京を攻めんとす。桃井直常、是に從うて、北國より攻上る。義詮都を落し、直常都へ入る。之を聞きて、尊氏幷に師直京へ歸り、直常と合戰。直常敗軍。然れども人皆師直を睨んで、惠源に隨ふ故、尊氏・師直は、又西國へ落行く。義詮は丹波へ落行く。直常又都へ入

高師直師泰討たる

直義病死

る。二月、師泰、石見より歸りて、尊氏・師直と播磨に參會。一つになりて兵を集め、攝州光明寺・小清水、所々にて惠源と合戰。毎度尊氏討負けしかば、松岡の城に籠り、自害せんとす。此時惠源と和睦の儀調りて、尊氏・惠源・義詮、皆都へ歸り、師直・師泰は、髮を剃りて降參しけるを、路次にて二人共に討死す。其一族、皆々所々にて殺さる。高の師直も、關東にて殺さる。七月、尊氏・惠源、再び不和なり。惠源、北國へ赴く。九月、尊氏北國へ赴かんとす。惠源、北國より關東へ赴き、鎌倉へ入る。續いて尊氏、關東へ赴く。義詮、都の守護たり。十一月、尊氏駿河の薩埵山に陣を取る。又惠源、關東の大軍を催し、尊氏を圍む。十二月、宇都の宮公綱、藥師寺の公義等、尊氏に從ひて、薩埵山の後攻しけるに依りて、惠源大きに破れて、尊氏へ降參す。尊氏、之を携へて鎌倉へ入る。幾程なく惠源は病死せり。或は毒を進めて、害せらるともいへり。此間、京都の兵少くして、危かりけるに依りて、義詮、南帝と和睦。南帝詐りて御承引あり。是に依りて、觀應二年を改めて、南朝の年號正平六年を用ふ。二條の關白良基を始めとして、百官皆々吉野へ參る。吉野伺候の輩、皆官位

細川顯能後村上天皇を押し籠め奉る

に進む。北畠の大納言源の親房、准后の宣旨を蒙る。南帝の舅にて、勳ある故なり。明る年の二月、南帝、吉野を出でゝ住吉天王寺に行幸。伊勢の國司源の顯能、兵を率ゐて參る。卽ち八幡へ行幸。顯能幷に楠正儀等を以て、俄に京を攻めしむ。義詮、近江へ落ち行き、細川賴春討死す。顯能、敕を受けて上洛し、持明院殿へ參り、本院(光嚴)・新院(光明)・主上(崇光)・東宮(直仁)を御車に載せ奉り、吉野の奥賀名生に押籠め奉る。主上、御在位纔に三年にして、捕はれ給ひしかば、平安城に主なくして、荒廢(あれすた)るゝ地となれり。兵亂打續きける故に、御禊・大嘗會も行はれず。此頃關東には、故義貞の三男左少將義宗、其別腹の兄義興、幷に義助が子義治、義兵を起し、尊氏と武藏野にて合戰。此戰に、石堂入道、密に新田と通じ、尊氏を討たんと謀る。其子右馬の助同心せず。故に石堂恐れて、新田方へ加はる。義興・義治は、鎌倉へ攻入りて、基氏を攻めければ、基氏遁れ走る。其後笛吹峠にて、尊氏・義宗合戰し、義宗討負けて越後へ赴く。尊氏又鎌倉を攻めければ、義興・義治退いて、河村の城に降る。三月、義詮勢を催し上洛。八幡を攻めて度々合戰。五月、南方の官軍破れて、南帝、八幡を落ち

て吉野へ還幸し給ふ。

[九十九] 後光嚴院。御諱は彌仁。崇光院御同腹の御弟なり。崇光院は、南方へ捕はれ給ひ、南帝も八幡を去りて、吉野へ還幸に依りて、義詮の計らひにて、觀應三年八月、彌仁御卽位し給ふ。時に御年十五歲なり。三種の神器も、皆南方へ渡しぬれば、御卽位いかゞと申す輩ありと雖も、武家强ひて申行へり。九月、文和と改元す。十一月、主上の外祖大納言公秀、內大臣に任ず。二年、山名時氏・其子師氏謀叛して、南朝方となる。是は去年、八幡の合戰に、師氏軍に、手柄あるに依りて、義詮に出頭しける佐々木道譽を賴みて、恩賞を望む。道譽奢りて、師氏に對面せず。故に師氏怒つて、本國伯耆へ歸り、父時氏を勸めて軍を起せり。五月、伯耆を出でて、六月、吉野の官軍と、狀を以て言合せ、夫より都へ攻上る。義詮敗軍し、主上を伴ひ奉り、坂本へ落行く。夫より東國へ行幸。敵追來りければ、路次にて、道譽が子秀綱討死す。主上をば、細川淸氏後に負ひ奉りけりとなん。美濃の垂井に、暫く皇居（皇居とは天子のおはしますところをいふ）を定めて、義詮守護し奉る。諸國の勢を集めて、山名を討たんとす。山名父

子勢盡きて、伯耆へ歸る。義詮、主上を守護して、都へ還幸あり。三年の春新田義興・脇屋義治、河村の城を遁れ出づる。東國靜まりければ、尊氏、畠山國清を、基氏の家老として、關東を守らしめて、尊氏は都へ歸り、仁木左京大夫頼章を、武家の執事職に任ず。義詮を播磨に赴かしめ、勢を催し、山名を討たしむ。山名之を聞きて、直冬を迎へて大將とす。是に依りて、直冬、南帝の方となりて、尊氏と父子の合戰始まる。越前の足利高經・越中の桃井直常も、尊氏に恨あるに依りて、直冬に隨ふ。北國より京を攻めんと約束す。十二月、山名時氏、伯耆を打立ち、四年正月、尊氏、主上を伴ひ奉り、近江へ落行く。直冬幷に時氏・高經・直常都に入る。二月、尊氏、東國の兵を催し、東坂本に陣を取る。義詮は、西國の勢を催し、神内に陣を取る。時氏・師氏、神内を攻む。細川頼之・赤松則祐・佐々木道譽等、能く防ぎければ、師氏疵を蒙りて敗軍す。直冬以下、東寺の城に籠る。是より尊氏・直冬、都の中東寺にて、合戰度々に及ぶ。仁木・細川・土岐・佐々木・赤松等、前後尊氏に二心なくして、軍の功あり。三月、南方の兵糧少きに依りて、直冬・時氏・高經・直常、皆其本國へ分れ去る。尊氏・義

尊氏逝去

新田義興討たる

菊池武光起る

詮都へ歸る。其後高經は、義詮の招きに依りて、武家へ歸參す。延文元年八月、義詮從三位に敍す。二年二月、光嚴法皇・光明院・崇光院、吉野の奥山より許されて、京へ還幸あり。三年二月、直義に從二位を贈らる。四月廿九日、征夷大將軍正二位大納言源の尊氏逝去。年五十四。從一位左大臣を贈らる。等持院殿仁山と號す。鎌倉にては、長壽寺殿と稱す。建武三年より延文三年迄、世を治むる事廿三年。宰相中將義詮、其跡を繼ぎて武將となる。十月、鎌倉の管領基氏、其家老畠山國淸・入道道誓と謀りて、江戸遠江守・同じく下野守・竹澤右京の亮を遣して、新田義興をたばかりて、武藏の矢口の渡にて、之を殺す。其外新田の一族所々にありけるをも、基氏尋ね出して、之を平げ、基氏鎌倉に居ずして、武藏の入間川に陣取つて、其備きびしやかなるに依りて、東國無事なり。十一月、菊池武光は、元來南朝の方にて、肥後國に住む。年々少貳・大友等と合戰。尊氏より置かれたる探題をも、攻破る。此年又尊氏の逝去を聞きて、九州所々にて、合戰度々に及びて、菊池利を得たり。是より先、南朝の宮を一人申下し、征夷將軍と仰ぐ。新田の一族其外諸國の兵、筑紫

義詮征夷大将軍に任ぜらる

に行きて、菊池を頼む者多し。九州は、大方菊池に靡けり。十二月、義詮征夷將軍に任ず。日野の左中辨明光、勅使たり。佐々木道譽が嫡孫秀詮、其宣旨を請取り、四年二月、武藏の守を兼ぬる。十月、武家の執事仁木頼章死す。細川相模守淸氏、執事となる。十一月、畠山道誓、基氏の名代として、關東の大軍を催し上洛し、義詮に見えて、南帝を攻めん事を勸む。十二月、義詮及び道誓、數十萬の勢にて、南方へ赴く。楠正儀・和田正武、之を防ぐ。五年二月より、京勢・關東勢、南方の兵と龍門山・銀が嵩・龍泉・平岩等の所々にて合戰す。五月、赤坂の城を攻落す。南帝の皇居は、觀心寺といふ深山なれば、敵寄來る事能はず。和田・楠も、金剛山の奥へ隱れければ、義詮幷に道誓、都に歸る。此時、仁木頼章が弟仁木義長、尊氏の時より、軍の功あるに依りて、甚だ奢りける故、道誓・淸氏等と不和なり。道誓、南方退治に事寄せて、義長を亡さんとす。七月、南方の軍兵又起る。道誓・淸氏等、之を討たんとて、天王寺に出張。勢を集めて、義長を攻めんとす。義長急ぎ兵を率ゐて、義詮の館へ來りて、強ひて道誓・淸氏追討の御敎書を申給はり、執事職に任ぜらる。佐々木道譽が

細川清氏佐々木道譽權を爭ふ

謀にて、義詮、女の姿となりて、館を出て、西山の谷の堂へ落行く。之を聞きて、義長に隨ふ者、皆散々になる。義長勢盡きて、伊勢へ落行く。義詮都へ歸る。道譽・清氏等も、京へ歸る。南方又起る。畠山道誓、働なき事を恥ぢて、八月密に關東へ歸る。康安元年六月、雪降る。其外火事・地震等あり。七月、山名時氏、伯耆より美作へ出張、赤松と合戰す。九月、楠正儀、攝津へ出張、佐々木秀詮を討殺す。筑紫には、菊池又起りて、少貳大友等を打破る。同じき月、細川清氏と佐々木道譽と、權を諍うて不和なり。義詮、道譽が申す所を誠と思ひ、清氏謀叛に極りければ、清氏都を落ちて、若狹へ赴く。十月、足利氏賴を以て、清氏を攻めしむ。清氏、南朝へ降參す。則ち大將の宣旨を蒙る。十一月、關東にて、諸々の侍千餘人言合せ、畠山道誓が罪を訴ふ。基氏、畠山を攻めはたる。畠山謀叛して、伊豆の修禪寺に籠る。十二月、細川清氏・楠正儀等、都へ攻入る。義詮、主上を守護して、近江へ落行く。清氏等都へ入る。義詮の嫡子義滿、此時僅か四歲なりしを、禪僧蘭洲之を隱して、播磨の赤松則祐に預け置く。義詮、諸國の兵を呼集めければ、清氏、南方へ歸る。義詮、都

へ歸る。貞治元年正月、細川淸氏、阿波國へ赴く。四國を打隨へん爲めなり。義滿、播磨より都へ歸る。義詮、足利氏賴を執事とせんとす。其父高經入道道朝、同心せず。是に依りて、道朝が末子、義將を執事とす。年若き故に、道朝諸事を執行ふ。氏賴は遁世す。道朝が家號を、斯波といふ。其子孫兵衞に任ずる故に、武衞と稱す。四月、主上近江より東へ還幸あり。六月、直冬幷に山名時氏等、中國に出張。七月、細川右馬頭賴之、讚岐國にて其從弟細川淸氏と合戰。淸氏討たれて、四國悉く賴之に隨ふ。九月、道朝が二男氏經、九州の探題に任ぜられて下る。菊池武光、之を打破る。氏經、髮を剃りて京へ歸る。二年七月、義詮、從二位に敍す。同じき年の春、周防の大內介、武家へ降參して都へ登る。山名時氏父子も降參す。因幡・伯耆・丹波・丹後・美作五箇國の守護を、武家より授けらる。仁木義長も、勢盡きて降參す。畠山道誓は、關東にたまり得ず、密に河內へ赴きて、南朝へ降參せんと思ひ、楠を賴みけれども、南帝御承引なきに依りて、遂に流浪して死す。六月、基氏、上杉民部大輔憲顯を以て、鎌倉の執事とす。芳賀禪可といふ者、上杉と不和なる故、之を怒り

て謀叛す。基氏自ら馬を出し、芳賀を打破る。關東の武士、皆基氏の威に靡く。七月、光嚴院の法皇、崩御ましします。御年五十二。四年三月、佐々木道譽幷に諸大名、執事道朝を義詮に讒言す。八月、道朝都を落ちて、越前へ赴く。五年七月、道朝、越前にて病死す。其子義將、降參す。九月、義將を越中の守護として、桃井直常を討たしむ。同じき月、高麗人來る。十二月、義詮が嫡男義滿從五位下に敍す。其名字宸筆（宸筆とは天子の筆を染め給ふをいふ）を染めさせ給ふ。六年正月、義詮正二位に敍す。三月、中殿の歌の御會に義詮參內。四月、鎌倉の管領左馬頭源の基氏卒す。年廿八。瑞泉寺と號す。其子氏滿相繼いで、關東に領す。上杉憲顯、之を助くる。九月、義詮不例に依りて、政を義滿に讓り、細川右馬頭賴之を、四國より呼寄せ執事とし、武藏の守に任ず。管領と號す。十二月、源の義滿、正五位下に敍し、左馬頭に任ず。時に纔に十歲なり。同じき月七日、征夷大將軍正二位前の大納言源義詮逝去。年三十八。寶篋院と號し、瑞山と稱す。同じき晦日、左大臣從一位を贈らる。延文三年より今年迄、世を治むる事十年なり。賴之遺言を請けて、幼なき義滿を輔け、天下を以て、己

後村上天皇崩御後龜山天皇御卽位

上杉憲顯死去

義滿征夷大將軍に任ぜらる

正儀降る

が荷とし、政道私なく、法を立て是非を明らめ、學文ある者を、義滿の前に居らしめ、善を以て敎へ導き、法師六人にことゆらなる衣裝を着せ、刀・脇差をさゝせ、侫坊・童坊と名付け、人に媚び諂はしむ。諸大名の追從輕薄なる者をば、侍童坊と名付けて恥かしむ。其心、義論の前に、讒人侫人を近付けず、武士の風俗を直さん爲めなり。應安元年二月、禪僧中津（絶海をいふ）・妙佐（汝霖をいふ）を、大明へ遣す。今年、大明の太祖の洪武元年に當れり。三月、南帝後村上天皇崩御まします。御子寛成親王御卽位。長慶院と號す。四月義滿元服。賴之加冠たり。細川兵部大輔業氏、理髮たり。六月、禁中仙洞殿下（殿下は攝政の事）幷に社領・寺領等沙汰ありて、武士の濫妨を止めさしむ。同じき月、義滿の名代として、賴之、石淸水へ參詣、銀劒（白銀作太刀なり）・神馬・砂金等を納め奉る。九月、鎌倉の執事上杉憲顯死す。其子能憲・其甥朝房、相並びて事を執れり。兩上杉と號す。十二月、源の義滿、征夷大將軍に補す。時に十一歲。二年正月、楠正儀、武家へ降參すべき由、申すに依りて、義滿、御敎書を賜らる。三月、楠加勢の爲めに、東より細川右馬助賴光・赤松判官等を南方へ遣さる。正儀都へ入り、先づ賴之

に會うて、後に義滿に見ゆ。四月、叡山の衆徒、南禪寺を破らんと奏聞す。公家・武家裁許なき故、衆徒怒つて、日吉の御輿を捧げて、內裏に振捨て、火を放さんとす。佐々木崇永、之を防ぐに依りて、衆徒山へ歸る。內裏何事なし。宸翰宸翰とは天子の御筆をいふなりを、崇永に賜はりて、御叡感あり。御輿を祇園の社へ入れて後に、山へ歸し入る。九月、斯波の義將、越中にて桃井直常と合戰。直常破れて、松倉の城に籠る。國人、皆武家方に從ふ。三年三月、桃井直常が孫直和等、越中の長澤へ出張。斯波の義將と合戰し、直和以下討たれて、殘る軍兵、皆落行く。四月、義滿、六條の新八幡宮幷に北野祇園へ參詣。十一月、和田の某以下、南方の武士、楠正儀が要害へ寄せて合戰す。賴之大軍を催し、南方へ赴き、敵を追拂ひ、山名氏淸を河內に止め置きて、南方の押とし、賴之は都へ歸る。正儀は、武家へ降參すと雖も、其一族共、猶ほ正成・正行が遺言の敎を守り、南帝の爲めに忠を盡せり。今年南朝歲を改めて、建德の年號を立てたり。四年二月、山名時氏死す。同じき月、鎭西の菊池武政以下、南朝の者共起るに依りて、今川伊豫守了俊を、九州の探題に補して下す。大內の義弘を相添へ

らる。此菊池、九州を靡かし、其立てたる南朝の宮を、關西親王良懷といふ。使者船をしたてゝ、大明へ遣す。其狀に、日本國王良懷と記せり。大明より日本國王へ來る使をも、筑紫にて押へ京へやらず。其返書を調べて遣すに依りて、大明にては、良懷を、眞の日本の王と思へり。三月、主上、御位を東宮緒仁に讓り給ふ。年號、文和四年・延文五年・康安二年・貞治六年・應安四年、御在位合せて二十年。

【百】後圓融院。後光嚴院の御長子なり。御母は崇賢門院。四辻の大納言藤原の兼綱が娘なり。御卽位の時、御年十四歲。後光嚴院の上皇、院中にて政を聞召し給ふ。此時、光明院・崇光院も猶ほ御存生にて、伏見にまします。御位讓りの御沙汰、兼て崇光院聞召し、御子榮仁親王正統たる由、賴之に仰せらるゝと雖も、先帝も深く賴之を賴み、思召すに依りて、伏見殿の御望叶はず。是に依りて、崇光院と先帝(後光嚴院)と御兄弟の御中、不和にならせ給ふ。五月、細川賴元(賴之弟)南方へ赴く。同じき月、武藏守賴之故ありて、管領職を辭退して、西山西芳寺に赴く。義滿、赤松律師則祐等を以て呼返す。賴之則ち都へ歸る。七月、桃井直常、越中へ出張り合戰す。八月、南方

の兵起りて、楠が要害を攻む。京都より加勢を多く遣す。十月、石淸水の八幡宮・叡山造り替へらる。賴之、相模守に任ず。十一月、赤松則祐死す。年六十。五年三月、今川了俊、筑紫にて菊池武政と合戰。大內介義弘兵を率ゐ、了俊を救うて利を得たり。十一月、義滿判始め。石淸水の社領を付けらる。時に十五歲なり。今年、南朝文中と改元す。六年三月、細川左衞門佐氏春、南方退治の爲め、尼が崎に陣を取る。六月、大明の使僧仲猷無逸、鎭西より都へ入る。則ち嵯峨に居らしむ。其趣、大明より使僧を三度、日本へ渡すと雖も、筑紫にて菊池に押へられ、京へ到る事能はず。故に兩僧を來らしむ。義滿聞きて驚く。八月、南帝長慶院、位を其御弟熙成王に讓り給ひて、吉野を落ち給ふ。南方の軍兵、河內の天野に陣を取りて、京勢の陣へ夜討す。同じき月、佐々木道譽死す。九月、大明の兩僧、國へ歸る。十月、鎌倉五山の事住持職は、義滿より沙汰せらるべし。其外の寺法は、鎌倉の管領氏滿の謀らひたるべしと定めらる。十一月、義滿從四位下に敍し、參議に任じ、左中將を兼ねて、左馬頭を、鎌倉の氏滿に授けらる。十二月、義滿、九州下向の評定あり。賴之と相謀

足利義滿筑紫に下向

りて、鎌倉の上杉彈正朝房を召して、京都の固めとし、仁木義長を以て、伊勢の北畠を押へ、武田・小笠原を以て、伊豫の金谷等を押へしむ。其外、東は伊豆を限り、北は越後を限りて、諸國の軍勢を召集む。七年正月、後光嚴院の上皇崩御ましますす。御年卅七。三月、義滿筑紫下向。賴之・斯波の義將・畠山義深・仁木・今川・土岐・佐々木等が一類、大名卅九人、軍勢十萬騎に及べり。山名師氏・赤松一族、先陣たり。四月、義滿安藝に到り、先陣長門に至つて、菊池武政と合戰して、山名・赤松、敗北すと雖も、細川讃岐守義之が四國の勢、續きて攻懸りければ、島津・伊東等、菊池に背きて降參す。菊池破れて、征夷將軍の宮を具し奉り、引退きて宰府に陣を取る。原田・秋月等九州の者共、皆菊地に背く。菊池又引退きて、筑後の高良山に陣を取る。義滿宰府に到る。細川・山名・赤松等、菊池と合戰度々に及べり。九月、菊池降參を乞うて、和睦の儀調りて、菊池肥後へ歸る。義滿、日向を伊東に與へて、筑前・筑後を少貳に授け、豐後を大友に給はり、長門・豐前をば、大内の義弘に給ふ。筑後・肥後幷に肥前の内には、菊池が兵、所々に城を構へて守れり。十月、義滿都へ歸る。十一月、上杉朝

南朝振はず

朝鮮國使鄭夢周來朝

房、鎌倉へ歸る。是より義滿の權威大いに盛にして、南方も衰へしかば、諸國の武士、皆京都へ集へり。十二月、主上御卽位の儀行はる。踐祚以後、世上靜かならず。其上、春日の神木、故ありて都に入り年を經ける故、藤原の輩、御役に出で難き故に、相延ぶとなん。永和元年三月、義滿、石淸水參詣。太刀・神馬・沙金納めらる。善法寺を宿坊とす。四月、義滿始めて參內。八月、義滿の館に歌の會あり。同じき月、筑紫にて太宰の少貳久資逆心ありて、探題今川了俊に討たれぬ。十月御禊。十一月、大嘗會。久しく相延ぶるに依りて、武家より申沙汰す。同じき月、義滿從三位に敍す。今年、南朝天授と改元す。二年正月、禪僧絕海汝霖、大明より歸る。大明の太祖皇帝に見えり。七月、荒川某、石見國の守護に補せられて下る。此時、直冬降參しければ、義滿其罪を許して、則ち石見に居らしむ。三年、朝鮮國の使鄭夢周來る。筑紫にて探題今川了俊に會ひて、國に歸る。四年三月、義滿、犬追物を興行す。同じき月、義滿、室町の新御館へ移徙。夫より室町殿と號す。庭に花を多く植うるにより、又花の御所ともいふ。同じき月、義滿、大納言に任ず。四月、鎌倉の上

杉能憲死す。其弟刑部大輔憲春、代りて事を行ふ。八月、義滿、右近衞の大將を兼ねらる。十一月、南方の橋本民部等紀州に起り、細川兵部大輔氏春と戰ふ。京より細川右京大夫頼之・山名修理大夫義理・其弟同じく陸奥守氏清、并に石堂・赤松等、紀州へ赴く。敵落行くに依りて、京勢歸陣。十二月、義滿、從二位に敍す。同じき月、南方又起りければ、義滿自ら東寺迄出で、山名義理・氏清等を遣して退治せしむ。康曆元年正月、義滿、馬寮御監となる。同じき月、山名義理・氏清等、紀州の敵を攻破り、土丸の城を攻落す。又湯淺の城をも攻落す。二月、鎌倉の管領左馬頭氏滿、逆心萠し、京を攻めんとす。上杉憲春、諫むれども承引なし。同じき南都の衆徒の訴に依りて、大和の十市の某を退治せんとて、京都より斯波の左衞門佐義將并に一色・富樫・赤松等、近江の勢・美濃・土岐が勢を添へて赴かしむ。其折節、京中騷動。是に依りて、南都へ赴く勢を召返さるゝ所に、義將并に土岐が勢、路より落行く。義將は、近江より京へ歸る。土岐大膳大夫は、隱謀の聞えあるに依りて、義滿、御教書を諸國へ遣し、土岐を誅せしむ。三月、義滿、鎌倉の隱謀を聞きて、自筆の狀を、

上杉憲春に給うて、京·田舍靜なる山を、仰遣さる。憲春、教訓すれども、氏滿、邪止まざるに依りて、憲春自害す。氏滿驚き悔いて、逆心やう〳〵解けぬ。憲春が弟安房守憲方に、政事を司らしむ。憲方、始めて鎌倉の山の內に居れり。同じき月、土岐大膳大夫許されて、使を京へ奉る。佐々木大膳大夫、路を塞いて通さず。義滿聞いて、土岐をばいよ〳〵許されて、却つて佐々木を討たんとす。四月、土岐·佐々木、共に許されて都へ登る。閏四月十四日、京中騷動。諸人武具を帶し、義滿の花の御所へ馳せ集る。二階堂中務·松田丹後守を使として、細川武藏守賴之が家へ遣し、管領職を止めて、四國へ赴かしむ。其弟賴之等一族、皆勘氣を蒙る。賴之は、京を出づる時髮を剃りて、名を常久と改む。明くる日、禪僧妙葩春屋と名付く丹後より都へ歸る。此僧は、夢窻國師の弟子なり。義滿、治世の始め、山門より南禪寺を破らんと言ひし時、賴之が沙汰遲しとて、妙葩怒りて、久しく丹後へ引籠り居けるが、賴之京を出づるに依り、妙葩は、京へ歸りけるにや。同じき月、斯波義將を管領とす。六月妙葩を南禪寺の住持とす。七月、義滿、右大將の拜賀。山名民部義幸、侍所の當職にて、兵

僧祿の始

百騎を連れて先陣たり。月卿雲客も從ふ。九月、義滿、御教書を以て、賴之入道常久を討つべき由を觸れらる。然れども、賴之罪なき故にや、許されて、阿波・淡路・讃岐・伊豫四國の管領として國にあり。二年正月、妙葩、國師號を蒙り、僧祿司に任ぜらる。僧祿といふ事、是より始まる。同じき月、義滿、從一位に敍す。二月、義滿の弟滿詮、左馬頭に任ず。鎌倉の氏滿、左兵衛督に任ず。五月、關東にて、小山下野守義政と、宇都宮下野の前司基綱と合戰。基綱討死す。氏滿、小山を討たん爲めに、上杉憲方を遣す。同じき月、大内の新介、其弟三郎と伊勢にて合戰し、討たるゝ者二百餘人。六月、光明院の法皇御まします。御年六十。七月、山名氏淸、南方の敵を打破りて、其張本民部大輔等十人の首を、京都へ送る。八月、紀伊南方の同類、多く落行く。九州小山の義政、鎌倉へ歸服す。十二月、春日の神木歸り給ふ。關白大臣公卿藤原氏供奉す。今年、義滿、鹿苑院幷に寶幢寺を建立、此頃の事にや。永德元年三月、天皇、義滿の館へ行幸。七月、義滿內大臣に任ず。年廿四。今年南朝弘和と改元す。此時、前朝の舊臣猶ほ遺りて、新葉和歌集を撰めり。二年正月、山名氏

清、河內を攻めて、南方の軍を破る。此時楠正勝破れて、赤坂城も落ちぬ。和田も戰負けて、和泉國氏淸に捕へられぬ。紀伊も漸く山名に靡きぬ。千劒破の城は、猶殘れり。氏淸が父時氏、既に因幡・伯耆等數箇國を領せり。今氏淸が一族、彼是合せて十一箇國の守護を兼ねたれば、日本六分一を領せりとて、山名が家を、六分一殿といひ習はせり。同じき月、義滿、左大臣に轉ず。右大將、元の如し。日を經て左大將に轉ず。閏正月、義滿、藏人所の別當に補せらる。三月、義滿、牛車に乘る事を許され、四月、主上、御位を御子幹仁に讓り給ふ。此代、初め三年は、先代の應安を用ふ。其後に、永和四年・康曆二年・永德二年、御在位合せて十一年。

〔百一〕後小松院。御圓融院の御長子なり。御母は通陽門院藤原の嚴子。三條內大臣公忠の娘なり。御卽位の時、御年六歲。後圓融院の上皇、院中にて政を沙汰し給ふ。左大臣源の義滿、院の執事別當を兼ねらる。同じき年十二月、御卽位の禮行はる。三年正月、蹈歌の節會に、義滿內辨を勤む。同じき月、義滿、奬學・淳和兩院の別當を兼ねて、源氏の長者に補せらる。兩院の別當・源氏の長者は、鳥羽の院の勅にて、代

代久我の家に補せられしを、是より武家に續ぎて任ぜらる。六月、義滿、准三后の宣下。十月、義滿の館へ行幸。今年、義滿相國寺を造り、妙葩を開山とす。然れども夢窻國師を推して、開山に用ふ。至德元年三月、義滿、大將を辭退す。今年、南朝文中と改元す。二年八月、義滿春日詣。今年の秋、前の管領細川常久、阿波の寶冠寺を建てゝ、絶海を開山とす。冬に及んで、義滿、絶海を召して、等持寺に居らしむ。二年七月、義滿、五山の座位を定む。南禪寺を五山の上とし、住持義堂周信に公狀を賜ふ。天龍寺を五山第一とす。相國寺は第二、建仁寺は第三、東福寺は第四、萬壽寺は第五なり。鎌倉の五山は、建長寺を第一として、天龍寺の次なり。圓覺寺を第二、壽福寺を第三、淨智寺を第四、淨妙寺を第五とす。是より先、既に座位の沙汰ありと雖も、此時決しけるにや、五山の次を十刹といふ、其座をも定めらる。嘉慶元年正月、主上御元服。攝政良基加冠。義滿理髮たり。二年五月、義滿左大臣を辭退す。今年、義滿、紀州の濱に遊び、又富士見物。明德元年四月、尊氏卅三年忌の追善、義滿執行はる。法華八講あり。今年、山名時熙・同じく氏幸、義滿の仰に背く。

山名陸奥守氏清・同播磨守滿幸を以て討たしむ。氏清、彼は一族の内なれば、後日許し給はゞ、合戰に及ばず、教訓を加ふべし。若し誰人申すとも、其罪許さるまじきならば、討つべしと申す。義滿、其罪許すべからず、早く退治すべしと宣ふ。氏清赴きければ、時熙・氏幸落行く。二年、細川常久、四國より召されて京へ上り、義滿、政道元の如く常久に任ぜられ、細川右京大夫頼元を、斯波義時に代つて管領とす。頼元は、常久が弟ながら養子なり。十月、山名氏清、宇治の紅葉を、義滿御覽に備へんと乞ひければ、承引あるに依りて、日を定めて營む。其頃、時熙・氏幸、密に都へ登り、罪を許し給はれと申しければ、義滿、氏清に相談せんとて、宇治へ赴く。滿幸、之を知りて氏清に告ぐ。氏清、既に和泉より淀迄來りけるが、其日に及んで、俄に病と稱して、宇治へ赴かず。義滿快ずして、空しく歸る。十一月、滿幸、仙洞の御領を妨ぐるに依りて、出雲の守護職を止められて、京中に置かれず、丹波へ追下さる。滿幸怒つて、和泉へ赴きて、氏清に謀叛を勸む。氏清元より逆心ある上、滿幸は甥ながら婿なり。又此時、時熙・氏幸既に許されて、本領安堵しければ、氏清旁安からず思

ひて、遂に謀叛す。十二月廿九日、氏淸・滿幸、和泉・丹波より相分れて、京へ攻入る。義滿・常久等、諸大名を以て、之を防がしむ。晦日、内野幷に京中所々にて合戰。氏淸が弟義數幷に家老小林は、大内の義弘と戰ひて討たれぬ。又滿幸は、常久幷に畠山基國と戰うて敗軍す。氏淸は、京中へ亂れ入る、大内の義弘・赤松義則・山名時熙等と戰うて、氏淸勝に乘りしかば、義滿自ら旗を進めらる。一色・詮範・斯波の義重先陣たり。氏淸敗軍す。詮範其子滿範と共に、氏淸と戰うて、氏淸を討殺す。年四十八。滿幸は逃去る。三年正月、氏淸・滿幸が舊領を分けて、丹波を細川頼之に給はり、丹後を一色滿範に、美作を赤松義則に、和泉・紀伊を大内の義弘に、出雲・隱岐を佐々木高明に、但馬を山名時熙に、伯耆を山名氏幸に給ふ。又若狹の今富の庄を、一色詮範に給はり、山城の内の領地をば、畠山基國に給はる。氏淸が兄義理は、紀伊にありしが、大内の義弘赴きて攻めければ、義理、城を去りて行方なし。又此頃、畠山、河内の國を領し、千劔破の城を攻落す。楠正勝、十津河の邊に流浪す。其弟正元は、密に京へ入りて、義滿を狙ひけれども、事顯はれて殺さる。斯りければ、南

賴之卒す

南北兩朝一統

方も愈〻衰へて、和泉・河内の和田・楠が一族、畠山大内が郎等となる者多し。二月、武藏守賴之入道常久卒す。年六十四。永泰院と名付く。葬禮の時、義滿自ら之を送らる。四月、公家・武家幷に諸寺諸社の沙汰ありて、賞罰を正す。八月、相國寺供養義滿執行はる。十月、大内の介義弘、和泉國に居て、義滿の仰を請け、南方和睦の義を繕ひ、閏十月二日、南帝熙成王都へ入御。嵯峨の大覺寺に着き給ふ。其儀式、行幸の如し。同じき五日、南帝、三種の神器を禁中へ渡さる。熙成王は、太上天皇の尊號を蒙りて、後龜山の院と名付け奉る。延元二年、後醍醐の天皇、吉野へ入り給ひしより、爰に至つて五十六年にして、南北始めて一統す。十二月、義滿、左大臣に再び任ず。今年、朝鮮の使來りて、隣の如く好をなさんといふ。義滿承引す。四年四月、後圓融院の上皇崩御まします。御年卅六。泉涌寺にて御葬禮。義滿も送り奉る。八月、石清水放生會に、義滿參詣。九月、義滿、左大臣を辭退して、其後伊勢參詣。同じき年、斯波の義將、再び管領に任ず。九月、義滿、日吉參詣。十二月十七日、義滿の嫡子義持、九歲にて元服。正五位下に敍し、左中將に任じ、禁色昇殿を許

足利義持征夷大將軍となる

義滿落飾

さる。義滿、征夷大將軍を義持に讓らる。凡て敍爵(敍爵とは、五位の位を授くるをいふ)は、攝家は正五位下、其外は清華と雖も、從五位下なり。今、義持の敍爵、攝家になぞらふ。同じき月廿五日、義滿、太政大臣に任ず。年卅七。二年正月、白馬の節會に、義滿内辨を勤む。二年四月、天皇、義滿館へ行幸。同じき月、義滿飾を落さる。年卅八。道號は天山、法名は道義といふ。今年、山名滿幸誅せらる。三年四月、源義持、正四位下に敍す。九月、參議に任ず。同じき月、源の道義、叡山に登る。其儀式、御幸になぞらふ。武家を公方と稱するは、此頃よりの事なるべし。道義參內の時、禁中に便宜所あり。之を小御所といへり。出入の時、伺候の月卿雲客、庭に下りて蹲る。其內武家に親しきを、昵近衆といふ。同じき年、今川了俊、九州より歸る。始め尊氏の時、了俊が父駿河・遠江を領せり。駿河を長子範氏に讓り、遠江を了俊に讓る。範氏死して、其子泰範と了俊不和なり。了俊久しく筑紫にありて、其子は遠江にあり。泰範、よりより了俊が事を讒言しけり。其上大内の義弘、九州の探題を望みて、了俊筑紫にあれども、其子遠江に居る故、鎌倉の氏滿と、心を通ずる由を申す。又管領斯波の義

金閣寺造營

朝鮮使朴敦之來朝

三管領四職所司代

將（勘解由の小路といふ）其一族、澁川を探題になさんとの志ありて、彼是にて了俊探題を止められて都へ登る。此後は、筑紫・中國の事、義弘計らひ申しけり。了俊は遲く上る由の咎に合うて、遠江の本領をも離れ、閉籠り居けるとなん。四月、道義、北山の別業に、新に館を構へて移り居る。室町の館をば、義將に讓る。道義を、北山殿と名付く。其營、華麗なる故、世の人、金閣といふ。天下を義將に讓ると雖も、政道は皆道義沙汰せらる。同じき月、道義、春日參詣。遣唐使を立てらる。今年筑紫にて、少貳・菊池・千葉・大村、野心を挾む。大内の義弘を以て平げしむ。五年正月、義持、正三位に敍す。同じき月、崇光院崩御まします。御年六十五。八月、朝鮮の使敦朴之、我朝へ來る。大内の義弘、之を挨拶す。道義書を送らる。十一月、鎌倉の管領源滿氏卒す。永安寺と名付く。年四十二。其子滿兼相續す。上杉朝宗家老たり。滿兼が弟滿直は、奧州の管領たり。篠川殿と名付く。同じき月、道義、畠山の基國を管領とす。是より後、斯波・細川・畠山、替々管領といふ。之を三管領といふ。又山名・赤松・一色・京極、代る／＼侍所を司る。之を四職といふ。夫に添ふを所司代といふ。京

極は佐々木の一流、道譽が末なり。關東にも之を似せて、鎌倉の管領をば、私に將軍といひ、御所と稱して、其家老上杉を管領と稱し、千葉・小山・長沼・結城・佐竹・小田・宇都宮・那須を八家といふ。之は皆賴朝の時より名ある家なり。六年十月、大内の左京大夫義弘、筑紫・中國の兵を率ゐて、和泉の堺に着きて、都へ上らず。却つて關東へ通じ、謀叛の企ありければ、道義、試に僧絶海を使として、宥めらるゝと雖も、同心せず。十一月、道義自ら八幡に出でて、管領畠山基國・前の管領斯波義將・細川賴元等を、和泉へ赴かしむ。義弘、城を構へて防ぎ戰ふ。十二月、京勢、和泉の城を攻めて火を放つ。義弘馳せて、基國が陣へかけぬ。基國が子滿家と戰うて、義弘討たれぬ。其子新介降參す。此時兵火に依つて、和泉堺の在家一萬間燒ける。七年正月、義持、從二位に敍す。三月、足利直冬、石見國にて卒す。八年二月、内裏燒くる。道義の北山の館に行幸。二月、義持、大納言に任ず。時に廿六歲。五月、日吉の社法華八講。道義・義持幷に門跡・公卿參詣。今年、道義、狀を大明の皇帝に贈り、黃金千兩及び器物多く遣す。九年正月、義持、正二位に敍す。二月、大明の建文

大内義弘謀叛

義弘討たる

帝、狀を道義に送らる。其書中に、日本國王道義といへり。八月、道義、兵庫に遊ぶ。九月、道義、北山の館にて、大明の使僧道彝一如に對面。明朝より、錦綺並に暦を贈る。十一月、義持、從一位に敍す。內裏を造る故なり。十年三月、義持、石淸水參詣。十一月、大明の成祖皇帝、狀を道義に送りて、其卽位を告げらる。十二月三日、中納言源の滿詮、（道義の弟）大納言に任じ、從二位に敍す。卽ち髮を剃る。十一年五月、大明の使者來る。道義、北山の館にて對面。十二年、斯波の義重、管領に任ず。同じき年、上杉憲定、鎌倉の執事となる。十三年八月、義持、右大將を兼ぬ。十四年正月義持、馬寮御監となる。十五年三月四日、道義寵愛の末子義嗣敍爵。同じき月八日、天皇、北山へ行幸。關白經嗣以下供奉。道義、法服を着、珠數を持ち、義嗣を携へて、門の下に出て、行幸を迎ふ。十餘日御止宿。管絃、和歌の御遊あり。其會の座次、御製の次に沙門道義、其次に源の義嗣、其次に關白藤原の經嗣以下なり。義嗣、左馬頭に任ず。正五位下に敍し、又從四位下に敍し、左中將に任ず。四月、義嗣、內裏にて元服。其儀式親王になぞらふ。參議に任じ、從三位に敍す。中將元の如し。

時に十五歲。五月六日、前の征夷將軍太政大臣從一位准三后源義滿、法名道義、北山の館にて薨ず。年五十一。鹿苑院殿と號し、天山と稱す。天皇宣旨ありて、太上天皇の尊號を贈らる。義持、辭退し請けず。應安元年より應永元年迄、職に在る事廿七年。義持に讓りて後十四年。合せて世を治むる事、四十一年。十一月、源の義持、諸國關所の事を沙汰す。管領斯波の右兵衞督義重判を押し、飯の尾常廉奉行す。義重は義政が子なり。十二月、大明の成祖皇帝、書を義持に送り、義滿を弔ひ、祭文を作り、恭獻王と謚す。十六年三月、朝鮮の使來る。六月、義持、石淸水に詣で、伊勢太神宮へ參らる。前の管領斯波の義將、義持の仰を請けて、返事を朝鮮の執政に遣し、先代に變らず好をなす。義將、私に朝鮮板の一切經を求む。七月、義持、內大臣に任ず。年廿四。同じき月、鎌倉の管領源の滿兼卒す。年卅四。三勝光院と號す。其子持氏相續。上杉憲定之を助く。上杉朝宗は、滿兼を慕うて、葬禮の場より、直に世を遁れて閑居。時に年七十。十月、義持、三條の坊門館に移る。十一月、義持、八幡參籠。一七日、斯波の義淳、其父義重に代つて管領となる。十七年正月、源

の義嗣、中納言に任ず。四月、義持、高野參詣。六月、畠山滿家、管領に任ず。十八年九月、源の高員を以て、飛驒國司藤原の尹綱を討たしむ。十二月、義嗣、大納言に任ず。同じき月、鎌倉の上杉安房守憲定死す。其再從弟右衞門佐氏憲、之に代つて持氏の家老となる。氏憲は朝房が子にて、朝宗が甥なり。氏憲髮を剃りて、名を禪秀と改む。犬懸の入道と號す。憲定が子憲基と不和なり。上杉は藤原氏にて、勸修寺の庶子筋なり。上杉重房といふ者、鎌倉將軍六代目宗尊親王の御供して、鎌倉へ下りしより、關東に住みたり。其子を賴重といふ。賴重が娘淸子は、尊氏・直義の母なり。淸子の兄弟を、憲房・重顯といふ。憲房が子民部大輔憲顯は、憲定・憲基が先祖なり。之を山内といひて、上杉一家の棟梁なり。憲顯が弟彈正少弼憲藤は、禪秀が先祖なり。重顯が子孫をば、扇が谷の上杉といふ。其外相分れて、越後に居るものあり。上野の白井に住めるもあり、又京・鎌倉往來する者もあり。基氏より氏滿・滿兼・持氏に至る迄、上杉、政道を助けし勢を借りて、威を關東に振へり。十九年五月、義持、大將を辭退す。八月、主上、御位を躬仁に讓り給ふ。年號、御卽位の始

め、永德を改めざる事一年。其次に至德三年・嘉慶二年・康應一年・明德四年・應永十九年、合せて御在位三十年。

百二　稱光院。後小松院の御子。御母は光範門院。日野の贈左大臣藤原の資國の娘なり。御卽位の時、御年十二。後小松院の上皇、院中にて政を聞召し給ふ。將軍源義持、院の執事に任じ、兵仗宣下せらる。十月、義持、淳和・奬學兩院の別當・源氏の長者に補せらる。細川右京大夫滿元、管領に任ず。二十年六月、義持、八幡參詣。月卿雲客從ふ。廿一年十二月、御退位の禮行はる。廿二年七月、義持、日吉參詣。八月、春日參詣。廣橋の大納言兼宣竝に雲客數多從ふ。九月、八幡參籠。廿三年十月、大納言源の義嗣、野心を挾む事、顯はれければ、髮を剃りて行方知れず。今年、鎌倉の上杉禪秀、其職を辭退す。持氏、山内の上杉安房守憲基を以て、禪秀に代つて事を行はしむ。十月、禪秀謀叛。持氏の叔父滿隆と持氏の弟持仲とを取立て、持氏憲基を攻めて合戰。持氏破れて、駿河へ逃げ來りて、今川泰範を賴み、京都へ訴ふ。憲基は、越後へ逃げ行きて兵を集む。禪秀權威を振うて、持仲を鎌倉の主とす。禪秀

亂とは是なり。廿四年正月、持氏、京都の加勢を得て、憲基と狀を以て言合はせ、鎌倉を攻破る。禪秀、戰負けて自害す。滿隆・持仲も自害す。其同類皆亡びぬ。持氏、鎌倉に歸り、住みて憲基執事たる事、元の如し。持氏の持の字は、義持より授けらるゝ好あるに依りて、義持と持氏とは睦し。十二月、義持の嫡男義量、十一歲にて元服す。義持が冠たり。正五位下に敍し、右中將に任ず。則ち昇殿を許され、參內す。廿五年正月、前の大納言源の義嗣、相國寺の林光院にて害せらる。年廿五。圓修院と名付く。五月、前の大納言源の滿詮卒す。義將の叔父なり。左大臣を贈らる。廿六年七月、大明の使呂淵來る。九月、義持、內大臣を辭退す。九月、義持不例。伊勢竝に社々へ奉幣。太山府君の祭行はる。十月、義持、病氣本腹。廿八年正月元日、義持參內院參。同じき月、鎌倉の左兵衞督持氏使として、木戶駿河守都へ登り、持氏、三位に進む事を一禮し、義持不例本腹を喜ぶ。四月、細川右京大夫滿元、管領を辭退す。八月、畠山左衞門督滿家入道道端、管領に再び任ず。廿九年正月、義持、青蓮院門跡義圓の坊へ赴く。義圓は、義持の弟なり。此頃天台座主にて、大僧正に

任じ、准后の宣旨を蒙れり。義滿以來、世上無事にて、京中靜かなる故、義持所々へ遊覽。管領畠山滿家・斯波の義淳・細川滿元竝に諸大名の宅へも赴きて、慰まるゝ。攝家門跡竝に西園寺・柳原・日野等の家へも渡御あり。之を御成といへり。四月、義持院參、猿樂あり。五月、義持、等持寺にて、鹿苑院義詮の年忌を執行はる。法華八講あり。八月、義持の御臺、伊勢參宮。九月、後小松の院上皇八幡に御幸。義持從ふ。同じき月、義持、伊勢參宮。十一月、義量、初めて八幡參詣。十二月、義持、等持寺にて、寶篋院義詮の年忌を執行はる。法華八講あり。卅年二月、義持、征夷大將軍を義量に讓る。時に十七歲。三月、義持竝に御臺、伊勢參宮。四月、義持、等持寺にて飾を落し、法名道詮。道號は顯山。時に卅八歲。七月、朝鮮より使僧來りて、一切經を贈る。卅一年正月、義量、從四位下に敍す。二月、義持、鎌倉の持氏と快からざる事ありしが、和睦せらる。四月、南帝後龜山の院、嵯峨にて崩御し給ふ。十月、義量、參議に任ず。同じき月、後小松の院上皇、相國寺御幸。義量從ふ。義持、既に天下を義量に讓りて、管領畠山滿家之を助く。義持は、洛外所々遊覽。卅二年正月、義量

後龜山天皇崩御

赤松滿祐同持貞所領を爭ふ

義持薨去

逝去。年十九。長得院と名付く。職に在る事、纔に三年四月。義量、近習の侍義持に見ゆ。管領畠山滿家竝に伊勢因幡の入道照心、之を申次す。伊勢守は、平氏の流れなり。室町家代々の近習にて、殿中の事を奉行する者なり。同じき月、圓融院卅三年忌。仙洞にて、法華八講を執行ひ給ふ。卅四年十月、赤松左京大夫滿祐、赤松越後守持貞と所領を爭ふ。尊氏の時より、赤松一族攝津・播磨・備前・美作・因幡五箇國を領せり。滿祐は、則祐が嫡孫なり。持貞は、則祐が兄貞範が孫なれども、嫡孫にはあらずして、庶子筋なり。然れども、義持の寵愛たる故に、五箇國の內三箇國を、持貞に給はる。滿祐憤りて、京都の己が館に火を放ちて、播磨へ下る。義持怒りて、細川持元・山名滿熙を以て、滿祐を討たしむ。然れども、持貞甚だ奢りて無禮なる故、諸大名之を憎んで、滿祐と相談し、持貞が惡を訴へければ、十二月、持貞自害す。滿祐は許されて京へ上る。正長元年正月十八日、前の征夷大將軍從一位內大臣源の義持薨ず。年四十二。太政大臣を贈らる。勝定院と名付く。應永六年より將軍に任じ、同じき十五年より、世を治むる事、今年迄廿一年に及べり。義量若死する

稱光天皇崩御

に依りて、跡目なし。鎌倉の持氏、天下の望あれども、夫も叶はず。義持の弟義嗣の外、一人は仁和寺御室の法尊、一人は青蓮院准后義圓、一人は梶井の門跡義承、一人は大覺寺門跡義照といふ。義持病中に、管領畠山左衞門督滿家入道道端、石淸水八幡宮にて鬮を取りて、青蓮院殿を、義持の跡目に定む。三月十二日、青蓮院門跡義圓還俗し、室町殿へ入りて、義宣（後に義敎と改む）と號す。同じき日、從五位下に敍し、左馬頭に任ぜらる。時に廿五歲なり。四月、武家評定始・判始・馬乘始あり。義宣、從四位下に敍す。七月二十日、主上崩御まします。御年廿七。此御宇、御卽位の後、改元なし。應永二十年より卅四年迄十五年、正長一年を加へて、合せて御在位十六年。此帝に皇子ましまさず。爰に持明院殿の皇統の御嫡流（人皇九十八）崇光院の御曾孫榮仁親王（後に太通院と號す）の御孫無品親王貞成（後に髮を剃りて道欽）の御子彥仁、御親子共に、伏見に微の體にておはせしを、天皇御惱の內、七月十二日、世尊寺の宮內卿行豐、伏見へ赴き、道欽に會ひ參らせ、源の義宣の旨を述べて、彥仁、京へ御出あるべき由を告げ聞かしめ、明くる日、管領畠山の滿家入道道端が手の者共四五百人、御迎に來りて、東山若王寺へ

入御ましま す。赤松左京大夫滿祐、警固し奉る。武家より、二條の關白持基を以て、後小松の上皇へ申上げ、彥仁を御養子に相定め、十七日、若王寺より、仙洞へ參り給ふ。月卿雲客數輩供奉し申し、畠山の滿家竝に其子尾張守持國、路次を警固す。同じき月廿九日、彥仁踐祚。時に御年十歲。則ち人王百三代後花園院是なり。いよいよ君臣合體し、快樂に誇る計りにて、諸人萬歲を祝し奉る。

安見太平記 大尾

芳野拾遺物語 巻第一

一 主上芳野の宮にて御歌の事

先帝の御時、世の中移り變りもてきて、芳野の假宮に渡らせ給ひ、憂かりし年も、事の騷の中に暮れ果てゝ、春立つといふ計りなる御節會の沙汰もいと悲し。二月の半過ぎ行く程に、御庭の櫻の、やう〳〵咲き出でたるを御覽じさせ給ひ、勾當の內侍に仰せられける御歌、

こゝにても雲井の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿とおもへど

と詠めさせ給ふ。

二 天女歌の事

同じ御門、豐の明の節會をせさせ給へるに、餘りに形ばかりなる有樣を御覽じ歎かせ給ひけるに、袖ふる山の眞近く見え渡りければ、

そでかへす天津乙女も思ひ出でよ芳野の宮のむかしがたりを

と打詠めさせ、月更くる迄おはしましけるに、御夢ともなく、袖ふる山の上より、白雲の棚引きて、南殿の御庭の、冬枯れし櫻の梢にとまりけるに、夫かと計り思しやらせ給へる乙女の姿の打萎れたるが、

かへしなば雨とや降らんあはれ知る天津乙女の袖のけしきも

と泣く〳〵詠じて、雲隱れけるを、御覽じおくらせ給ひて、御心細げに渡らせ給ひし御有樣の、忘られ難くこそ。

三　明神臨幸の道を照し給ふ事

同じ帝、花山院を密に出御ならせ給ひて、大和の方へ赴かせ給ひけるに、いと暗き夜なりければ、御供に侍ひける人々も、如何にせんとわび合へるを聞かせ給ひて、此

所は何方の程にやと、尋ねさせ給ひければ、忠房の侍從、稻荷の御社の前にこそと奏し給へば、御歌、

うばたまのくらき闇路に迷ふなり我にかさなんみつの燈火

と、伏拜ませ給ひければ、御社の上より、いと赤き雲一叢、むら立ち出で來て、臨幸の道を照らし送りて、大和のうち山といふに入らせ給へば、雲はかねの御嶽の上にて、消え失せにけり。まさしく御供に侍ひて、見し事にこそ。

四　吉水の法印歌の事

同じ帝、芳野へ遷らせ給ひける。またの年の春、睦月の末つ方、吉水の法印に仰せ給ひける御歌、

三芳野の山の山守こと問はんいまいくかありて花は咲きなん

と、遊ばされし御返しに、

花咲かんころはいつとも白雲のゐるをしるべにみよしのゝ山

と、勅答申されける。

五　勾當內侍の歌の事

同じ御時、山の櫻を眺めさせ給ひて、勾當の內侍に、折節の移り變るにこそ。昔の歌に、

　　をしなべてこのめも春と見えしより花になり行く三芳野の山

と、詠みつる時は、此山をまだ見ざりし。今はた此處に住み馴れて、其折節の戀しく思ひ出でらるゝは如何にと、宣はすれば、共に打泣き給ひて、

　　いにしへを思ふ淚はみよし野のよしのゝ山のはなのしらつゆ

と、啓し給へば、いといたう哀れがらせ給ひけり。誠に限りなき淚の、いとしるくこそ覺え侍りけれ。折節雁の通りければ、かく心かく雁こそかへれと、宣はせ給ひければ、內侍、

　　雁金に我身をなさばみよしのゝ色も見捨てゝかへらさらまし

となん。主上、をかしがらせ給ふとこそ。

六　内侍、妹の方へ返歌の事

同じ内侍に、古郷の妹君の方より、山の内の御住居こそ思ひやられて、いと悲しうこそと、ありける御文の返事に、

春は花秋はもみぢをみよしのゝ山のかひあるすまひとをしれ

七　御歌の德にて雨晴れし事

先帝の御時、五月雨のいと久しう降り續き侍りける頃、上達部、數多御前に侍ひ給ひて、御遊のおはしましけるに、實世卿の、川音高き五月雨に、岩もと見せぬ瀧の景色こそこよなうと、啓しさせ給ひければ、さもこそあらめ。空さへ晴れなばと宜はせて、其あけの日、取敢ず御幸ありけるに、觀音堂のほとり迄渡らせ給ひけるに、空の景色、いとおどろ〳〵しくなりて、また掻曇りて、篠を突くが如く降り出でければ

後醍醐天皇崩御

ば、御堂に暫く立ち休らはせ給ひて、

　　こゝはなほ丹生のやしろにほど近し祈らば晴れよ五月雨の空

と、詠じさせ給ひければ、時にとりて霽れけるのみかは、日影うらゝかになりて、夫より降らざりけり。帝徳のいみじく渡らせ給ふを、人々も頼もしく思ひ合ひてけるに、八月の始め頃より、秋霧におかされさせ給ひけるが、兼て時をも知召しけるにや。同じき十五日の夜、親王を、左大臣經忠公の亭に移し奉らせ給ひ、三種の御寶を譲りおはしまし、御行末の事、いと細やかに仰せ置かれて、御劍と法華經とを、左右の御手にものし給ふ。十六夜月と共に、雲隠れさせ給ひけるに、附隨ひ奉りし人人は、たゞ闇路に迷ふ心地なんし給ひける。御姿をあらため奉りて、如意輪寺の御堂の後の方にをさめ奉り、御送して、人々は歸り給ひけれども、更に人心地もなかりければ、御廟の前に泣き明しして、東雲過ぐる程を待ちて、かしら下し、畏き御影のあたり近く、草庵を結びて、なき御跡迄仕ふまつりけるに、其長月の十日餘りの月、いとさやかに見ゆるに、昔の御事など思ひ出して、

いまははや忘れ果つべきいにしへを思ひ出でよとすめる月かな

といひて、少し睡みけるに、御廟の前に、百官、袖を連ねてなみ居給へるを、資朝卿の萬づ計らはせ給ひておはします御袖を控へて、問ひ奉るに、此處にては、舊都に程遠くして、御本意を遂げさせ給はん御謀もなり難かりければ、龜山の仙洞に、行幸ならせ給へるにこそあなれと、宣ひも敢へぬに、御扉の開き給へるに、見奉れば、其際の御姿にて、王の御輿に召されば、伶人、樂を奏して、百官供奉し奉りけりと見て、打驚きけるに、松吹く風に、音樂の猶ほ聞ゆるものから、五つの色の雲、御廟より出でて、北の方へ長う棚引きて見ゆるに、更に涙も止まらで、御影もいまは爰におはしまさぬにやと、いと悲しくて過し侍る程に、同じき夜に、舊都にいます夢窻和尚の夢に、君、龜山の舊跡に幸行ならせ給ひて、群臣と共に宴せさせ給へりと見給うて、武家に心を合せて、御寺を營み給へりと、後に傳へ聞えけるに、今更のやうに思ひ出でられて、皆袖を絞り侍りし。

宗房卿の秀句

八　宗房卿の秀句の事

先帝の御時、辨の内侍といひけるは、右少辨俊元朝臣の御女なりけり。御父に遲れさせ給ふものから、母君さへ、世を厭はせ給ひければ、三位行氏卿の許におはしましけるを、先帝御位をそへさせ給ひしより、御宮仕し給ひける。又世の中亂れて、皇居も所定まらざりけれども、離れ給はで、芳野迄參り給ひけり。或夜御前に、中納言隆資卿・洞院の實世卿・宗房卿、其外數多侍ひ給ひけるに、御酒給はせんと、此内侍の、御土器もて出て給ひけるに、如何し給ひけん取落し、二つ計りに割れければ、御氣色のいと惡しく見えさせければ、取敢ず、

さかつきの割れてぞ出づる雲の上

と宣ひければ、御心よげに、誰か次ぎ給へかしと、秀句にとりなさせ給ひければ、宗房卿、

星の位のひかりそへばや

といひ給へるに、輿ぜさせ給ひて、夜も明けなんとする迄、御酒まゐりけるに、山鳥の聲の聞えければ、隆資卿、

還幸となくや芳野の山鳥かしらもしろしおもしろの夜や

と宣ひければ、いと〳〵う、御心よげに渡らせ給ひけり。

九　高の師直内侍を奪ひ取る事

辨の内侍、御形はいとめでたく侍ひしを、武藏守師直が、如何なりけん折にか見染めけん、心に懸けて思ひけるに、帝、隱れさせ給ひて後、密に御文奉りて、忍び出でさせ給へ、御迎を參らせてんと、度々いひ越しけれど、御返もし給はざりければ、ねたく思ひて、行氏卿へ通ひける女のありけるを求め出てて、北の方へ、斯かる事なん侍る、共に計らはせ給ひて、本意遂げなんには、しらさせ給はん所をも、數多つけ侍りなん。三位殿の官位をも進めてなどいひおこすれば、さらぬだに、世の中の人の恐れぬはなきに、いと賴もしく聞えければ、御文を調へ給ひて、内侍の君に、もと仕ふ

奉りし梅が枝といひし女を添へて、共に計らはせ給へかしと聞えけるに、いと喜びて、命を懸けて契りける侍、二十人が程選びて、梅が枝に添へて、芳野へ遣しける。内侍の君に、梅が枝が、北の御方の文を待ちてこそといひ入れけるに、御戀しう思ひて過ぎしつるに、此方へと召されて、御文奉るに、遙にこそ渡らせ給へ、山里の御住居、さこそと思ひやらるゝ毎に、袖をこそ絞りあへ給はね。御戀さのいとせめて、住吉へまうで侍りし程に、道の便も知るべければ、逢ひ奉らん事を思ひて、河内の國とかや、高安の邊に、知りたる人の侍ふに、參りてこそ待ち奉れ、はかなき世の、まして亂れがはしければ、此度ならでは、いかで相見んなど書き給うて、

　あひ見んと思ふ心をさきだてゝ袖にもしられぬ道芝の露

と、御使も、御文の心に搔口說きければ、誠の御母君に、捨てられ參られしよりは、それともまさりて思ひ給ひし御情の忘られて、朝夕戀しう思ひ奉りつれとて、君に御暇を啓し給ひて、取敢ず出てさせ給へり。女房二人・青侍三人、御供には仕ふまつりけるに、道に人出て合ひて、高安にまたせ給ひけれども、人多くてむづかしけ

高師直・辨の内侍を奪はんとす

正行、辨の内侍を救ふ

れば、住吉迄罷るにこそ。若し御出も候はゞ、あれ迄具し奉れと、仰せ置かれて候へばとて、多人數出でて、取籠め奉る。いと心得ぬ事にこそ、住吉迄遙々といかで行きなん、御輿を返せと宣はすれば、青侍共、御輿を返しなんとしければ、たゞ住吉迄急ぎ給へと、引立つるに、如何にも叶ふまじけれと、引止むるを、さないはせそとて、三人共に打殺してけり。君はいと恐しく、鬼に捕はれ給へる心地し給ひて、たゞ泣きに泣かせ給へり。物の哀れをも辨へぬ武者共、情なう、今宵住吉迄急ぎなん、殿も夫迄出迎ひおはさんなどいひ罵りて、石川といふ所迄、出で行きけり。帶刀正行が、芳野殿へ召されて參るに行逢うて、其程過しなんと、傍なる木陰に立ち忍ぶを、心元なく思ひて、立止りて事の様を問ひけるに、局方の、住吉に詣でさせ給ひけるといふに、さてはとて過ぎなんとするに、内侍の泣き給へる聲を聞きて、押して御輿のほとりへ立寄りて問へば、かう／＼の事になんと宣はすに、いかさま怪しければ、奏しなん程は、皆召捕れとて、殘らず搦めにけり。恥を思へる者三人・四人ありて、拔き合せ戰ひけれども、終に打殺しぬ。芳野へ參りて、事の由を奏し奉れば、梅

が枝を難して問はせ給へば、謀りつる事を申しけるに、侍共は皆切られて、梅が枝は尼になし給うて、斯る有様を、北の方へよく〳〵啓せよとて、返されにけり。此正行がなかりせば、いと口惜しからましに、よくこそ謀らひつれとて、内侍を正行に賜はせんと、勅ありければ、正行畏りて、

とても世に永らふべくもあらぬ身の假の契をいかで結ばん

と、奏して辭しにけり。其時は、心得難く覺えしが、後に思ひ合されて、いとゞ惜しみ合ひにけり。

十　伊賀の局化物に逢ふ事

新待賢門院に、伊賀の局といふありけり。是は左中將義貞朝臣の侍に、篠塚伊賀守といへるが娘になんありける。女院の御所は、皇居の西の方にて、山に續ける所なりけり。去ぬる正平丁亥の年の春の頃、化物ありとて、人々騷ぎ恐れ給へる。形をしかと見定めたる者もあらず、行逢ひけるものは、心地暗くなりけり。内裏より

御宿直人數多參らせ給うて、蟇目など射させ給ふ。其程は靜まりにけり。水無月十日餘りの程に、いと暑き頃なりければ、此局、庭に出で立ち給へるに、月の差出でて、いとあかゝりければ、

涼しさを松吹く風に忘られて袂にやどす夜半のつきかげ

と、誰れ聞く人もあらじと、獨りごち給へるに、松の梢の方より、からびたる聲して、たゞ能く心靜なれば、則ち身も涼しといふ古き詩の下句をいふに、見上げ給へば、さながら鬼の形にて、翼の生ひ出でけるが、眼は月よりも光り渡るに、勇き武者の心も消え失せぬべきに、打笑ひ給うて、誠にさにこそありけれ、さもあらばあれ、如何なるものにかあるらん、怪しく覺ゆるにこそ、名乘し候へと問はれて、我は藤原の基遠にこそ侍れ。女院の御爲に、命を奉り侍ひしに、せめては亡き跡をとはせ給はん事にこそあれ。夫さへなく候へば、いと罪深く、斯かる形になりて、苦しき事のいや增されば、恨み奉らんと思ひて、此春の頃より、後の山に侍へども、御前には恐れて參らぬにこそあれ。此由啓し給ひなんと答へければ、實にさは聞及びし。

されど恨み奉るべき事かは。世の亂に、思ひ過し給へるぞかし。其事計りならば、啓して弔ひてん。さるにても御經には、いかなる事か能かるべき、心に任せ侍らんと宣へば、たゞ其事計りに候へ。御弔には、法華經に如くはあらじ。さらば歸りなんといふに、歸らん所は何處にかと宣へば、露と消えにし野の原にこそ、亡き魂はうかれ候へとて、北を指して光りもて行くを見送りて後、女院の御前に參りて、啓し給ひければ、誠に思ひ忘れてこそ過しつれとて、あけの日、吉水法印に敕ありて、御堂にて、三七日法華經を供養し給ひけるに、其後、敢て異なる業もなかりし。浮びてやあるらん、いと賴もし。

十一　同局芳野川にて高名の事

此局、一年武藏守師直が、皇居を襲ひ奉る時に、防ぐべき便のなかりければ、人々猶ほ山深く入らせ給ひけるに、女院の御供に、はか〴〵しき侍も附き奉らで、女房達ばかりなりけり。吉野川の橋一間が程破れ落してありけるに、詮方なくて、皆呆れ

て立たせ給へるに、此局、其ほとりの松・櫻の大枝を引折り〳〵打渡して、女院を負ひ奉りて、人々をも渡し果て給ひける。後に其時の大枝を、そのべの六郎に折らせて御覽ありけれども、叶はて止みにけり。いといかめしき事にぞありける。今は左馬頭正儀の妻になんなり給ひし。

十二　源中納言の北の方發心の事

先帝の御時、源中納言、陸奥の軍を數多隨へ給ひ、道々をも平げて、美濃の國迄おはしける由、先立ちて聞えければ、上より、初めて頼もしき事に覺し給ひけるに、阿部野の露と消えさせ給ひけりと、刑部丞友成が、其の際の有樣を、參りて泣く〳〵語るに、燈の消えぬるやうになん、人々御心はなりにけり。御父の卿は、いか計り覺すにかとて、

先立てし心もよしや中々に浮世のことをおもひわすれて

北の方は、たゞ伏し沈ませ給うて、更に御心地もなかりけるを、騷ぎて面に水など

注ぎしける程に、又の日の夕暮の程に、少し御心地の出できさせ給ひて、

玉の緒の絶えも果てなく繰返し同じ浮世に結ぼふるらん

なほ同じ道にと、思召立ち給へる御氣色の、いちじるく侍りければ、立去り給はて、人々の守りければ、御心にも任せ給はて、くはんしん寺といへる山寺の麓にて、御髮下してすませ給へるに、過ぎにし事共を思ひ給ふにぞ、

そむきても猶忘られぬ面影は浮世の外の物にやあるらん

爰に三歳が程過し給うて、世の騷も、屢々靜まりければ、さすが古郷の方や思ひ出され給ひけん、芳野山を辿り出でさせ給ふとて、

何處にか心を止めん三芳野の芳野の山をいてて行く身は

親房卿の御許に、屢おはして曉方に立出でさせ給ひけるに、御名殘の盡きさせ給ふまじき御事にてありければ、顧みさせ給へるに、有明の月のいとさやかに、山の端近く見え給へば、

別るれどあひも思はぬみよし野の峯にさやけき有明の月

阿部野を過ぎさせ給ひけるに、爰なん其人の消えさせ給へる所と告げければ、草の上に倒れ伏させ給うて、

なき人のかたみの野邊の草枕夢もむかしの袖のしらつゆ

此ほとりに、刑部の丞友成が、世を背きてありけるを、尋ねさせ給ひけるに、急ぎ參りて、御有樣を見奉り、さしも由々しく渡らせ給ひける御裝の、いつしかかばかり衰へさせ給ひけるにやと、涙も止め敢ず、住吉天王寺のほとり迄、御従に參りて、所所の案内しけるに、天王寺の龜井の水のほとりの松の木を削らして

後の世の契の爲に殘しけりむすぶかめ井の水くきのあと

と、書付け給へり。夫より友成入道は歸りにけりと、一歳尋ね來りて語りけるに、いと哀れに思ひ奉りて、其後、天王寺へ參りけるに、御筆の跡消えも果てずして殘りけるを、見參らせて、そゞろに袖を絞りけるにこそ。其後舊都に上らせ給ひて、母君も共に世を背きおはしけるが、先立ち給ひて、又の年の春、うせさせ給ひけりと聞えし。中納言資相卿の御女なりし。

新田義助藤原藤房と相會ふ

十三　藤房入道鷹巢山にて讀經の事

刑部卿義助朝臣の、越前の國よりいまして物語に、越前の國鷹巢の山は、高く峙ちて、城郭に然るべき所なりければ、六郎左衛門時義といふ者に守らせけるに、案内を知らんが爲めに、猶ほ奥深く分け入りてけるに、谷川のいと清く流れけるを、其水上を尋ねに上りけるに、さし出でたる岩をかたどりて、松の葉にて葺きたる庵の見えけるを、斯る所にも住む人のありけるにやと、立寄りて見侍れば、木の葉を集めて筵とし、平なる石の上に、法華經を置きける外には、何も見えず。暫しありけるに、山路を辿り來る人を見れば、痩せ衰へたる僧の、法を手に持てり。如何にし給ふにやと、物の隱れより見けるに、谷川の水を掬びて、庵の内に入りて、經の紐を解きける程に、讀み始め給はぬ先にと、急ぎ行きて、斯かる御住居こそ、いと珍く覺え候へ。いかなる人の、世を背かせ給ひけるにやと、問ひ奉るに、そこには如何にと、尋ねさせける程に、名乘をしつれば、いと本意なきさまして、東の者にこそと計り宣ひて、

經を讀み給ひし程に、歸りて候へ。藤房卿の御面影して侍るといひし儘に、いと床しくて、一條少將を伴ひて參りけるに、庵は其儘ありて、僧は見え給はず。經のありつる石と聞えしに、

此處もまた浮世の人のとひくれば空行く雲に宿もとめてん

と、書付け給へる筆の跡を、少將の能く見知り給ひて、其邊の山々を尋ねさせ給ひけれども、更に見え給はねば、いと本意なくては宣ひしを、人々聞きもあへ給はで、皆涙落してけり。さしもいみじかりける人のきゝしかごとの御住居は、誠に有難き御心にこそ。年月を合せて見侍るに、君が住む宿といひこされし後の事なり。越の方より、筑紫へ通り給はん折にや。其後に絶えて御音信も聞かざりし。此藤房は、大納言宣房の子なりしを、才智世に勝れ給ひて、君にも御覺の淺からで、中納言迄なり給ひしが、建武甲戌の年の春、俄に世を捨て給ひし、

十四　中納言藤房卿捨文の事

藤房卿の拾文

同じ頃、大納言實世卿の御許へ、童の文もて來りけるを、見給はせければ、

君がすむやどのあたりを來て見れば昔に濕らす墨染の袖

と、さながら手跡も昔に變らぬを、哀れと驚かせ給ひて、御使の童を召寄せて、問はせ給へれば、今朝西なる野に出てて、草を刈り侍るに、瘦せ衰へたる修行者の、此文屆けてよと、仰せ候ひしといふに、急ぎ皇居へ參り給うて、大和・紀の國・河内、關々に敕して、修行者を止めけれども、夫とも覺しきもあらざりけらし。藤房入道の文にてぞありける。

十五　藏王堂炎上附御託宣の事

藏王權現は、役の優婆塞の行ひ出てさせ給へるより、此方靈驗あらたに渡らせけるにより、大塔・金堂玉を磨き、南の方には、金剛力士の立たせ給へる二階の門、東に救世觀音の御堂、阿彌陀如來の御堂は、西の方に立たせ給へり。中にも大ゐとく天神の御社は、日藏上人のめいどにて、延喜の帝の敕を請け給ひて、此所に齋かせ給へ

師直藏王堂を燒亡す

るとかや。さしも由々しき軒を並べておはしましけるを、正平己丑の年、睦月の頃にや、帯刀正行が、世を短う思ひとりて、力の衰へぬ中に、君の御爲め父の爲めに討死してんと、先帝の御廟に詣でて、心を一つに思ひ定めける輩の名を書付けて、敵の陣に向ひけるが、多くの軍を追靡けて後、終に討死せし。勢に乘りて、武藏守師直が、四萬餘の軍を從へ、皇居を襲ひ奉りしに、防ぐべき便なかりしかば、君を始め奉りて、猶ほ山深く入らせ給ひけるに、皇居を始め參らせて、多くの伽藍を燒き亡しけるが、誠に淺ましき業なりけり。神といひ佛といひ、二世の苦みをいかで遁れ侍らはんや。斯くて軍共歸りしかば、形計りなる假屋を造りて、本尊を移し奉るに、衆徒の中に、某の法眼とかやいひしが、夜もすがら御前に侍ひて、今は佛の御力も失せさせ給ひけるにや。斯く淺ましき御有樣にこそ、柔和の御姿を引換へさせ給へる御しるしもなかりつれとて、さめ〴〵と泣き居て、打眠りけるに、夢ともなく現ともなく、柔和の御尊體の現はれさせ給ひて、よしやたゞ恨みずともあらなん。佛は、迷へる衆生を導かん爲にこそ、此上には、濟度方便の事にこそあれ。佛も本は

衆生なり。衆生はつゐの佛なり。罪を作りし上にこそ、又罪をも與へめ。立向ひては本意にあらず、夫と知らるゝ事の、などかなからんとぞ。

恨むなよさてやはやまん梓弓まゆみつき弓年はふるとも

と、言捨てさせ給うて、曉の月の、山端に隠れさせ給へるが如くなりけるに、打驚きて、あのありつる事を委しく記して、奏聞し奉らるゝに、人々も覺束なくおぼし給うて、深く納め置き給ひけるが、果して あけの年より、尊氏と直義とのなからひ惡しくなりて、直義御味方に降りて、又の年の二月の程に、武藏守が一族、皆亡びにける。其折に、樣々不思議のありける由、傳へ聞きしかど、見ぬ事なりければ、爰には洩らし侍る。直義も、君の御力を借り奉りて、私の本意を遂げぬれど、又心變して、都へ歸りけれども、實の道ならねば、天に背きて、其秋の頃にや、東にて、尊氏に亡されけるとぞ聞えし。

十六　熊王發心の事

大夫の判官光教が、津の國の固めありける時、左馬の頭正儀に、度々計られけるを、口惜しく思ひこめて、過し侍りけるに、去ぬる住吉の戰に討たれて、うせしうの、六郎といひしが子に、熊王といひけるが、また幼き時、光教にいひけるは、正儀は、我爲にも親の仇にて候へば、いかにもして討ち侍らん。河内へ打越え、正儀に仕へ侍らんに、幼くて侍らへば、などか心を許し申さん事のなかるべき。縱ひ心を許す事の侍らずとも、七年・八年程も仕へ侍らはゞ、其内には、討ちぬべき便の、いかでなからん。御暇をこそ給はらめと、涙を流せば、光教もいと哀れと思ひ乍ら、幼ければ、敵の國へやらんも心元なし。または命に代りて、討たれし者の子なれば、形見とも思ふべけれと、強ひて止め侍ひけれども、少しおとなしくなりなば、よも近付け給はじ。幼くありなん時參りてこそと、頻に望みければ、力及び給はて、常に身を放ち給はざりし刀を給ひて、是にて本意遂げよとて、阿部野まで、人數多添へてやらせけるに、夫よりは我に等しき童一人を具して、赤坂の城に行きて、其ほとりにたずみてありけるを、兵庫介忠元が見付けて、如何なる人にやおはすらんと尋ねら

れて、我は大夫尉光教の侍に、うの丶六郎といひける者の子に、熊王といへる者にて候へ。父にて侍る六郎は、古住吉の戰に討たれて候を、一門にて侍る備後守が、我を追討ちて、領地を奪ひ候へども、光教と心を合せ候へば、詮方なくて、如何なる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり、父が跡を弔ひ候はんが爲に、さそらへ侍るといひけるを、哀れと聞きて、先づ我が方に伴ひて、樣々勞はりて後に、正儀にありつる事を語りて、幼くは候へど、心のさかしくてなど申すに、哀れがり給ひて、召寄せ給へり。元より情ありける人なりければ、熊王も思も付きて、親の仇をも忘れにけるにや、能く宮仕へにけり。十五六程になりければ、河内の國にて、少しき所を知らさんといひけれども、恥ある一矢をも射候てこそとて、辭しにけり。明る年の春、父が七廻に當りけるに思ひつけて、今宵は正儀を討ちて、父の手向にもし、光教の心をも休め奉らんと、思ひ立ちてありけるに、其日正儀のいひしは、今日こそ吉日にてあるなれば、元服せよかしとて、和田和泉守に髻取上げさせて、和田小次郎正寛と名乘らせ、芳野殿より給はせける鎧を給ひければ、熊王、涙を袖にうけて喜

ぶ。夜に入る迄、正儀が前にありけるが、又ふと思ひ出てて、討ち奉らんなれば、今宵こそと思ひて、膝を直して、正儀に目を懸くれば、年頃の情深かりし事、今日の元服の事など思ひ續けて、いかで情なく討ち奉らんと思ひ返して、心を靜むれば、父の敵、又は譜代の主君の仇といひ、一方ならねばと思ひ定めけれども、何心もなく渡らせ給ふ有樣を見ければ、痛はしく堪へ兼ねけるにや。廣緣に出てて、大聲を揚げて泣き叫ぶを、人々も正儀も、覺束なく思ひ給うて、障子を開き見給へるに、伏し沈める樣の、たゞには見えずありければ、いかにやと、問はせ給ひければ、ありつる心の內を啓して、兎に角に君の爲め先君の爲め父が爲めに、自ら死なんより外は候はずとて、刀を取直せば、ありつる人共が、皆涙に暮れてあり乍ら、いかてかさはあらんと取付きて、働かさねば、力及ばて、後には其刀にて髻押切り、往生院にて形を變へ、君より給はせたる名なればとて、正寬法師とぞいひける。寺の傍に草の庵を結びて、若しも心の變る事のありもやせんとて、往生院の門の外へは出でずして、行ひてありけり。光教より給はりける刀は、ありし有樣を委しく書添へて、古鄉へ返

しけるとかや。いと哀れにこそ侍れ。

芳野拾遺物語　巻第一終

芳野拾遺物語　巻第二

一　鷹、怪鳥を取る事

今上御位に居させ給ひし初めつ方、伊豫國左馬介氏明の許より、世に例なき程の逸物なりとて、はい鷹一もと奉られしを、大納言隆資卿に預けさせ給ひて、折々御覽じさせ給ひけるに、誠に勝れたりけり。其頃、皇居の上なる山の茂みより、夜な〳〵出でて、鳥の聲に似て、内裏に響き渡りて鳴くを、怪しき物にてあらんと、武士に仰せて射させ給ひけれども、所定めざりければ、彼も是も、叶はで止みにけり。或時彼の鷹を、麓の野邊にて、雉子に合せ給ひけるに、雉子には目もかけて、山の方へそれ行くを、さしも賢う思召し、御鷹をとて、行く方に群り行くに、茂みの内に入りけるを、いかにせんとて守り居ける程に、鵺の大さなる黒き鳥を追出して、空にて組合

ひ、共に落ちけるを、人々寄りて、怪鳥を殺してけり。形は鳥の如くにて、左右の翼を引延して見ければ、七尺餘りありけり。鷹、胸の程を喰はれて、暫しの程ありて死にけり。夜な〳〵鳴きつるは、此鳥にてこそありけん。其後は音せざりけり。何れ、たゞ事にてはあらじとて、二つの鳥を塚にこめて、其上に小き社を建て、鳥塚といひて、正にありける。いと怪しき事にこそ。

二　康方水練の事

將軍の宮、若き殿上人數多供はせ給ひ、芳野川にて、鵜を遣はせて御覽ありけるに、左衞門尉康方が若かりける時に、鵜の鮎を喰ふを見て、あたら事にこそ、鳥の喰ふ魚を取りて、まさなごとにせさせ給へかし。網こそ能かるべけれといひけるに、皆人をかしがらせ給ひて、汝、網捌きなんやと宣はす。いと能く捌きなんといひて、網を持ちて出づるに、衣皆脫ぎ捨てゝ、烏帽子はありし儘にありけるを、緒を強くしめ、舟に乘らんとするに、たゞ置き給へ、いと怪しうと、制せさせ給へども、何かは網

を打入れけれども、魚一つもなかりければ、人々笑ふに、また網を入れんとせしが、蹈み外すが如くにして、つぶ〳〵と水の底に沈みけるを、さればこそとて、人々騒ぎて、水に慣れたる者共を、川の下に入れさせ、求めさすれども、敢て見えず。暮れなば、篝火にて鵜を遣してん、螢の面白からじなど思し給へる興も盡きて、せめては骸(なきがら)をだにと、岩根々々を隈なく見せさせ給へども、甲斐なし。親しきが許へ人を走らせなどし給ひ、一時が程も過ぎにければ、人々は歸り給はんといひ合ひ給へるに、少し河上の方に、烏帽子計り、水の上に見えけるを、あれ〳〵といふが内に、顏計り差出して、打笑ふを、如何にといはれて、まさな事にせさせ給はん程の者は、網にては止め得じと、思ひ候ひて、水底を求め侍りしに、爰許には候はて、宮の瀧のあたり迄行きてこそ、思ふ程に候ひ給はねどといひて、浮上るを見れば、三尺許りなる鱸といふ魚と、二尺餘りの鯉とを、左右の脇に狹みて、蛭子の樣して、岩の上につい居けるに、人々驚き、宮にもなきものと思召して、周章て騷ぎつる樣など、語り給ひて、興に入り給ひぬ。其後鵜を遣はせ、螢を取りなどせさせ給ひて、つとめて上

の御前にありつる鱸を奉らしめ給ひて、康方が事を啓し給はせければ、興あることにこそ。近き程に御幸ありて、御覽じさせ給はんと、仰ありけるとかや。

三　康藤が下女が事

此康方が親大夫丞康藤が許に、下仕しける女ありけり。同じく侍らひける藤六といひける雜仕と、心を通はし侍りけり。彼女、いたく痛はりありける事の侍りしかば、藤六が居ける山陰の屋にこさせてありけるに、京にありける女の母の、夕暮の程に、斯かる事のありと聞きて、いと心許なく思ひて、取敢ず來にけりといふに、女もいと嬉しげに、昔の物語などしける。此母、いと甲斐々々しく扱ふを、男は嬉しき事に思ひて、此程の疲に、心怠りして眠り居けるに、此女の聲して叫ぶに、打驚かれて、何故にやといへど、また女は、いらへもせず伏し居けるに、夢にやありつらんと思ひて、灯の影より見るに、母は枕上に居て泣き居けるを、心得ず思ひ乍ら、又暫し眠りける程に、此度はいたく叫びて、屋の上の方に聞えけるに、其まゝ起出てけ

れども、灯も消え失せにければ、走り出てて聞くに、屋の上より、山の方に叫び行く。周章てゝ呼ばはる程に、康藤も、何事にかとておはす。外の人も聞付けて、數多入り來て、松ども點して尋ぬるに、後の山に、聲に附きて行けば、下なる谷に聲すなり。谷に行けば、彼處に聞え、彼處に行けば、爰に聞え、手を分けて叫ぶ聲を、知邊に追ひ行けば、夜の明け行くに從ひて、聲も微かになりて、ほの〴〵と明けにければ、追ひ止まりにけり。分ち追ひける人々の、青根が峯の方へ行きしもあり、宮の瀧・むつだの淀・あしたが原など迄、聲に附きて行きしぞ心得られね。ありつる寢屋に歸りて見れば、女は其儘臥してあり、母は見えずなりけり。其後便に附けて、母の事を聞き侍るに、其の日の夕暮の程に、京にて身まかりけるとかや。猶心得られぬ事にこそ。

四　怪しき果を食ひて死する事

同じ頃、先帝の御廟の後の方に、異る木の生ひ出てけるを、誰も知らず。過ぎにし

其年、三尺餘りに延びける儘に、人見付けにけるに、如何なる木とも知らず。木の皮は、櫻木に等しくて、葉は桂のやうにて、夫よりはいと大きなり。又の年の春如月の頃に、花の咲きけるを見れば、椿のなりして開きたるが、五寸計りもあるらん、色は血汐の紅も、及び難き程になんありける。凋み散りて、秋の半に實のなりけるが、いと大きなる柿のなりして、始めより、花の色の如くに赤かりけり。古き山人、數多召出されて、尋ねさせ給ひけれども、知れる者もなし。典藥の頭も、古き書にも、見侍らずと、奏し奉れば、斯く怪しきものはさてありなんとて、まはりを嚴しく圍はせ、人を付けて守らせしめ給ひけるに、源の康村が下仕の童が、夜、密に此實を盜み取りて喰ひけるに、味の香しき事は、物になぞらふべくもあらずといひけるが、頭より足の先迄、たゞ赤くなりぬる事、譬ふべくもあらず。心地損ひ、二日・三日して死にけり。其木も、師走計りの雪に逢ひて枯れにけり。いと怪しき事にこそありけれ。

五　兼好法師來談の事

同じ頃、兼好法師が、玉津島に詣しけるとて尋ね來て、古、深く契りける中なりければ、いと嬉しくて、昔今の物語しけるに、古、法皇の、和歌の道に深く思し入らせ、御情の淺からせ給はて、かしこき御影とならせ給ひし悲しさの儘、世に永らふべき心地もあらざりけらし。せめての遣る方なさに、御後の世をもと、思ひ侍る儘に、斯かる姿となり侍れども、露の命の消え難くて、斯からん世を目の當りに見侍る事よと、袖を絞られけるに、我も、先帝の御情の忘られ難くて、御跡をも慕はまほしく思ひ侍れども、さすがに思ひ返し侍りて、柴の扃には侍れども、心は浮雲の風に漂ふらん樣して、はかなき夢路には、古郷の空にも通ひ、「思ひ」とづむれば、西の空にも憧れ、春の朝には、芳野の花の梢に宿り、秋の夕の哀れを思ひ續けては、さやけき月の影をも曇らせ、脆くも落つる木葉を見ては、はかなき世を思ひ巡らす袖の時雨となりて、染めにし墨の色も空しく、旅行く人を思ひ送りては、まだ見ぬ嶺をも越ゆる

にこそ。いかなる緣にもふれ侍りて、人目絕えなん山深き岩の洞にも納まらでとこそ、歎き過し侍りぬといへば、誠にさには候へども、我れ一年、木曾の御坂のあたりに、さすらひ侍りし時、山のたゝずまひ、河の淸き流に、心止り侍りしかば、爰にぞ思ひ止まりぬべき所にこそ侍れとて、

思ひ立つ木曾のあさきぬ淺くのみ染めてやむべき袖の色かは

と詠じて、庵を引結びて、暫し候ひしに、國の守の鷹狩に、數多の人具し給うて、山深き庵のほとり迄いまして、狩し給ふさまの淺ましく、堪へ難かりければ、

こゝもまた浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな

と、詠め捨てゝ出で侍りし。夫より何方に、心を止むべくもあらずと思ひ取りて、古鄕に立歸りて侍れば、世の中の亂れける程に、たゞ和歌をともなひとして、心を澄し侍らんより外はあらじと、思ひ侍るにこそと、啓して、淚を流されしは、誠に世を背く心は等しくこそありけれ。そゞろに袖を絞り侍りし。

六　公連朝臣閑居の事

長月の頃、芳野を出てて、奈良の都のゆかしく侍りて、此處彼處見ありき侍るに、大安寺といへる所に、公連朝臣の世を厭ひゐますなるを思ひ出てて、尋ね侍りしに、隙あらはなる柴の戸の、暫しが程も住むべくもあらぬ、板井の水は木葉に埋れ、わざとならぬ庭の草むらの色は、さながら霜にけたれぬるにや、風もたまりぬべくもあらぬ障子を、引立てゝゐますにや、其方に御經の聲ぞ聞ゆなる。讀み滿てさせ給へる程を待ちて、見候へば、さしも華やかにおはせし有樣は、いづちいにけん、瘦せ衰へさせて、香の煙にふすぼりたる形に、涙を浮べさせ給ひて、世のつゝましさに、ふと思ひ立ちて、斯かる姿にこそ侍れ。其際には人々の俤のみ立添ひ侍りて、世を遁れし甲斐もなくこそ、くやしきのみに過し候ひしが、程經るまゝに、浮雲の消え行く心地になん物し侍りて、心の月も澄み渡りて、後世の營みより外は候はねども、父の卿の、さぞ便なく思し歎かせ給ふらんと、思ひ出づる度毎に、また搔き曇る

にこそ。されど讀み奉る御經は、其の御爲に回向すなれば、二世共に御心安く居させ給はんかしと、立歸り給はゞ、傳へなんなど仰せられて、一夜が程、昔今の物語して、ほの〴〵と明くる程に、泣々歸りにけり。此公連朝臣は、洞院右大臣殿の御子にて、御覺もいかめしく渡らせ給ひ、頭の中將までならせけるが、今上の后の宮を、いかなる玉垂の間、求めさせ給ひけるにや。仄かに見させ給ひけるが、絶えぬ思に、世の中の事も思し忘れて、打臥させ給ひけるを、暫しは、如何なる御惱にやと、人知らざりけるに、思ひ弱らせけるにや、忍びて御文奉らせ給ふ。

芳野川岩打つ浪のいはてのみ玉散るそてを君にみせばや

宮の御返し、

なき名さへ早く流るゝ芳野川岩打つ浪のいはてやみなん

とありけるを、うちも置かせ給はて、詠め明しけるに、御父の卿、ふと入らせ給ひければ、驚き給ひて、置き忘れたる文を見給うて、例なき事にはあらねども、斯く亂れたる世にしあれば、君さへ鄙の御住居に渡らせおはしまして、安き御心もおはすべ

きかは。まして下としては、御敵を亡しなん謀を、心に籠めてこそ、誠の道ならめ。それさへあるに、御うしろめたなき事にこそ。たゞ思ひ止まりてとよ。公泰公の三の君をこそ、迎へらんと諫め給へば、いと／＼う恥しげに、詫びられし氣色なりしが、其夜、芳野を忍び出てさせしに、行方の暫しは知られざりけるが、程經て、大安寺に居ます由の聞えければ、大臣殿より、さま／＼仰せられけれども、心強く世を遁れ給ひけるとかや。

七　犬王丸、山賊に逢ふ事

隆俊卿の許に、召使ひ給ひし犬王丸といひし童、山賊に行逢ひて、矢に當りなんとしけれども、やう／＼逃げ延びて、吐息もつきあへず語りけるを、殿、聞かせ給ひて、

梓弓ひきて慕へる山だちは犬おふものといふにあらなん

とて、可笑しがらせ給ひけるとこそ、

八　實勝朝臣北の方の事

洞院の實世の卿の御娘は、御心ばえより始めて、御形のいとめでたくおはしましければ、帝に奉らんと、冊かせ給ひけるを、宰相中將實勝朝臣の、せちによばひ渡らせけれども、許し給はねば、力なく過し給ひしに、春の半過ぎ行く頃なるべし。高間の山の櫻を、よそ乍ら見させ給はんとて、實世の卿、女房達を伴ひ給ひて、山路を辿らせ給ひ、高峯に登らせ給ひけるを、宰相中將の君、兼て君の御乳母と心を合させて、茂みに隱れゐますを、知らせ給はで、乳母と共に眺めやらせ、げにも高間の山の名も、いちじるくこそあれ。花はたゞ雲と見ゆるは、心あてにやと戯れ給へるを、猶彼方よりは能くこそあらめ、茂みを出で離れなば、芳野川も見下されぬべしといひ〳〵て、此方へ誘ふを、實勝朝臣つと出て給ひて、岩橋渡りして奉りなん、此方へとかい負はせ給ひて、乳母と共に歸り給ひけるを、人知らざりけり。さて姬君こそ見えさせ給はねと、人々騷ぎて、手を分ちて、谷へや落ちさせ給ひけるにやと、巖の隱れ、

はざま〳〵を求むれども甲斐なし。斯かる奥山には、天狗などいふ者の、常に住むなれば、取り奉りやしてんとて、谷峯を越えてあされども、ゐませねば、泣く〳〵歸り給ひぬ。日を經て、宰相中將の許に居給へると、告ぐる人のありければ、いきまき給ひて、帝に訴へて、罪せんと宣へば、斯る亂の中には、たゞおはしませと、制する人々の多かりければ、心にもあらで止み給ひけり。幾程もなくて、將軍義詮公の許よりかうし給うて、都へ還幸を勸め奉れば、主上は八幡へ皇居を遷されしに、實勝朝臣も、都靜まりなば御迎に參りてんと、契り給ひて、御供に參らんと、立出てさせ給ふ。御袖を控へ給うて、

何となく心にかゝる白露の置き別れ行くそでのけしきは

など。さは思すにかとて、

別路の露にはあらぬ嬉しさをやがて袂につゝみこそせめ

と言慰めて、心強く立ち出て給ひけり。斯くて年の半程、御心を雲に宿して、待ち詫びさせ給ひし甲斐もなく、八幡にて討たれさせ給へると、聞かせ給ひしより、されば

よ、其別れ路の何とやらん心にかゝりて覺えしが、斯からん事にこそ、今は永らふべくも覺えぬなり。契り始めし其折柄は、我心を合せて、あられぬ業をし給へると、疎からぬ限りには思ひ落され、頼むべき人は空しければ、思ひ定めにけりと、掻口說かせ給ひければ、めのとの侍從、さ思し給へるとも、甲斐も候はゞ、斯かる事も例なきにはあらずなど、諫めて誠には思立ち給はじと、少し怠りける隙に、浮れ出でさせ給へり。夕暮の程なりければ、さらでも道の覺束なきに、河音の微なる方を知邊にて、なつみの川の邊に、辿り着かせ給へども、月さへうとき山陰の、螢をよすがに頼み給ひて、岩の面にさだかならねど、

山陰のくらき闇路に迷ひなんなつみの川に身を沈めなば

と、書付け給うて、御身を沈め給ひけるに、跡を尋ね求めける者の、數多集ひて、松ども灯して見けるに、敢なき御形の、岩のはざまに懸り給へるを、取上げ侍りしに、僅に御息の通はせ給ひけれども、御顏の色も變らせ給へるに、皆涙落してさま〴〵に取扱ひ奉れば、やう〳〵御心の附かせけるにや、御目の少し開きければ、皆悦びて

りて、

かくばかり移れば變る三芳野の花見て暮す身こそつらけれ

十六　つくり山伏の事

梶井二品親王、捕はれさせ給ひて、此山の淺ましげなる柴の庵に住ませ給ひけるを、山本の三郎といひける者承りて、嚴しく守りにけり。二年計りありて、御邪氣の心地の、日に添ひて重らせ給へるといひのゝしりて、峯通る山伏もがな、行ひさせてんといひあへれば、守りける武士共も打散りて尋ねけるに、其明の日、たとげなる山伏を、三人具して參りにければ、悅ばせ給うて、御枕上に召して行しけるに、二日計りありて、御心のさはやぎけりと、御布施など給はり守りける。武士共、御悅の御酒給はせければ、夜更くる迄うたひなどして、遊び居りけり。山伏は、曉出立ちなんとて、御暇を申して、まだ暗きに歸りけり。晝の程にや、宮のおはしまさぬと騷ぎて、隅々へ人を走らし、山伏を止めけれども、夫より先に通らせ給うて、

其夜、興福寺迄着かせ給ひけるとかや。是は御門徒の律師元祐といひける者、兼て謀りて、己れ山伏になりて笈を大きに、宮の隠れさせ給へる程に物しけりと、後に聞きし。夫より皇居をいよ〳〵固く守りければ、さま〳〵謀りけれども、詮方なかりしとかや。

十七　嵐山の事

彌生の頃、日のうら〻かなるに、女院御所の御庭に、散り積りける花の、いと多かりければ、供の御奴召させ給ひて、一所に集めさせ給へば、高さ五尺計りの、山のなりにありけるを、いと興ぜさせ給ひて、芳野の花をうつせし山なればと、嵐山と名付けさせ給ひて、人々に歌詠まし、上にも吟し給ひければ、あすの程に渡らせ給ひてんと、宣はせ給ひけるに、其夜風の烈しく吹きて、言甲斐なくなりにけり。つとめて辨の内侍の方へ、兵衛典侍の局、

みよしの〻花を集めし山の名も今朝は嵐の跡にこそあれ

しを、人々の亡骸を尋ねて、此塚に籠めさせ給ひて侍へども、親しかりつるも疎くて、御跡を問ふべき便もなく候へば、一方ならぬ悲しさに、斯くて候なり。御經をも讀みて給ひてんと、いひし面影の、見し心地しければ、餘り悲しく覺えて、いかに廻り來にけんと、くやしき迄に思ひ候ひ乍ら、心強く經をも讀み、念佛手向けて、草の蔭にはいかゞ思ふらんと、推量にも涙に咽び、殘し置きける童の有樣を、見るにも堪へ難くて、目も擡げられ候はざりしを見て、日も暮れにければ、いざ我宿へと誘ひ候ひし程に、行方の心元なく侍りて、行き候ひしに、住むべくもあらぬ程に荒れ果てゝ、昔候ひし仕へ人も、如何になりぬるにや、唯一人のみ住むなる。親しき人はおはせぬにやと問へば、貧しく成行くまゝに、訪はず侍り。昔仕へし女の、此あたりに殘りて、朝夕のいとなみをして、與へぬる計りにてこそ候へと、夜もすがら語りけるは、皆我身の上の事なりけり。夜も明けなんとしければ、彼女の來りなば、見忘れぬ事もやあらましと思ひて、墓所にて經を讀みてん、返りこん程に、立寄りなんといひて、立別れ侍る。此心の内を推量り給へかしと語るに、共に袖を濕

らし侍りて、げにも斯かるほだしは侍らはじ。行末知られず出で給ふとも、玉の緒の絶え給はぬ程、忘れ給はじ。後の世を妨ぐるにぞあらん。具し給へ、殿へ奉りてん。心安く後の世願ひおはせよかしといひければ、嬉しげにて歸りけり。何とかたばかりけん、頓て具し來けるを、ありつる事をば啓して、身近く召遣はれて、右馬允行朝と名乘りて、むらなき剛の者にてありける。

十五　中納言の局歌の事

正平壬辰の年の春、舊都の主上、本院・新院、共に捕はれ人とならせ給ひて、此上に入らせ給へるに、黒木の御所の淺ましきに、所々を篠にて嚴しく圍ひなして、猶ほ其外に茨・枸橘を隙なく植ゑたる内に、押籠め奉る。誠に見る目もいと悲し。櫻より外に、御慰もなかりけるにや、中納言の局の、

かゝる世もよしや芳野の山櫻宿のものとてかざしにもせん

と、奏し奉らせ給ひにけりと聞きて、世の中のはかなき事を、花に思ひなぞらへ侍

楠正行が墓所に、如何なる者の仕業にやありけん、書付けゝる。

くすの木の跡のしるしを來て見れば誠に石となりにけるかな

十三　康村長重狂歌の事

瀧口長重が、武藏守師直、皇居を襲ひなんとしける時、いち早く落行きけるを知らで、後にて尋ねられけれども、見えざりければ、康村、

みよし野にありと聞えし瀧口が落ちては名をも流しけるかな

と、いひけるを傳へ聞きて、安からず思ひ、いかにしてか、此返しをせんと窺ひけるに、芳野川の水上のほとりの境を、山人の爭ひて訴へけるを、康村に仰せられて、境を見に行きて、歸りなんとするに、年老いにければ、暫く打休みしけ程に、訴へ人は、早く參りて、檢斷所に待ち居ける程に、大理の康村を尋ねさせけれども、未だ歸り給はずといふ。遙に待たせて後に歸り來て、しかなんといひけるを、

芳野川その水上をたゞすみの老いにけりとてなどやすむらん

といひし。いと可笑しかりしてとぞや。

十四　右馬允行繼が遁世の事

二條關白殿にありける右馬允行繼といひけるは、去ぬる八幡の戰に、いかなる事かありけん、歸らせ給ひて、御勘氣ありければ、幼き子一人・女房とを、むつだの里に親しき者のありけるに預けて、高野山に登りて髮下しけり。三年ばかりありて、古郷に行き歸り來て、雨しづくと泣きけるを、いかにと問へども、いらへもせで、心の行く限り泣きて起直り居けるは、諸國修行の志侍りて、高野を出て侍りしに、さすがに過し難くて、むつだのあたりを、よそ乍らも見なましと思ひて、其ほとりをさそらひ侍りしに、新しき塚の前に、十餘りなる童の、伏し沈みて泣き居けるを、哀れなる樣の、見過し難くて、如何にと問ひ侍りければ、父は三年ばかり先に世を遁れて、何地ともなく出で給ひて、御音信も候はぬを、母の明暮歎き給ひし餘りに、御心の亂れて、過ぎつる夕暮の程に、紛れ出てさせ給ひて、河淀のほとりへ身を沈め給ひ

歸りけり。御心地の附かせ給へるまゝに、御數を思召し出てさせ給ひて、せめては御さまを變へ給はんと、しきり給へば、詮方なくて、御心に任せ給ふにこそ。淺ましき亂れぬる世の中には、斯かる事さへ數そひにけりと、いとゞ悲しくこそ。

九　行輔卿の妾歌の事

平三位行輔卿の、忍びて言ひ交し給へる女の、京に住みけるが、秋の半の頃、いひおこせける。

おもひかねそなたの空を眺むれば我にたぐへる初雁の聲

御返し、

わが袖をなほ絞れとや初雁のつばさにかけし露の玉づさ

十　鼻の高き狂歌の事

內大臣實守公の、節會の內辨を勤めさせ給はんとて、威儀正しく繕はせ給ひて、參

り給ふ道にて、紀の國より始めて參りける武士共の、行逢ひ侍りしに、あな恐し、山伏とも見えず、まして人にてはあらじ、天狗の類にてあらんといひけるを、聞き給ひて、

天狗ともいはゞいはなんいはずとて鼻低からぬ我身ならねば

と、極めて鼻の高くおはす事を、いひ當てにけりと、後迄をかしがらせ給ふ。

十一　松茸の歌の事

高野山より、それん法師の尋ねゐまして、閼伽棚にありける松茸を見給ひて、

いつかはとその曉をまつたけにひらくる法にあはんとぞ思ふ

と、宣はせし程に、

松茸のひらけし法にあふこともそのあかつきの雨のうるほひ

十二　楠が墓に落首の事

り、せくゞまる謀より外には他事もなし。されぱとて、昔契りし交を忘らるゝにはあらねど、自ら道の程も、敵の爲めに差塞がれぬれば、人してとぶらふべくもあらず、偏に生を隔てたる計り歎き侍る。其便とても稀々なれば、上に異なる御事もましまさぬにや、人々はまめやかに仕ふまつり給ふにやと、いと心ならず、いぶかしくてなん侍りて、いつしか移り行く年月にて、何事も衰へたる世の樣なるに、御運も夫に準ふべきにやと、一方ならぬ樣のみ、宜しく謀り給ふべし。八苦の境涯は、高き賤しき隔て侍らねど、其外の勞り、數へ盡し難う覺え侍るなど、昔今の事、心ばせを盡して、筆を染め給へるさま、またなく殊勝の事にも思ひ侍る。此文の外に、又認めたる文やらの物あり。封をほどき見れば、新玉の年を祝したる詩なり。

近甑二胡人一而吟二北陸一、遙雖レ慕二南風一、音信區レ通矣。嗟呼芝蘭今既凋、心友斷レ交、闇然送二光陰一而已。殊舊冬之玄寒、新陽之餘寒、交以徹二于肌骨一。宜レ預二憐察一焉。委曲別以レ狀、鄙懷千萬端。

東風吹レ暖入二家々一　想像九衢塵裏嘩　不レ識世間春色遍

舊爐殘火去レ年花

比來雖ニ騷劇住一、莫レ誼ニ修禪之工夫一矣。俗士之隱生者乎。

二月甲戌　　　　兒島高德

隱老　机前

いと細やかなる事なめりかしと思ひて、ついで宜しく叡覽に備へ奉りしに、いと優しきなど、敕賞ありしこと有難し。

二　芳野の山紅葉御覽の事

秋の暮、人々誘ひ奉りて、野山の色をめて暮し、花野のわたりさまよひ侍りしに、櫻紅葉の錦、今一入の眺め添へて、歸るさの道も忘れ侍りて、木影に佇み居てけり。月の前の初時雨も物哀れに、折節そへてをかしき物なり。昔より新玉の春といへば、芳野の山の櫻をこそ、いち早く歌にも讀み來しに、秋の紅葉・櫻が枝、花には猶勝りてをかしく侍る。人々も、古き歌など口ずさびて、隔てなく樂むにぞ、暫しは

りしを、神のうけさせ給ふ御神託にこそ。思續けて、いと賴もしく歸り來にけるにこそ。

芳野拾遺物語 卷第一 終

芳野拾遺物語　巻第三

一　兒島備後守越の國より文の事

兒島高德の誠忠

いにし如月の頃、兒島備後守高德の許よりの使とて、尋ね來れり。文いと細やかに思を述べて、たくましく書き給ひてけり。其中に、さても世は、思ふに叶はぬ樣かな。何れの人々も、君に忠を盡し、御敵を亡し、再び一統の御政道を仰がんとの誠をのみ思はぬはなし。高德苟くも、先帝の御爲めには、唐の紀信が義にも準へ、子房が謀にも劣るまじなど、力めて心計りは潔く、明暮之のみ謀ると雖も、御運の拙さにや、其事ゆかで、動もすれば、味方に能からぬ奇異などいまして、いと口惜しく候。越の士ともなりなまし。さても年頃の好忘るゝ間もなく侍れども、軍の爲めに明くれば、西東に急ぎ、暮るれば北南に走り、いとまには、高き賤しき一所に集

寛成親王の御聰明

と通りて侍りし程に、山伏も打過ぎしを呼返して、元の如くに祈直してんといひければ、又行先に、細き道のゐますれば、いかゞし給はんといひし程に、實にもと思ひ侍りて、其まゝ持ちて參りぬといひ給へば、上より始めさせ、ありつる人々、をかしがらせ給ふに、宮の御氣色も、いと能くならせ給ひて、げにさもあらん事なれ。其山伏を召返せかしと宣はすに、早や遙に行過ぎて、何地行くらんも知られずと、啓し給へば、本意なき事にこそあれ、止めて民部大輔が大きなる空事を、少しきやうに祈らせんものをと、笑はせ給ふこそ、實(まこと)御行末賴もしき御事にこそ、いとせめて覺え侍りし。

十九　大神宮御託宣の事

過ぎつる年の春の末つ方、天照大神に詣でて、三七日が程法施奉りて、かへさに中納言あき能卿の御許へ立寄りて、一夜が程、昔今の物語しけるに、世の中の斯く亂れぬる事、ひとの國には、例(ためし)多かりぬべけれども、和國には是ぞ始めならめ。いつ

かは靜まるべき。斯る折節に生れ來ぬらん宿世の拙なくてなど詫び合へるに、誠にさこそおはすなれ。されども御敵は亡びて、終に還幸ならんとぞ思ひ奉れ。今上の未だ陸奧の大守にて、東へ赴かせ給はんとし給へける時、儲の君に立たせ給はん旨を、密に申聞かせ給へり。建武己丑の年七月の末つ方、伊勢の國へ越えさせ給うて、おほん神に御暇を申しに、詣でさせ給ひければ、止まらせ給ふべき御告の渡らせ給ひけれども、斯く出立たせ給ひぬる上はとて、數多の御艤して、九月の始めつ方、上總の地近く、御舟の着き侍りしに、聊か空の景色の變りて見ゆるままに、波風あしく吹き侍りしかば、數多の舟共、伊豆の御崎にたゞよひ侍りしに、猶ほ風の強く吹きもてきて、船共の散々になり、同じ所にありし舟の、常陸の方まで吹かれ行きしもあるに、宮の御舟は、其の日の暮程に、伊勢の海まで吹戻して、夫より芳野に入らせ給ひしに、程なく三種の御寶を携へ給ひて、天津日嗣を受けさせ給へば、何事もおほん神の御計らひにこそ、ゐますかりけれ。我も宮の御舟に侍らひて、目の當りの事に候へば、賴もしく思ひて過し侍ると、語り給ひしに、此度詣て侍

とありけるを、奏し奉らしめ給ひければ、

千早振る神代もきかす夜の程に山を嵐のふき散らすとは

と宣はせて、いといたうをかしがらせ給ひにけり。

十八　寛成の御子鷹狩の事

寛成の御子の、まだ幼うおはしましける時、若き殿上人、數多伴はせ給ひて、なつみの川の河淀のほとりにて、鷹使はせて御覽ありけるに、傍のほとりに、いと大きなる岩の、えもいはれず面白きに、松の生出でたるありけり。御子の御覽じさせて、此岩を、歸りなん時、皇居の御庭にもて參れ、上に奉らんと、實爲中將に宣はせければ、幼き御心を推量りて、御ことうけさせ給ふ。鳥など數多取らせ給ひて、歸らせ給へる時に、忠行侍從に、岩を忘れ給はじと宣はせければ、民部大輔が、力も强く侍れば、御後よりもて參り候なりと啓して、皇居に入らせ給ふ。御鷹の鳥など奉らせ給うて、實爲中將に、ありつる岩を求めさせ給ふに、忠行侍從の、仰事を承りぬと、啓

し給へば、侍從を召して、如何にと尋ねさせけるに、民部大輔の、御後よりもてこんといひ侍る。民部を召させ給ひなんと宣はせば、むつからせ給うて、中將にこそ能くいひつれ、さはいふにかとしほらせ給ひければ、中將のありつる事を啓し給へば、をかしがらせ給ひて、誠に面白からん岩こそ、見まくほしけれ。民部が力こそ、由々しければ、もてきなんに召させ給へと宣はすに、中將、立歸り給うて、民部大輔に、斯かる事なんあり。いかゞしてんと宣へば、すべき事こそあなれとて、御庭にありける小さき岩に、松の枝を取付けて、中將と、いと重げに持出てて、宮の御前に据ゑ奉れば、是はいと小さくこそあれ、それにはあらじと、猶むつからせ給ひければ、民部大輔の、さればこそ、其岩を持ちて、上の山を通り候ひしに、右左山の差出でて、道のいと狹き所にて叶ひ難く、如何にせましと、たゞよひ侍りしに、向の方より、山伏の來りけるが、岩にせかれて通られぬにこそ、退け給へとのゝしりける程に、我も詮方なさに、斯くて侍る、いかにせましと、詫び合へるに、さらばすべき事こそあれとて、珠數を押揉み、何やらん玄さて、祈るに從ひて、此岩小さくなりて、やす〳〵

世の亂も忘らるゝ物ならんかし。上にも此事聞召しつゝ、密に御幸ならせ、愛せさせ給ふ。御供には、忠資卿の局など侍り。山里の淋しさのまゝ、落葉に映る夕日の影さらなるを、御覽じさせ給ひて、

山里の垣根の道のさへくれて木の葉の外は訪ふ人もなし
入相の鐘のよそなる木末にも心づかうと散るもみぢかな

と、詠めさせ給ひ、夫より還幸ならせ給ふ。

三　實世卿の許へ訪らひし事

望月の影さやかなるを、たゞにやは眺むべきと、實世卿の許へ訪らひ奉りしに、高資の卿もおはして、二人・三人隔てなくて、語らはせ給ひしに、名にしおふ今宵の月に向ひて、今樣の歌なども、いと懷しからず。昔の人の巧なる裝を口ずさみて、我物面にせましなど、戲れてありしに、實世卿の青侍やうの者共、五人・六人もありしが、障子を隔て伺候してけり。月も庭の面を照し、更け行くまゝに、興添ひ侍りしに、雁

金いくつらも渡り、其聲空を響かし聞えしを、月の夜に初雁の聲は、古き人も殊にもてあそび來るめり。心ある際のもてあそび、是に如くはあらじと、いみじき歌など、十首計りも詠み果てゝ、肴こそなけれ、酒たうべてんなどありし折柄、侍從の青侍の聲して、今宵の月は更なれど、初雁に如くはなし。願はくば此雁を得たき事かな、思ふやうにまぎれごとしてたうべてんなど、口々にのゝしる。夫を隔てゝ、厨屋の近き所に、下部多く、世の沙汰し戯れ侍りけるが、此雁の聲を聞きて、哀れ能きゝのの渡り侍る。いくつらかあるらん、捕へ捻伏せ殺して、市人に與へて、代りにこがねやうの物を得たらましかば、思ふやうに、萬づの願を叶へてむといひけるにぞ、耳に立ちて覺え侍りし。人々の願ふ所、誠に品ある事にぞ、歌啓してんなど仰せられしは、本意なるべし。羹にしてたうべてんといふも、いとさがしくは侍れど、あながち惡くからず。殺して黃金に代へてんなどこそ、つれなく狩人めきたり。人は斯かる折柄にこそ、そのしなじなも顯れぬべき事なり。

四　御連歌の事

神無月の頃、當今、人々召させ給ひて、御遊の御次に、我朝の歌は、古今集・後撰の頃の風骨深く、えならぬ歌仙もありけらし。其後いみじき歌、數多撰集に見えたり。慶濱の砂はいふめれど、異鄉の歌は、皆同じやうなることのみ、いと珍しからず。慶長の頃より、連歌を持囃して、いかめしき句など、あまた作るものあり。朕より〳〵之を翫び、此程は歌を外にして、連歌をのみ深く樂めり。今宵人々も、發句など仕うまつりてんやと仰せられて、遊ばさせ給ふ。御句に、

　月やしるありあけの夜の夕時雨

又いといたう悲しき御心を、

　世々ふるもさらに時雨の宿り哉

御二句遊ばしめ給うて、人々も仕うまつらし給ふ。

　散ればきぬ袖もあらしの紅葉哉　　　　隆　資

花をさへ忘れぬ風の木葉かな　實世

色こきは嵐にちかき落葉かな　親房

落葉せし梢に積るあらしかな　女房

此外に、數多珍しき句どもありつれども、覺束なくて書洩らしつ。

五　隆資卿・靜仙上人問答の事

西大寺靜仙上人訪らひて、隆資卿のがりおはし侍り。世の衰へ行く樣、武士の勢猛うなる振舞、佛法の沙汰とり〴〵拙からず、語り給ひ侍るに、主の訪ひ給うけるは、昔其寺に、靜安といへる比丘宿りて、常騰法師とかやいふなるに、一宗の至要を請け學びて、其後は江州比良の山に寺を結び、住み侍るといふ。此の靜安法師、御佛名經を讀みて、禮拜修懺せられける。其の聲、比良の山より、帝闕まで聞えて侍れば、上にも、例なく尊く思召して、僧官を贈らせ給ふ。又諸國の間へも聞ゆなど、言傳へ侍り。昔、元良親王、元三の奏賀の聲、大極殿より鳥羽の作り道迄聞ゆと、李部王記

に書き給へり。是等に限らず、田原又太郎たゞつなが聲も、十餘里を隔てゝ、遠く聞ゆといふ。是はそも如何なる事ぞや、いぶかしき事共なりと、なだらかに語り給ひければ、上人、夫こそ御不審至極に覺え侍り。佛家の事は、其語を得て、我心を恣にする事あり。されど異郷には不思議の人もなし。唯口のみいみじくて、心曇れりと見え侍れ。さもあらばあれ、元良親王、又太郎が事は、如何なる音聲ぞや。斯樣の事、異國にも例おはし侍り、佛法のみに限るべからず。いかさま不思議の事には、さま〴〵了簡を加ふれども、何れも決し難き物にておはしませば、愚僧は、計り及ぶべき事に侍らずと、安らかに斷りて歸られ侍るとなん。此上人いみじき人にて、多くの書籍を明らめられたりとぞ。内外の文を引きて返答あらば、如何計りもうつは物廣く聞ゆべけれど、さはなくして、ありつる儘に答へられしは、誠に智者なりとぞ。

六　光明皇后の御ぐしの事

光明皇后の御髪

南都諸大寺を巡禮して、御寶物共、彼方此方と拜み侍りし時、心にしみて尊く、日數の移るも知らずさまよひけり。中にも有難く恐しく覺えしは、興福寺寶藏の内に、圓き筥あり。其中にたけ一丈餘りなる髪あり。其色、翡翠を欺く黒髪艶やかにして、準ふべき物なし。是は光明皇后の御ぐしなりとぞ。更に今様の髪に似ず。斯かる物もありけるにやと覺え侍り。七百餘年の昔の御姿を、今見るやうの心地になん侍る。御形の麗しさは、昔よりの文共に、甲斐々々しく記し止めつれば、今更述ぶべき事にもあらず。觀音薩埵の再誕なりといふ事、彼緣起にも委し。やんごとなき御事なるべし。

七　長谷寺參詣の事

同じ時、初瀬に詣で侍るに、其地景、外に變りていとめづらし。山川のいさぎよき流れ岩間を穿ち、嵐雲を沈めて、夕日の影あらたなり。坊舍谷をかけて作り並ぶ。をちこちの鐘の聲に　無明の眠を覺まし、梢の花香り來ては、浮世の穢らはしさを

避く。誠に玉桂の君の古も思出でられて、哀れにをかしく侍る。抑當寺御本尊は、吾朝の貴賤を救はせ給ふのみにあらず、唐土までも御利益深き例もありけんかし。昔後嵯峨院の御位にましくける御時、世尊寺の行能朝臣、歳既に七十餘に及びて、一人の子なし。是れ既に我家の絶ゆべきにやと、哀れ佛に祈りてなど思込めて、寛元元年に、此佛に詣て、子を祈りけるに、いとあらたなり、一人の子を生めり。白川の三品經朝卿といふは是なり。此經朝、康元の頃かや、生年十三歳にして、大内の番帳を書きて、叡覽に入れ手跡美しう妙なりしとぞ。年六十に餘りて、冥土の請に赴いて、閻王宮に至られけるに、閻魔王、此人に命じて、額を書かせ給ふとなり。如何なるぞや、七日が程息も絶えておはしけるに、其程過ぎて蘇生ありて、元の如く家の業をも勤められける。人々訪らひて悦び、且つは怪しみ給うておはしけるが、其後幾程もなくして、身終り給ふ。希有の事なり。又參議佐理卿は、伊豫の三島の神託にて、日本總鎭守三島大明神といふ額を書き給うて、神の御心にも叶ひ、後の世迄も、譽を殘し給ひけり。是皆誠の心より、佛神の御惠もあり、其道に妙をも得給うなる

べし。今様は無下にふつゝかなる様の、いと心にくからず。

八　伊豫の國左馬介が歌天覽の事

伊豫の國左馬介の許より、日頃詠み侍る歌なりとて、上らせられけり。五十首計りも書集めて、傳奏の御達へ送られて、褒貶を乞はれけるを、たゞにやは判ずべきとて、天覽に備へ奉らしめ給ふ。君も御氣色殊に麗しく、斯かる亂の最中なれど、心ばえ優しくもつかうまつりしなど、仰下されて、やがて敕判を下し給ふ。いと有難き事にぞ。彼の卷物の中多くの御褒美も添へしめ給ひけれど、皆記し止めず。

川千鳥

山河の岩間の氷さゆる夜をおもひかねてや千鳥泣くらん

名所松

陰高きみのゝを山の年を經て散り失せぬ松の世々の言葉

祈戀

年を經て思ふ心のかくとだに祈るを袖もあはれとやみん

月照二寒草一

かげさむき枯野の草の霜の上に月すみわたる冬の夜の空

寄レ道悅

治まるも理なれや君が世のめぐみ盡させぬしきしまの道

是等の言葉を、わきていみじく仰下されたし。いと有難くこそ。

九　足利直冬の事

足利左兵衛佐直冬は、尊氏の息にて侍りしかど、左馬頭直義不便せられて、父の許よりも、取成され侍るとなり。此故に、伯父の字を取りて、直冬とはいひけらし。是れ御敵の張本なれど、其心ばえの優しき事を聞召しけり。一歳鎮西の軍破れて、直冬方々になりて、僅かの人を相具し、引退かれける折節、

梓弓われこそあらめ引連れて人にさへ浮目をぞ見せつる

となん侍りし。軍崩れて忙はしきに、優なることになん思召しける。此歌深き事にも侍らじなれど、人にさへうきと續けたる所、又淺からず。凡て此道の心ばえある人々は、後まで名も殘りぬるものならじ。たとひ及ばずとて、外の藝の至れるよりは、勝るものにも侍りなんかし。貫之がいひし言の葉、げにとぞ思ひ侍る。

十　藤親房卿十歲の詩の事

藤の親房卿、若うより、文數あまた明らめ、上の御爲には、こゆう輔佐の重臣にてぞおはしけるが、源中納言の果て給ひて後は、萬づ心細く思ひ給うて、御前の勤も怠り給ひて、はうさの勞、日に添ひて、筋骨を苦しめければ、上にも深く勞らせ給うて、召さゞりける。是も顯家の卿のなくなり給ふ悲みの積にやとぞ見えし。或時訪らひ奉り、近く寄りて、隔てなく申慰み侍りし。其序次に申されしは、我れ頑にして怠り侍れど、故院あながちに不便せさせ給ひ、人々にも疎まれず人となりて、數多の文を讀めども、心愚にて味ひ難し。此故に老いて悔となれり。十歲の春、人々御

前に召させ給ひて、新玉の春を祝する詩歌仕うまつりてんと敕を蒙り、此詩を叡聞に奉る、

春來品物都青容　木母花開香正濃　今日太平三洞旦
家々醉賞更飛〻鍾

此句を御覽じて、上古の名士にも劣るまじと、敕賞誠に有難う思ひ暮し侍りしかど、思へば夢のやうになん侍ると宣ひければ、いとゞよそのいみじさに、感涙を袖に移し侍る。さて譽ある人は、幼きよりやごとなきものなりとぞ。

十一　五月雨の歌の事

五月雨の晴間なく、物淋しきまゝに、友とすべき人もおはせて、一人ごちて侍り。是より人のがり訪らひ奉りて、慰みてんなど思へど、さすが世を背き、微かなる住居に住して、雨の淋しさを厭ふも、本意ならずと思ひ返して、机の文など繰廣げ、歌を案じなどして侍るに、

むかし思ふ草のいほりの夜の雨に涙そへそ山ほとゝぎす

と、人の歌をふと思ひ出して、時移るも知らで、哀れの涙押へ難し。日暮るゝ儘なれば念誦しけり。今樣の不束なる言の葉を詠み侍らむも、いと恥かはしくて止みにけり。古の歌仙は、斯かる妙なる言の葉のみ、いかで斯くは續けられしなど、怪しく思ひ侍るもいとをかし。

十二　三位公親卿發心の事

冬の名殘もいと烈しく、風荒らかなるに、野山の眺も物すごく、知らで或古寺へ立入り侍るに、主の僧、これは目馴れぬ御事なり。此わたりに住ませ給ふとは見侍らず、能くも渡らせ給ひぬる物かなとて、あかり障子の新しきを差廻し、火などたきて、餘寒は冬よりも堪へ難く侍れば、此方へ寄らせ給へなど、優しげにもてなして、心の及ぶ計り走り廻れるさま、いと田舍めかざる振舞なり。床のあたりを見れば、連歌の反古など引散らして、人丸の繪をかけたり。あやしき事かなと思ひて、障子を

少し開け侍るに、庭に咲きたる梅の花の、風に從ひて香り來るに、いとえならぬ覺して、

はなはまつ風の手折りしにほひかな

と、發句をつゞり侍りしに、主の僧、いと喜ばし氣にて、あないかめしの御振舞やなといひて、其身も何をつけ侍られしを、いと不思議に思ひて、御僧は、何れの國より渡らせ給ふ。また此の近きわたりの人なるにやと、問ひ侍れば、しか〳〵の者に侍ると、古今の有樣を、いと細やかに語り給ひしにも、疑もほどけて侍り。やんごとなき三位公親とかやいひし御事が、世上の騷しきを疎みて、髻を拂ひ、身を安く計らひ給うて、近き程より、此寺に住み給ふにぞありける。

十三　つくしの御子御文の事

上の召させ給ひしとて、人々參り、御前に侍らはせ給ひけるが、つくしの御子よりの御文なりとて、數多開かせ給ひて、人々に見せさせ給ふ。此御子も、久しく戒衣

を召させ給へば、優しき御言の葉も、怠らせおはしますらめと、人々も思ひ奉られしが、近き程の御文の中に、詠ませ給ひける御歌あり。

夕落葉

おとまがふかひもあるかな夕時雨染めし言葉の告のみどりは

寄鳥戀

いかにせん思ふ妹脊は打連れてあまとぶ鳥もありけるものを

是等の優しき御振舞を見給ひて、人々も感涙を流し給ふ。

十四　里見主税助下人が事

里見主税助が許に、いみじき若黨あり。心ばせおとなしくむらなく、主人の爲めに、骨を碎きて侍るまゝ、里見も不便して召使ひける。其頃内侍の女童、此男を見初めて、あなたより親しみ寄り、文やうのもの認め、人して密に彼の許へ遣しける。心ときめきて、誘ふ水あらばと、詠める昔の歌もあり、まして女の憧れて、おこせし旨を、

いかて背き侍らん。是れ幸の事よとて、返事認め送りければ、女もいと嬉しくて、かしこうぞ外へ洩らし給ふなど、親しきを頼みて、宵の月暗き程に、內侍の內を忍び、其許へまかてつゝ、淺からず年頃の思ひつる事共をいひ果たし、更け行く夜半の鳥が音も、耳に入らで、互に語りつるまゝに、夜もやう〳〵、東の山より、明方近くなり侍れば、いざ歸りなん、又も暇を窺ひてこそとて、歸り侍りしが、其後は彼の女心ばえそぞろになりて、內侍への勤も身にそまで、思ひ暮らしつるまゝに、人々にも悟られ、さがなく誹をまうけ、內侍にも聞召して、時こそあらめ、此頃は、武士のいそがはしきに、上にも御心うく渡らせ給ふ折柄に、いと惡くき事や、女の方より戀わびたる事は、例もあるべきなれど、召仕ふに由なしとて、追放ち給ふ。女童も、すべき樣なくて、男の方へ行きて、斯くといひつゝ、一日・二日こそ隱しもしてん。騷しき折柄、斯かる振舞を、主人に聞え侍らば、行末とても惡しかるべし。又頼み寄るべき方も侍らず。時移らば、人も嘲りなん。此世こそ拙なからめ、後の世は久しうなどいひて、宵の程に忍び出でけるにや、木深き山陰に入り、二人諸共に刃に伏して果てけり。

いと悲しき有樣とて、人擧つて哀れがりし。內侍にも聞き給ひて、始め諫めつるは、いと口惜しうて、不便に思ひ給ふれど、取隱すべき業も、君に憚らせ給うて止みければ、其邊の者が集りて、二人の死骸を隱し、念佛して弔ひける。此處に浅ましや、斯くならん樣は、兼ねて知らるべきに、あたら命を早うして、永き世の嘲となりぬといふ人侍り、夫は拙き心ばえなるべし。假初の契といへども、僞らぬ誠の心からは、身を捨て侍る事は、大和・唐土の例も、をさ〳〵傳へ侍り。誰かは命も惜しかるべき。後の笑をも憚らじ。

十五　藏人資行發心の事

先朝へ仕う奉りし時、藏人資行も、同じう參りける。此人いみじき譽ありて、上にも殊に思し給ひけるが、如何なる心にやありけん、御暇を申し、遠つ國へ罷りけり。世の騷しき儘に、懷しく思ひ侍りつれど、敵の爲めに道を隔てられて、久しく訪ふべき便もなく、身の置き所さへ定めざれば、徒らに多くの年月を經る儘に、床しく

てとて、此秋來にけり。來し方の物語盡きせず、茅が軒端の月を眺めて、知らぬは人の行末の空と、古き言の葉を口ずさみ、七世のむま子に逢ひたる昔も、斯くやと嬉しくて、草の庵にとめ侍り。世を捨てたる荒屋に、露霜の洩りくるも、いと淺ましけれど、心計りのもてなしにて、世を厭ひしどち語り侍るに、いと興も盡きざりけり。彼人申されしは、明けなば、別れて高野山へ罷らんと。今いくか泊り給へ、古き都なにがしの方より、文して訪らひ給ふれども、程過ぎ侍れば、いと惡くしとや思ひ給ふらめ。此度罷らなん、いざと啓しければ、自らも暇ある身なれば、其御方の知らせ給ふに、憚るべきにもあらずとて、共に庵を出で、急ぐべき道しならねば、此處彼處に時を移し、舊跡をも見廻り侍るに、日數も積りて、漸く行き着きぬ。主さまざまのもてなし、いとまばゆき迄に思ひつれば、よき程に計らはせ給へ、世捨人は、濕やかに語りてこそ本意なれと申し侍れど、たまさかの訪らひなど仰せられて、猶止み給はざりけり。連の人も、大方此程の道に疲れ、許し給へなど斷りて、主も共に隔なく、伏し乍ら語り侍る。一日・二日止まりて、西東の山々を、聊か眺め侍る

に、昔に變らぬさま、いと面白くて、日暮るゝ儘に歸りける。此夜しも、月あかく興添ひて、物語もいと盡きなく侍る。故郷の殘月といへる心、自ら詠み侍る。

花の色とふりにし里の月影も移りにけりな明ぼのゝ空

主も興ありて、詩を作り、連れ立ちし人も、とり〲の歌などありつれど、忘れにけり。

十六　皇居の近邊鳥群る事

同じ御時、多くの烏群り、皇居の上にて、東西へ分れ飛び廻り、鳴く聲いとかなし。守護の武士ども拂へども、おそるゝ色もなく、世の常ならぬことなりとぞあやしみける。

十七　先帝崩御の御事

過ぎし頃、夢見しこそあやしけれ。所は藏王堂の丑寅と覺しきに、主上御幸ならせ

後醍醐天皇崩御

給ひ、御快く四方の空を眺めさせ給ひて、御兩眼の中、恐しく拜み奉りしに、上の山より、一つの大龍來り、頭を傾け居たるに、主上、此龍に召して、虛空を遙に上らせ給ふ。供奉の人々も、續いて上り給ふべきやうもなくて、俯き居たると思ひしに、夢覺めたりと呼きしが、程なく崩御ならせ給ひ、御葬送の夜は、何處ともなく樂の聲響きて、供奉の人々、耳を驚かし侍りて、有難く袖を絞らぬはなし。凡そ上の御事、申すも愚なり。三十三天の日輪を、御親とし給ひ、生れさせ給ふ。萬乘の寶位に備はらせおはします御身なれば、御命終らせ給へるにつけて、さま〴〵の奇異ありしも理かな。御後世の事、兼ての御勤怠らせ給はず。御臨終に、妙なる樂の空に聞えしこそ、佛の來迎と覺ゆれ。

十八 作り化物の事

先帝崩御ならせ給ひて後、化粧の物ありて、夫れに相見る人、魂を取られ、絕え入り侍るといひしこそ。斯かる怪しき事は、昔より言舊りたる計りにて、誠に思はざりし

に、是は目の當り見たるなんど語る人もあれば、穴勝に疑ふべくもあらず。此化物に逢ひし者は、絶え入るのみにあらず。其人の身に着たる衣、持ちたる物まで、悉く失せたるといふこそ、盗人なめれ。化粧の、衣裳を剝取りたる例(ためし)を聞かず。人々はたゞ門戸を能く差固め給へと、いひ笑ひけり。人生の居り難きは、安穩といへる語あり。誠にいみじき金の言葉とも覺え侍る。世中の品、一人より下民生に至るまで、其勤むる事安からず。また法師計り、暇ある物はなし。先師も常にいひめれど、夫は世俗の上より見ればなるべし。いと安からぬ物なり。人を威して、其物を奪はんとする者は、我身を先とすれば猶ほ危し。斯かる振舞を巧みて、恐しき形をして、人に見えんと繕ひしさま、いと容易すからず。

十九　御製の事

山中の皇居なれば、訪ひ奉りし人とてもなく、たゞ法師のやうの者の外、よそより參る人も稀々なり。建禮門院の昔も、思召し合せ給ひて、いと淋しとのみ仰せあか

させ給ふ。山家雲といふを題にて、

みねにたつ雲もやたよりつれ〴〵と杉の庵の夕あけぼの

と、詠めさせ給ふと語られし。羽林も歌奉りしと、見せられしが、忘れにけり。

二十　つくしの御子尺八を好ませ給ふ事

つくしの宮の、御年もゆかせ給はざる御時、尺八をめし、天性妙を得させ給ふ。芳野川の御幸に吹かせ給ふにぞ、見慣れぬ鱗、數知れず水より躍り上り、上にも、めづらかに興ぜさせ給へば、類なき御事とぞ。昔も妙音院殿、熱田の御社にて、琵琶を彈かせ給ふに、鱗、陸へ躍り上り侍ると申傳へし。正しく都の御たぐひなりとて、感じ奉りけり。尺八は、本は尺八と、樂書に書き侍る。古、聖德太子、生駒山にて尺八を吹かせ給ふに、百獸走り出てて、頭を傾け聞きけるとかや。

廿一　光物の事

先帝崩御ならせ給ひし前の月より、さま〴〵の怪しき事のみ侍りしに、人々胸のほど、ときめき給ひしは、宵の程より、東の山より、黒雲一叢立出でて、雲は世の常ならず、態と作れるやうにいみじくて、色々の形に變じ侍る。是こそ希代と見る所に、暫くありて、雲の中より、日傘の廣ごりたる程の光物出てて、すぢかひに西へ飛び行き、雲の中へ入りけり。其の通りし跡は、虹の如くなる筋、五つ竝びて、其色青赤し、怪しき事類なし。四方の山輝き、草木もおしなべて、晝よりもあかし。暫くありて、雷のやうになりて、半時計りも止まざりけり。昔の事は知らず。間近く斯樣の奇異目慣れず、恐しなど愚なり。

石清水へ御濟幸

廿二　石清水へ御幸の事

世の中の騷がしき中に、能からぬ事のみ多く侍りし故に、主上、密に石清水へ御幸ならせ給ひ、御手づから願文を認めさせ給ひて、御心の底を拂はせ給ひ、御祈せさせ給ふ。紀氏の某を召して、當山の先達とし、彼方此方の神祕を開門させ給ひけ

正行芳野に參內

る。法印奏せられしは、當社の御奇特、昔より傳へ侍るに勝りて、愚口に述べ難き事なれど、さま〳〵の御奇瑞、品を盡しける中にも、南門破風の上に、又小さき屋根の如くに見えさせ給ふは、仲哀天皇を、勸請し奉る御社にこそおはしますれ。八幡宮三所は、中に應神天皇、左は神功皇后、右は姫大明神にて渡らせ給ふに、仲哀天皇を、御社の上に崇め奉らせ給ふは、神職も、辨へ難き御事なりと奏し奉れば、主上、破風の方を遙に叡覽ましまして、御信敬の御氣色にて、此御神にも、御願文を籠めさせ給ひて、御祈請斜ならず。自らも拜し奉り、尊くも老涙袖に餘りてぞありける。騷亂の中を、御忍の御幸なれば、他事の御沙汰はさらなくて、早や還幸ならせ給ふ。

廿三　楠正行始めて芳野へ參りし時の事

楠正行、始めて皇居へ參りける時、主上いと賴もしく、不便に思召し、正成、日本第一の忠義を顯し、其子正行も、同じ志なる事、有難くも敕賞ありし。人々も例なき御

事に、奏し給ひけり。參内の儀式、いと由々しくおとなしく、人々涙を流し給ふ。正行は、父が武略にも劣らず、歌の道にも志ありて、故鄕にて詠みし歌の中に、公の仕人にも恥ぢざる程の言の葉多し。旁いかめしき人なりとぞ。此折節、折付けたる一通の文やうの物を取出して、隆資卿へ奉りし。是こそ父正成が、最期に故鄕へ下したる物にてぞある。やがて上にも奏し給ひてけり。

今度隼人差遣候事、非二餘之儀一候。我等最期近々ニ覺候。願ハクは貴殿成長之器量見屆度候へども、義之重き處更難レ遁。勤學無二懈怠一、忠孝之勤、成長之後、我等心中可レ被レ察候。

□□此卷衣三、從レ君拜受。具足は、祖父より着古し候へども、永ク形見と送り候。

建武二年五月日　兵衞　正成　判

楠庄五郞殿

此文を寫し止めて、人々に送り侍りし。深く慈み給ふ。

廿四　詠歌の事

綾小路敦郷卿、久しく訪らはせ給へり。いと嬉しくて見侍るに、萬づ言葉を書き盡して、山家雲・山家雨といふ心ばえを詠みてんなど戯れ給へり。元より頑なれば、今更讀みぬべくもあらず。されど穴勝いなび侍るも無下に覺えて、

山家雲　山家雨

よそに見て住まれんものか山里の雲さへかへる夕暮のそら

つれ〳〵も絶えて住みぬる山里の軒端もくづる雨の音かな

源の康村、此歌を見て、高運の振舞なめりと戯れしは、誠に傍痛かりき。

廿五　御歌にて附物退く事

辨の内侍の許に、やんごとなき女房あり。未だ君へも參り給はず、微なる樣しておはせしが、心ばえこと女に勝れ、容もよさまなりと、君にも聞召し、いつしか戀ひ忍

ばせ給ひしが、世の騷に紛れさせ、一日・二日延び行かせ給ふに、女狂はしくなりて、氣色いと恐しく見えけり。神子をして、如何なる祟にやと卜はせられしに、狐の業なる由申してけり。兎角拂ひ退けつれど、日に添ひて猶ほ物に狂ひし。夜に入れば、唯冬木々々といふより外はなし。頃は霜月、綿小袖重ね着ても、猶ほ寒かりしに、此女は、單の衣一つ着て、汗を流しける。いと希有の事かな。如何にせんと、月日の移り行く程に、隆資卿、此事を奏し給へば、君も驚かせ給うて、御製、

　春にこそ訪ふ人もあれ花の君冬木といふは己がいつはり

と遊ばして、物狂の門の柱に、押させ給ふるに、忽ち附物は退きてぞありける。實にいとも賢き御事、いふ計りなし。

廿六　主上御笛の事

主上、御笛を好ませ給ふに、天性の御器用いと賢くて、妙音を備はらせ給へり。御嗜深く渡らせ給へば、時として御心よからぬ折も侍り。臣、序宜しく諫め奉りて、若

し御勞など設けさせ給はど、民の苦と歎き奏しけるに、夫はさる諫なれども、勞は此業に限らず、時ありて惱めり。堀川の院こそ、笛の御嗜深く、寒月の影に、夜もすがら吹かせ給ひ、かはらけを藏人に持たせられ、笛の下口にあてさへ、試みさせ給ふに、御息の雫、かはらけに滴り、一夜に三度たまりけりと傳へたり。いみじき事、いふ計りなし。朕が翫ぶは、物數ならずと敕にこそ。言葉なく感涙抑へ兼ね退さし。あなたうとの綸言かなと申し奉りし。

廿七　登倶法師の事

登倶法師は、左馬介氏□が猶子なり。來りて佛の沙汰など、甲斐々々しく語り侍りて、後には樂などの物語も始めてけり。若き時より、琵琶をしらし侍れど、いと不堪の器物にて、事ゆかざりけり。されども懈怠なく勤め侍れば、身一つの樂になる計りは、覺え侍るとなん。胡國には、胡沙などいひて、草木も生ぜぬ砂の地多く侍る。其所の物、月の夜になり侍れば、友を誘ひ連れ、彼の所に至りて、馬に乘り乍ら

も、琵琶を彈じける。其聲大風の吹くが如くして、若干の遠き所まで、聞え侍るといへり。いとをかし。人と生れたらんには、先づ此業に心をかけでんと、文にも侍る。鴨の長明が道人といはれしは、絲竹・敷島の道を、深く心懸けて、人の心も和げ侍りしより、世に尊く申侍るとなん、優しき事なり。

廿八　藤の康元歌の事

藤原の康元、山家水といふ題にて、

うらやまし同じ山路もかげに住む岩かき水の淸き心は

此歌を、庵の障子に押して給はれなど語られたり。いと優しきことになん。其の如くして置きたりしに、人每に、是は誰人の歌やらん、いみじき事に申されけり。

廿九　高野山御幸の事

先帝の御時、芳野のみかりやを、忍び出てさせ給ひて、高野山へ、御幸ならせ給ふ。

其頃も、世の騷の中なれば、供奉の人々とても乏しく、いま〳〵しき御樣にて、嶮しき山路を凌がせ給ふ。御兩眼麗しく拜まれさせ給ふにぞ、有難くて、涙を流さぬはなし。遠近の長道なれど、御輿もやう〳〵高山に上げ登らせ給ひ、金剛三昧院に入らさせ給ふ。法印、驚き仰ぎ奉り、御忍の臨幸なれば、御幸の儀式も事終らせ、內院より、遙に廟所を叡覽まし〳〵て、御敕、下緣の外迄、仄に聞えさせ給へば、有難し。其後法印、當山の靈物なりとて、一の卷物を、天覽に備へられしは、高祖大師の弘仁の帝へ捧げられし、高野一山の畫圖を作らせ給へる物に、天皇御宸翰を染めさせ、御寄附の文を書添へられ、朱の御手形、押させ給ふにぞありける。君にも御叡覽の後、御寄進の御言の葉を染めさせ給ひて、一軸三跡の卷となされて、いといみじく、高野の一物なりかし。南國の武士は、御味方に參れど、君の臨幸を知らされば、關々を塞ぎて、往還の通ひなし。當山もさう〳〵しくて、君にも還幸に赴かせ給ふ。其外の事、忘れ侍れば記さず。

勘物

奧書

正平己戌の年の春、草能庵の夜の雨に、芳野の花の露をしたてに、よしなし事を書き連らね侍るこそ、物狂ほしけれ。

隱士松翁

右玆奧書一本有二中卷一。古來依レ稱二芳野拾遺物語三卷一、後人得二不足二卷之本一、而補二下一卷一加二奧書一、爲レ證者歟。然又其後人、依レ爲二文詞之參差一、以二奧書一入二中卷一歟。共不審也。傳聞松翁者、兼好和歌門人也。依レ之奧書全誌二徒然草之詞一堪レ笑云々。

作者

古來此物語松翁（又名命松丸傳不レ詳）作也。仍考二兼好法師來談事之章一、師弟無レ□唯稱二故友一而已者、非二松翁作一歟。或說、侍從忠房作也。上卷に、まさしく御供にさむらひて、見し事にこそとあり。故有二拾遺物語之稱一歟。共未レ詳。

闕卷

上卷自二後醍醐天皇崩御以前一、起二中卷之一、末紀二後村上院儲君事一畢。依レ之按、此書者後醍醐帝之事記也者、發端爲二闕如一事必矣。其間依レ爲二隨筆一頗濕〔混カ〕雜矣。

甲子冬十月既望、遂二書寫一、同連夜於二燈下一以二類本一令二校正一畢。

芳野拾遺物語　卷第三　大尾

櫻木物語 一

彌生の十日計り、如意輪寺のほとり、此處彼處花見て、暮れかゝる春の名殘を惜しみ、立休らふに、傍に、年たけ、さま衰へたる翁の、同じく花の陰に休らひ居たるが、昔を忍ぶ人よと見えて、世の移り行くさま、獨言しけるが床しくて、物いひかけたれば、彼翁も、誘ふ水あらばと思へる風情にて、木の根に腰打懸け、日の傾くも知らて物語しぬ。此山の花も、過ぎし頃までは、今のやうにはあらざりしに、有盛少將の、千本植ゑ添へ侍りて、殊に多くなり侍る。先々皇の、花をめでさせ給ひしかば、御遺敕にて、櫻木の數植ゑ添へつと承ると語る。僕も其往の戀しく、見ぬ世の盛なりしさま、又亂れ初めし有樣など、語つて聞かせよといへば、翁、ほゝゑみて、若き人々の聞置き給ひて、また後の若き人に、語り傳へ給へかし。翁が若きより、見聞き侍りし世のさま、朧げ乍ら語り侍りなんと、富樓那が辯をもて、物語りぬ。

神武天皇より九十五代の帝を、後醍醐天皇と申し奉る。後宇多院第二の皇子にておはします。御母、談天門院と聞えさせ給ふ。花山院内大臣師繼公の養女、實に參議忠繼公の御女なり。第一の御子、後二條院の時、太宰の帥にならせ給ひ、また中務卿を兼ねさせ給ふ。花園院御位の時、東より計らひ申して、東宮に立たせ給ふ。後二條院崩御の後、また東より計らひ申して、御年卅一と申しけり。御時文保二年如月末の六日、御位に卽き奉る。二條道平公、關白せさせ給ふ。鎌倉は、久明親王の御子守邦親王、將軍として、執權は、時政八代の後胤、相模守高時なり。されば帝、御位の中、唐・大和の道を明らめさせ給ひ、延喜・天暦の昔の跡を追はせ給ひ、賢き御政に、四の海の外までも、其惠に潤ひ侍りき。また早うより、西園寺入道大臣實兼公の末御女を、わき方なき御思、年に添へて、やんごとなくおはしつれば、いつしか女御の宣旨を下され、程もなく元應元年八月初め七日、后立あり。其外あまた君の御覺能き女房達も、おはす中にも、左中將公廉公の御女、三位殿と申しけるを、他に異なる御覺ありて、宮々多くおはしける。總じて皇子十八人・皇女十八人まで

おはすなり。第一の宮は、御子左大納言爲世卿の御女、權大納言局と申しける御腹にて尊良親王と申し奉る。吉田內大臣定房公、養ひ奉る。二の御子、帥の親王と申すは、左中將俊實卿の御女、遊義門院の一條局と聞えし御腹なり。北畠大納言親房卿、養ひ奉る。一の御子よりも、帝の御慈み深かりしが、元德二年九月中の八日、重く惱ませ給ひて、敢なくうせ給ひぬ。御乳人親房公、我世盡きぬる心地して、取敢ず頭下し給ひぬ。第三の御子は、源大納言師親卿の御女、民部卿局の御腹なり。梨本の門跡に入らせ給ひぬ。其外の御子も、夫々に備はり給ひぬ。しかはあれど、東宮の御事は、いつも東より計らひ定めける間、後伏見院の一の御子、量仁親王と申し奉るを、嘉曆元年七月廿四日、東宮に立て進らす。斯かりし所に、正中元年長月廿三日の事か、まだしのゝめの程に、世の中いみじく騷ぎ罵る。美濃國の兵に、土岐十郎賴兼・多治見の藏人抔いふ者忍び寄り、四條わたりに宿りて居けるを、又告げ知らす者ありて、俄に其所へ、六波羅より、小串・山本抔いふ者共始め、數百人の軍勢押寄せつゝ、搦取るなり。顯れぬとや思ひけん、彼者共は、やがて思ふ程戰ひて自

害しぬ。事の起は、帝、東を亡し給はんとて、彼武士共を召したるなりといひあつかふ。扨て其宣旨なしたる一人とて、日野中納言資朝卿・藏人右少辨俊基朝臣をも、吾妻へ下していましむべしと、六波羅へ取られぬ。其後吾妻へ下し、長崎某が所に預けられ、工藤次郎左衞門尉高景といふ者承りて、一々に尋ね問ひける。去ぬる正應の頃、淺原などいふ者の騷は、後嵯峨院の御遺詔を、吾妻より引違へし御恨とこそ聞えしかば、今度も、其御憤の名殘と聞ゆ。過ぎし頃、彼資朝卿も、山伏の眞似して、吾妻の方へ忍び下り、俊基朝臣、紀伊國へ湯あびに下る抔いひなして、田舍歩きしけるも、彼方此方にも、宣旨を受くる人のありけりと、皆人思ひ合せける。さる儘には、いひ知らず聞ゆる事もあれば、先づ此事を、おだやかに止めんと思して、彼の正應の騷に、ありしやうなる誓の御消息を遣す。萬里小路中納言宣房卿御使にて、吾妻へ下り、宣房卿、年もたけたる上、此頃は天の下に、潔く宜なる人に思はれたる頃なれば、此事、更に帝の知召さぬ由、けざやかにいひなすに、荒き夷心にも、いと忝き事と思ひても、異なるべく奏し、げに此御使の賞に、宣房卿大納言にな

資朝朝臣佐渡に流さる

りぬ。されば帝は知召さぬにても、彼二人は、遁るべき方なしと、資朝卿、佐渡の國へ流されぬ。俊基朝臣は、いかゞにして遁れぬる。都へ歸りぬれど、ありしやうには出仕へず、籠り居たり。嘉曆二年の春の頃より、中宮御懷姙の疑おはすと聞えて、御祈の數々あり。御產の儀は、常盤井殿にてあるべしと行啓なる。帝にも、二三日隔てず、通ひおはします。雲の上人、大方夜晝に參り仕ふ。次第に其月近くならせ給ふと、修法の壇、軒を軌り、念誦の聲、空に響く。されども御產さるべき程も打過ぎ行けば、猶ほ暫しはさうぞあれなとゑ聞かれて、さらにつれなく、十月・二十月にも餘らせ給ふ迄、兎も角もおはしまさねば、今はそらごとの樣にぞなりける。扨しもあるべきならねば、中宮にも還啓ありぬ。此より後は、只吾妻を調伏の爲め、事を中宮の御座に寄せられしとは聞ゆめり。元德二年如月、南都へ行幸あり。同末の七日、山門に行幸なりて、大講堂御法養あり。同冬の頃、平野・北野の社に、度々行幸なる。後にぞ、是も山奈良の法師、語らはせ給ふべき御謀とは聞えし。また吾妻には、嘉曆元年の春、高時病を受けて、命もいかゞと覺えしが、長崎入道とかやが計

資朝朝臣刃死

俊基朝臣刃死

にて、出家せさせぬ。弟の泰家と聞うるも、此間事出來て、同じく出家しぬ。金澤修理大夫貞顯といへるに、執權せさせけりと、是もさま〲事ありて、相模守守時と、修理大夫惟貞二人執權しぬ。貞顯も、程なく出家しぬ。扨も其後、元弘〔脱字カ〕年の夏の頃、調伏の御祈ありし事など、吾妻へ聞えて、法勝寺慧鎭上人・小野文觀僧正・淨立寺の忠圓僧正を、六波羅へ取りて後、吾妻へ下して、尋ね問ふに、明らさまに、殘る方なく申しぬ。さるからに、彼れ一年執らへられたりし俊基朝臣を、また六波羅より搦め取らんとしければ、内裏へ逃げて參るを、追駈けて、陣のほとり迄、武士共打入りて、終に搦めて、六波羅へもて行き東へ下りぬ。去ぬる正中元年流されし資朝中納言、未だ佐渡の島にありつるを、此程の席々失ふべき由、吾妻より預りの武士に下知しければ、やがて切りぬ。

四大本無レ主　五蘊本來レ堂　將レ首傾ニ自刃一

但如レ讃ニ夏風一

既に斬られ給ける時の頌と聞き侍るらし。俊基朝臣も、遠島に流す迄もなく、斬るべ

天皇内裏を忍び出でさせ給ふ

きに定りて、元弘元年六月三日、武藏の國葛原岡にて誅せられぬ。今際時にかくなん

秋をまたで葛原が岡に消ゆる身の露のうらみや世に殘るらん

斯くて其年中秋二十日の頃にか、吾妻より、二階堂下野判官・長井遠江守と聞ゆる武士を差上せ、帝を、遠き島へも遷し奉り、大塔宮を、失ひ奉りなん爲めとかや。何と聞き定めにしことはなけれども、世の中、何となく騷ぎ立ちぬ。廿四日は、雜務の日なれば、帝は、記錄所におはしまして、事行ひ暮らさせ給ひ、人々も罷りて、君も本殿に、暫く打休ませ給へるに、今夜既に武士共、きほひ參るべしと、大塔宮より、忍びて奏せさせ給ひ、また種々の謀など奏し給ひぬれば、取敢ず雲の上を出でさせ給ふ。いとあわたゞし。内侍所・神靈・寶劍計りぞ、忍び出で渡らせ給ふ。此の對よりやつれたる女車の樣にて、忍び出でさせ給ふ。日頃の御用意には、先づ六波羅を攻められん紛に、山へ行幸ありて、彼處へ兵を召し、山の衆徒をも相具し、御堅めとせらるべしと、定められける間、大塔宮・妙法院宮にも、其御心して、坂本に待ち聞え給ひけれど、斯樣に事違ひぬれば、俄に道を變へて、奈良の京へ越させ給ふ。一の

御子尊良親王も、御馬にて追うて奉り給ふ。九條あたり迄御車にて、其より帝も、御馬奉る。御供に、按察使大納言公敏卿・萬里小路中納言藤房卿・同季房朝臣・源中納言具行卿・四條中納言隆資など參れり。皆怪しき姿に紛らはして、たどり〳〵木幡山を過ぎて、夜明頃、木津といふ所に馬を止めて、東南院の僧正の許へ、敕使を立てらる。東南院僧正は、圓光院禪定基忠公の御子にて、醍醐の座主東大寺の別當なり。二心なき人におはしければ、先づ臨幸候由を披露せず、北山松嶺寺といふ所に、帝をなし奉りける。爰に西室顯宣は、相模守が一族にて、權勢の門主たる間、頼まれ參らする衆徒もなかりければ、廿六日、和東の鷲峯山へ、行幸ありけれども、其處もさるべくやなかりけん、笠置といふ寺へ入らせ給ひぬ。都には、廿四日の夜、六波羅より小田常陸介馳け參りて、內裏をあさり、強く帝のおはす所を見れば、近き御厨子、調度共打散りて、唯今迄おはしける跡と見え乍ら、宮人だに一人もなし。御簾帳、蹈みしだき引落して、此處も彼處もくらがりて打荒れたるを、武士も打散らして、松明高く捧げて、細殿・渡殿迄、あさりたる氣色淺まし。廿五日の曙に、武士共滿ち

滿ちて、帝の親しく召仕へし人々の家へ押入り〳〵、取りもて行く。萬里小路大納言宣房卿・侍從中納言公明卿・別當實世卿・平宰相成輔卿、一度に皆六波羅へもて行きぬ。此さま見て、膽心失せ、取殘されたる人も、我と逃げ隱るゝ程に、主なき宿のみぞ多かめり。山へは、花山院大納言師賢卿を、帝の忍びておはします由にもてなし、西塔の釋迦堂を皇居とす。眞の御座所を、左右なく武家へ知らせじとの謀とや。彼兩法親王、事行ひ給ふ。衆徒も、二心なく守護し奉りぬ。六波羅には、帝、山におはしますと心得て、廿七日に、佐々木判官時信・海東左近大夫・波多野上野前司など數千人、東坂本へ押寄せ攻め戰ふ。山法師、命を捨てゝ防ぎしかば、武家の大將海東左近大夫、討たれにけり。其外宗徒の武士多く討たれ六波羅の勢引歸しぬ。事の始に、東失せぬ。目出たしなどいひあへる。持明院殿には、春宮におはしませば、思の外に、目出たかるべきことなれど、軍の紛にて沙汰もなし。御宿直の者もなし、離れたる所も、危き心地すればにや、六波羅の北に、代々の將軍の御料とて、造り置かるゝ檜皮屋一つあるに、西院・春宮に移らせ給ふ。斯かる所に、帝、笠置におはし

天皇笠置を忍び出でさせ給ふ

ます由聞うれば、謀られ奉りけると、山の衆徒心替りして、怪しき氣色ありければ、宮々も逃れ出でさせ給ひ、師賢卿も、辛うじて笠置へ迴り參られし道すがら、志賀の浦にて、有明の月澄み渡り、寄せ返る浪の音淋しく、松吹く風身に染み心細く、

　　おもふことなくてぞ見ましほの〴〵と有明の月の志賀の浦浪

とは詠じぬ。笠置殿には、大和・河内・伊賀・伊勢などより、兵共參り集ふ中に、殊更賴みおぼれしは、河内國の住人楠兵衞正成とて、心猛く謀賢しき者にて、己が館の上なる赤坂山に、城構いかめしく、〔脫字アルカ〕の如く競ひ上る。然るに九月廿八日の夜、隅山の何某弁に小宮山などいふ者、後の山より忍び入りて火を懸けつ。御座所近く、既に烟かゝり、御敵共崩れ參る間、帝も怪しき御姿にやつれて、たどり出でさせ給ふ。せめて楠が城迄とおぼして、藤房・具行兩中納言・師賢卿など手を取りて、焔の中を免れ出で、少し延びさせ給ひて、御馬尋ね出して、君計り奉りぬれど、習はぬ山路に、御心地も損はれ、高間の山といふわたりに、暫しためらふ所に、山城の國の住人深栖太郎入道とかいふ者、參り懸つてけるに、上達部想像（おもひや）る方なくて、只目を

正成金剛山に籠る

量仁親王御即位

見交して、いかさまにせんと呆れたるに、吾妻より上る大將に、陸奥守貞直、大勢にて參れり。今は兎も角も、宣はすべき樣なければ、甲斐なく敵の爲めに御身を任せぬ。やがて宇治に幸なし奉る。具行・藤房抔も捕へられぬ。君をば宇治へ入れ奉りて、先づ事の由、六波羅へ聞ゆるほど、御逗留ありて、十月三日、都へ入らせ給ふに、いとすさまじげなり。武士共、御輿近く打圍みたり。六波羅の北の檜皮屋には、持明院殿おはしませば、南の板屋の怪しきにおはします。尊良親王を始め御子達も、皆捕はれさせ給ひ、武士共預かり奉る。扨楠が城へ吾妻より上り集ふ大勢、寄懸けて戰ふに、正成種々の謀設けて防げば、吾妻の武士も、戰ひ兼ねてありける中、楠、兵糧に盡きて、雨風強き夜、城に火をかけて紛れ出でつゝ、金剛山といへる深山に隱れぬ。都には、例の吾妻より、御使上れり、代々の例とかやとて、秋田城介高景・二階堂出羽入道といふ者なり。西園寺大納言公宗卿に談じて、春宮量仁、御位に卽き給ふ。其後、舊內裏へ遷らせ給ひ、院も常盤井殿におはして、世の政聞召せば、後宇多院の昔、思出てられて哀れなり、十月十二日、宣旨下されて、宣房卿・公明卿・藤房卿

隱岐へ御潛幸

具行卿・隆資卿・實世卿・實隆卿・季房朝臣・隆重朝臣・忠顯朝臣、總て十人官位を罷めらる。先帝近侍の人々は、高きも賤しきも、召籠められぬ。去ぬる六日、三種の神寶も、新帝の方へ渡されぬ。斯く騷々しき紛に年暮れて、元弘二年になり、正月八日、吾妻より、問註所信濃入道・工藤次郎左衞門尉二人、上り來りて、沙汰初めに、去年笠置にて捕へ奉りし人々、死罪・流刑に處すべき由、吾妻にての趣をもて定めつ。先帝を、承久の例に任せ、隱岐國へ遷し奉るべしと、彌生初七日、都を寄させ給ふ。御送の武士は、千葉介貞胤・小山五郎左衞門尉秀朝・佐々木佐渡判官入道道譽なり。御供には內侍三位殿・大納言局小宰相など、男には行房中將・忠顯少將計りなり。六波羅より七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺の門前にて、御車押へられと計り、御念誦あり。鳥羽殿におはしまし著き、御粧改め、是より御輿奉りける。淀の渡りにて、昔八幡の行幸ありし時、橋渡しの使なりし佐々木入道に賜はりける。

知邊する道こそあらずなりぬとも淀の渡は忘れじもせじ　　御製

八日、昆陽野の宿に着かせ給ひ、蘆がり吹く軒の舊りたるに、夕月夜ほのかにをか

しかりければ、

命あればこやの軒端の月も見つまたいかならん行末の空　　御製

夫より播磨の國に入らせ給ひ、明石の浦にて島がくれゆく船共、ほのかに見えて哀れなりければ、

水の泡となりて浮世を渡る身の浦山しきは海士の釣舟

野中の清水・手枕の松・高砂の松など、御覽じ渡さる。いと高き山の峯に、花面白く咲き續きて、白雲を分行く心地するも艶なるに、都のこと、數々思し出でらる。

花ぞ猶浮世もわかず咲きにけり都も今や春になるらん　　御製

十七日、美濃の國におはしまし着きぬ。御心地惱しくて、此國に、二三日休らはせ給ふ程、假初の御宿りなれば、深からで、侍ふ限りの武士等も、間近く見奉るを、君もおぼし續くることとありて、

哀れとは馴れも見るらん我民を思ふ心はいまも替らず　　御製

御座にちかき軒のつまより、煙の立ちたれば、庵にたけると、打誦ませ給へるも艶

なり。

餘所にのみ思ぞやりし思ひきや民の竈をかくて見んとは　御製

廿一日　雲清寺といふ所にて、いと面白き花を折りて、忠顯少將奏しける。

色も香も替らぬしもぞうかりけるみやこの外の花の梢は　忠顯

また、小山秀朝と聞ゆる送りの武士、同じ花をやるとて、

憂き旅とおもひは果てじ一枝の花の情のかゝるをりには　忠顯

猶ほ行く越方は、そこはかなく霞渡りて、裏に遠くもなりにけるかなと、日數に添うて、都のいとゞ隔て果つるも、心細う覺さる。ほのかに咲き初むると見えし花の梢、日數も山も重なり、日に添へて、うつろひ增りて、登り下る九折に、いと白く散り積みて、村消えたる雪の心地す。

花の春また見んことのかたきかな同じ道をば行返るとも　御製

久米の佐良山といふ所、越させ給ふとて、

聞置きし久米の佐良山越行かん道とは更に思ひやはせん　御製

都を出でさせまし〳〵て、十三日と申すに、出雲國八杉の浦に着かせ給ひ、渡海の順風を待たせ給ふに、彌生程なく暮れ果てゝ、卯月朔日にもなりぬ。送りの武夫共が、今日は更衣とて、いかゞ都の面白からんなど、申すを聞召して、

さもこそは月日も知らぬ我ならめ衣更せし今日にやはあらぬ　御製

卯月十日計り、御船に奉る。大船廿四艘、小船共、端に類知らず附きたり。遙に押出す程、今一かすみ、心細う哀れにて、誠に二千里の外の心地するも、今更めきたり。扨て彼島におはしまし着きたれば、預人佐々木隱岐判官清高、府の島とかやいふ所に、黒木の御所作り、入れ奉る。海面よりは、少し入りたる處なり。月日經る儘に、いと忍びがたう。徒然におぼす折には、軒近く出でさせ給ひて、遙に浦の方を御覽じやるも、海士の釣舟ほのかに、木の葉の浮べる心地するも、何所を指してかと覺ゆる。

こゝろさす方を召さばや浪の上に浮きてたゞよふ海士の釣舟　御製

都には、十月になりて、御禊・大嘗會抔のいそぎに、天の下物騷がう。内藏司・内匠司・内

殿・染殿、何くれの道々に付きて、かしがましく響き合ひたるも、片々は涙の催しなり。悠紀・主紀の御屏風の、歌書くべき者のなければ、行房中將召返されんなど聞うるを、傳へ聞召して、宵の間靜なるに、御前に異人もなく、行房朝臣計り侍ひし時、都にいふなる事は如何あらん。さもあらば、いと浦山しからめと仰せられて、燈火をつら〳〵と眺めさせ給へる御目の、忍ぶとすれど、いとう時雨させ給へ、日を見奉るに、中將も心强からず、いと悲し。如何計りの道ならば、斯かる御有樣を見置き參らせ、憂き故鄕には歸らんと思ふも、跡聞えやらず、後夜の御行におはしませば、汐風高く、霰の音さへ堪へ難く、いみじう寒き夜の氷を打叩き、閼伽奉るも、山寺の小法師原の心地ぞする。忠顯少將・行房中將など、搔打參れるも、いつ習ひてかと、哀れに御覽ぜらる。今一度、いかで世を御心に任する業もがなと、人の心のけちめ分るゝに付きて、深う思しまさる事のみ數知らず。

櫻木物語 一 終

櫻木物語　二

尊良親王土佐へ流され給ふ

尊澄親王讃岐に流され給ふ

先帝隱岐國へ遷幸ありし又の日、尊良親王も土佐國へおはします。御供に、爲明中將參る。預り人佐々木判官時信、御送りに參る。日頃斯く怪しき御宿に物し給ふを、忝く思ひ、聞えさするに、遙なる世界にさへ、出ておはしませば、いかさまなる業をして御覽ぜられんとありし。時信けいめんし騷ぐ。宮、既に立たせ給ふとて、瓶に挿したる花を折りて、

花はなほとゞまるぬしに語らへよ我にぞ旅に立別るとも　尊良親王

同じ日、妙法院尊澄親王も、讃岐國へおはします。先帝、今日湊川の宿に着かせ給ふに、尊良親王は、昆陽野の宿におはして、程近く聞き奉らせ給ふも、哀れに悲し。宮、

いとせめて憂人やりの道ながら同じ泊りと聞くぞ嬉しき　尊良親王

尊良親王も、遠き國に赴き給うて、雨さへ降暮らし、いと心細さも類なく思召して、

うきほどはさのみ涙のあらばこそ我袖ぬらせ餘所の村雨　尊良親王

打出といふ所に、御泊ありけるに、尊良親王、昨夜此所に御泊ありし由、聞かせ給ふに、何となく、傍なる壁を御覽ずるに、供なりける爲明が筆にて、いとせめて憂き人やりの道ながらと、あるを見給ひて、

よべ迄も同じ宿りの道ならば我いきうしと思はましやは　尊澄親王

配所立、共に四國と聞ゆれば、せめて同じ國にてあるならば、事問ふ風の便り、憂を慰む一節とも思召しけるも叶はて、尊良親王は、土佐の畑へ赴かせ給ひ、尊澄親王は、讃岐の託間といふ所におはし着きぬ。源中納言具行卿も、佐々木佐渡判官入道伴ひて、吾妻へもて行き、柏原といふ所にて、暫く休ひける。預りの入道、吾妻へ人を遣したる返事、待つなるべし。其ほど物語など、情深く交しつれば、同じうはと思ひて、頭下さんとなん思ふといへば、いと哀れなることにこそ、何條とかはと許しつ。斯くといふは、水無月十九日なり。失はれん事も、今日なめりと、氣色にしか

●具行朝臣引死

ぬ思ひ儲け乍らも、猶ほためし報のほど、いかゞ淺くは覺えん。今はの際にかくなん聞ゆ。

消えかゝる露の命のはては見つさても吾妻の末ぞ床しき　具行

終に其處にて失はれにけり。大納言師賢卿は、去年笠置の城を落ち給ふ時、出家して、法名は素貞と申しける。下總國へ流されて、千葉介に預けられぬ。其道すがら尾張國を通るとて、都人へ、讀みて遣す。

海山を見る空もなしわが心さながら君に添へてこしかば　師賢入道

行き〳〵て、伊豆の國三島の社へ、詣で奉りける。

ちぎりありてけふは三島の御手洗に憂き影映す墨染の袖　同

斯くて配所におはしぬ。秋の頃にか、獨眺むる月の哀なりければ、

ふるさとの同じ空とはおもひてし形見の月の曇もぞする　同

同じ頃、蘆吹く宿の淋しさに、蟲を聞きて、

古へは露分けわびし蟲の音を尋ねぬ草のまくらにぞ聞く　同

季房朝臣藤房朝臣常陸に流さる

其年十月末つ方、病に犯され、命絶えんとしける時、

雲の色に時雨雪氣は見えわかで只かきくらす今日の空哉　同

死出の山越えんもしらで都人猶さりともと我やまつらん　同

東宮亮季房朝臣は常陸國、中納言藤房卿は、同じ國にぞ流されぬ。東南院の僧正は下總國、宥僧正は長門國と聞ゆ。さすらひの身の悲しみ、あれも同じ涙なるべし。中にも大塔宮は、山より奈良へ落ちさせ給ひ、其後熊野におはしまし、大峯を傳ひて、吉野にも高野もおはしまし通りつゝ、さりぬべき隈々には、能く紛れ物し給ひ、猛き御有樣をのみ、顯し給ひければ、いと賢き大將軍にて居ますべしとて、附從ひ參らする者多くなり行けば、御還俗ありて、護良親王と申し奉りける。楠正成は、去年赤坂の城にて、討死したる體にもてなし、金剛山の奥に入りけるが、卯月の末つ方、又兵を集め打出てたれば、六波羅より、隅田・高橋・宇都宮などいふ武夫數千人、馳せ下りけるに、正成は、聖德太子の御墓の前を、軍の園にして出逢ひ、懸引き寄せつ返しつ、潮の滿ち引くやうに戰うたれば、六波羅の勢打負けて、引歸しぬ。其

正成千破劔に籠る

護良親王吉野に籠らせらる

後、金剛山の麓に、千破劔といふ所に、いかめしき城を拵へ、猛き者も多く籠り居ぬ。また赤坂の城にも、勇々しき者、數多籠め置きぬ。大塔宮も、多武峯・吉野法師など語らひ給ひ、吉野に城構へして、籠らせ給ひ、扨令旨を下され、國々の兵を語らひ給へば、世に恨ある者共、從ひ參らせ、此處彼處に旗揚しつ。中にも播磨國に、赤松次郎入道圓心といふ者を始め、伊豫の國にある土居得能などいふいちじるき兵、起り立ち、其國々をあさり騷ぐ。都には、十月廿八日、河原の御祓あり。十一月十三日、大嘗會を遂行し、萬づ目出度折節、斯る騷ぎも出來にける間、六波羅より早馬を立てゝ、吾妻へいひやれば、相模守を始め一族等も、いと安からぬ事と驚き騷ぐ。誠や此卯月の頃、年の名替りしぞかし。正慶とぞいふなる。十一月、吾妻より、陸奥右馬助高直・阿曾彈正少弼治時・武藏左近將監・遠江入道宗敎・二階堂出羽入道道蘊などを大將軍として、さるべき武士數多、其勢數十萬人、雲霞の如く、栅引き寄りぬ。斯く只騷ぎに、年は暮れ果てぬ。明くれば正慶も二年になりぬ。如月朔日、吾妻より上り重れる大勢共、吉野・赤坂・金剛山三つの城へ、別りて向ふ。吉野へは二階堂出羽入道、赤

護良親王戰利あらず高野に逃れ給ふ

坂へは阿曾彈正少弼・千破劒へは陸奥右馬助・武藏左近將監・遠江入道・長崎四郎左衞門尉など向うめる。同三日より、軍始まりてける。閏二月の初、赤坂は落ちぬ。吉野の城も、宮の御勢、命を捨てゝ防ぎければ、左右なく破らるべくはなきに、山の案内知りける者が、後の山より忍び入りて、火をかけぬれば叶はで、多くの兵討死し、宮も高野へ落ちさせ給ひぬ。其後、正成が籠る金剛山の城を、吾妻の勢共寄せ集うて、打卷き攻むる。されば正成は、唐土の張良・韓信とやらんが、肺肝を流し出したる謀をもて、多くの御敵を討取りければ、吾妻の方の兵も、今は詮方なく、只圍みたる儘に打守りて、日數經ぬ。播磨の國の御味方赤松入道、既に國の中は平げぬ。都を攻むべしなど聞えて、津國摩耶といふ山寺に城構して、猶も近きあたりを打取らんとす。隱岐には、後、如月、始つ方より、取分きて密教の祕法を試みさせ給へば、夜も、大殿籠らぬ日數經て、流石いとうこらし給ひにけり。心ならず睡ませ給へる曉方、夢現とも分かぬ程に、後宇多院、ありし乍らの御面影、さやかに見え給ひて、聞え知らせ給ふとたゞありけり。打驚きて、夢なりけりとおぼす程、いはん方なく

天皇、隱岐を遁れ出でさせ給ふ

名殘悲し。大塔の宮よりも、海士の便に付けて、聞え給うて、絶えず都にも、猶世の中、靜まり兼ねたる樣に聞ゆれば、萬づに思し慰まで、閨守の中、寢ぬる隙をのみ窺ひ給ふに、然るべき時の至れるにや、御垣守にさむらふ兵共も、御氣色をほの心得て、靡き仕らんと思ひ、心づきにければ、さるべき限り語らひ合せて、同月廿四日の曙に、いみじくたばかり濟して、出し奉る。御供には、忠顯少將・成田小三郎入道・佐々木富士名の三郎、下部に金若計りなり。いと怪しげなる蜑の釣舟のやうに見せて、御船を出さる。夜深き紛れに推出す。雲霧いみじく降り、行先も見えぬに陸の方は、松明みち〳〵て、尋ね奉ると見えたり。明くれば同廿五日の巳の刻、隱岐前司が追手の船は、三尾の關に着きぬ。方々の追手船多かりければ、紛るべくもなかりしが、兎角して御船は、出雲の國野波の浦といふ所へ着きぬ。其浦の地頭を、御賴ありけれど、叶ひ難き由申すにぞ。其より三浦といふ所へ着かせ給ひ、供御には御酒計りなく、其間の事々、いふ計もなく淺まし。廿七日、杵築の浦へ着かせ給ひぬ。供御求めてんと、富士名三郎と金若、船より上りぬ。杵築の神主、兵船に乘

りて、追進らせけるに、俄に吹く風烈しくて、叶はで、神主が船は戻り、御座船は、風に任せゆられさせ給ふ。日も暮れければ、陸の方は、松明いくらともなく捧げて、尋ね參らすると見ゆ。富士名三郎と金若は、神主が共に取られぬ。其夜は、波風いと荒々しけれど、御船に明けさせ給ふ。廿八日御疲に、望ませ給ひけるにや、水を聞召さんが爲め、大坂の湊とかやいふ所に、御船寄せ、梶取共、行方なくなりぬ、成田水取りて參りたれど、梶取さへ失せければ、いとゞ御胸塞り、甲斐々々しく、水をだに聞召さず。兼ねて聞召されける奈和の庄の地頭村上又太郎長高が許へ、成田を勅使にて、御頼ありけり。成田畏りて立ちけれど、案内知らぬ所なり。いづくを指して尋ぬべきとも覺えず。綸言なれば背き難く、大なる道に付き、西を指して走りける。御船のもとより、十餘町計り行き、畠打つ者に、奈和の庄は何所ぞと問へば、是より二里計り行きて、しか／＼の所ぞと、敎の儘に走り行き、漸く午の刻計り、奈和の庄へ走り付き、案内もいはで、長高が館の內へ走り入りぬ。之を見て、侍所にありける者共走り寄り、左右の手引張り、何者ぞと問へば、成田、人傳には申し難し

村上長安守護し參らす

と、いひける折節、長高、此由物越に見て、內へ呼入れ、物樣を問ふ。成田、敕よりの趣、細々申せば、長高承り、忝くも斯かる敕に預る事、弓矢取る身の譽なりと、歡び勇みて、急ぎ御迎に參らんと物具し、馬に打騎り〱馳せ參る。長高を始として、二男孫三郎甚長・三男乙童丸・長高が弟鬼五郎助高・六郎太郎義氏・徒弟小太郎信貞・同次郎三郎實行・內河彥三郎義直など卅餘人、鞭を上げて參る。されども、さるべき御母も見えさせ給はず、こは如何なる事ぞと呆れ乍ら、能々尋ね參らすれば、とある所に、人もなき小舟、岸に橫はれり。怪しみて、皆馬より下り、近く參つて、是に六條少將殿やおはしますと、押返し尋ね進らす。君は苫の下にて聞召せども、隱岐の前司が方樣の追手の者にやと思召し、いとゞ御胸を冷させ給へど、申す體の荒々しくもなければ、扨は御迎の者にやと思召し、御手づから苫を除けさせ給ひ、御出ある。御冠も傾き、御袂もしほれ、御有樣の、申すもとから淺まし。長高を始め皆皆も、猛き夷心にさへ、哀れに悲し。良ありて長高、御迎に參りし由、奏し申すに付けて、供奉の人々候はぬやらんなど奏すれば、成田は其へ遣されぬ。忠顯は、椎取

船の上山に遷御

長高、長年と改む

尋ねにとて出づると、仰も果てぬに、忠顯朝臣參れり。成田も遅れて參る。長高申すは、私を皇居になし奉るべけれど、いみじき所にてあらずと奏して、同じ國船の上山といふ所へ、御守りもてなし奉る。山の傍なる柴など折敷きて、餉飯を供御に奉る。其間に、面々着きたりける者を引割きて、繩を作りて、御輿に召させ昇き奉り、山の巓に、假のおまし所作り入れ奉る。明くれば廿九日、隱岐前司を始め、彈正左衞門正綱・能登守・參河守など三千餘騎にて、船の上山へ寄せて戰ふに、爰にも其心して、長高が親しき者共、いみじう戰ひければ、寄手打負けて、能き者共數多討たれて、引返しにけり。其夜、長高、左衞門尉になりぬ。いかゞ思召しけん、長く高きは、あらき事あり。名を長年と改めよと勅ありと、長年と名づけぬ。三月三日、伯耆の國を賜はり、伯耆守となる。此間に、長年が親しき者共、出雲・伯耆の中より參り集ふ。長年が弟小三郎長義・同六郎行氏・竹間七郎入道・同八郎高重・十郎行泰・村上孫一郎直行・同四郎助貞・同九郎行眞・同十郎行義・內河兵衞三郎・同新三郎・筒河三郎・阿陀迦井小四郎など參りぬれば、近國の者共、雲霞の如く馳せ參りぬ。此事六

波羅に聞え、吾妻にも聞えて、驚き騷ぐ樣思ひやるべし。千破劒の闘に、吾妻へ聞ゆる武士は、大方彼處に集ひ居たる。斯る事さへ添へたれば、いとゞ吾妻よりも、兵上り集ふめり。都には、三月十日餘りの程、世の中俄にいみじう騷ぎ立ちぬ。播磨の國より、赤松入道圓心が攻上りぬるなり。夜いたう深きに、此處も彼處も、鬨の聲とゞめき渡り、燒上る烟空に滿ち、火の光に晝の如く、射違ふる矢の、雨より繁く、修羅の巷となれば、貴も賤も、只周章て迷ふ。例の六波羅へ行幸なり。南院も御幸とて、上下立騷ぎ、馬車走り違ふ。武士共の打込み罵りたる樣、いとすさまじ。されど六波羅の軍強くて、其夜は赤松引返しぬ。されど爰も彼處も、軍とのみ聞えてければ、院よりの仰とて、上達部・殿上人迄も、ほど／＼に從ひて兵を召せば、弓引く道もおぼ／＼しく、若侍などをさへぞ奉れるもをかし。十五日には、六波羅の兵、赤松が屯を攻めんと、山崎へ向うて戰ふに、甲斐なく打負けぬ。山へも、大塔宮より仰せらるゝ事共ありければ、三月廿八日、山法師數萬人、都へ寄せけるが、軍仕損じて引返しぬ。卯月三日には、赤松入道、また山崎より、渦卷きて戰ふといへ

ど、六波羅の軍強く、今度も赤松打負けてける間、船の上より、忠顯朝臣を、頭の中將になして、長年弟村上判官高置・同信濃法眼など相具して、京へ上る程に、道々の兵集りつどうて數萬人、丹波國を經て、西山に打上り、四月八日、六波羅へ寄すべしと聞ゆ。

櫻木物語 二終

櫻木物語　三

忠顯朝臣六波羅を攻む

高氏兵を率ゐて上洛

正慶二年卯月初八日、忠顯朝臣大將軍にて、雲霞の如く都へ寄せ懸けて、北は大舍人より、南は七條迄小路々々を、東ざまに旗差連れて、進み戰ふ。六波羅の兵も、今日を限りと軍しつ。斯くて一日一夜どよみ明しけるに、忠顯朝臣の兵、戰ひ負けて引返しぬ。また同十日餘り、吾妻より兵多く、登りける中に、去々年笠置へも向うたりし源高氏上れり。院・六波羅にも、賴もしく思ひて、彼の船の上へも向ふべき由なり。吾妻を立ちし時も、後めたきことやありけん、相模守計らひて、二心あるまじき由、おろそかならぬちか事文を書かせけれど、底の心いかゞあらん、斯く聞ゆる筋もあり。高氏は、古の賴義朝臣の名殘なりければ、元の根差は、やんごとなき武士なれど、承久以來は、頭差出・源氏もなくて埋れ、少し乍ら猶廣く、國々に心寄せの者も多かれば、斯樣に國の危き折を得て、思立つことゝやあらんなど、下々に

さゝやくもしるく、同じく上りける名越尾張守は、山崎の赤松が勢を破りて、山陽道より向ひ、高氏は、丹波路より伯耆へ向ふべしと聞ゆるに、先づ西山・大原わたりに休み、酒などたうてありける中、追手名越が軍敗れて、尾張守討たれぬと聞くや、其儘丹波の方へ行きて兵を集め、五月七日、赤松入道と謀し合せ、ほの〴〵と明くる頃より、二條より、南七條大宮を東ざまに、七手に分けて、雲霞の如く六波羅へ寄せ懸くる。赤松の入道は、八條より下東寺より、眞蓦になつて攻入るに、更に雨を向ふ者なし。忠顯中將殿・法印など、竹田東洞院より、北ざまに押入る程に、關作るとかやいふ聲は、雷の落ち懸るやうに、地の底ひゞき、梵天の宮の中も、聞き驚き給ふらんと思ふ計り、どよみ合ひたる樣、越方行先くれて、物おぼゆる人もなし。持明院の帝・春宮院の上・宮達など、まして只呆れ給へり。むね〳〵しき武士共は、殘る方なく、金剛山へ向けたれば、さならず殘りて、都にある限りは戰をなす。今を限りの軍なれば、手を盡して罵る程、まねびやらん方なし。雨の脚のやうに走り違ふ矢に、目の前に死を受くる者數を知らず。今日も一日一夜、入り揉みどよみ明す

に、六波羅叶る手なく塞ぎつれど、終に陣の内破れて、今は斯うと見えたり。日頃侍ひ籠り給へる上達部・殿上人なども、今日と思ひ儲けたらんだに、君のおはしまさん限りは、いかでかまかでもちらん。まして兼ねてより、斯く設けゝるをも知ろして、昨日迄當代の宣旨を給はりし高氏などの、斯く裏返りぬれば、誰か思ひ寄せん。總て上下となく、一つに立込んで、周章て迷ひたり。日も暮れぬれば、八幡・山崎・宇治・勢多・深草・法性寺・竹田・伏見・七條・八條の大路迄燃え上る烟に、四方の空満ち満ちて、墨を摺りたるやうなるに、紅の焔閃きたり。又爰にも火懸りて、いと淺ましければ、今は叶ふまじと、六波羅と聞ゆる越後守仲時・左近將監時高は、いみじう固めたりつる後の陣を、辛うじて破りて、其より逸れ出て、内の上も、いと怪しき御姿にて、まか〳〵しく、兩院御手を取交すといふ計りにて、人に扶けられつゝ、出でさせ給ふ。上達部・大臣達、袴のそば取りて、冠などの落行くも知らず、空を歩む心地して、或は河原を西へ東へ、散々様々になり給ふ。兩六波羅は、東を指して、吾妻へと心懸けて落ちければ、御幸も同じ様なり。南の方と聞えし時益は、矢に中りて失

時益討たる

せぬ。兎角して其夜は、近江國觀音寺といふ所を、一夜の御座所となしぬ。明くれば九日、東へ向つて落ちけるに、美濃・近江の兵集りて、龜山院の御子、五辻の宮を取り奉りて、夷が嶽とかやいふ嶮しき山に待ち受けて支へぬ。京よりも、また追手懸るなど聞ゆれば、六波羅のと聞えし。仲時、內・春宮・兩院具し奉り、番場といふ所の上の山へ、入れ奉りけり。行末、とても叶はじとや思ひけん、仲時を始め從ふ兵數百人、腹切つて失せぬ。御所々々の御供には、俊實大納言經顯・中納言賴定・中納言資名・大納言資明・宰相隆蔭など侍ひけり。俊實卿・資名卿・賴定卿などは、やがて其處にて髻切りぬ。斯くて五辻宮の兵共、御所々々を取り奉り、また都へ還し入れ奉る。金剛山に集りつどうて、正成が城を圍みたる吾妻の武夫共、斯くては叶はじと周章てゝ、奈良の方へ引返しぬ。正成が兵、跡より追打ち、道々は野伏滿ちくて、支ゆる程に、聞ゆる武夫共數多失せて、殘る輩僅になりて、奈良へは落着きぬ。去程に吾妻にも、兼ねて大塔宮より令旨賜はりて、新田小太郞義貞といふ者大將軍にて、武藏・上野より旗を揚げ、軍を起してけり。此義貞も、古の賴義朝臣の名殘にて、元はや

んごとなき武夫なれど、承久より埋れてありけるが、折を得て、宮の御旨を承りけるなり。此頃の東の將軍は、守邦親王なり。御後見仕うまつる相模守高時入道を始め、一族共驚き騷ぎて、其處等有合ふ兵、數多差窺ひたれど、義貞が軍強くして、打負けて引返しぬ。斯くてはと、また高時が弟子左近大夫泰家といひし、今は入道したるを大將軍にして、有合ふ限り、其勢十萬餘騎、五月十四日、鎌倉を立ちて向ふ。承久より以來、多くの年月を積み、相模守の一族廣がりたれば、新田などいふ國人に、容易くいかでかは亡さるべきと覺えしに、程なく義貞が勢、鎌倉に近づく由聞えて、家々を毀ち、騷ぎ罵る樣、いと淺まし。左近大夫入道も、軍に打負けたれば、從ふ武士、殘りなく新田が方へ付きぬ。得さらぬ者共計り、五六百騎にて、十六日の夜に入りて、鎌倉へ引揚ぐる程に、また三つの道へ、兵を差向けぬ。下の道へは、武藏守貞將とかや向ふ所に、下總より千葉助貞胤など義貞と同じ心して攻上るに、打負けて引きぬ。武藏路は相模守高時、洲崎・千代塚のほとりにての戰に負けて自害しぬ。大佛貞直とかやは、中の道の大將軍にて、葛原といふ所にて戰ひし

高時討たれ北條滅ぶ

船の上より還幸

が、義貞の軍强くして、宗徒の者皆討たれ、殘りし計り引返す程に、十八日の未の刻計り、義貞が兵、稻村が崎を打過ぎ、前濱の家々に火懸けてければ、燃ゆる焰、風に吹かれて飛散る間、爰も彼處もたゞ火になりて、いと恐し。鎌倉中のあわてふためける有樣、譬へん方なし。斯くて鎌倉方、殘りなく打負けてければ、今は斯うと、東勝寺といふ所に籠りて、相模守高時を始め、城之介入道・大佛陸奥守・長崎入道圓善・鹽田入道・常盤駿河守・右馬權頭義時・江馬遠江守・名越土佐前司・秋田城之介高興等などいふ宗徒の者、殘りなく腹切つて失せぬ。五月廿二日の事とかや。泰家入道はたばかりて落行きぬ。高時が二男の龜壽も、とかうして紛れ落ちぬ。伯耆には、五月十二日、都より、追々早馬を參らせて、六波羅攻落したる由奏しければ、船の上を御立あつて、還幸なる。廿七日には、播磨國書寫山へ行幸なりて、御宿願など、果たさせ給ふ。廿八日は、法華山へ御出、御順禮せさせ給ふ。都より、關白殿を始め奉り、上達部・殿上人、あらん限り參り集ひて、かしづき參らす。六月五日、都には、伯耆よりの還御とて、世の中犇き合へり。先づ東寺へ入らせ給ひて、事ども

後醍醐天皇御重祚

定めらる。明くる六日、東寺より、常の行幸のやうにて、內の京へぞ入らせ給ひける。先陣は、二條富小路の內裏に附かせ給ひぬれど、後陣は、猶ほ東寺の中にと聞え侍る。音高き正成も仕うまつれり。奈和伯耆守も、衞府の者共に打交りたり。先づ東寺へ幸なりしことは、兼ねて御宿願のおはしましける故とかや。松の房にて、其松のこと問はせ給ふに、こと〴〵奏し參らすとて、

植ゑ置きし首やかねて契りけん今日の御幸をまつ風の音　頼意僧正

今日の御幸、さま變りて、ゆすりみちたる世の氣色、斯くもありけるをなど、淺ましくは歎かせ奉りけるにかと、目出たきにつけてもゆかし。車など立て來るさまありし。御下りには、こよなく增りけり。物見ける人の中に、

むかしだに沈む恨を隱岐の海に波立ちかへるいきぞ賢き　讀人不知

金剛山より引返し、奈良の京にうごめき至る。吾妻の武夫共も、叶はじと髻切り、頭を垂れて參りき。扨も還御の後、重祚の禮もおはしまさず、只遠き行幸の由なり。禮成門院も、また中宮と聞えます。六日夜、やがて內裏へ入らせ給ひぬ。去ぬ

護良親王征夷大將軍の宣旨を受け給ふ

る元弘元年九月より任官敍位どもは、持明院殿よりなされたる事なれば、皆止められぬ。年の名も、正慶を捨てられて、元の元弘に返さる。關白を置かるまじとて、二條左の大臣道平公、氏の長者の宣下ありて、都にて管領あるべき由。十三日には大塔宮、都に入り給ふ。去ぬる頃より、御ぐしおふして、得もいはず淸らかなる男になり給ひ、護良親王と申し奉る。御供に、ゆゝしき武士共打圍み奉りて、帝の御供にも劣るまじ。速に征夷將軍の宣旨蒙り給ひぬ。元弘の初め流されし人々、程なく競ひ上るさま、枯れにし草木の、春に逢へる心地す。其中に、季房宰相のみぞ預り人の情なくや、東の犇きの紛に、失ひてければ、兄の藤房、歸り上れるに付きて、父大納言の歎盡きさせず。四條中納言隆資卿も、頭下したりしが、また髮おふしぬ。元より塵を出づるにはあらず、敵の爲に身を隱くさんとて、假初に剃りし計りなれば、今はた肩を開く時になりて、男にならんも何の憚かあらんと、同じ心なるどち言合へり。天台座主にてゐませし法親王だに、斯くおはしませば、ましてとぞ誰にかありけん、其頃聞えし。

恩賞の沙汰行はる

翠染の色をもかへつ月草のうつればかはる花のころもに　讀人不知

斯る目出たき折なるに、文月の初より、中宮、御心煩はしくおはしましけるに、いと御惱の強ければ、十九日、御ぐし下しにき。されど御惱の怠らねば、五壇の御修法を始められ、山・奈良にては、大藏經を、一日の內に書寫せられ、御勝寺にて御供養ありけり。されど甲斐なく、十月六日に、隱れさせ給ふ。上を始め參らせて、人々の御歎、いはん方なし。せめてのことに、後京極院と追りなし奉る。秋の半よりは、今度いさをしある兵共に、恩賞の御沙汰あるべしと聞ゆ。別當實世卿、上卿に定められてけれど、さま〴〵さゝはりありて、また上卿を改めさせられ、藤房中納言になさる。是も能くあしき正しき、淺き深きを分ちて、皆能きさまに申與へ給へと、內奏の惡しき計らひ共あり。藤房卿、諫を納め兼ね給ひて、辭し給ひぬ。其後は九條民部卿光經卿、上卿になり給ひぬ。是も忠・不忠など其手の大將に、いと細かに問ひ極めて、申與へんとし給へど、總宗領は、內の供御料所に置かれ、秦日入道が跡を、大塔宮へ參らせられ、大佛貞直が跡を、准后の御領になされ、其外所々に名立た

りし武夫共が跡をば、させることなきゆれ女僧法師に賜ひけり。されば天が下の廣けれど、兵共に賜ふべき闕所もなし。光經卿、心のみにて月日を送らせ給ふ。うたてしくこそ見えし。また都芳門の右と左に、決斷所とて造られたり。事の樣嚴には侍へど、只ことごと亂れて、誤多く侍りしかば、其に付きては、國々の騷とはなれりける。久しく世を治め、天が下安からざらん御政とは見えざりし。さるにても折々は、藤房中納言の、事に觸れて、唐・大和の賢き事など奏して、諫め奉りぬれど、入れさせ給ふべくも見えず。

櫻木物語 三 終

櫻木物語　四

持明院の帝を、去ぬる六月詔して、御位を下し奉りぬるが、今年も暮れかゝる頃に、太上天皇の尊號を參らせ給ふも、いと忝し。元弘三年も、諸々の紛に暮れて、明くる四年睦月の初、今の内裏はいと狹ければ、帝の業、萬づ繁き事も、調ふべからず。四方へ廣げよとありけれど、其も猶、昔の大内には似るべくもあらねば、大内を造らるべしと聞ゆ。安藝と周防國を寄せられ、總て天の下の地頭御家人ほどいふ者の所領に、二十が一をかけて召さると聞ゆ。抑大内は、唐の秦の國の帝の一殿をうつし來て、造らせ給ひしとかや。横のわたり二十餘町、竪三十餘町なり。四方に十二の門を立てられぬ。東には陽明門・待賢門・郁芳門。南の方は美福門・朱雀門・皇嘉門。西の方は談天門・藻壁門・殷富門。北は安嘉門・偉鑒門・達智門とかや。此の上東門・上西門なども侍る。紫宸殿東西に、清涼殿・温明殿。北に當りて、常寧殿・貞觀殿

といふなるは、后町の北の御匣殿・清涼殿の南の弓揚殿は、授書殿と名付くるなり。其外壺梅・壺桐・壺藤・壺かん・鳴壺・萩の戸・陳座・瀧口の戸・鳥の曹司・縫殿・兵衛の陣。左は宣陽門、右は陰明門。朔平門は、北の陣。衛門の陣の西方には、建春門・宣秋門も侍るめり。大極殿・小安殿・蒼龍樓・白虎樓・豊樂院・清暑堂、五所大嘗會などは、爰にてぞ行はる。中和院・内敎防・神嘉殿・武徳殿・朝堂院・右近の橘・左近の櫻・鬼の間・直廬・鈴の繩・荒海の障子は、清涼殿にこそ侍る。紫宸殿には、賢聖の障子も立てられたり。斯る目出たき殿造なれど、去ぬる安元二年とかやに焼けたりし後、代々の帝も御沙汰なりしに、今年造らせ給ふこと、神の御心にも違ひ、戈の端ともなりぬべしなど、賢き人々は申合へりけれど、いれさせ給ふべき御氣色もなく、造り初めつれば、天が下のえたちに懸りて、歎とはなり侍りぬ。正月廿九日、年の名改まりて、建武元年とは申すめり。唐の帝の、再び世を治め給ひし例とは聞えし。同じ頃筑紫と河内・伊豫國に、前の相模守が類とて、其處等あたり騒がす。其御祈とて、内にて安鎮國家の法行はせ給ふしるしにや、程なく反ける者共打負けて、自害し果てぬ。

されど吾妻には、猶ほ其類殘り居て、世を亂しなん。鎌倉に宮をすゑ奉りて、吾妻沙汰し給はんこそよけれと、第七の御子成良親王を、吾妻の將軍になし奉り、高氏が弟の直義を、其御守にして、下し參らす。其秋の頃、內には夜な〳〵怪しき鳥來りて、鳴き侍るが、いつ迄もとは聞ゆ。其聲いと恐しく、帝を始め奉り、上達部忌み恐れさせ給ふ。武夫召させて、射させんなど聞ゆるに、誰とて承る者もなし。殿下の御內に、隱岐の入道といひける、其器に侍るといひ合へりければ召されぬ。入道、鈴の間ほとりに參りて、弓矢持ちて待つに、仲秋十七日の月、殊に冴え返りて、いと冷かなるに、大內山の月こゝに、墨摺流したるやうの雲立ちて、其中にぞ、彼鳥は鳴きける。鳴きける時焰を吐き、聲の中雷光して、御簾の內迄散り通す。帝を始め上達部迄、鳥鳴くさま見んと寄り集うて、入道二人、強き十二束暫し固め、放つ矢、紫宸殿の上を鳴し響かして、あたると見えて、大なる岩など轉ばすさまに、仁壽殿の軒の妻より、ふたへに竹壺□の前へ落ちぬ。殿上・地下のゝめき渡り、衞士松明取らせて御覽ずるに、頭人の樣にて、身は蛇の形なり。此角の末曲りて、齒は鋸のさまにぞ

ありける。羽先より、長さ二たけ計りもあるらんと見ゆ。入道は、殊に御感ありて、因幡の國にて大庄二箇所賜はりぬ。弓矢取の譽にぞかし。同じ頃、去年のいさをし多き者へ、先づ抽賞給はりなんと、高氏に武藏、下總・常陸、直義に遠江國、新田義貞には上野・播磨、其子の義顯には、越後國賜はりぬ。弟の義助に駿河の國、楠正成に和泉・河内・攝津國、伯耆守に、因幡・伯耆とは聞ゆべし。如何なることにや、赤松入道計りは、御恩も薄く、元よりの播磨守さへ召されける。彼入道、殊に六波羅攻落しけるいさをしはありけるに、斯かる事に逢ひて、君を恨み奉る心出來てこそ、後の亂には、高氏に早うより、同じ心にはなれりけるが、同じく十月の初め、中殿の御會とて、人々尋ねられけるに、大塔宮も參り給ふに、上の勅とて、馬場殿に押込め奉る。是は此宮御子達の中にて、勝れていとさかしくおはしましければ、高氏が有樣の末は、御敵にもなりなん者と、早うより思召して、討たせ給ふべき御心おはして、密に其御催に、さるべき兵召されけるを、高氏恐れ思ひて、繼母の后の御方におもねり仕へて、種々宮の事を讒し申しけるを、君誠に思召して、斯くは御計ら

大塔宮を幽閉し參らす

藤房中納言遁世

ひもありけるなり。其上宮を彼のあだ人の直義が許へ給はりて、鎌倉へさへ下し參らせ給ふ。彼あだ人喜びて、やがて土を〔脱字アルカ〕牢を塗固めて置き參らせ、月日の光も見えず暗がりて、横切る雨に、御袂を濡らさせ給ふも悲し。去年吾妻を亡させ給ひしは、また此宮の御謀のいみじきよりのなれば、忽の御事なるべきに、あだ人にさせ渡させ、さすらへ給ふこと、いふ計りもなく淺ましき。同じ頃か、石清水行幸の事侍りき。上達部殊にきら／＼しく、御供一際華やかなり。藤房中納言は、別當にておはすれば、殊更今日を晴に出立ち給ひぬるが、還幸の後、頭下して、行方もなくなりぬ。此藤房卿、上の御政の正しからぬを、折々事に觸れ、御諫を奉りけれど、御いれさせもなければ、よしや今は、身を退けんより外もなしと思取りて、世を遁れ給ひしぞかし。上にも驚きおぼして、急ぎ返し參れと、父の宣房卿に仰事あれば、宣房大納言、やがて人して、彼藤房の道の隱れ家へ申させければ、其返事に、

　何事の浦山しさに歸るべき世にありとても厭ひこそせめ　藤房

とありければ、父の卿、彼の隱家へ尋ね行き給ひければ、主の僧の語りしは、今朝迄

は、爰におはしつれど、また都人に音づれられ、よしなしごとや聞くべきと、行方なくおはしけりと申せば、宣房卿餘りの事に、物も宣はず、其住み捨て給へる庵の障子を見給へば、誰にか見よと書置きける。

住み捨つる山を浮世の人問はゞあらしや庭の松に答へん　藤房

藤房中納言、世を遁れ給ひし後は、天が下危うき事共、多かめり。心ある人、歎き申しけるも理なり。殊更正成驚き騒ぎて、世は程なく亂れなん、誰々も心すべきにぞとは申しぬ。賢き者のいひける事、思合せ侍る。されば吾妻の類も多かる中に、泰家入道と聞えし男、たばかり濟して落行き、都に上り、西園寺大納言公宗卿の許に隱れ居て、髮おふして、刑部少輔時興と名乘りて、世を亂さん謀のみしぬ。西園寺殿は、承久の亂に、吾妻へ内通し給ひてければ、義時戰に勝ちぬ。されば子孫七つぎ迄、西園寺殿を頼み參らせんといひぬ。今になりても、吾妻より忽には奉らず、代々の后達も、此家よりこそありけめ。また國々の司も、半は其類にあり、昇進も類侍らず、是ぞ吾妻よりもてなし參らする故なりと思しけるまゝ、いかにして

も、彼類を取立て、再び天が下知らせばやと、さま〴〵謀を構へ給ひぬ。藤房卿の世を出で給ひぬれば、猶更思し立つ事の急ぐめり。建武二年六月廿五日六日のほのぼの明くる頃ほひ、世の中いみじく騒ぎ罵る。何事と聞けば、西園寺殿の企、内へ告げ參らする人ありて、上も驚きおぼして、定平中將大將軍にて、太田判官伯耆守など、勇々しき武夫共、北山の館を打卷きて、公宗卿を始め、三善の久衞捕り參るなり。さしも造り並べて、麗しかりし館も、御簾、御帳引落し、武士共あさり騒ぐ。斯くて久衞をば、伯耆守に仰せていましめ問ふに、殘りなく、謀のよしなしもなど申しぬれば、やがて河原にて失はれぬ。公宗卿も失ひ參らせよと、定平朝臣承りて伯耆守具して一間所へ向ふ。其も兼ねて聞えしかば、北の方忍びておはしぬ。公宗卿、いひ出し給ふ言の葉さへなく、

哀れなり日影待つ間の露の身におもひおかるゝ撫子の花　公宗

北の方のたゞならずおはしければと聞ゆ。硯の水に涙落して、薄墨の文字定かならず、猛き武士の心さへ消えぬべし。まして今はの形見共とゞめ給ふ。水莖のそこは

かとなき悲み、北の方、御心善へん方なし。伯耆守入りて、餘りに夜も更けぬと、急ぎて大納言の卿をひこづり行きぬるが、中門の築垣のほとりにて、押伏せて失ひ參らせぬ。北の方は、此さま見給ひて、絶え入り給ひぬ。公宗卿失はれ給ひしかば、其類共吾妻に遁れ下りて、失せにし相模守が二男の龜壽とかやいふ者を男になし、相模次郎時行と名乘らせて、信濃國諏訪の上宮の祝參河守何某、後見して、三浦入道・蘆名判官淸久・山城前司などいふ武夫共、同じ心して鎌倉へ攻上るに、道にて支へんと、そこらの武士寄集うて戰ひけれど、時行が軍强くして、澁川刑部大輔・小山判官も討たれぬ。斯かればいとゞ敵大勢になりて、三手に分けて、雲霞の如く鎌倉へ棚引き寄する程に、叶はじと思ひて、直義、將軍の宮を守り奉りて都へ登る。加賀の國には、名越太郎何某といふ相模守が類ありて、そこの武士を催し集め、其近き國々をあさり騷ぐ程に、都の騷ぎ思ひやるべし。陸奥にも、夷共起り立ちて此處も彼處も亂れぬ。國司にておはしける顯家中將、やがて向うて、打平らげたれば、事治まりぬ。由々しく聞えし。直義、鎌倉を追出されて上りける時、淵部何某といふむ

護良親王討たれ給ふ

くつけき武夫に、いつぞやより押込め置き參らせし護良親王を失はせつ。ねだけたる直義が業、いと淺まし。吾妻の騷ぎ亂るゝを、上も驚き思召し、高氏、大將軍として向ふべき由聞ゆ。彼高氏、元より惡しき心ありて、斯かる亂の折を得て、吾妻の管領征夷大將軍になるべきなど奏し申す。此等は世の重き御事なれば、輕々しく御許させもあるまじきことなるに、左右なく敕許ありしこそ、世の亂れぬべききざしなりけれど、後には申合へり。扨高氏、都を立ちて下る。參河國にて、直義が上るに逢ひて、打連れて吾妻へ向ふ。時行も、數多の兵を海道へ差上せて戰ふ。高氏が軍の強かりければ、吾妻の武士共打負けて、八月二十日計り、鎌倉の大御堂の内へ、殘りし輩走り入り、腹切つて失せぬ。諏訪宮の祝を始め、宗徒の武士四千餘人と聞えし。時行は、逃れて落ちぬ。加賀の國の名越も、聞かうる其國々の武士に、戰負けて失せにき。平家の再び起るべき時にや、爰も彼處も亡びにし。高氏は吾妻に

高氏反す

下りて、時行亡びぬれば、そこらの武士從ひ附きて、もてかしづきければ、いよ〳〵誇りて、都をも蔑に思ひ、獨り心の儘に振舞あり。義貞朝臣、殊に目ざましく思ひ

て、帝へ、高氏が年頃のねぢけて邪なる事共、訴へ申しぬ。中にも護良親王、失ひ奉りしさまなど、上も聞召して、怒りおぼす。さらば高氏討つて參らせよと、義貞に仰せぬれば、上達部など、また世の亂れんことの淺ましきよ。高氏を、都へ召上せて、御たゝさせあるべき由、奏し參らすれば、上もさにこそと思召して、具光中將を吾妻へ御使に下させ給ふ。されど高氏も、己れが身の邪なる事共、上も知召されてけると計り知りて、事に寄せて上りこす。詮方なきにや、義貞が行の、あしざまなるさまにも申しなして、又義貞朝臣をも、ねぢけ事にて失ひてんと奏し申せど、高氏が逆さまなる心、紛るべくもなければ、今は兎に角、義貞朝臣の奏し申す事、誠にこそ。上達部沙汰ありて、高氏討つて參らすべき由、義貞に敕あり。一の御子中務の宮を、將軍になし參らせ、義貞大將として、國々のさるべき武夫共、數多添へられ吾妻へ下さるべしと聞ゆ。都の御守には、義貞の子越後守義顯を始め、正成・太田判官・伯耆守など、ゆゝしき者侍るなり。十一月初の八日に、義貞節度を賜はるべしとて、ゆゝしき兵を、きら〳〵しき出立にて具し、內へ參る。□□の節會あり。

尊氏義貞合戰

昔平惟盛卿、賴朝討にと下さるゝ時、鈴計り給はりたりしは、惡しき例なれば、今度は天慶・承平などの遠き例を、引用ひさせ給ふ。同じく十九日、中務の宮上達部・殿上人、數多御供に參る。武士は、義貞を大將軍として、其類あるべき限り打立ちぬ。菊池・千葉・宇都宮・大友・佐々木・武田・小笠などいふさるべき兵、六萬七千餘騎なり。搦手は大智□宮彈正・尹の宮□別當實世卿。武夫には江田兵部大輔・大館左馬助・島津入道・仁科入道を始め、六十餘騎と聞ゆ。山道より向ふべしと打出でぬ。其と吾妻にも心得て、直義大將にて、高・上椙・仁木・細川などいふ者共、雲霞の如く棚引き上りて、矢矧河にて入揉み、どよみ合ひけるに、吾妻の兵、多く討たれて引返しぬ。其後鷺坂・手越にて、命を限りて挑み合ひぬれど、義貞の軍强く、直義又打負けて、鎌倉へ引きぬ。斯くて都より下る武夫共勇みて、鎌倉破りなんこと、いと安く覺えぬる所に、箱根と竹の下にて、また戰ひけるに、大友貞載・鹽谷判官など、高氏に心を通はし、後矢射攻めければ、御方搦手より破れて、そこら皆散々になりぬ。義貞が類は聞かうる猛き武夫なれば、爰も彼處も打破りて、海道を踊り登る。高氏は、都をも

攻崩さんと、吾妻の國々、殘る方なく催し集めて、雲霞の如く棚引き上る。斯る折を得て都より西の國々に、君を怨み奉る類起り立ちて、あさり騷ぐ中に、播磨國の赤松入道、殊更いかめしく打立ちて、そこら〳〵打從へば、やがて都へ亂れ入らんなど聞ゆ。此頃、斯る事あるべしと思寄らざれば、九重の内罵り騷ぎ、馬車走り違ひ、今にも敵打入りたらんさまに、とゞめき合へり。

櫻木物語四 終

櫻木物語　五

世の中いみじう騷ぎて、物覺えぬさまに年暮れて、建武も三返りになりぬ。新玉の春立ちぬれど、内には朝拜もなく、節會も行はれず。七日には、義貞を始め、さるべき武夫、宇治・勢田・大渡・山崎へ、敵防がんと出立ちぬ。十一日より、爰も彼處も軍始まりて、戰ひけるが、山崎より破られて、兵皆都へ引返しければ、上は、山へ俄に行幸なる。上達部・殿上人も、冠横ざまに着なして周章てつゝ、御供に參る。院々宮宮、殘る方なく落ちさせ給ひぬ。其日、敵、九重の内に打入りて、火を懸けぬれば、立上る烟に、雲のさながら卷揚りたるやうになり、天が下の力を費して、作り建てられし大内の前殿・後宮、徒に烟となりぬ。いふ方もなく淺ましし。されど上は、坂本におはしましけるに、陸奥より、顯家中納言、兩國の兵を具して參られぬ。又山道の搦手にこそ、下し參らせけれ。宮々別當抔上り集うて、雲霞の如くなりければ、

叡山へ臨幸

顯家兵を具して入洛

高氏筑紫に走る

京師還幸

三井寺に、高氏が兵殘り居るを打散らして直に都へ入りて戰ふに、敵打負けぬ。其後押かけ〳〵、山より攻入りたれば、高氏方殘りなく打負け、上椙兵庫入道・伊賀左衛門尉を始め、さるべき敵數多討たれて、叶ふべき樣なければ、高氏、津の國へ逃れ落ちて、猶ほ兵を募り、また都へ歸り入らんと聞ゆれば、義貞・顯家・正成など向うて戰ふに、此度も、敵打負けて船に乘り、筑紫へ赴く。二月四日、上は坂下より還幸なりてけれど、去ぬる十一月、内の燒けたれば、花山院へ入らせますします。義貞がいさをし、君も淺からずおぼして、左中將になりぬ。顯家卿は、常陸・下總を添へ賜はる。また陸奥へ向ふ第七の御子義良親王を、又守り奉りて、如月廿九日下り給ひぬ。義貞は、中國の國々管領を賜はり、また西國へ向ふべしと聞ゆ。されど此頃惱にて、心地煩はしく、日數經て下らず。其内にぞ、高氏筑紫にて、彼國々殘りなく打從へて、また雲霞の如く兵を催し集うて、陸と海と二手になりて上る。義貞朝臣、病怠りて後、西國へ向ひぬれど、敵早う吉備の中津國迄上り來りぬれば、津の國の渡りにぞ、海と陸と一つ所に防ぎなんと引返して、兵庫湊川の邊に陣取りて、

正成戰死

再び叡山へ臨幸

都へも其由訴へ申せば、上、殊の外驚き思召して、正成を、重ねて遣さるべしと聞ゆ。正成能々謀りて、勝つべき事共奏しけれど、御いれさせもなく、只々遣さるべしとの仰に、せんすべなく、よしや討死してこそと、正成下りぬ。されば子正行が、また小童にてあるを、道より河内へ返すとて、行末の事など細々と教へ置き、さるべき郎等は、皆正行に附けて返しぬ。我身は、弟の七郎と、志貴などいふ者共計り具して、兵庫へ至りぬ。五月末の四日、兵庫湊川のわたりにて、敵も御方も進みつ返しつ戰ひし。正成いつよりもゆゝしくて、かたき引返しぬれば、其儘正成も、歸るべきなりしに、かね〴〵討死してんと思設けたれば、追駈け〳〵討つ程に、我身も從ふ者も、數多所手負ひぬ。今はとて其類十三人、皆腹切つて失せぬ。類なき武夫にて、天が下に、雙ぶ方なき者なりけるを失ひて、上を始め、皆誰々も、火を打消したる樣に、呆れ思召す。義貞朝臣も、いみじう戰ひぬれど、正成失せければ、兵氣を失ひて、散々になりぬ。義貞、僅に討ちなされて、都へ返りぬれば、九重の中、俄に熱き騷ぎて、帝もまた山へ行幸なり。日吉の社におはします。上達部・殿上人、殘り

なく武夫の出立にて、御供に參る。其外追々參り集ひければ、山も坂も人みち〳〵て混雜し、起り求むるにも、爭ひ出來て、淺ましさいはん方なし。持明院の院々・春宮も皆山へ御幸なし進らせんと聞えけるに、路次に事ありて、殘り止まらせ給ひ、やがて高氏が許へおはしましければ、高氏悅び思ひて、やがて一方の皇流を立て奉る。是ぞ高氏が運の、いみじう侍りけるなり。高氏は、東寺を、いかめしく城構して籠りぬ。猶ほ山をも攻崩さんと、三手に分れて、志賀・唐崎・今道・古道・西坂・八瀨・北白河・修覺寺わたりより、雲霞の如く棚引き上る勢、面を向ふべきやうなく、忠顯中將・正忠少將など打出てて戰ひしかど、餘所の谷より上りける敵に、後を卷かれて討たれぬ。山法師も、命を塵芥のやうに輕んじ、戰ひぬれど、敵雲霞の如く棚引き上れば、危くなりぬ。義貞朝臣、東坂本よりおはして、眞下りに懸落されたれば、敵打負けて崩れ逃げ、谷々も埋む計りに落ち重なりて、死人いくらの數も知れず。其明の日、東坂本へ敵寄せたりしも、義助・長年など、ゆゝしく戰うて追返しぬ。其後熊野人とて、眞黑に出立ち、異鬼杯のやうなるが、かづき連れて、西坂より上り來

るさま恐し。義貞の兵、勝れたる射手ありて、二矢・三矢にて射返しぬ。六月二十日計りの事か、東も西も戰ありて、今日を限り戰ひしが、敵打負けて引返しぬ。大將と聞えける豐前守師重、生きながら捕へて、唐崎の浦にて、治家の者の例とて、山法師給はりて切りぬ。佛法果法に敵しぬる身の果、いと淺ましく見ゆ。其後山より京へ向うて戰ひしが、味方打負けて、伯耆守討たれぬ。猶もまた義貞朝臣の、たけだけしく京へ寄せて戰ひぬれど、かたき大勢にて、小路々々立切り、爰も彼處も兵滿ち／＼て打卷きぬ。味方の兵、詮方なく打負けて引返しぬ。長月の末になりて、糧も盡きぬと、下々驚き騷ぎて、夜毎に落行く程に、さしも山にも坂本にも、滿ち滿ちたりし武夫の、此頃は僅に殘りて、心細くなり侍り。御運のいみじからぬいと悲し。されば其さまの、かたき洩れ聞きて、密に高氏の許より、都へ還幸の事を僞り申す。上も、思召す事のありけるにや、義貞朝臣などには知らせで、還幸の事定めさせ給ふ。其由別當實世卿の許より、義貞に知らせたれば、彼種驚き騷ぎ、ある限り參り集うて、上を恨み申せば、思召す事のありて、春宮の供奉して、越の國へ離れ

と仰せぬれば、義貞を始め彼の類、殘る方なく、元より君を疎に思ひ參らせねば、うけがひて、十月九日、春宮恒良親王・一の御子中務親王・別當實世卿・行房中將・義貞朝臣、其類あるべき限り、千葉・宇都宮・土居・得能など、宗々しき者ども供奉して、越の國へ罷る。上は、十日、西坂より還幸ならせ給ひ、宣房大納言・[illegible]經顯卿・光經卿など供奉し參る。武夫にも、江田兵部大輔行義・大館氏明・宇都宮公綱・菊池・武里など、御供し奉る。法勝寺のわたりにて、直義參り向うて、上を花山院へ入れ參らせ、やがて武夫共、警固し奉り、參り通ふ人もなし。供奉の上達部・殿上人も、解官停任せられていと淺まし。武士も皆押込められて、四人などいふ者の事にて、いましめられぬ。越の國へ罷りし人々も、其國の習とて、峯々に雪いと白し。麓には、時雨の雲立重り、風さへ吹きしぼり、いと寒かりければ、兵多く凍えて、山路にしゞまり伏して、死する者いくらとも知らず。いふ計りもなく淺まし。されど春宮・一の御子・義貞朝臣などは、辛うじてつるが津におはし附きたれば、彼國の者共御迎に參り、金崎の城に入れ參らす。其後かたき、雲霞の如く金崎の四方に棚引き渡り、打卷き

て攻むる。城にも、たけ〲しき者共、數多籠りたれば、寄手多く討たれて、矢軍に月日重なるあり。十二月の頃、顯信中將の伊勢におはするが、竊に人して都へ上せ、上のおはします花山院の皇居へ、申入れさせ給ふ事ありしかば、上も時の至れるにやと思して、やがて夜に紛れて、花山院を出御まし〳〵て、大和の方へ赴かせ給ひける。いと暗き夜なりければ、御供に侍ひける人々も、如何にせんといひ合へるを聞かせ給ひて、爰は何處の程にやと尋ねさせ給ひければ、忠房卿侍從、稻荷の御社の前にこそと奏し給へば、

うば玉のくらき闇路に迷ふなり我にかさなん三つの燈火　御製

とて、伏拜ませ給ひければ、御社の上に、いと赤き雲一簇むら立ち出で來て、臨幸の道を照し送りて、大和の國内山へ入らせ給ひ、雲は金の御嶽の上にて消え失せぬ。末の世といひ乍ら、あらたなりける神の心、有難かるべし。扨賀名生といふ所へおはし着きてけり。此の處のさま、人里さへ遠く、鳥の聲も微に、暫もおはすべきやもなければ、高野へ入らせ給ふべき由、敕使を立てさせ給へど、彼山の衆徒等、支へ

申しけるまゝ、吉野へ入らせ給ふ。吉水法印が坊を、おまし所とす。近き國より承り傳へ、故正成が名殘とて、正行を始め、其類ある限り參り、其外大和・紀伊・和泉・河内に、弓矢に携はる者共は、殘る方〔脱字アルカ〕參り集うて、夜晝となく守護し奉るさま、引換へ目出たしなど申合へる中、年もたゞ暮れに暮れて、延元も二年になりぬ。新玉の春來ぬれど、山中の宮居なれば、朝拜もなく、節會も行はれず。七日も過ぐれば、都より右大臣公賢公・大納言師基公・實任中納言など、御跡慕ひ參らせ、吉野へおはしぬ。まめやかなる御心を、上にも悅び思召す中に、崇兼宰相も、吉野へ參らんと立出で給ひしを、武夫追懸けて、害し參らす由聞召し、いと悲しませ給ふも有難し。參議公量卿・親光宰相も、武士共捕りて押籠めぬるぞ淺まし。春深くなり、山の櫻も白雲のかゝれるやうに、いと都びやかなる折節、惟繼中納言・在氏朝臣・淸忠卿も、山へおはしてかつき進らす。卯月の初つ方、殿所經忠公さへ、都よりおはしければ、上も、御心强うならせ給ひぬる御氣色見參らせて、人々も安き心ばし侍る。されど往にし彌生の中は、越の國金崎の城落されて、一の御子を始め奉り、行房中

將・義顯朝臣自害し失せ給へば、帝を始め、上達部・殿上人・宮人迄、一方ならぬ御悲み、いふ計りもなく悲し。其後又義貞朝臣、越の國へ打出て、義兵こはくなり行く由聞えて、人々生きたる心ぞする。其上に、陸奥國より顯家中納言、また親王を先立て參らせ打つて上る由、いと頼もしく思す。顯家卿、長月の末に、國を立ちて上るに、兩國の宗々しき兵、殘る方なく參りたれば、其勢十萬餘騎と聞ゆ。上野の國利根河を始め、所々の戰に勝ちて、鎌倉へ寄する。義貞朝臣の、己が國に殘せし子の德壽丸とかや、まだ幼きが、上野より起りて、多くの兵を具して、親王の御光に參る。先せにし相模入道・子相模二郎時行も、帝より御許蒙りて、是もさるべき者數多具して、馳せ參る程に、顯家卿、いとゞ勇みて、鎌倉へ押寄する。鎌倉には、高氏が子の義詮大將軍にて、其外高・上杉・斯波家長などいふ者共ありけるが、武藏の國へ出てて戰ふ。薊山・安保原の軍に、鎌倉勢打負けて、猶ほ道にて支へけれど、小薺・松寺・腰越わたりの合戰、また御方打勝ちぬ。斯波家長を始め、義詮が頼みたる輩、多く討たれぬれば、叶はずとや思ひにし、義詮何處ともなく落行きぬ。今は吾妻にゐまさ

んも詮なし。都へ打ちて上らんと、奥の御方海道を、雲霞の如く棚引き上る。鎌倉にて打散されにし敵共、またも群り集うて、後より上り來りしかば、さるにても、先づ此輩を亡ぼしてぞ都へは上るめると、顯家卿の兵、道にて止まり居て、延元三年睦月十日餘りの頃、青野が原にて、敵御方追ひつ返しつ、入交り戰暮らしつ。敵に桃井・土岐などいふ者共、元よりたけくして、今日を限りと打合ふ程に、御方も、彼等爲めに、さるべき輩討たれぬ。辰の刻より、日の傾く迄入揉み、どよみ合ひしが、敵打負けて引返しぬ。其後京より、宗徒のかたき、あるべき限り下り向うて、黑地川にて支へ防ぐ。雪解の水增りしも、透間なく防ぐ程に、奥の御方、夫より道を引違へて、伊勢より伊賀を經て、奈良へ向ふ。敵も怺へでや、黑地にありける者共に、また國々の兵いやまし集うて、奈良へ寄せ來りぬ。彌生の初め、敵・味方命を限りに戰ひしが、味方打負けて、光繼中納言を始め、多くの兵討たれぬ。軍破れぬれば、親王は吉野へ入らせましまし、顯家卿などは河内へ向ふ。其後八幡山を始め、度々の軍、味方打負けて、同五月の末、和泉の國にて戰にも、味方打負けて、顯家卿討たれ

給ひぬ。時の至らぬにや、忠孝入道茲に窮り、苔の下にも、埋れぬものとては、たゞ徒に名のみぞ殘れる、いとはかなし。上にも兼ねてより、頼もしく思して、待たせ給ひしに、安部野の露と消え給ひければ、刑部丞俱成が、其際の有樣を、參りて語るに、燈の消えぬるやうになん、人々の御心はなれにけり。父親房卿の悲み、譬へん方なし。淚のひまに、

さきたてし心もよしや中々に浮世のことを思ひわすれて　一品入道

北の方は、唯伏沈ませ給うて、更に御心もなかりけるを、騷ぎて、面に水などそゝきぬれば、又の日夕暮の程に、少し人の心地出で來させ給ひて、

玉の緖の絕もはてなく繰返し同じ浮世にむすぼゝるらん

猶ほ同じ道にと思し立ち給へるさまも、いと悲し。

櫻木物語　五終

櫻木物語 六

去年より、越の國にて數多度軍ありて、義貞朝臣義兵こはくなりける上、越後の國より、其類なりける大江田氏經朝臣を始め、殘る方なく打集うて、攻上る程に、道々の國々平ぎぬ。其勢、義貞のおはする所へ着きぬれば、いとゞ勢増して、そこ〳〵皆打從へぬ。尾張守高經とて、高氏が親しき類の落ち殘りて、足羽といふ城にありけるを、攻め崩さんと、義貞朝臣の兵、打卷きて戰ふ。閏七月の初め、彼足羽にてまた戰ありしが、軍の半に、流矢に中りて、義貞朝臣失せ給ひぬ。大將軍射られて、從ふ武夫、心々になりぬ、義助朝臣も、斯くては叶ふまじと、杣山といふ處へ落着きぬ。義貞討たれ給ひて、國々の御方、心弱くなりて、爰も彼處も、皆敵に下り、また行方なく落行くさま、いとはかなし。上も心細う思召し、煩はせ給ふ折柄、親光が父の結城白河入道、内へ參りて、吾妻の又心變りせぬ中にこそ、宮、御下りましまさ

ば、一年の中は、また兩國を從へて打上らんこと、容易かりなんなど奏し申せば、上にも喜び思召して、義良親王を又下し奉り、顯信卿幷一品入道も、同じく御供して下り給ふ。義貞朝臣の二男右兵衛佐義興朝臣・左馬頭時行朝臣なども、御供に參る。妙法院宮・新宮も、同じく御下向とは聞ゆ。陸は、かたきこはくて、通り難ければ、船にて御迎あるべしと、伊勢は顯能朝臣の國なれば、親王・宮々始め、供奉の人々、伊勢の國大湊に行きて、船共揃へ、風待ちしけるに、八月十七日、海の面も靜に、風いと怖く吹きぬれば、五十餘艘の船共、御座船を中になし、八重の潮路に泛みぬ。さて所々船泊りして、長月十日のことにや、上總の地近く寄す。空の氣色おどろしく、海上荒くなりしに、また伊豆崎といふ方に漂ひしに、いとゞ浪風夥しくなり、數多の船共、行方知らずなり侍りし中、義良親王の御船は障なく、伊勢の篠崎といふ所に着かせ給ふ。顯信卿は元より、御船に侍ひけり。同じ風の紛に、一品入道の船は、東を指して吹かれ行き、常陸國なる内の海に着きぬ。同じ風にて、東西に吹分けける、末の世には珍らかなる例にこそ。儲の君に定まらせ給ふ。御子の類

なき部の御住居も、いかゞと思ひにし人々多かるに、皇大神宮の止め申させ給ひけるなるべし。後に吉野へ入らせまし〳〵、目の前にて、御位に卽かせ給ひしかば、いとゞ思合せ侍るなり。一品入道も、常陸は、元より志す國なり。御方に志ある輩參り集うて、伊佐・大藏・關の城にありて、義兵なりぬ。妙法院の宮・相模左馬頭が船は、遠江國足高の浦より上りぬ。其より奥の山へおはして、伊井介高顯が城へ入らせ給ふ。高顯喜びかしづきて、御還俗の儀勸め參らせ、女の子ありけるを、御給仕に奉る。此腹に、後には御子達數多おはすめり。新宮の御船は、西を指して吹きもて行き、伊豫の國に着きぬ。其より筑紫へおはしませば、肥後國の菊池などいふ者共、やがていつきかしづき參らす。鎭西將軍の宣旨下されて、西海の守にぞおはします。義良親王の御船、篠島に着かせ給ひぬる由、吉野へ聞えて、御迎として、賴意僧正參り給ひけるが、扨も斜ならぬ大風に、御供なりける船共損じけるに、同じ風の紛に、御船計り悉く故なく、此所へ着かせ給ふ事、大神宮の御計らひなるべしと奏しける。次に、

かみかぜや御船よすらん沖津浪瀬をかけし伊勢の濱邊に　大僧正賴意

其後親王、吉野へ歸り入らせまし〳〵ぬ。其後十一月の末、京より、高土佐守師秋とやらんいふ者、高氏方として、伊勢の國へ亂れ入りぬ。顯能朝臣も馳せ向うて、度度軍あり。寄せつ返しつする中に、年はたゞ暮れに暮れて、延元も四年になりぬ。正月の中は、顯能朝臣と師秋と、また寄合揉合して、かたき打負けて引返しぬ。妙法院の宮は、伊井の城におはして、御ぐしおふして、宗良親王と申し奉る。おはします所より、濱名の橋・橋本の松原のほとりを遙に見やりて、其氣色のいと哀れなりければ、

夕暮はみなともそこもしらすげの入海かけてかすむ松原　宗良親王

はる〳〵と朝うつ潮のみなと舟こぎ行く方は猶霞みつゝ　同

親王、伊井の城におはし乍ら、吉野のことも覺束なく、卯月の末、密に吉野へ入らせ給ひぬ。同じ頃顯信卿、又奥へ下らんと出立ち給ふ。此度は、尊良親王の一の御子を、陸奥の大守になし參らせ、同じく下し奉る。去年には似もつかず、海上も穩に

て、常陸の國に着かせ給ひ、其より陸奥へ越させ給ひ、白河の城に暫しおはして、其後宇津野峯の城へは入らせまします。白河の城の主藤原親朝、かしづき參らする事のまめやかなれば、宮も顯信卿が、歡び給ひて、親朝從四位下に敍し、修理大夫になされける。されば常陸奥の義兵こはくなりて、佐竹・吉原・結城・宇都宮などいふ敵と、寄せつ返しつ戰ひ暮らす。軍ひまありとも見えず。七月の初め、宗良親王また吾妻へ罷るべしと、敕請けて出立ちぬ。此度も、伊勢より船にておはしけるが、また浪風荒く行届きて、遠江國白羽の湊といふ所へ着きて、其より陸へ上せ給ふが、其浦の氣色いと淋しく、海士の家僅にありて、宿るべき方もなくいと哀れなり。

　いからほすものとも知らず苫やかた片しく袖の夜の浦浪　宗良親王

其後たどる〳〵、再び伊井の城におはし着きて、

　馴れにける再びきても旅衣おるゝ吾妻のみねのあらしに　同

八月の初つ方の頃か、帝、風の御心とて、惱ませ給ふ。人々驚き騷ぎけるに、典藥助敦重、御惱御風けにおはしませば、程なく怠り給はんなど奏し申せば、

後醍醐天皇崩御

露の身を草の枕に置きながら風にはよもと頼むはかなさ　御製

御惱も怠らせ給はねば、上達部･殿上人、安き心もなし。上も兼ねて、時をも知召しけるにや。同十五日の夜、八つの御子義良親王を、左大臣經忠公の邸に、うつし奉らせ給ひ、三種の御寶を讓りおはしまし、御行末の事、いと細やかに仰せ置かれ、御劒と法華經とを、右左の御手にものし給ひ、いざよひの月と共に、雲隱れさせ給ひけるに、附從ふ奉りし人々は、唯闇路に迷ふ心地なんし給ふ。御形をあらため奉りて、御座を正しくし、如意輪寺の御堂の後の方に、をさめ奉る。御壽の、五十の上一つ二つなり。扨も御位におはしましける中、延喜のひじり、帝の跡追はせ給へば、尊號奉るにも、後醍醐天皇とはおくり名し奉る。准后の歎、申すも更なり。唯伏し沈ませ給ふのみなるに、上の帝に持たせ給ひし御硯の中に、葵の二葉かづら、同じかざしと、御筆を染めらるゝを御覽じて、

かれつゝも二葉變らぬ草の名をかけ離れたる我ぞ悲しき　新待賢門院

また常に手馴れさせ給ひし御琵琶のありけるを、見參らせ給ひ、いとゞ御歎の色深

後村上天皇卽位

かゝりけるに。

見るまゝに涙ぞかゝる四の緒の行末長き音につたへても　新待賢門院

上の御筆を染められし反古の裏に、理趣經を手づから書かせ給ひて、其奥に、

いはざりき身の水莖の流れても殘る形見の跡と見よとは　同

御遺敕にて渡らせ給へば、八の御子御位に卽かせ給ふ。御諱は義良。御母は公廉中將の女、准后三位にておはします。後に新待賢門院と申し奉るめり。新帝御位の時は、さま〴〵大禮もおはしますべけれども、山中の行宮にておはしませば、事備はるべきやうもなければ、形の如く三種の御寶拜せさせ給ふ計りにて、位に卽かせ給ひぬ。經忠公、關白にならせ給ひ、氏の長者の宣旨あり。師基卿、右大臣になり給ふ。資次公別當になり、實世卿・隆資公などゝ何事も執行ひ、奏し申す。大神宮へ奉幣使を立てさせ給ふ。其時、

四の海の浪もをさまるしるしにて三の寶を身にぞ傳ふる　御製

九重に今もますみのかゞみこそ猶よをてらす光なりけれ　同

宗良親王、去ぬる頃より、又伊井の城におはしましけるが、先帝の雲隱れ給ひけるを、風の便りに聞かせ給ひ、御歎一方ならず、鄙の御住居も、いと侘しく、殊更秋の習とて、時雨さへひまなく、木の葉降る宿の氣色、哀れさもまさるべし。庭の紅葉一葉つゝみ、文細々書きて、別當資治の許へ送られ給ふとて、

思ふには猶色淺き紅葉かなそなたの山はいかゞ時雨るゝ　宗良親王

資治卿、其御文の返し參らすとて、

この秋の涙を添へて時雨にし山はいかなる紅葉とかしる　資治別當

親王御歎に餘り、吉野へ參りて、先帝の御陵へもまうでなんと、御志しきりなれど、陸は敵こはく、海上は秋とて、浪風荒々しくて、御心に任せず、物憂きことのまさり行けば、

後れじとおもひし道も甲斐なくば此世の外の三芳野の山　宗良親王

斯かる折節に、參河國の武夫に、是助次郎重春とやらん、其國へおはしませ、從ひ參らせて旗揚せんなど、申しけれど、御心定まらず。

一筋に思ひさだめず入梅のくもてに身をもなげく頃かな　宗良親王

といひ遣り給ひて、駿河國へ赴かせ給ふ。其國には、狩野介貞長・入江・神原・田貫・鈴木などとて、ゆゝしき武夫、多く從ひ參らせければ、此處に暫しおはします中、不二の氣色の哀なる、都人の、鄙の物憂さも知らで、山の姿のうらやましかるらんと、繪に書かせて、爲定卿の許へ送らせ給ふとて、

見せばやな語らば更に言葉の及ばぬ富士の高根なりけり　同

其御返しに、

思遣る方さへなきに言葉の及ばぬ富士と聞くにつけても　爲定

新帝御位におはしまして、先帝の御遺敕に任せ、國々の武夫へ、綸旨を給はりければ、越の國におはする義助朝臣、九月の初、其國にある敵の城共、數多攻從へぬれば、京には驚き騷ぎ、義助討たんとて、國々の兵、雲霞の如く攻下り戰ふにぞ、さする小勢にて、義助打負けて、美濃國へ向ふ。其國は、堀江貞光とて、義貞の類なるが、君より賜はりて、年ごろ住み侍れ。松尾といふ城に侍へば、義助もそこへ入り

神皇正統記を上る

職原抄を上る

ぬ。敵又其國へも襲ひ來り攻め戰ふ。寄せつ返しつ揉合ひて、年も暮れぬ。去ぬる十月、年の名變りて、興國元年と申すめり。其二年の春にもなりぬ。常陸國におはする一品入道の許より、神皇正統記をつゞりて、上へ奉り給ふ。今の帝、また年も幼くおはしまし、上達部・殿上人も、僅におはすれば、昇進除目なども、そこはかとして調はず。上も歎き思召す由承りて、一品入道、又職原などいへる文つゞりて、奉り給ふにぞ、百官諸位職、掌を指す如く、末の世の鑑なるべし。美濃國の戰にも、義助打負けて、伊勢國を經て、吉野へ參りぬ。君、戰の利なかりしことなど、仰せも出でず。たゞ年頃のいさをしありしことを、賞せさせ給ひ、刑部卿になされ昇殿しぬ。其折節、四國より御方に從ふ武夫共、大將軍たび給へと奏するも侍りければ、頓て義助を下されぬ。卯月の中は、義助、紀伊國より船に乘りて、伊豫國へ向ふ。其國には、大館左馬助氏明とて、是も義貞の類にて、ゆゝしき者なるが、去年より其國賜はりてありける上、河野・土居・得能などとて、さるべき兵數多侍らひしが、義助朝臣の下りけるに、いとゞ勢を得て、此處も彼所も打從へんと、出立ちけるに、

五月の初め、義助心地煩ひて、僅か七日といふに失せければ、皆人氣を落し、呆れ迷ひぬる折、かたき雲霞の如く寄せかけ戰ふにぞ、下々皆落失せて、去り難き兵計り、今日を限りと戰ひ、大館氏明を始め、むね〴〵しき者、多く討死しぬ。其外の輩は打破りて、行方なくなりぬ。あたら義助朝臣失せて、其國々さへ斯くなりけるぞあさまし、

櫻木物語 六 終

櫻木物語　七

興國二年の秋の頃か、陸奥におはします親王を、守り奉る顯信卿・顯時朝臣・具信・經泰等の朝臣供奉して、常陸の國小田の城へ入らせまします。陸奥にも、伊達・信夫・南部・田村などいふ御方の武夫、軍を率ゐて、斯波・岩手といふ所へ打出て、敵と戰ふにぞ、此處の敵寄せ集うて、多くの兵なりけれど、打負けて、宗徒のかたき數多討死しぬ。吾妻の義兵、其よりいとゞこはくなるべし。宗良親王は、去年より駿河國におはしましけるに、初めより附從ひ參らする人々の外は、參る者もなければ、信濃國へ打越し給ひなんと、出立ち給へば、狩野介を始め、御名殘を惜しみ參らせ、彼國へおはしたる後も、まめやかに仕へ奉らんと申すを聞召し、哀におぼして、

　　身をいかに駿河國の沖津浪よるべなしとて立ち離れなば　宗良親王

狩野介が郎等も、數多御送りに參る。扨清見關を打過ぎさせ給ふ時、其氣色哀れな

宗良親王信濃に入らせ給ふ

りければ、

東路のすゑまで行きぬいほさきの清見が關も秋風ぞ吹く　宗良親王

車返しといふ所より、甲斐の國を經させ給ふに、富士の山の麓を巡る。通る道なれば、

北になし南になして今日いくか富士の麓を巡り來ぬらん　同

行き〳〵て、甲斐の國白須の松原に、暫し休はせ給ふとて、

かりそめの行通路と聞しかどいざや白須のまつ人もなし　同

信濃國大河原といふ所におはし着きて、送り奉りて參りける輩を、駿河へ返すとて、狩野介が許へ、

富士の根の煙を見ても君問ふに淺間の嶽は如何もゆなど　同

信濃には、御方に從ふ兵多かりしかば、彼輩參り集うて、義兵こはくなりぬ。興國三年の春の初の頃、大納言爲定卿は、年頃御志厚かりける間、御文細やかに書きて參らすとて、鄙の御住居物憂くおぼしつらん。今年は道の程も靜なる由、聞き侍る。

いかにしても、忍びて參り給へ。また春の間は、海上荒々しくは候まじ。船にて伊勢迄御渡りありて、山傳ひしてもおはすべけれ。花もいつよりは早く咲きなん、名にしおふ山の景色哀れにて、されど上の、物事につきて御心細きさま見奉りしぞ、悲しく侍る。其よりおはしまさず、さぞや喜ばせ給はんになど書きて、奥に、

かへるさをなどや急がん名にしおふ山の櫻に心とめてぞ　爲定

其文の信濃へ屆きければ、返し遣すとて、

故鄕はこひしくとても三芳野の花の盛をいかゞみすらん　宗良親王

其頃越中國に、御方に志ある者共、從ひ參らせなん、愛の國へおはしませと、招き奉れば、頓ておはして、石黑何某が許におはしましける折柄、秋の半とて、雲井の雁を聞召して、

故鄕と聞きしこゝろの空をだも猶ほ浦遠く歸るかりがね　同

又獨り物わびしくおはしける時に、やがてなん、

數ふれば七年もへぬ賴みこし七のやしろの影をはなれて　同

名子の浦といふ所におはしまして、都へ赴きける者に仰せて、爲定卿の許へ、御文遣し給ふとて、

今は又問來る人も名子の浦の潮垂てすむ海士と知らなん　宗良親王

其御文の屆きければ、御返し奉ると、

秋の風はや吹き返せ名子の海士の潮垂衣うらみのこさで　爲定

越中の國におはしけれど、參る者も多からねば、其國打平げなんこともならねば、又信濃へ歸りおまして、大河原の城にまし〳〵けるが、其年も暮れて、興國四年になりぬ。春立つといふ計りにて、信濃路は雲降り積みて、物淋しけれど、鶯の鳴きければ、

かりのやどかこふばかりの吳竹をありし園とや鶯のなく　宗良親王

春每にあひ宿りせしうぐひすの竹の園生にわが忍ぶらん　同

常陸の國におはします親王を始め奉り、一品入道顯信卿など、義兵こはくなり、そこら打從へたれば、其國のかたきも恐れ騷ぎて、佐竹・結城・相馬等、宗徒のかたき集

り集うて、卯月の初つ方、寄せ來て戰ふ。御方にも顯時・具信・小田治久など、ゆゝしき人々打出でつゝ、追ひつ返しつ戰うて、かたきの大將軍と聞えし結城直朝とかやを始め、佐竹・相馬が類に、さるべき兵數多討取りたれば、叶はじと思ひてや、かたき引返しぬ。其後五月の半、鎌倉の基氏が後見する者に、高の參河守師冬とやらん、雲霞の如く兵を具して、三村山のわたりに屯し、小田の城を攻めんとす。御方も打出て戰ひ、寄せつ返しつ、秋半まで、夜晝となくどよみ暮す中、小田治久、心變りして、敵を引入れしかば、小田城の堅めも叶はて、一品入道は關の城、親王・顯信卿は下妻の城へ入らせ給ひぬ。其後は、敵彌〻增に馳せ集うて、いくらといふ數知らず。野も山も一つに滿ち〳〵たり。されど義を先とする兵、御方にも多かめれば、いとど勇みて、命を限りに戰ひつれば、さすがに敵もえ破らず。たゞ矢軍に、月日立行き、其年もたゞ暮れて、明くれば興國も、五年になりぬ。其頃京に、風雅集を撰ばれぬ。信濃にまします宗良親王、其事聞召して、去ぬる年續後拾遺集撰ばれし時、聊の障ありて、其作者に洩れさせ給ひ、今年も鄙の御住居なり。選者も、爲定卿は、芳

野の御方におはしませば洩れぬ。道も廣がり行きぬと、歎きおぼして、

いかなれば身はしもならぬ言葉(ことのは)の埋れてのみ聞えざるらん　宗良親王

この度は書きもらすとも藻鹽草中々和歌のうらみとはせじ　同

年月經て、信濃の國におはしませど、其國さへ、また打平げず、ましてよの國々へ、打出で給はんこともなり難し。いつを期すともなき事柄に、從ひ參らする輩の、まめやかなる心も、空しくやならんと、心憂くおぼし煩ひて、

いはて思ふ谷の心もくるしきは身を埋木とすごすなりけり　同

吾妻の戰は、敵も味方もまた支へて戰ひ暮らすに、白河修理大夫さへ、敵にすかされて、心變りしければ、常陸の國に落ちさせ給ひて、親王・顯信卿などは、陸奥へ歸りおはして、宇津の峯の城に入らせ給ふ。一品入道は、上より召されぬれば、船に乘りて伊勢へおはし、伊賀を經て、芳野へ參り給ひぬ。其後年の名も、七年にて變り、正平とは申すめり。其二年に當りける頃、故正成が名殘とて、其子の正行・正時、上の救受けて、河內國にて、義兵こはくなりぬ。京より其こと聞えて、細川顯氏など

いふ者共、多くのかたきを具して、寄せぬれど、正行を始め、皆たけ〴〵しき兵なれば、やがて藤井寺のわたりに向ひ戰うて、打破りぬ。其後又山名何某、細川を助けて、寄せ來りしも、四所明神の御社のほとり、聖德太子の御墓のわたりにて、戰ひつつ、數多の敵を討取りぬ。高氏、いとゞ驚き騷ぎ、此度は高師直・同師泰を始め、さるべき兵、殘る方なく催し集ひ、雲霞の如く棚引き渡りて、年の暮れなんとする頃、河內國へ亂れ入りぬ。正行此度も謀はいくらもありけれど、其身病多く、折々煩はしく、命長からんこと叶ふべくもなし。なま中に兎に角にする內、心煩ひ死しなば、父が申しける言葉も誓ひてなくば、よみ路にて、父に面もあらじ。また此頃世の有樣、治まりぬべき氣色もなく、永らへて、いとゞ淺ましきことや見ん。たゞ討死して、なき父の言葉に背かぬこそ、子たる者の道にこそと思取りて、弟に侍る正時幷に和田新發知新兵衛尉正家など、親しき類百四十三人、內へ御暇に參り、御暇給ひて、この如意輪堂のかべ板に、各名書止め、其奥に、

梓弓引き返さじと思ふよりなき數に入る名をぞとゞむる　正　行

四條畷の戰

正行正時戰死

皆鬢の髮少し押切り、佛殿へ投入れつゝ、芳野を立ちて、敵に向ふ心ざま、いとゞ哀なり。斯くて敵・味方、四條繩手にて寄集ひ、入揉みどよむ。正行が兵、兼ねてなき身と思ひ切りにしかば、命を塵芥のやうになして戰ふ程に、敵さへ兼ねて崩れ靡けば、南・松田・上山などいふむねむ〳〵しきかたき共皆討たれ、師直も、既に危く見えしが、さり難きかたきも殘りて、いと甲斐々々しく戰ひけるにぞ、正行・正時を始め、今日討死しなんと契りける。兵皆痛手負ひぬれば、今は斯うと、殘る方なく刺違へて消え失せぬれど、消えぬ名をのみ殘すめり。正行失せにしかば、敵いとゞ勢ひ乘りて、師直が弟の師泰など、數多の兵を具し、楠が城へ襲ひ來るに、正行が弟二郎正儀、また其頃は、二十にも足らざりけれど、いと甲斐々々しく、殘る類を集うて打出でつゝ、寄せつ返しつ戰ひ暮らす。師直等は、吉野へ襲ひ參る由聞ゆれど、折節御方に、さるべき兵も多からず、防ぐべくやうもなければ、上を始め奉り、女院・皇后・上達部・殿上人・下々迄、山深く落ちさせ給ふ。習はぬ岩根の道を踏み、八重山を起して迷ひ入り、上は、勝手の宮の御前を過ぎさせ給ひける時、寮の御馬より下り

させ給ひ、御涙の内に、思召し續け給ふ。

この儘に扠しもあらば芳野山神の勝手の名こそをしけれ　御製

昔淨見原の帝の、大友の宮に恐れさせ給ひ、この山に隱れさせ給ひにし。暫しは世の亂れけれど、終には御代知召しつる古の例もあれば、斯くてはあり果てじと思召し、なぞらふる方はおはしませど、尊き賤しきとなく、周章て迷へるさま、みそなはす御心の中、推量かり參らせて、人々涙せき敢ず。其後師直、數多の敵を具して押寄せしが、防ぐ兵なければ、頓て内裏に火をかけぬ。折節風さへ烈しくて、上達部の家々を始め、笠鳥居・金の鳥居・二階の門・天神宮・廻廊・かぐらや・寶藏・かな殿・藏王の社迄、暫しの煙と立上る。いふ計りもなく淺まし。上は、賀名生といふ所におはし着きて、黑木御所を作りおはしませば、彼唐の聖の御代の事思出でられて、減なるさまもあり乍ら、女院・皇后のおはします所は、柴ふく庵の怪しきに、軒端もる時雨を防ぎ兼ねさせ給ひ、御袖の涙、乾すひまさへなく、上達部・殿上人などは、岩のはざまに、松葉葺きかけ、苔蓆かたくしきて、御身を置く宿とし給へば、高峯の風吹

賀名生に臨幸

高氏直義不和

吉野に還幸

落ち、夜の衾をかへせど、露の手枕いと寒く、昔を見する夢もなし。斯かれば、暫くも、ありながらへん心地もなければ、さすがに消えぬ露の身の、命さへあらばなど思ふも、いとはかなし。斯かる惡逆の報の來りてや、彼師直、明の年より、高氏・直義中惡しくなりて、直義御味方に參りて、又の年如月の程に、師直が一つ類、殘る方なく亡びにき。彌生の初めつ方より、芳野へ歸り居させ給はんなど聞えて、十二日三日の頃還幸なりけれど、ありにし内裏も燒け失せぬれば、また黑木の御所造り、入らせましゝます。藏王堂始め、爰も彼處も、皆煙となりぬれど、花のみ變らで、白雲の懸れるやうに咲き續き、いと哀なりければ、花一房、御文の中に入れ、宗良親王へ送らせ給ふとて、女院、

三芳野は見しにもあらず荒にけり徒なる花は猶殘れども　新待賢門院

其御文の、日を經て信濃へ着きければ、御返し奉るとて、

今迄も思ほゆるかな後れにし君がみかげや花に添ふらん　宗良親王

尋ね見る人の爲めにや殘しけん同じかざしの三芳野の花　同

去ぬる興國の始め、先帝雲がくれさせ給ひにし時、御遺敕のまし〳〵ければ、御院のほとりに、櫻を幾千本植ゑよと、敕承りて、久盛少將奉行して、去年までも年々に植ゑける。花の咲き續きたるを見て、

植ゑ置かば苔の下にも三芳野の御幸の跡をはなや殘さん　　久盛

此頃より後の事は、唯今の若人も、見もし聞きもし給はん。春の日の長物語、詮なくや侍らんと、花の蔭に立紛れて、夕暮の鐘と共に、散る花のみ殘れり。

櫻木物語　七　大尾

三人法師　上

抑高野山と申すは、王城を去つて遠く、きうりを離れてむにんじやう、八葉の峯峨々として高し。八の谷森々として靜なる所なれば、弘法大師入定し給ひて、慈尊の出世、三會の曉を待ち給ふ靈地なれば、或は座禪入定の床もあり、或は念佛三昧の所もあり。思々に浮世を厭ひ給ふ所に、半出家の僧、所々に住ひし給ひしが、一所に寄合ひて、物語をする程に、一人の僧申されけるは、我等皆半出家なり。何故に遁世しけるぞ。いざ座禪の面々、懺悔物語申し候はん。懺悔に罪を滅すると申す事の候へば、何かは苦しく候べきと、申しければ、其中に、年頃四十二三計りなる僧の、難行苦行に、身は瘦せて衰へたれども、かねふかゞ〳〵と尋常なる僧、衣此所彼所破れたるに、をひろなるくわらかけて、誠に思ひ入りたる體なるが、さらば愚僧、先づ語り申し候はん。京中の事にて候へば、定めて聞召しても候ひつらん。尊氏將軍の

御時、某は、糟屋の四郎左衞門と申して、近侍に召使はれ候ひしが、十三の年より御所へ參り、禮佛・禮社の御供、月見・花見の御供に、はづれ申す事なく候程に、二條殿へ御成候ひし程に、折節朋輩共會合仕り、身が許へ使を二三度立て、遲しと申し候程に、夫に心を引き候てよりも、御供のすき候へかしと存候て、御座敷の體を覗き見し所に、御酒二三獻目と覺え候時、御引出物と見えて、廣蓋に御小袖を置きて、女房達の持ちて御出候ひしが、御年は、未だ二十にはならせ給ひ候はじと、見えさせ給ひしが、練衣の肌小袖に、こうくわりよくやうの一重に、紅の袴をふみ、長なる髮をゆりかけて、何と申す計りなく、美しく御渡り候ひしが、物に譬へば、楊貴妃かんのりうじん、我朝の衣通姬・小野の小町・染殿の妃・女后かういと申すとも、いかでか此には勝るべき。哀れ人間に生れば、斯樣なる人に、言葉を交へ、枕を弁べばや。せめて今一度出でさせ給へかし。一目なりとも見參らせんと、思ひ染めしより心憂く、胸の煙となり心憧れ、忘れんとすれども忘られず。更に現ともなき戀となりぬ。去程に將軍も還御なりぬ。我身も宿所に歸り候。さて其後、上﨟の面影忘れ

難く候て、食事を絶やし打伏して、四五日出仕をも申さず候程に、御所樣より、何とて此程は、糟屋は參らぬぞと、御尋ね候に、違例の由申して候へば、頓て醫師を召されて、療治をもせよと、仰せられ候程に、醫師、我宿へ參りぬ。起直り、烏帽子・直垂打冠り候て、對面仕候へば、脈を暫らく取り候て、本の座敷へ直り申すやうは、あら不思議や、別に本病とは覺え候はず。人を恨みさせ給ふやらん、又は大事の御訴訟を御持ち候かと申しけり。其時さらぬ體にもてなし、我等幼少に候ひし時、斯樣の勞をして給ひしが、養生仕り候て、十四五日にて直り候ひし程に、其日數を待ち候べし。何の大事を持ち候べきと、申して候へば、藥師、御前へ參り申しけるは、さすがに煩とは、存じ候はず。身に大事を持ちたる人にて候か、げにや昔ならば、戀とも申し候べき勞にて候と、申上げければ、將軍仰せけるやうは、今なればとて、戀といふ事のあるまじきにてもなし。糟屋が心の內を問はせばやと、仰出されける。佐々木三郎左衞門こそ、深き知音にて候へと、申上げければ、佐々木を召されて仰付けられけるは、糟屋が方へ行き、看病をもせさせ、心の內をも尋ね候へと、御諚なれば、佐

佐木參り、先づ身を恨み候ひしやうは、朋輩多き其中に、御邊と某は、深き契約申し候ひて、兄弟の如くに候ひつるに、などや是程の御勞をば承はり候はぬと、いろいろに恨み候ひし間、某が返事には、さして勞なく候程に、一人持ちて候老母にさへ知らせず候。御恨は御理にて候。其上大事候はゞ、是より申すべく候。ことゝしく候に、御歸り候へ。身こそ候らめ、御所中の事は、不思議なる事も候ではと、重ねて申候ひしかども、看病すべき由申候て、四五日打添ひて、我が心の中を問ひ候ひしに、暫くは包みしかども、餘り心深しと思ひ候て、有の儘に語り候へば、佐々木此由を聞き候て、さては御分は戀をしけるものを、あら易き事やとて、さらぬやうにて座敷を立ち、頓て御所へ參り、此由を申上げけり。さては易き事よと仰ありて、忝なくも御所樣御文を遊ばして、佐々木を御使にて、二條殿へ參らせける。御返事には、尾上と申す女房にて渡り候程に、地下へ下すまじきにて候。其人を此方へ給はり候べき由、遊ばされ候ひし文の返事を、我等が宿へ給はり候。御所樣の御恩、報じ申すべきやうもなし。是に付きても、味氣なき世かな。譬ひ尾上殿に逢ひ本

り候とも、たゞ一夜の夢の契なるべし。是こそ遁世する所と存じ候ひしが、又打返し思ひ候事は、糟屋こそ、二條殿の女房達を戀ひ申し、將軍の御籌策にてありけるが、隱して會ひ申さで、遁世したるなどといはれん事、生涯の恥と存じて、せめて一夜なりとも會ひ申し、其後は兎も角もと存じ候て、或夜思立ち、さして結構するとは覺えず候ひしかども、けてうに出立ちて、若黨三人召具して、案內者を以て、夜更方に二條殿の御所へ參りて候へば、きやうがる座敷を、屏風唐繪にて飾り、同じ程の女房達四五人、華やかに出立たせ給ひてありし所へ入りぬ。さて各酒二三獻過ぎ候て後は、茶·香の遊、樣々に候ひしなり。たゞ一目見申せし事なれば、何れが尾上殿にて御渡り候やらん、何れも〳〵美しく御入り候程に、迷惑仕候所に、聞召したる御盃を持ち乍ら、我身が候ひし所、近々と差寄らせ給ひて、人一人隔て候て、御おもひさし候時こそ、これが尾上殿よと心得て、御盃給はり候。さて夜も明方になりしかば、八聲の鳥も告げ渡り、寺々の鐘も、きぬ〳〵の分れを催し、行方久しく契り置き、女房又夜深きに歸り給ふ。寢亂れ髮の隙よりも、華やかなるかほばせ、綠の黛、

丹華の唇、誠に睦しき御姿にて、縁へ立出てさせ給ひ、一首かくこそ遊ばし候ひしぞや。

ならはずよたまにあひぬる人故に今朝はおきつる袖の白露

返し、

こひえてはあふ夜の袖の白露を君が形見につゝみてぞ置く

さて其後は、御所へ參り候。又身が宿へも忍びて、時々御入候ひし事なれば、定めて御疲勞にもあらんとて、將軍より、近江の國に、千石千貫の所を、參らせられ候ひしなり。次に我等は、北野の天神を信じ申候て、毎月廿四日に、參籠仕り候ひしが、此女房故に、懈怠申し候程に、折節、頃は十二月廿四日の夜にて候程に、歳末と申し、此程の懈怠をもゝ懺悔申さんが爲めに參りて、夜の更くる迄、念珠申候ひし所に、或傍に、あら痛はしや、何れの人にて、御渡りあるやらんと申すを、怪しと聞き、よくよく尋ね候へば、都はかくなる所に、年十七八程の女房を殺し、衣裳を剝取りたると申す程に、餘りに怪しく思ひ、取る物も取敢ず、走り行きて見候へば、少しも

違はせ給はず、彼の女房にて候間、夢現とも覺えず。剩へ髮をだにも切りて候程に、兎も角も申す計りなく、呆れ果て候ひしなり。如何なる罪の報にや、斯かる憂目を見る事の悲しさよ。逢ふを嬉しと思ひしも、今はかへりて恨なり。先達行きし人故に、何しに心を盡しつらん。我れ故に、君も未だ二十にも足らずして、女房の身として、邪見の劒の先にかゝり給ふ事よと思ひし。其時の我身が心の中をば、思召しやらせ給へ。いかなる鬼神、乃至五百騎・三百騎が中へ割つて入り、心計りの働、棄つる命、露塵程も惜しからず候ひつれども、知らねば力及ばず。頓て其世に髻を切りて僧になり、此御山に早や二十年計り、其女房の菩提を弔ひ候なりと、語りければ、二人の僧、墨染の袖を濡らしけり。又一人の僧、年五十計りになりけるが、丈は六尺計りにて、頸の骨拔け出て、頤反り、頬骨荒れ、唇厚く、目鼻大きに色黑く、極めて骨勝なるが、破れたる布衣に、同じくわら懷に押入れて、大きなる珠數爪繰りて申すやう、此次をば某語り申さんといふ。さらばとく〳〵語り給へといひける。不思議やな其上﨟をば、某が殺し參らせしといふ。はんかい開きて、きつと居直り、

色變りて、思切りたる體なり。其時、入道申すやう、暫く靜まり候へ。事の仔細、委しく語り申さんといへば、はんかい思直し、早や〳〵とありければ、荒入道申すやう、京の人と承り候へば、定めて聞召しても候らん。某が名をば、三條の荒五郎と申す者にて候。九つの年より、盜を仕初めて、十三の年、人を斬り初め、其上﨟迄は、三百八十餘人なり。夜討・强盜を、身の能と思ひ候なり。然るに宿執因果の積りけるか、其年の十月の頃より、盜をすれども叶はず、山賊をするも取り得ず。是ぞと思ふ事も、俄に違ふ事のみにて、苦勞せし程に、朝夕の烟も立たず、妻子の有樣も凄じく候間、心憂く候て、十一月の頃より、外を家とし候て、此處や彼處の古き御堂の庇、或は都の社の拜殿などにて、夜を明し、日を暮し廻り行く程に、或時、家の有樣をも見ばやと思ひ、差入り見れば、女にて候者、某が袂を控へ、さめざめと泣きて申すやう、あら恨めしや、など情なく候ぞや。夫婦の契不調なる事、珍しからぬ事なれば、穴勝ち歎くべきにもあらねども、今は早や緣盡き心變り候へば、何と慕ひ悲しみ申すとも、叶ふまじ。早や〳〵暇をたび給へ。女の身一つは、

過ぎ詫ぶまじく候。正月も近くなり候へば、幼き者共も、扶持すべき營し候はん。元より所領も持ち給はず、商もせず、農作もなし。たゞ一圓に、人の物を取り給ひしも、今は叶はず。子共の行末も知らず、剩へ家をも打捨てゝ、外を家とし給ひしも、たゞ自ら故なりと覺えたり。たとひ家をこそ、凄じく思ひ給ふとも、などや子共の渇命をも、計らはせ給はぬぞ。此二三日は、我等も朝夕重寶盡きて、烟をも立てず。あの幼い者共が、泣き悲しむ事見るも、如何程悲しく候ぞと、搔口說き申候程に、我身申すやうは、前世の因果や積りたるらん、さりともと思ふ事も、皆違ひ候程に、此程は外へ行きてありしかども、子共のゆかしくありし程に、歸り來てあるなり。安き事なり。待ち給へ。今日明日の程に、何事も候はんと申して、某が心に思ふやう、今宵に起きてはと存候て、日の暮るゝを遲しと待つ程に、寺々の鐘も響き、黄昏時にもなりしかば、例のくるまたちを持ちて、或古築地の影に立ち、往き來る人を、今や遲しと待ち居たり。其時の心の內、如何なる樊噲・張良なりとも、只一太刀の勝劣と存候て、手を握り待ち居たり。去程にちりとり一挺、すがるやか

に出立ち、何れも若き者雜談して通る。是は心なきよと心得て、やり過しぬ。又一町計り上の方より、異香薫じてありしかば、すはや、さりぬべき人の來るよと思ひ、されども未だ我身の運はありけるよと、嬉しくて見れば、おたりも輝く程の上﨟の、異香薫じて、さゞめき渡りたり。下女二人連れて、一人をば先に立て、一人をば後に、上差のつゝみ持たせて、身が候ひしをば、見ぬやうにて通り給ひしを、やり過し申して追懸けたり。前に立ちたる女房は、あら心憂やと申して、行方知らず。跡なる女房は、御包打捨てゝ、助け給へとて、走り逃げにけり。されども此上﨟は、少しも騷ぎ給はず、聲をも出さずおはしゝを、太刀をばはきそばめて、つゝと寄り、情なくも剝ぎ奉り、肌小袖をも給らんと申候へば、いかでか肌小袖は、女の恥にて候へば、許し給へと仰せ候て、御まほりを持ちて、これを肌小袖の代りと仰せ候て、投出させ給ひしかども、無道の者の悲しさは、是計りにては叶ふまじ。御肌小袖をも給はらんと申せしかば、肌着を脫ぎては、命生きても甲斐なし。只命を失ひ給へと宣ふ。それこそ元より好む所なればと申し、只一刀に刺殺し奉りて、肌小袖に血を附

けじと、周章てゝ肌着を剝ぎ奉り、袋を懷に入れて申すやう、いかに女共の喜び候はんと、獨言を申し、家に急ぎ歸り、戶を叩き候へば、女にて候者申すやう、餘りに早きは、何事もせぬかと申しける。早く戶開けよと申して、袋を內へ投入れ候へば、いつのまに取りつらんとて、袋の口開くるを遲しと、連鎖を引切り、取出し見るに、異香薰じたり。十二單の御裝束なり。こうくわりよくようの衣、皆紅の袴取出せば匂滿ちたり。小路を行く人も怪しみ隣あたりの家迄も、驚く程の匂なり。女の子等、喜ぶ事限りなし。女房、忝けなくも、御肌着をば、生れてより此方始めなり。斯程の裝束着給ふ女房の、年も若くこそ御渡りあるらん。いくつ計りの人ぞと申す程に、情をも知りてとふぞと心得て、夜目に見つれども、いま廿二三迄は、よもなり給はじ。十八九の人なりと申しければ、なかく\と申し、是非をいはず、外へ出づる程に、只いかやうの用にも出て候かと思ひ候へば、やゝ久しくありて、來り申すやう、あらいかにと、御身は大名にて候者かな、とても罪作るならば、少しも德のあるやうにはさせ給はで、現在わらは行きて、髮を切りて取りたり。是程

の髮こそなけれ、鬘にひねり候べし。小袖には代ふべからずとて、茶碗に湯をうめて振すゝぎ、竿にかけ乾し、踊り跳ね嬉しがり、喜ぶ事限りなし。さても女の寶儲けたり。あら嬉しやと申候ひし。此女の有樣を、つく〴〵と見て、あら淺ましや不得心や。前世に佛法の結緣あればこそ、人とも生れてあるらん。たま〳〵人間をうけたる時、佛法をも修行して、善人迄こそなくとも、せめて世の中の情をだにも知らぬ身となり、大惡人となりて、夜晝思ふ事は、只人を殺し、盗をせん巧ならでは思ふ事なく、因果遁れず、終には無限地獄の業因と思ひ知れたる、斯樣の惡業を作り、露の命をつなぎ、夢の夢を知らぬ事よと、我身ながらも口惜しや。又女の子等が心の中無道さよ。中々申せば愚なり。斯かる女に枕を竝べ、契を結びしことこそ、返す返すも口惜しけれ。あら淺ましの女の心やと思ひ取り、何しに此上﨟をも、殺し參らせつらん。痛はしさよと思ふ計りにて、氣も心も消え入る心地して候ひしが、いやいや斯くては叶ふべからず。之を善提の善智識として、髻を切りて、此上﨟の御跡をも弔ひ、又我身の菩提をも願ひ候はんと思立ち、頓て其夜の中に、一條北小路

へ行き、玄惠法印に逢ひ奉り、御弟子になり名をばげん竹と附けられ申す。頓て此山に上り候ひしなり。「さこそ無念に思召し候はん。いかやうにも愚僧を殺し給へ。身を寸々に斬り給ふとも更に痛み申すべからず。只愚僧を殺し給ふとも、上﨟の御爲には、中々業因なるべし。斯く申候へど、命惜しみ申すにはあらず、三ぼうも御ちけん候へ。申出づる上は、兎も角も御計らひたるべしと語りて、衣の袖を濡しけり。糟屋入道申しけるは、譬ひ世の常の發心なりとも、互に此姿になり候て何の心か候べき。まして此人故の御發心なれば、殊更に懷しく思ひ申すなり。誠にさも候はヾ、此人は菩薩の變化なり。斯かる女人と顯れて、無緣の我等を助けんが爲めに、大慈・大悲の御方便と思ひ候へば、猶々古こそ忘れ難く候へ。斯かる事候はては、いかヾ我等出家して浮世を厭ひ、かのむゐの樂をうけん事は、憂の中の喜なり。今日より後は同心なるべきことゝこそ、返す〴〵嬉しく候へといひて、墨染の袖を濡しける。さて今一人の僧の發心の由來承り候はんと申せば是も老僧なり。衣の破れたるに、七條をかけて、看經ありしが、道行に瘦せて色黑み、其さま哀にあれ

ども、さすがよき人にてぞあるらん。誠に道者と見えて、居眠りてましまし丶を早や〳〵語り候へと、責められて申すやう、面々の御發心のやうを承り候に、言語道斷に覺えて候。前世の宿執と存候。某が遁世は、さほどの事までは候はず。語り申しても、中々無益にて候へども、御兩人御語り候に、語り申さねば、同心申候はぬに似たり。くふうの暇惜しく候へども、聞召し候へ。我身は河内の國、楠には一族にて候。篠崎掃部助と申すもの丶子に、六郎左衛門と申す者にて候が、親にて候者は、楠正成が爲めには、隨分の者にて候間、一大事をも内談し、何事をも相計らひ候ひし程に、一門多門楠に、さる者ありと、人に知られたる者にて候なり。正成討死の時も、一所にて腹を切りぬ。正行も遺跡にて、我等が事をば、疎略なく候ひし間、我等も、これが事をば、一大事に存候ひしなり。其後正行、討死し候ひし時は一所にて、身も討たれ候ひしかども、敵に首を取られずして、少し息の通ひけるを、知れる僧見あひて、ある所にかきて行き、看病せられて、不思議に命生き候て、歸りて候へば、今の楠正儀えつきをなし、親にて候者を、正成が存候如く、互に思合ひ候

ひし所に、人傳に承り候へば、足利殿へ、降參申すべき由を承り候程に、所存の外に存候間、楠に逢ひて、申せし事は、まことしからず候へども、足利殿へ、御降參あるべき由承り候。誠左樣に思召し候やと、申して候へば、餘りに君の御恨めしき事共御座候程に、左樣に思立ちて候と申せし程に、身が申すやうは君を御恨み候はゞ、我身を捨てゝ、遁世し給ひてこそ、誠の御恨にては候へ。足利殿へ、出でさせ給ひ候ては、君に弓を引き給はん事、御恨にては候はず。君の御運盡きさせ給ひ候を、見限り申候て、我身を立てんが爲めに、足利殿へ降參と、人申すべし。降參の事は、ゆめ〳〵あるまじく候。などや是程の大事を、思召立ち候はゞ、先づ我身、甲斐甲斐しく候はずとも、承り候はずと申せしなり。楠が申すやう、御分定めて此事を、わろがらせ給はんと存候て、申さず候と申す程に、我身わろがり申候はんずるを思召して候御心を以て、諸人の嘲を思ひやらせ給へ。一代ならず、宮方にて討死仕り、名を後代に揚げ給ふが、御分の代として未練の振舞、口惜しき事にて候なり。何の御恨か御入り候べき。今の拜領も、師の御恩にてこそ御渡り候へ、君、君たらずと

雖も、臣を以て臣たりといふ古人の言葉あり。思召止まり給へと申して候へば、上洛して、とうじにて、くはんれいに對面しけりと、承り候ひし程に、君の御運命も、盡きさせ給ひぬ。身一人を離れて、功をなす事有難し。又つれて降參は、本意に背き候間、是こそ善智識よと存候て、遁世仕り候ぞや。

三人法師　上　終

三人法師　下

さる程に、河内の國篠崎を罷出で候ひし時、三つになり候女子一人・男子一人、二人の幼き者、妻にて候者共を打捨て出でし時は、さすがに多年の夫妻の好を申し、名殘惜しき事、千萬に候ひしかども、是ぞ十分の遁世と思ひ切り、頓て關東へ修行の志出で、松島のゑげに、三年候て、其後北國を修行の志候ひし間、とても斯樣なる半出家の者は、諸國を巡り、如何なる知識にも、結縁をも歎き、名所舊蹟をも見て、心をも慰め、又とても、あり果つべき浮世の中ならねば、歩き倒れてと存候て、日本國を巡り、西國を指して止り候程に、不思議に、河内の國を通り候間、故郷篠崎の有樣をも見ばやと思ひ候て、身を堀のほとりへ立寄りて見候へば、築地はあれども、おほひもなし、門はあれども、扉もなし。庭には草深く繁り、家共は皆壞れ失せて、僅にあやしの賤が庵二つ三つ殘りたり。夫さへ雨風たまるべくもなし。見るに目も當て

られず、涙を流し、罷通り候ひしが、其近き道のほとりに、一人田を打ちて見えたり。此尉は、いかにも古の事をば、知りたるらんと存候て、立寄りて問はゞやと思ひ、やあ尉殿よ、此所をば、何と申す所ぞと、問ひて候へば、尉が着たりし日笠を脱ぎ候て、篠崎と申す所にて候と、答へ申すなり。さていかなる人の御領ぞと尋ね候へば、篠崎殿の御領にて候と申す程に、扨は我等が事をば知れるかと存候て、某、田の畔に腰を休め、此尉も、鍬を杖につき候て、心静に、事の仔細を語りけり。是は篠崎掃部助殿と申して、何事も人に勝れておはせし程に、楠殿も、一大事の御事に思召して、深く御頼み候て、同じ御一族ながらも、しやうくわん御申候ひしが、其御子息に、六郎左衛門殿とて、楠殿、京方へ御降參候を、御恨み候て、御遁世にて御座候が、御行方も知らず。當時北國方に御座候とも聞え候。又御他界とも承り候。誠に御さうのある事は候はずと申候て、涙を流し候間、それがしも涙を押へて、申すやう、扨て御身は身内の人か、又は御領の人かと申せば、此尉は、御領の年頃の百姓にて候。六郎左衛門殿御遁世の後は、當所荒れて、宮仕ひ申す者一人な

く候程に、我等は、人數ならぬ身にて候へども、御臺・御公達の御有樣を見參らせ候て、餘りに御いたはしく存候て、私を打捨てゝ、此五六年が間、宮仕ひ申候。六郎左衞門殿御遁世の時、三歲になり給ひし姬君・幼き若君を振捨てゝ、御遁世候ひし程に、母御の兎角御方便候て、御育み候ひしが、此上﨟殿も、あかぬ別れの思ひにや、病者とならせ給ひ候て、去年の春の頃より、勞らせ給ひしが、此程は、食事を絕やし給ひ候て、はや御他界候て、今日三日になり給ひ候が、此公達の御歎を見申候に、中中に目もくれ、心も消ゆる計りに覺え候なり。あれに見えて候松の下に、茶毘し申して候。此幼き人は、二人ながら每日に、泣く〳〵茶毘所へ御參り候。今日も御供申すべき由申して候へども、よし今日は、供をせずともと仰せ候程に、人竝々に、此田をうち候なり。是も尉が爲めにはあらず、公達の行末を思ひやり候て、御痛はしく候程に、此田を打ち候。此尉をばおうちと申し、おうちならでは、御賴み有難く候程に、今日も公達の、遲く御歸り候程に、あなたのみまほり申候へば、田をうつも、身に染まず候と申し候て、さめ〴〵と泣きにけり。其時、餘りに不便に覺え、か

かる賤しき者だにも、斯様の情は知りたりけるに、我身は餘りに邪慳にて、捨てける事よと存候て、これこそ其六郎左衛門入道よと、いはゞやと思ひしかども、いやいやさては此間の修行、徒事なりと存候て申すやう、誠に有難くこそ候へ。如何なる人か、尉殿のやうなる志の人か候べき。あら痛はしや、世の中に斯かる哀れなる事こそ候ひけるよと、其幼き人の御歎き思ひやるも、兎も角も申し難く存候。僧も左程の事迄は候はねども、さやうの思ひをして候なり。何よりも幼き者の、父母に遅れたる程の、世に悲しき物はなかりけりと申して、衣の袖を顔に當てゝ、泣き候へば、さては御僧も、古へ左様の思ひをして御座候やと申して、聲も惜まず泣き居たり。やゝ久しくありて、某申すやう、尉殿よ、是より後も、見放し給ふなよ。いかにいかに父母の、草の蔭にて、嬉しく思ひ給ふらん。又尉殿の子息に報い候て、末もめでたくあるべし。返す〳〵も其幼なき人達、いとをしみ給はゞ、佛神三寶も、尉殿を守り給ふべし。暇申して、尉殿、日も暮れ候へばとて、立ち行きけるに、遙々と送り、懇に物語り申し、何につけても此尉は、泣くより外の事はなし。我等も涙を

抑へて、尉殿は、はや泊り給へと、申せばとまりぬ。少し行きて見れば、實に或る木の下に、人を荼毘して見え候程に、中々と存候て、行過ぎ候ひしが、又心を返して思ふやう、發心して家を出て候時、初めは妻子を振捨てゝ出行きしに、今は死して既に三日に當り候荼毘所を、見ながら通らん事、無道心なり。知らずば力なし。たまたま法師の身とはなりて、立寄り、陀羅尼の一遍もみてずして通らん事は邪慳なり。かつうは利益もかけ、又は亡者の、草の蔭にて恨もあらん。歸りて見ばやと存候て、立寄り見るに、木蔭に、幼き二人の者蹲ひ居たり。あれそれよと思ひて申すやう、上﨟達は、如何なる御事なれば、かやうの所に御渡り候ぞと、問ひ候へば、其返事をばいはて、あら嬉しや、是は我等が母の御他界にて、今日三日になり候程に、骨を拾ひ候所に、今日しも、御僧の御通り候事の嬉しさよ。恐れながら、御經遊ばして給はり候はゞ、御利益にて候らめと、搔口說き申す間、其時目もくれ心も消えて、更に夢現とも思はず候ひしなり。暫く心を取直し、此幼き者をつくづくと見候へば、姉は九つ、弟は六つなり。さすがに下﨟の子供にも似ず、形いたいけに見え

たり。親子恩愛の道なれば、抱きつき、父よと名乘らばやと思ふ心は、千度・百度候ひしかども、いや〳〵心弱く候ては、此程の心勞無になり、佛道に入り難しと存候て、怺へて候ひし事、思召やらせ給ひ候へ。扨此等が玉の手箱の蓋を姉が持ち、懸子をば弟が持ちて、誰か敎へけん、竹と木との端を持ちて、骨を拾ひけるが、猶いふ言の葉もなく、袖を顏に押當てゝ、泣き候ひし時、はる〳〵ありて、某申すやう、上﨟達は、幼くわたり候が、何とておとなしき者は候はぬか。自ら骨を取り給ふと申せば、我等が父にて候人は遁世し、未だ行方も知らず候。其後はたゞ下のおうぢと申す者一人候ひしも、今日は供をもせずとて、詞少なになりて淚に咽び、物をもいはざりし時、愚僧陀羅尼を讀み候はんも、聲も出でず、故郷へ、再び來りけん事の悔しさよと、我身を恨めしく思ひしなり。いや〳〵斯くては叶ふまじ。陀羅尼をみてんと思ひて、見て候ひし折節、時雨さつとして、木の葉の露も淚の如く見え候ひしを、姉が見て申すやうは、法にて候ひし人は、京の人にて渡り候ひしが、妾に敎へさせ給ひしは、歌の道には如何なる恐しき鬼神も、又うとき人も、聞きては心も和

ぎ、佛も納受し給ふなり。女の身として、歌の道に心をつけずば、淺ましき事と仰せ候て、わらは七歳の年よりも、かたの如く文字をつらね候。只今思出され候とて、一首かくなん、

草木までわれを哀れと思ひてや涙に似たる露を見すらん

此歌を聞きて、强き心も失せ果てゝ、詮方なくして、露霜ならば、既に消えぬべき心地して、いやいや今は包むとも叶ふまじ。我こそ汝が父の六郎左衛門入道と、いはばやと思ひしかども、心弱くて叶ふまじ。年來思立ちて、遁世したる身の、今日、子といふ首枷をになふべきか。かく思ふことは、甲斐なき心かなと、我と心を恥しめて後に、それがし申すやう、此歌こそ、言語道斷に遊ばして候へ。誠に神も佛も、いかで哀れと思召し給はざるべき。父母も草の蔭にて、いかに嬉しく思ひ給はん。我等は、物の哀れも情の道も知らず。かゝる卑しき身にて候へども、今の御歌を聞きては、涙もせきあへず、いかで心あらん人聞き給ひて、御心の中を哀れみ給はで候べき。只今之を罷り通り、かゝる御痛はしき事を見參らせ候も、思へば前生の宿執

にてこそ候はん。見放し難く思ひ參らせ候へども、中々いとま申すとて、立出て候へば、姉が申すやう、仰の如く、一樹の蔭に宿り、一河の流を酌むも、皆他生の縁とこそ承り候へ。又いつの世にか巡り合ひ參らせ候べき。返す〴〵も、御名殘惜しくこそ候へ。殊更御經遊ばして給はり候事、申盡し難く候といひしも果てず、袂を顏に押當てゝ、聲も惜しまず泣き居たり。弟は、未だ聞分けたる事もなく、姉に取付き悶え焦れて、泣く計りなり。其時更に心も消え、目も當てられず、何に譬へん方もなくて、たゞ腹を切るも、斯くぞと思ひ切り、立出て候程に、彼等も見送り候。それがしも見送り〳〵行き候へば、是等母の骨を、匣の蓋に入れ持ちて、我が宿の方へは行かずして、よそへ罷り候程に、又立歸りて、そなたへは何方へ渡り給ふぞと申せば、是はほうにん寺と申す御寺に、都より尊き上人御下り候て、七日の御說法にて候が、今日はや五日になり候。人々參り候程に、我等も參り御聽聞申し、此御骨をも、納めばやと思ひ候て、扨て御寺へ參り候と、申候ひし程に、それがし申すやう、あらいたはしや、幼なき心にも、かやうに思ひ寄らせ給へば、如何に母御の草

の蔭にて嬉しく思はせ給ふらん。扨もほうにん寺と申すは、是より如何程候やらんと、尋ねて候へば、未だ知らず候へども、人の行くに任せて罷り候と申す。などや人を召具し給はて御渡り候ぞ。餘りに御いたはしく候ものかな。明日おうぢとやらんをも召連れて、御參り候へかしと申せば、姉申すやう、此程參るべき由、おうぢに申候へば、幼き人の、あるまじきことと叱り候程に、思ひ乍ら參らず候と申す。さらば御供申し候て、上人をも拜み申し、結緣をも申候はんとて、つきて行き候へば、中々物も申されず。道すがら此姉申候は、我等が父、未だ生きてましまさば、御僧の年頃にこそ渡らせ給ふべきに、淺ましや、如何なる罪の報にや、父には生きて離れ、母には死して別をなす事の悲しさよ。せいちやうしやの事ならば、父御の面影は身に添ひて、憂き心の友ともなるべきに、情なの父御やと申し、聲も惜まず泣きし時、弟が申すやう、父御は佛になりてましますと、朝夕母御の仰せ候ひつるものを、さのみ泣き給ひそと、こざかしげに申せし程に、それがし前後を失ひて、行く道も見えず候ひしなり。扨も此御寺と申すは、聖德太子の御建立なり。けんほう・

建武の動亂に、所領悉く相續して、拜殿堂廢りしを、楠が世になりて、所領を元の如く返しつけ、修理をなし、京都より妙法上人を請じ下し申して、供養を述ぶる山中す間、見ばやと思ひて行く程に、ほうにん寺にも近くなりければ、げに貴賤上下袖を連ね、道俗男女市をなす。輿、ちりとり・鞍置馬、幾千萬とも數知らず。既に三箇國の人々群集す。木の下かやの下までも、皆人ならずといふ事なし。さる程に此幼き者共、たうばの內へ入るべきやうもなし。何とあるらんと見候へば、案內申候はん。是は上人に近付き申すべき事候とて、押分け〳〵入る程に、誠に諸神、諸佛も憐み給ふと覺えて、人每に道をあけてぞ通しける。法會の座に至り、上人の御前に二人の者共、蹲き居たりけり。さていかやうにあるらんと見れば、二三人許り隔てて、姊が手箱の蓋を、上人の御前に差置きて、三度禮して手を合せ、跪き居たり。上人之をつく〴〵と御覽じて、幼き人は、如何なる人ぞと御尋ねあれば、是は楠が一門に、篠崎の六郎左衛門が子供にて候が、わらは三歲の時、父にて候者は、楠と中を違ひ遁世して、今に行方も知らず候。此程は、母一人に添ひ奉り、浮世を明し暮し

て候が、有爲無常の習の悲しさは、母にて候者にさへ別れて、今日はや三日になり候。御骨をだにも取るべき者なく候て、おとゝひの者共、取りて箱に入れては候へども、置くべき所をも知らず候て、上人を賴み參らせんが爲に、是迄持ちて參り候。願はくは如何なる所にも納め、母を早く淨土へ入らせ給へと、回向して給はり候はば、偏に御利益にてあるべしと申せば、上人、誠に哀れに思召し、兎角の御言葉もなく、御涙に咽び給ひ、暫く物をも仰せられず、上人御落涙は限りなし。聽衆の人々も、遠きも近きも、袖を濡らさぬ人ぞなき。扨姉が袂より、一つの卷物を取出し、上人に奉る。上人之を取上げさせ給ひて、たか〳〵と遊ばし候ひしを、承り候へば、それ人間のさかひを聞けば、閻浮の衆生は、命不定なりとは申せども、其中にも、成人する迄、親に添ふ人の子多く候へども、如何なる宿執の報に依つて、我等三歲の時、父には生きての別れ、母には死しての別となりぬらん。今ははや賴む方なくなり果てゝ、迷の心はやる方もなし。思ひの烟は胸を焦し、悲の涙、乾く間もなし。我身のやうなる人しあらば、憂ひの道を語り、慰む方もあるべきに、まどろむ事も

なき程に、夢にだにも見奉らず。たゞ身に添ふものは、あるかなきかの陽炎許りなり。三日を過しけん、思ひはたゞ、千年・萬年を暮すも、斯くやと思ひ知られたり。ましてや行末の悲しき事は、やる方ぞなき。露の命、幾秋をか保つべきとも覺えず。かやうに孤兒となり果てゝ、誰か哀れともとふべき、たゞ願はくは、我等二人を憐み給ひ、母諸共に、一つ蓮の臺に迎へ給へと、こざかしく年號・日附まで書きて、奥に一首の歌を書きたり。

見るたびに涙ぞまさる玉手箱兩親ともになしと思へば

玉手箱蓋と懸子の黒髪をいふ方もなき身をいかゞせん

之を上人遊ばしも果てず、御衣の袖を顔に押當てさせ給ひて泣き給ふ。道場の内の聽衆、貴賤・上下・道俗・男女、袖を絞らぬ人はなし。之を聞き、見る人は元結を切り、刀に添へて、上人の御方へ參らせ、御弟子になるもあり、或は女性、笠の下より髪を切りて、上人に參らせ、發心する人もあり。其外遁世する人、數を知らず。其時の愚僧が心の中、思ひやらせ給へ。暫く御說法をも、聽聞申したく候ひしかと

も、あはや捨てし絆に繫がれん事よと驚き、目を塞ぎ思切り、たゞ合戰場にて千騎・萬騎が中へ切入り候て、一命を捨つるもかくやと思ひ、篠崎を出でしよりも、なほ大事に給ひしなり。さてはる〴〵罷り出て候て、ある木の下に休み、思案仕り候は、座禪工夫も道なるべからず。所詮高野山は、弘法大師の入定所、諸佛群集の靈地なり。如何なる所と申すとも、此御山にまさるべからずと存候て、奥の院の傍に、柴の庵を結びて、一大事を修業せばやと思ひし心を先として、此山に上りてより此方、更に他念なし。我をも人をも知らず。まして故郷の事をも知らず。唯寢ても覺めても、念佛三昧にて月日を送り候。面々に交り申す事も、今日始めてに候へ。過ぎにし春の頃、河内より此山へ參りて候人の、或人に逢ひて物語し候ひつるは、彼等が事を、楠が聞きて不便がり、其時六つになり候ひし男子を取立て、篠崎を取らせらるゝなり。又姉は比丘尼になりて候由、物越に承り給へば、心安くこそ候へと語りければ、二人の僧、有難き御發心にて候。殊更殊勝に覺え候とて、各袖を絞りけり。さて御身をば、何と申すぞと問へば、げん梅と申すなり。樊噲入道をば

げん松と申し、荒五郎入道をば、げん竹と申すなり。三人の僧、一同に手を打ちて、あら不思議や、上の字の變らぬ修行者よ。下の字は、松・竹・梅の字なり。さては我等、今世計りの契にてはなかりけり。譬ひ同じ智識のもとにて、心を紛はり候とも、かゝる事はよもあらじ。誠に有難き宿執共かな。此間此山にあり乍ら、かくとも申さで、過ぎつる事こそ口惜しけれ、今より後は、同心あるべき事に侍らん。返返も、皆世の中の有樣、前世の業因來り、迷となるなり。こゝを知るを善といひ、知らざるを凡夫と申す。位も樂も智慧も、皆過去の行なり。我が思ふ事はよし、人のはあしく候て、我身さへいやしく候などと、人每に申合へり。あらあだ事や、よくよく工夫ありて見候へ。世の中の理は、のふ智慧も又千兩の金も、其身のながらへ候程なり。一たび無情の風に赴かん時は、只一念の發心こそ、誠に入る道なれと、御心得候へと、申合はせけり。樊噲も、彼の女房に逢ひ奉らずば、いかてか發心あるべく候。色こそ變れ、何れも思寄らざる道心なり。あながちに惡をも嫌ふべからず。善の裏なり。戀をも嫌ふべからず、心の細きより起り候。かの一大事は、心

細く候はては、いかて御入り候べき。斯かる理、皆心を知らしめ、佛道ならしめ給はん方便なりとぞ侍りき。

三人法師 下 大尾

細々要記 一

内裏御造營

元弘四年正月廿九日、改元ありて、建武元年と號す。漢朝の年號を模さる。同じ頃都には、大内裏造營の御汰沙ある由云々。去年の冬より、内裏を、四方へ一町宛廣げられ、宮殿を造り添へらるゝと雖も、猶ほ分内狹く、朝廷の禮儀を調へられ難き故、詮議ありて、催さるゝ所なりと、安藝・周防料國に寄せられ、六十餘州所領の得分二十分一を懸召さるゝ由云々。

大内裏は、安元三年四月燒亡の後、造營の御沙汰なかりし所、兵亂の後、國費え民苦しむの時、大内裏を造らるゝ事然るべからずと、傾け申すの由風聞。二月三日、紙錢通用の儀仰出され、諸國の地頭御家人の所領に、課役を懸けらる。先例未だなきの所なり。

三月、諸國疫癘病死する者甚だ多し。四月、筑紫に規矩兵庫助・絲田左京亮といふ

平氏の一族、先亡の餘類を聚め、亂をなす由。同廿二日、西室僧正を取立て、大和・河内兩國の賊等蜂起、飯盛山に上り、城郭を營する由、南都騷動す。近邊甚だ物騷。

五月、河内守護楠判官正成、京都より歸國。四日、般若寺に宿す。其勢三百騎計り、四日の夜、般若寺へ使者を遣し音聞。明日出立の由云々。

五日辰の刻、楠判官、河州へ赴く。九日、飯盛山の城凶徒打出てたる由風聞。物騷なり。

十一日、飯盛山合戰ありと云々。京都に、今度の逆徒追伐の御祈に、安鎭の法を修せらるべき由。南都よりも僧徒を召さる。紫宸殿に於て修法せらる。道師竹内慈嚴僧正と云々。鎭壇應護の兵士は、結城左衞門尉・伯耆守・楠舍弟七郎・鹽冶判官等、四門の警衞に參る。南庭左右の陣は、千葉助・三浦介を召さるゝの所、兩人相手を嫌ひ申すに依り、已に法會の違亂に及ぶ。俄に大島讃岐守・細河阿波守兩人を召され、て參る由云々。同じ頃南海伊豫國に、平氏の餘類赤橋何某といふ者、逆亂を起し國中騷動する由。

五月、都には兵革の餘殃を銷せられんが爲め、眞言祕密を修せらるべき由にて、俄に神泉苑を造らると云々。

七月、飯盛山の凶徒、今に至つて伏せず、合戰あり。四國・九州も亦此の如しと云云。同中旬の頃より、内裏に、夜々怪鳥飛び來り、鳴く聲雲に響き、聞く人恐ると云云。兵革後、餘殃銷せざるか。

八月中旬、殿下の御内隱岐入道心寂が子左衞門尉入道弘寂、敕を承り、怪鳥を射る。彼鳥、紫宸殿の上に飛上り鳴く所を、十二束の流鏑矢を以て射る。當鳥は、仁壽殿の軒より、竹臺の前へ落つると云々。其狀かたち、頭は人の如く、身は蛇の形、觜曲つて齒生違ひ、兩の足けつめありて鋭く、羽先を伸べて、其長さ一丈八尺ありと云々。希有の鳥なり。廿二日、彼鳥を東山に埋めらるゝ由風聞。路次に於て、見物の爲め、貴賤群集すと云々。

西室僧正等討たる

十月朔日、飯盛山の城沒落。西室僧正を始め、凶徒悉く討捕らる。其外生捕數を知らず。申の刻、飯盛山の方、燒亡の烟立ち、既に落城たる由、確に云々の虚、成實り[illegible]

大塔宮幽せられ給ふ

州より歸院。具に聞く所相違なし。

十月廿九日、内裏に於て、大塔宮を執り奉り、馬場殿に押籠め奉る由云々。密に聞く、足利治部卿、讒言を構ふるが故と云々。又宮反逆の御企あるが故ともいふ。分明ならず。是に依つて世間物騷なり。

十一月上旬、大塔宮の候人三十餘人、密に誅せらるゝ由云々。同中旬、大塔宮を、細河陸奥守顯氏請取り奉り、關東へ御下向。左馬頭直義が鎌倉にあるに、預けらるべき由なりと云々。

大塔宮鎌倉に移され給ふ

同じ頃、筑紫伊豫の賊徒悉く敗北し誅に伏す。首共京都に上る由風聞。

大塔宮鎌倉へ御下向。二階堂谷に、土牢を塗り置き進らす。御介錯は、保藤卿の女新按察典侍一人より外、附副へ參らする人なき由云々。帝一旦の逆鱗に、鎌倉へ下し進らせらると雖も、是迄の沙汰あれど、叡慮遊さるゝを、直義日頃宿意あるを以て、禁籠し奉るの由風聞。

藤房遁世

去る十月五日、萬里小路中納言藤房卿、遁世出家。行方知らずと云々。藤房卿、連

連帝へ諫奏を上る事ありと雖も、御許容なきに依りて、身を退くと云々。年卅九歳と云々。父宣房卿、悲歎類なきの由云々。

建武二年夏六月末、西園寺大納言公宗卿、勅勘召捕らる。廿六日罪名を勘へ、八月二日誅せらると云々。幷に日野右兵衛佐氏光・文衡入道等、悉く誅せらると云々。文衡入道拷問せられ、白狀に及ぶ所、先亡平氏四郎左近大夫入道を、去々年より、西園寺の邸に隱し置かれ、今度謀叛を企て、帝を失ひ奉るべき種々の計略ありけるが、事露顯に及ぶと云々。

七月、信濃國より凶徒蜂起、鎌倉を襲ふの由風聞。世上物騷なり。北國にも、凶徒蜂起の由云々。天下彌〻穩ならず。信濃國の凶徒は、先亡相模入道の二男龜壽丸を、大將に取立て、諏訪上の宮祝部頼重・三浦介・葦名清久等、大名多く與して、數萬騎に及ぶと云々。

同中旬、信州の凶徒、上野國に打入り合戰。岩松左衛門尉・新田四郎等の官軍敗北。行方を知らずと云々。其後鎌倉より、澁川刑部大輔・小山秀朝等の兵數千人發向。

久米河女影が原にて合戰。官軍敗北して、小山・澁川を始め、一族家人數百人自害すと云々。信濃國の凶徒、愈々氣に乘りて、鎌倉に攻め上る間、直義以下馳せ向ひ、防ぎ戰ふと雖も、無勢の間叶ひ難く、鎌倉を出て、成良親王を具し奉り、京都へ上る。直義、武藏國へ打出づる所に、猶ほ凶徒攻め懸る故、直義が一族細河四郎賴貞入道返し戰ひ、家人百餘人と共に討死。此間に、成良親王竝に直義、京都へ落ち上ると云云。同下旬、龜壽丸、相模二郎時行と號する由。鎌倉へ打入り、關東の侍幷に在國の輩は、皆鎌倉に附從ふの間、天下又打返して見ゆる程に、京都は勿論、諸國共騷動斜ならず云々。

八月二日、足利宰相尊氏卿、相模二郎追伐の敕命を蒙り、海道に下向。其勢五百騎に足らず、無勢の由、人怪しみ沙汰すと云々。今度東八箇國管領を許され、時行誅伐の後は、征夷將軍に補せらるべき由、敕約ありと云々。此兩條は、天下治亂の端なり。左右なく敕許の事、如何あるべきならんと、世上傾け申すの由、風聞ありと云々。

尊氏東八箇の管領に補せらる

同日、今度凶徒誅伐の御禱として、西大寺に於て、一日百座の大威德明王の法を修行。其後聞、其日鎌倉より凶徒數萬人、京都へ攻め上るべき用意をなす所、俄に大暴風吹き、家々を吹き壞るの間、天災を遁れん爲め、近邊に宿る軍士、大佛殿の中へ逃げ入るの所、佛殿の棟二つに折倒れけるの間、集り居る所の軍士數百人、壓に打たれ死すると云々。則ち大威德の法行れし日なり。尊氏卿、東八箇國管領の事敕許なるの間、上野の國も、尊氏卿分内なり。上野は、去々年既に新田左兵衛督に賜ふの所なる故、義貞、帝を恨み奉り、野心ありと風聞。

八月八日、遠江橋本の宿に於て、尊氏卿の勢、凶徒と合戰。終日凶徒敗北すと云々。同十八日、相模河に於て、合戰終日と云々。官軍今河式部大輔入道父子・小笠原七郎父子以下數百人、討死したりと雖も、凶徒終に沒落すと云々。十九日、鎌倉合戰、凶徒敗北。諏訪前祝部賴重を始め、宗徒の者數十人、大御堂の内に入りて自害、滅亡すと云々。其外生捕降參の者、數を知らずと云々。去ぬる七月下旬より、八月十九日に至り、二十日餘り、彼相模二郎、二度父祖の舊里に立歸ると雖も、程なく沒

落。今度鎌倉に打入る。凶徒の中、曾て輔佐古老の者なく、大將時行、未だ幼弱なり。其外平氏の門葉、去々年偶々身命を助かり、諸寺に於て、小僧喝食となりたる者、俄に還俗すと雖も、烏合の衆、其功をなさゞりしと云々。

尊氏卿、鎌倉に居らせられ、威勢甚しと云々。風聞に云、尊氏卿、謀叛の企頻なる由云々。

九月中旬、尊氏卿隱謀の企ある由、風聞頻なり。十九日、中院頭中將具光朝臣、敕使として、鎌倉に下向と云々。是れ今度東國の逆亂靜謐の條、叡感あり。但し軍兵恩賞に於ては、京都に於て、綸旨を以て充行はるべきなり。尊氏卿は、先づ早々歸洛あるべき由、仰下さるゝの由云々。

十月中旬、敕使具光、歸洛さるれども、尊氏上洛せず。巷說種々なり。

十一月上旬、尊氏卿の奏狀、京都に着。同日義貞朝臣も、奏狀を捧げたるの由云々。其意趣、互に從來の鬱恨を以て、彼を誅伐し、泰平を致すべき由申すと云々。

同中旬、大塔宮の御介錯に、附き進らせられし新按察典侍、歸洛して申す。去ぬる七

大塔宮討たれ給ふ

月、相模二郎以下、鎌倉へ打入るの時、直義が計ひにて、淵部何某、宮を害し奉るの由、具に奏聞。是に依つて、尊氏卿兄弟の隱謀疑なきに極まり、急に討手を下さるべき由、京都騷動すと云々。世上物騷し。

尊氏叛す

是に依つて、京都伺候の人々の親類代官は、京都へ上り、尊氏卿と親しき輩は、又京より逃げ下るの間、海道上下の輩、俄に織綺の如しと云々。

同十九日、中務卿親王を、東國の管領になし奉り、公卿・殿上人其數を知らず。武家の大將は、新田左兵衞督幷に一族在京の武士、さるべき侍、西國・畿内の勢數萬人、東征すと云々。同日義貞朝臣命を受け、舟田入道以下を、尊氏卿の宿所二條高倉へ遣し、燒拂ふと云々。

同廿一日、搦手の大將軍大智院の宮・彈正尹宮・左衞門督實世卿、武士は江田修理亮・大館左馬助以下、中國・九州の勢數千人、東山道より發向すと云々。

尊氏義貞合戰

十一月廿五日、節度使義貞朝臣の官軍、參河國矢矧に着。既に昨廿四日、鎌倉より、直義を大將にて數萬人、矢矧の東の宿に着くの間、今日東國の軍士河を渡し、合戰

數刻。直義が兵士許多討死し、終に敗北すと云々。
同廿八日、鷲坂に於て合戰。直義が軍敗北すと云々。
十二月五日、手越に於て、合戰終日。夜に入り、東軍敗北すと云々。度々の合戰、官軍勝利たるの間、降參の人々數を知らずと云々。
十二月上旬、北國・中國・四國・九州・凶徒蜂起の由、國々の早馬、京都へ連綿たる由騷動す。世上物騷いふ計りなしと云々。
十二月十一日、箱根竹の下合戰。箱根の追手官軍、利ありと雖も搦手竹の下の戰、勝利を失ひ、公家の人々兩三人討死。敗軍の士、海道を引退くの間、追手の勢も悉く敗北し、義貞朝臣以下、尾張國迄引退くの由云々。是に依つて、京都愈々騷動。大和・河内よりも、軍士多く上洛す。物騷いふ計りなし。
同十九日、西國の動亂、以ての外の間、義貞朝臣を召還さるべき由にて、敕使を立てらるゝと云々。
廿五日、義貞朝臣以下、京都に歸參すと云々。

同日、楠判官正成、河内に歸國。南都を經て、廿六日、赤坂に至ると云々。

廿九日、楠判官又上洛。昨廿八日より、米穀數百石、河州より、江州坂本へ運送するの由。人馬絡繹たりと云々。東國の凶徒襲來の間、京都合戰あるべくや、其兵糧用意の爲めと風聞すと雖も、其意を知らず。今日、南都へ敕使下向。朝敵誅伐の御祈を仰下さる。

今日聞、西國の凶徒、以ての外多勢、細河師定禪大將となり、赤松月潭入道・同子息等以下、幷四國・中國の勢一圓に數萬人、既に兵庫明石の邊に發向すと云々。

又聞、丹波・但馬等の凶徒數千人發向。既に和久の口邊に至ると云々。

北國の凶徒、既に以の外、悉く入洛すべき由。日本國中、蜂起せざる所なきの由風聞。天地も打返すべき如く、南都邊に至る迄、物騷いふ計りなし。まして京都の騷動、言語道斷と云々。

諸國凶徒蜂起

又聞、諸國蜂起の沙汰、以の外の間、京都の軍勢過半沒落。凶徒に加はるかと云々。

宇治・勢田・大渡・山崎等に於て、防戰あるべき由、楠正成・伯耆守・結田入道・同長門守

等、晦日京都より發向、其用意夥しと云々。

山門より、道場坊以下數百人、江州へ發向すと云々。是れ東國の凶徒を支へん爲なりと云々。伊岐代の宮を、俄に城に構へて籠ると云々。

丹波路の凶徒、以の外の由。二條大納言殿、數百騎を率し、發向せらると云々。

細々要記一終

細々要記　二

建武三年正月、大亂に依つて、内裏に、節會·朝拜行はざるの由云々。

京都の騷動、言語に絶するの由云々。

同七日、尊氏卿兄弟、東國の軍士を率ゐて、江州に着陣。其勢數十萬人。山野一遍に充滿すと云々。

同日、四國·西國の凶徒、攝州に至る。其勢又數萬人と云々。洛中愈〻騷動。人馬東西に馳違ひ、物騷いふ計りなしと云々。

今日、南都よりも、衆徒三百人、京都へ進らす。兼日召さるゝに依つてなり。すぐに山崎の固めに向ふの由云々。

平等院燒亡

今日申の刻、宇治の在家、悉く燒亡。餘烟平等院に移りて、佛閣·寶藏燒失、烟蒼天に充つ。後に聞く、楠判官、宇治の固めとして、凶徒に心安く陣取らせじとて、火を

かけたりと云々。

同九日、山陰道の凶徒數千人、大枝山に陣する所、官軍江田行義以下、馳向つて打破る。凶徒敗北。大將久下五郎以下數千人を討取り、生捕數を知らずと云々。

同十日、諸方の凶徒、同時に襲來し、宇治・勢田・大渡・山崎等合戰。午の刻、山崎の官軍戰に伏して、凶徒亂入の間、諸方の官軍、攻口を捨てゝ歸洛。淀に於て又合戰數刻、官軍敗北、討死多しと云々。

同日、主上山門へ臨幸。公家・武家悉く供奉。東坂本に皇居と云々。

同日酉の刻、內裏炎上。其外公武の第宅民屋に至る迄燒亡。餘煙空に滿ち、火の光天を焚き、世上物騷いふ計りなし。

同日、結城白河判官親光、京都東洞院七條に於て討死すと云々。其相手大友左近將監同時に討たると云々。

同十二日、南都より參る所の兵士歸寺。手負百餘人、討死の輩卅七人、其餘恙なし。

同十四日、陸奧國より、親王を先立て奉り、陸奧鎮守府將軍顯家卿、此亂を聞き、陸

奥・出羽の軍兵數萬人を率して、今日東坂本に着くの由。官軍大に力を得るの由云云。

同日、江州觀音寺の城合戰。城中の凶徒沒落。行方を知らず。官軍大館中務大輔幸氏が軍士、之を攻め破ると云々。

同日、尊氏卿の命を受け、細河律師・同刑部大輔賴春・陸奥守顯氏以下數萬人、江州へ發向、三井寺に陣す。彼寺の衆徒、凶徒に同意かと云々。

同十六日、官軍數萬人、三井寺を攻めて合戰。細河が軍敗れて、京都へ逃げ上ると云々。其刻官軍、三井寺を燒拂ひ、諸堂院々悉く燒失すと云々。

同日、官軍京都へ攻上り、二條河原將軍塚の麓・眞如堂邊、所々數刻合戰ありと云々。

同二十日、去年東山道の搦手として、東國へ下向ありける大智院宮・彈正尹の宮・使別堂實世卿以下、軍兵數萬人を率して、申の刻東坂本に着すと云々。官軍彌〻勢を得ると云々。

同廿七日、官軍數萬人、西坂より下り、或は大津を經て、京都へ攻入り、合戰數刻。京

顯家義貞等尊氏を破る

尊氏西國へ落つ

方敗軍し、上杉兵庫入道・三浦因幡守・二階堂入道を始め、宗徒の者數百人討死すと云々。

同廿九日、官軍顯家卿・義貞朝臣・楠・結城・伯耆以下數萬人、西坂より下り、京都へ攻め入り合戰。尊氏卿敗北、行方を知らず。凶徒悉く沒落し、死人生捕數を知らずと云々。

二月三日、尊氏卿、攝州兵庫に落止り、敗軍の士を集めて、又京都へ攻め上るべき由云々。

同五日、官軍顯家卿・義貞朝臣兩大將、數萬人を率し、西國に下向すと云々。

同六日、豐島河原に於て合戰あり、數刻に及んて、尊氏卿敗北。又兵庫に陣すと云云。

同八日、兵庫湊河の邊に於て、又合戰數刻。尊氏が軍敗れ、船に乘りて西國へ沒落し、死人生捕數を知らず。其上降人數千人に及ぶの由。

されども廿九日、尊氏卿、京都を沒落の間、去ぬる四日、主上、東坂本より還幸。花

山院を皇居になさるゝの由云々。是れ内裏兵火に依つてなりと云々。同十一日、顯家卿·義貞朝臣歸洛。其勢數萬人、又今度降人の輩一萬人を相具すと云々。同十二日、臨時の除目を行はれ、義貞朝臣正四位上に敍し、左近中將に任ず。今度都鄙數箇度の戰、勳功の賞たりと云々。

同廿九日、改元、延元と號す。近日朝廷、已に尊氏卿の爲めに傾けられんと欲する所に、程なく靜謐の天下に歸す。京都は勿論、諸國の人民迄も、安堵の思をなしぬと云々。

同日顯家卿、使別當に補し、右衞門督を兼ぬ。又新王を守護し奉り、陸奥へ歸國し給ふと云々。今度本の兩國に、常陸·下野を賜はりて下向と云々。是れ尊氏卿、筑紫へ落行き、少貳·大友を味方とし、菊池と合戰ありけるに、菊池打負けて引退くの間、九州二島、悉く尊氏卿に靡き從ふ。其機に乘じ、中國の凶徒、雲霞の如く蜂起するの由、諸方より京都へ急を告ぐるの間、東國の事も覺束なしとて、顯家卿を歸し遣さるゝと云々。世上物騷なり。

同日、義貞朝臣に、中國十六箇國の管領をゆるされ、尊氏卿追討の宣旨を下さると云々。

三月四五日の頃、京都より、江田兵部大輔行義・大舘左馬助氏明二人大將として、數千騎官軍を率し、西國へ下向すと云々。義貞朝臣、西國に發向せらるべきの所、此頃瘧病に犯され、煩しきの間、先づ軍勢を差下さるゝと云々。

同七日八日の頃、播州室山に於て、官軍と赤松合戰。官軍勝利と云々。

同十四日、官軍の大將義貞朝臣、數萬騎を率し、西國へ發向せらると云々。

同廿五日、官軍、赤松が籠りたる白旗の城を取圍みて攻むると云々。赤松の城堅固にして、落ち難き故、四月三日、官軍、勢を分けて、船坂より、備前・備中へ發向すと云々。

同十九日、船坂山合戰。凶徒敗北し、逃げ走るの間、官軍三手に分れて、備前・備中・美作三箇國に發向して、諸城を攻むると云々。

四月下旬、尊氏卿、九州を討從へ、數十萬人の軍兵を率し、攻め上ると云々。是に依

後伏見天皇崩御

湊河合戰　正成戰死

つて又京都物騒し、去ぬる六日、持明院法皇崩御。後伏見院と申し奉る由云々。

此頃聞く、後伏見院の御子、今は先帝新院と申し奉るが、忍んで尊氏卿の許へ、綸旨をなさる。早く凶徒を退け、君を本位に即け奉るべしと、尊氏、九州にて彼綸旨を拜し、悦んで西國の勢を引具して攻め上ると云々。

五月五日、尊氏卿・直義の軍勢、備後迄攻め上るの由。京都騒動す。

同十六日、備中國福山の城合戰。

同十八日、官軍備前・美作の陣を拂ひ、播磨に引退く由云々。

同廿三日、官軍播磨を引いて、兵庫に退くの由、早馬京都へ着。是に依つて、京都愈々騒動すと云々。

同日、楠判官正成、敕を受け、兵庫へ下向。其勢五百騎計りと云々。

同廿五日、兵庫湊河合戰數刻、官軍敗北。楠判官武威を振つて討死すと云々。義貞朝臣を始め、其外官軍、丹波路より京都へ逃げ上ると云々。京都の騒動いふ計りなしと云々。

山門へ臨幸

尊氏直義京に入る

同廿七日、主上、かさねて山門へ臨幸。公家・武家悉く供奉して、東坂本へ落つると云々。

同卅日、尊氏卿・直義朝臣、數十萬騎を率し、京都に入り、東寺に陣すと云々。

同日、新院・東寺へ潜幸。日野資名入道・三條實繼朝臣等、供奉と云々。或は云、廿七日潜幸すと云々。本院・春宮は、二十七日、主上と同時に、東坂本へ御幸なりぬと云々。

新院、東寺本堂を皇居とす。久我内大臣を始め、落留まる所の人々、東寺へ參ると云々。卽ち一方の皇統を立てらると云々。

六月四日、尊氏卿、山門を攻むべき爲め、數十萬人、二條河原に於て着到をつけ、勢を揃ふと云々。其後三手に分れ、東西より山門を打圍んで攻むると云々。

同七日、山門西坂合戰數刻。千種宰相忠顯卿・坊門正忠朝臣以下討死。既に攻め破らるべきの所、義貞朝臣、東坂本より馳付き、官軍戰ひ強く、寄手敗北。死人數千人に及ぶと云々。

同九日、東坂本合戰。寄手聊か利を失ひ、本陣へ退く。一時計りの合戰と雖も、死人數を知らずと云々。

同十六日、西坂本合戰。寄手利を失ひ退くと云々。

同二十日、東西の坂本、同時に合戰。寄手敗北。悉く退散す。死人生捕數を知らず。西坂寄手の大將高豐前守生捕られ、義貞朝臣命じて、重衡卿の例に任せ、山門の大衆申請け、辛崎の濱に於て首を刎ぬると云々。

同晦日、官軍數萬人、西坂より京都へ攻入り合戰。官軍敗北すと云々。

七月十八日、官軍又京都へ攻入り合戰數刻。官軍敗北。討死數百人に及ぶと云々。

同廿二日、山門の牒狀、南都に到る。依つて大衆蜂起し僉議。卽ち返牒を送る。大乘院法印草す。

興福寺衆徒牒ニ延暦寺衙一。

來牒一紙、被レ載ニ尊氏・直義等征伐一事。

牒、夫觀行五品之居ニ勝位一也。學ニ圓頓於河淮之流一、等覺無垢之円ニ上果一也、敷ニ

了義於印度之境㆒。是以隋高祖玄文玉泉水淸、唐文皇舊神藻花風芳、遂使㆓一夏敷揚之奧頤㆒、遙傳㆓于叡山㆒。三國相承之眞宗、獨留㆓于吾寺㆒以降、時及㆓千祀㆒軌垂㆓百王㆒。寔是弘㆓佛法㆒之宏規、護㆓皇基㆒之洪緖也。彼尊氏・直義等、遠蠻之亡虜、東夷之降率也。雖㆑非㆓鷹犬之才㆒、屢忝㆓爪牙之任㆒、乍忘㆓朝奬㆒、還挿㆓野心㆒、討㆓楊氏㆒兮爲㆑辭、在㆓藩溪㆒兮作㆑逆、劫㆓略州縣㆒掠㆓虜吏民㆒、帝都悉燒殘、佛閣多魔滅。軼㆔赤眉之入㆓咸陽㆒超㆔黃巾之寇㆓河北㆒。濫吹之甚自㆑古未㆑聞。天誅所㆑覃、冥譴何逃。因㆑茲去春之初、鋤㆓耰棘矜㆒、一摧㆓關中㆒焉。匹馬隻輪、纔遁㆓海西㆒矣。今聚㆓其敗軍㆒、擁㆓彼餘衆㆒、不㆑恐㆓雷霆之威㆒、重待㆓斧鉞之罪㆒、六軍徘徊、群兇益振。是則孟洋再駕之役、獨夫所㆑亡也。夫違㆑天者有㆓大咎㆒、失㆑道者其助寡。積暴之勢、豈又能久乎。方今迴㆓皇輿於花洛之外㆒、張㆓軍幕於楢溪之邊㆒、三千群侶定合㆓懇祈之掌㆒、七社靈神鎭迴㆓擁護之眸㆒者歟。彼代宗之屯㆓長安㆒也、觀㆓師於香積寺之中㆒、勾踐之在㆓會稽㆒也、陣㆓兵天台山之北㆒、事協㆓先蹤㆒寧非㆓佳模㆒乎。爰當寺衆徒等、自㆓翠華北幸㆒、抽㆓丹棘於中庭㆒、專祈㆓寶祚之長久㆒、只期㆓妖孽之滅亡㆒、精誠無㆑貳、冥助豈空乎。就中寺邊之若輩、

國中之勇士、頻有下加二官軍一之志上、屢運下退二兇賊一之策上。然而南北境阻、風馬之蹄不レ及、山川地殊、雲鳥之勢難レ接矣。矧亦賊徒構レ謀、寇迫二松璫之下一、入心未レ和。禍在二蕭牆之中一、前對二燕然之虜一、後有二宛城之軍一。攻守之間、進退失レ度。但綸命屢降、牒狀難レ默。速率二鋭師一、早征二兇徒一。今以レ狀牒、牒到準レ狀。故牒。

廿六日、軍士五百人を發し、八幡に陣す。四條中納言隆資卿、山門より八幡に至り、大將軍たり。南山城の軍勢馳せ集り、數千人に及ぶ。是れ併ら南都與力の餘勢たるかと云々。

八月十三日、八幡の勢、京都へ發向し、東寺を攻めて合戰。味方敗北して退くと云云。

名和長年戰死

同日、官軍、西坂より下り、京中合戰數刻。官軍敗北。伯耆守并に一族數十人討死す。其外手負討死數を知らずと云々

十四日、四條中納言、八幡より退散せらるゝに依つて、南都の軍士も退き、酉の刻歸參。手負五十餘人・死人廿三人なり。

廿二日、尊氏卿より使者參着。種々申さるゝ旨あり。且つ數箇所の庄園を寄附あり。依つて山門合體をひかるべし。武家與力の約をなす。衆議一決。
九月十七日、江州野路・篠原合戰。山門の大衆多く討取られ、敗北すと云々。
同二十日、重ねて山門より數十人を遣し、江州四十九院合戰。大衆等敗北。數百人討死すと云々。
同廿九日、山門の衆徒、官軍數百人相雜り、重ねて三大寺合戰。官軍又敗北。死人數十人と云々。
十月九日、尊氏卿より、內々山門の主上へ申入らるゝ旨あるに依り、今日京都へ還幸。供奉の公家・武家數百人と云々。然るに新田の人々支へ申すに依り御延引。
同十日、主上愈〻京都へ還幸。春宮恒良幷尊良親王・義貞兄弟等、北國の方に沒落。併し其勢數千騎と云々。妙法院宮は、東國へ御沒落と云々。
同十二日、公家武家の落人、多く南都を經て、河內へ赴くと云々。
主上還幸の後、花山院へ入り奉り、四門を閉づ。武家より兵士を遣し警固し、出入

を止む。還幸供奉の公武共大名共へ召預けられ難く、禁錮すと云々。

十一月廿七日、聞く、去ぬる十月、春宮幷義貞朝臣等、越前に到り、金崎の城に入る

諸國の將軍方數萬人、金崎を打圍んで攻むると云々。

十二月上旬、北畠大納言入道、伊勢の國に於て義兵を揚げ、國中を打靡かす。是に

依つて諸國の宮方、又蜂起すと云々。

去ぬる廿五日、都には、尊氏卿、參議右兵衞督を辭し、大納言に任ずといふ。

十二月廿二日、先帝、花山院を忍び出でさせ給ひ、吉野へ入御。其路南都を經給ふ

由。知る者なし。吉水院を皇居とす。近國武士馳せ參じ、其勢雲霞の如しと云々。

京都には、延元の號を止めて、建武の曆を用ふ。

建武四年、先帝は吉野に御座。延元二年を用ひらると云々。

三月六日、越前金崎城沒落。尊良親王及新田越後守義顯・頭大夫行房以下、數百人

自害。東宮は京都へ還幸。則ち牢の御所を作り、推籠め奉ると云々。

四月五日、近衞關白經忠公、吉野へ參り候。其外公卿・殿上人、追々伺候せらると

云々。
九月十一日、義貞朝臣兄弟、又北國へ打出て、所々合戰ありと云々。
同じ頃、諸國の宮方蜂起。國々合戰。奥州國司北畠顯家卿、又親王を先立て奉り、數萬人攻上ると云々。武家騷動すと云々。顯家卿の官軍、鎌倉へ攻上り、上野國利根河・武藏國所々合戰。武家方敗北すと云々。其後官軍、鎌倉へ攻入るに依つて、尊氏卿の長男義詮を、幼弱の大將として、桃井・上杉・斯波等以下數千人、發向して戰ふと云々。
建武五年、南方延元三年正月、鎌倉合戰。武家敗北。義詮以下行方を知らず。顯家卿の官軍、海道を攻め上ると云々。京都物騷し。
同廿四日、濃州青野原合戰と云々。
二月四日、顯家卿の入洛を支へん爲め、京都の勢數萬人、濃州に發向すと云々。
同十三日、顯家卿の官軍、伊勢・伊賀を經て、今日南都に到着。東大寺大佛殿を、本陣とせらる。其勢皆邊鄙の夷、狼藉いふ計りなし。顯家卿の官軍、近日京都へ攻上

顯家敗軍

顯家戰死

るべき由、其用意頻りなり。

同廿九日夜、京都より、桃井播磨守直常等以下數千人、顯家卿の陣を襲うて、合戰鷄鳴に及ぶ。顯家卿敗北。官軍八方に退散。中納言光繼卿等以下、死人數百人、生捕數を知らず。親王は吉野へ入御。顯家卿は河内へ到ると云々。

三月五日、顯家卿・舍弟顯信朝臣以下、敗軍を集め、八幡へ出張し栖籠る。京勢又數萬人、一圓に八幡を圍んで戰ふと云々。

四月二十日、顯家卿以下、天王寺に陣して、京都を攻めんと欲する由云々。

五月十八日、京勢數萬人、天王寺へ押寄せ、合戰數刻。官軍敗北。

同廿二日、和泉國堺浦合戰數刻。官軍敗北。顯家卿討死。其外從兵悉く死すと云云。吉野帝を始め奉り、人々力を落し、氣を失ふと云々。

此頃、義貞朝臣、北國所々の城を攻め墜し、其勢又數萬人に及び、勢遠近に振ふと云々。

七月、義貞朝臣の官軍數萬人、山門に登り、京都を攻むべき爲め、越前を發し上洛す

と云々。

同十一日、八幡の社壇、兵火の爲め燒失。官軍、兵糧を社壇に籠置くの間、悉く燒失。力を失ひ、其夜退散して、河內へ歸ると云々。

閏七月、〔脫字ア ルカ〕越前國足羽の城度々合戰。二日、足羽合戰。官軍の大將義貞朝臣、流矢の爲め射られて死すと云々。是に依つて、官軍悉く敗北すと云々。

顯家卿・義貞朝臣、討たれ給ふの間、南方の人々氣を失ふと云々。

九月、義良親王を輔佐し奉り、春日少將顯信朝臣・新田左兵衞佐・相模左馬權頭・結城入道忠・宇都宮公綱等、東國に下向として、今日南都を經て、伊賀路に赴く。

同十八日、妙法院宮・北畠一品入道、同じく東國に赴く。午の刻、南都を經て、伊賀路に至る。兩日發向の官軍、數千人に及ぶ。

九月廿五日、東國下向の官軍、遠江天龍灘に於て、難風に遇ひ、數多の船漂沒す。親王の御船は、勢州に歸着。北畠入道の船は、常陸の國に到ると云々。其外行方を知らずと云々。

十月三日、親王吉野に還御。今日南都を經給ふ。春日少將以下供奉。其勢二百騎計り云々。

去る八月廿八日、京都改元ありて、曆應元年と號すと云々。

今度の除目に、尊氏卿、上首十一人を超え、正二位征夷大將軍に補す。直義朝臣、從三位に敍し、相模守を兼ぬと云々。

細々要記　二　終

細々要記 三

暦應二年、南方延元四年、北畠顯能朝臣、去冬より伊勢國にて義兵を擧げ、武家と合戰、數度に及ぶと云々。

二月、中務卿親王の若宮を守護し、北畠顯信卿、重ねて奥州へ下向。今日南都へ着、東大寺に宿。九日辰刻、伊賀路に赴く。其勢五百騎計りと云々。

七月十三日、恒良親王、京都に於て薨ず。武家毒殺し奉ると云々。

同廿一日、成良親王、京都に於て薨ず。

八月九日より、吉野の帝御不豫と云々。

同十六日の夜、吉野の帝崩御。壽五十二歳と云々。

十月五日、義良親王踐祚。先帝第八の宮。御母は准三后藤原廉子と云々。十一月上旬、先帝に尊號を上り、後醍醐天皇と申し奉ると云々。諸國の官軍へ、遺敕の綸

北畠顯家擧兵

恒良親王薨去

成良親王薨去

後醍醐天皇崩御

後村上天皇即位

旨を下され、忠戰を勵むべき由、仰下さると云々。

南方改元あつて、興國元年とすと云々。

脇屋義助兵を擧ぐ

同月、脇屋義助、北國に義兵を揚げて、黑丸の城を攻む。足利高經敗れて、加賀國に退く。是に依つて京都より、高上野介師春・土岐頼遠・佐々木氏頼・鹽冶高貞等以下數萬人、北國へ發向すと云々。其刻、不慮の事あつて、鹽冶高貞・高師直が爲めに害さると云々。

暦應三年、南方興國二年二月、北國所々合戰。官軍敗北すと云々。

職原抄を上る

北畠一品入道、常陸國にあつて、職原抄二卷を作り、吉野の新帝へ獻ずと云々。其書百官諸位職、掌を指すが如し。末代の龜鑑たるべしと風聞。

四月、脇屋義助、北國の合戰に打負け、微服潛行、吉野に至ると云々。

同中旬、義助朝臣敕を受け、紀州より船に駕し、四國へ渡り、其國々を平げんとすと云々。

義助病死

五月、義助朝臣、伊豫國府に於て病死すと云々。同月、四國所々合戰。官軍敗北。大

館左馬介等戰死すと云々。

十月、佐々木入道道譽、妙法院宮へ押寄せ、大狼藉、前代未聞と云々。山門より訴へ申すに依つて、道譽、上總國山邊へ流刑せらると云々。

此頃、北畠一品入道幷に春日中將、常陸國にあつて、武家方と合戰度々に及ぶ。勝負區々と云々。

暦應四年、南方興國二年、去冬より勢州に於て、國司顯能朝臣と武家方、度々合戰。勝負區々と云々。

常陸・奥州の合戰、只今に至り勝負區々と云々。

暦應五年、南方興國三年春、京都疫病家々に滿ちて、死する者數を知らず。其頃吉野先帝の御廟より、夜々車輪の如き光物、京都へ飛渡ると、風說巷に滿つ。

九月三日、伏見院の御忌日御佛事の爲め、持明院上皇、彼御舊跡伏見殿へ御幸。夜に入つて還幸の所、土岐彈正賴遠、二階堂下野守行春、五條東洞院にて參會。恐るる儀もなく、狼藉に及び、御車に矢を射懸け、前代未聞の所行と云々。後に狼藉の

樣露顯して、賴遠、六條河原にて誅せらる。●行春は、遠流に處せらると云々。去ぬる四月、京都改元、元を康永と改むと云々。

康永二年春、常陸・奥州の合戰、今に勝負區々と云々。北畠一品入道は、常陸國關の城にあり。親王幷顯信卿等は、下妻の城にありと云々。

去冬より、吉野先帝御追福として、武家より、夢窻疎石を開基として、龜山帝の舊跡に寺を建立す。安藝・周防を料國に寄せて、經營すと云々。

康永三年、南方興國五年、常陸・奥州の合戰。武家方勝利。官軍多く武家に屬すと云々。康永四年、南方興國六年、武家より經營する所の天龍寺の伽藍、功畢つて、八月、上皇臨幸あらせられ、供養を遂げらるべしと云々。是に依つて山門憤り、奏狀を捧げ、天龍寺を廢し、勅供養を止めんとすと云々。公家より、其趣武家へ仰下さるゝの所、武家、以の外に奏し申すに依り、款狀徒になり、山門面目を失ふ。是に依つて七月廿三日、日吉聖眞子の神輿、未の刻大衆社頭に群下し、山上に上げ奉る。寅の刻、八王子十禪師の神輿を、山上に上げ奉る。八月六日酉の刻、殘る所の神輿四基、山下に上げ

奉る。

同十七日、三百七十箇所の末寺・末社へ、觸れ送ると云々。同日牒狀南都へ到來す。是に依つて、院司の公卿・藤氏の雄臣、歎き申さるゝ旨あるに依り、諸事をまげて、敕願の儀を停止せられ、御結緣の爲め、翌日御佛事を修し、宸臨すべきの旨仰下さるゝに依り、山門是に靜まり、神輿歸座ありと云々。

八月廿九日、將軍左兵衞督、天龍寺供養の爲め行向はる。天下の壯觀と云々。仍つて見物の爲め、貴賤群集すと云々。

事々遲々懈怠、既に酉の刻に及ぶ。申の刻、侍所山名伊豆前司某、折烏帽子鎧を着け、前行小舍人と稱する者、或は腹卷をつけ、兵杖を持ち、弓箭に及ばず。先行路頭に呵叱。其勢二三百騎か。其跡先陣の隨兵十二騎、次に將軍の車、八葉狩衣の牛飼之を遣る。直垂牛飼兩三人相副へ、大番笠持例の如し。又小雜色六七人、次に布衣の者少々あり。次に左兵衞督の車、布衣上括の五位兩三人、次に武藏守師直以下、布衣半靴の輩十騎計り、次に後陣の隨兵千騎計り、次に直垂の輩數百騎、然るべき

風雅集を撰す

輩評定衆等、此内にありと云々。
同晦日、上皇、天龍寺に臨幸。今日別に法會取行ふ。宸欣ありと云々。今日も、見物の貴賤群集すと云々。
九月、京都に改元あり、貞和と號す。備前國の住人兒島高德、密に京都へ上り、官軍與力の兵を集め、將軍左兵衛督を夜討せんとす。事顯れて、武家の軍士襲ひ闘み、高德等北國へ逃げ走ると云々。
貞和二年、興國七年春、京都に於て、風雅集を撰すと云々。
四月、南方改元ありて、正平元年とすと云々。
貞和三年、南方正平二年、春、奥州に於て、官軍・武家方合戰、度々と云々。夏に至り官軍敗北すと云々。
貞和四年、去年の秋より、宮方東條に蜂起。吉野軍勢、河内に於て合戰度々。官軍勝利と云々。
故楠判官正成が子正行、父の遺訓に違はず、宮方無二の忠功を勵まし、合戰頗る勇

威ありと云々。
八月十五日、正行等以下、泉州堺に陣すと云々。
同十九日、京都より、細河陸奥守等以下數千人、河内に發向。藤井寺に陣す。其夜正行等不意に寄せ來り合戰。京勢敗北し、死人數を知らず。
九月三日、正行以下、密に上洛し、將軍左兵衞督の館を俄に攻む。防ぎ戰ふこと能はず、將軍左兵衞督免れて、江州に退去。是に依つて正行、河内へ歸ると云々。
十一月廿五日、重ねて京都より、山名伊豆守時氏・細河陸奥守顯氏等、數千人を率し住吉天王寺に陣す。南方へ發向すべしと云々。
同廿六日、住吉合戰數刻、京勢敗北。宗徒の者多く死し、生捕數を知らず。山名・細河等も、疵を被ると云々。
去ぬる十月廿七日、京都には、興仁親王踐祚。
十二月十四日、京都より武藏守師直・越後守師泰、數萬人を率し、南方へ發向。八幡・山崎に陣すと云々。

正行戰死

貞和五年、南方正平四年、正月五日、四條繩手に於て、師直と楠正行と合戰、數刻に及ぶ。正行等、兵術を以て武威を勵まし、大軍を打破り、師直殆ど危しと云々。諸卒死する者數を知らず。されども師直能く拒ぎ、楠が軍を散し、正行兄弟幷一族數十人、同時に戰死すと云々。

越後守師泰、楠が城へ押寄せ合戰。正行が弟正儀、殘兵を發し合戰。同中旬、師直平田の莊に入る。廿四日、橘寺に移る。是れ吉野發向の爲めなりと云々。廿六日、師直數萬人を率して、吉野の宮を攻む。帝を始め奉り、女院・皇后・卿相雲客、悉く歩行にて、山深く落ちさせ給ふの由云々。師直、則ち皇居に火を放つ。餘焔藏王堂に移り、笠鳥居・金の鳥居・二階門・廻廊・神樂屋に至る迄、一時の灰燼となる。又驅け奉り兵糧を追捕し、太子御廟・太子御體を破損し、廟中沙金悉く捜し取るの由。言語道斷の事なりと云々。

五月廿七八日、將軍の長男右兵衞佐直冬、長門國に發向。彼國に於て、中國の成敗を司らしむべしと云々。

八月、左兵衞督と師直隙あり。是に依つて洛中騷動、いふ計りなしと云々。去ぬる六月、太白歳辰星三星相犯。閏六月三日、天晴、雲間光あり、雷の如し。同日辰の刻より、酉の刻に至り、八幡の寶前、鳴動すと云々。
直義卿・師直隙ありて、合戰あるべき由風聞。京都以の外騷動すと云々。
同十三日、師直以下數萬人、將軍の居所を圍む。是れ直義卿、夜前より彼館へおはするに依りてなりと云々。
十四日、再往の問答に及んで、師直が所存の如くなりて、事の張本たるに依り、上椙伊豆守重能・畠山大藏少輔直宗二人、流刑に處せらる。師直圍を解いて、群臣和談すと云々。
十月廿三日、左馬頭義詮將軍の長男、鎌倉より上洛。直義卿の政務に代り、天下の權を執らん爲めと云々。見物の爲め、貴賤洛外に群集。其行粧、美を盡すと云々。則ち三條高倉の直義卿の宿所へ入り、住せらると云々。
十二月八日、直義卿出家すと云々。

廿六日、與仁卽位。大禮を行はると云々。

貞和六年、（南方正平五年）二月廿七日、京都改元、觀應元年とすと云々。右兵衛佐直冬、筑紫に於て蜂起。是れ直義に應じて、兵を起すと云々。石見國の武士、是に同じて蜂起すと云々。

六月下旬、高越後守師泰、數萬人の軍士を率ゐ、石見國に下向。隨體九州に發向すべしと云々。

同廿二日、大地震。

廿五日辰の刻、又大地震。

七月下旬、美濃國土岐周濟房蜂起。京都騷動すと云々。

十八日、義詮・師直等、濃州に發向すと云々。

八月中旬、美濃國の合戰、京勢打勝ちて、周濟入道生捕り歸洛すと云々。

廿三四日頃、左馬頭義詮、今度の勸賞に、宰相中將に任ぜらると云々。

十月中旬、九州蜂起。事已に大事に及ぶ。直冬、九州の勢を靡かす由。京都武家の邊

騷動。是に依つて、將軍幷師直、九州に發向。義詮に於ては、京都の守護として、逗り留まると云々。

廿六日夜、左兵衞督直義入道逐電。京都騷動すと云々。

廿八日、直義入道、南都に到り、內侍原法眼が家に居す。

十一月一日、越知伊賀守が家へ、直義入道入つて居す。近國の武士馳せ集り、數千人に及ぶと云々。

同七日、直義入道、南方へ降參。則ち敕免の綸旨を給ひ、大將軍とせらると云々。是に依つて畿內の官軍、悉く東條へ馳せ集り、直義入道に屬す。其勢雲霞の如しと云々。

觀應二年南方正平六年、正月七日、直義入道、數千人を率し、八幡山に陣す。京都を攻むべしと云々。

同十二日、越中國桃井播磨守直常、北國の勢數千人を率し、直義入道に應じて攻上り山門に陣し、京を攻むべしと云々。

十五日、京都の守護中將義詮、八幡山門の大軍を防ぐべき事なり難く、西國へ沒落。

其刻、武藏守師直以下の館十箇所計り、放火すと云々。

同日、將軍幷師直等、中國より歸洛し、義詮途中に出會ふ。則ち洛中に引つ返すと云々。

同日午の刻、桃井入京、仙洞に參り祇候の所、將軍以下歸洛、河原に相戰ふの間、桃井以下卽ち馳せ向ひ、河原に於て數刻合戰。兩陣疲れて引分れ、京勢、二條京極に陣し、桃井、法勝寺に陣すと云々。

其夜、京中の勢、過半落行き殘る者なしと云々。

十六日、將軍幷に師直等、又丹波の方に沒落。其勢四五百騎に過ぎずと云々。夫より播州の方へ向ふと云々。宰相中將は、丹波に逗留すと云々。

二月、師泰等、石見より歸陣し、將軍の在所播州書寫山下に到着。則ち京都へ攻上るべしと云々。

同じ頃、八幡より、石塔等以下數千人、書寫山下へ發向。光明寺の邊に陣すと云々。

其後、將軍幷に師直等軍勢、光明寺を圍んで戰ふと云々。

同九日、八幡より、上椙・畠山等以下數千人、光明寺の後結の爲め、播州に發向すと云々。

同十八日、攝州小淸水合戰。將軍師直等敗北し、松岡の城に退き、已に自害せんと欲するの所、直義入道と將軍和睦なつて、將軍歸洛。師直・師泰等、出家して降參すと云々。

廿五日上洛の所、武庫河の邊、鷲林寺の前に於て、上杉修理亮、師直・師泰兩入道以下十餘人を討つ。河津・高橋以下又切腹すと云々。

廿八日、將軍歸京。大略流人の如し。佐々木入道道譽等、相從ふと云々。

廿九日、直義入道歸京。東寺の實相寺に入ると云々。石堂以下諸大名數千人、相從ふと云々。

三月朔日、宰相中將義詮、丹波より歸洛。細河顯氏等、相從ふと云々。

去ぬる廿六日、直義入道の最愛の一子、五歲にして早世。入道を始め母儀悲歎、以

ての外と云々。
五月、將軍と直義入道、未だ不快の事あり。京都夜々騷動すと云々。將軍に相從ふ所の大名仁木・細河・土岐・佐々木等、皆本國に逐電すと云々。是に依り、京都愈々騷動すと云々。
六月、南方の官軍蜂起。泉州所々合戰すと云々。
七月中旬、直義入道逐電。北國へ赴くと云々。入道に從ふ石堂・上杉・桃井等、悉く逐電。京都騷動以ての外と云々。
去ぬる上旬、江州佐々木道譽、將軍に叛き、城郭を構ふの由、且つ問答を加へ、且つ戰伐を加へん爲め、將軍江州石山邊に到り、陣するの處、其言なきの間、石山より歸洛すと云々。併せて直義禪門逐電の間、京都騷動せしむるの間、又北國へ下向すべしと云々。骨張珍事なりと云々。
八月中旬、直義禪門追伐の爲め、江州へ發向すと云々。
九月上旬、直義禪門、上杉・石堂・桃井等數千騎を率し、江州八相山に陣し、將軍と對

陣すと云々。其後禪門の軍勢、過半將軍に降參するの間、直義禪門、退散せらるべしと云々。
十月上旬、禪門、北國を經て、東國に下向すと云々。
十四日、將軍入洛。此頃、南山御合體の儀、頻りに仰入らるゝの所、南方にも御許容の由。則ち直義禪門追伐の綸旨を乞はる。仍つて南方より、綸旨を下されぬと云々。
赤松妙善法師、御合體の儀を執し申し、南方より忠雲僧正入洛。賀茂親承法印坊に向うて、宰相中將に謁す。綸旨二通、忠雲隨身して、相公に與ふと云々。一通は敕免、一通は直義禪門追伐の事なりと云々。公家の事、一圓南方御沙汰あるべし。武士の事、彼召仕候上者、管領すべきの旨、敕許と云々。此事必定の由云々。
十一月四日、將軍關東に發向。其勢五百騎計りと云々。宰相中將、在京すと云々。
南方御合體につき、正平六年を用ひ、觀應の號を止めらると云々。
廿四日、頭中將具忠朝臣、南方の敕使として、今日南都を經て入洛。軍士二十騎計

りを率ゐる。

廿九日　具忠朝臣、京より南都に着。慈嚴院に止宿。夜に入りて、向ひ謁す。世上の事、去ぬる以來の事演說。今度尊氏卿、懇切に申す旨候間、恩免せられ畢ぬ。天下の事、大小となく、南方の御沙汰たるべき由申すの間、御出京あるべしと雖も、北國・東國、未だ靜ならざるの上、今年塞りの方たり。明春出御あるべしと云々。

晦日、具忠朝臣、南都を立ちて、吉野に歸參せらる。則ち今日、吉野へ使者をまゐらす。

細々要記三終

細々要記 四

正平六年十二月十三日、南方より中將具忠朝臣、又入洛。持明院殿に參入。宰相中將出會、劒璽内侍所南方へ渡さると云々。

廿五日、三種神器、南方へ渡御。南都を經。具忠朝臣供奉。其外軍士百騎計り、相從ふと云々。見物の爲め、貴賤群集す。

廿八日、京都より、三條坊門中納言通冬卿・御子左中納言爲定卿、南都を經て、南方に伺候。此頃聞く、今度東方へ不參の輩に於ては、官位の望を斷つべきかと風聞。是に依つてか、持明院殿方拜趨の諸卿、悉く京都を捨て、吉野へ伺候。廿九日午の刻より、南都を經て向ふ者引きも切らず。路次群集す。

正平七年正月五日、南方に於て、敍位を行はると云々。今度京都より參仕の諸卿は、降參の人とて、一階一級を貶され、南方伺候の諸卿は、多年の功勞を賞せられ、超涉

不次の賞を行はると云々。

吉野の帝の御母后三位殿、院號ありて、新待賢門院と申し奉る。北畠一品入道は、准后の宣旨を下さると云々。

二月廿六日、帝、吉野の宸居を出御入洛。暫く東條の城に御座し、住吉に赴かしめ給ふと云々。和田・楠等路次を警固す。供奉の人々、各戎衣の體。但し厚總の鞦を用ふと云々。具忠朝臣、示旨あるの間、馬一疋厚總の鞦・蒔繪の鞍等、傳借し進す。

二月廿七八日の頃、南山帝、住吉迄御出とて、凡そ貴賤、見物の爲め、多く參る云々。

四月、南山帝、去ぬる閏二月の頃より、天王寺へ御出。三月上旬の頃、八幡へ御出。其後宰相中將殿、近江・美濃迄沒落の後、又軍勢を率して上る。同中旬の頃、南山方の軍勢、京都を沒落して、一圓八幡に籠る。其後、八幡を打卷きて攻むると云々。

五月十一日夜、南山方皆沒落。死人・生捕數を知らずと云々。

帝は招提寺へ御入。其後三輪、其後宇陀水分宮に御移り、其後吉野へ御入りと云云。其後具忠朝臣音問に聞く、去ぬる二月より、帝、住吉の神主國夏が第に皇居。

國夏上階すと云々。

去ぬる三月、帝、八幡へ行幸。晩に及び着御と云々。同二十日巳の終、八幡より、北畠中納言顯能卿・千種小納言顯經朝臣幷和田・楠等數千騎、京都に攻め入り、宰相中將殿、七條大宮の邊に於て合戰。南山方勝利、細河讃岐守討取らるゝに依り、武家方敗北。中將殿沒落と云々。

同じ頃、持明院の三上皇を、南方へ取り奉り、加名生の奥に押込め奉ると云々。

傳へ聞く、去年冬、將軍、關東に發向。駿州薩陀山に陣して、直義禪門と、度々合戰あり。禪門敗北して、將軍へ降參。其後禪門病に依つて、鎌倉圓福寺に於て圓寂。四十五歳と云々。

又聞く、奥州國司北畠顯信卿、義兵を擧げ、奥州に於て、度々合戰ありと云々。伯耆國にも、先づ伯耆守が一族義兵を起し、合戰ありと云々。

同じ頃、東國には、新田義貞の二男義興・三男義宗・義助の男義治等、兵を擧げて、上野國より武藏國に入る。妙法院宮、今は還俗して、宗良親王と申し奉るを、將軍と

両朝御合體破る

なし、數萬人を率し、鎌倉を攻めんとすと云々。其後武藏・上野、所々合戰ありと云々。

南方と武家御合體の事、已に破れ、京都の三上皇を始め、天台座主迄、皆南方へ遷幸なりければ、平安城、主なくしていかゞと、武家殊に、御位を誰にか卽け進らすべきと、尋ね求め奉ると云々。本院第二の御子、今歳十五にならせ給ふを、去ぬる頃、南方より、日野春宮權大進保光に仰せて、南山へ取り奉らんとしけるが、兎角料理に滯りて、保光朝臣、京都に捨て置きけるを尋ね出して、御位に卽け奉ると云々。

九月廿七日、京都改元ありて、文和元年とす。去年冬より、南方、正平を用ふるの所、御和睦破るゝ上、新帝位に卽かせ給ふに依り、改元ありと云々。

十一月下旬、當今の國母陽祿門院、崩ずる由云々。但し天下諒闇、武家が所存に依つて、頗る豫儀に及ぶと云々。

文和二年南方正平八年二月四日、夜半に及んて、京都炎上。持明院殿回祿。後聞、火の起り放火なり。隨身所の後の方より火起り、其より次第に仙洞を燒くと云々。回祿

は天災にて、世の常ある事なしと云々。

近年打續き、京中の堂社・宮殿、大方に燒けぬ。建武より以來、回祿に遭ひぬる所々を、數ふるに遑あらず。先づ内裏・馬場殿・准后御所・常盤井殿・二條の御所・鳥羽殿・伏見殿・十樂院・梨本青蓮院・妙法院・白河殿・大覺寺殿・洞院・左府亭・吉田内府の北白河小坂殿・爲世卿の和歌所・毘沙門堂・淳風堂・花園河原院。佛閣は、法勝寺・長樂寺・清水寺・六坊講堂・雙林寺・慶愛寺・淨住寺・平等院・六波羅地藏堂・東福寺・祇陀林地藏堂・建仁寺・天龍寺に至る迄、何百箇所といふ事を知らず。此頃聞く、筑紫に、兵衛佐直冬、使者を參らせ、南方へ降參。則ち御許容ありて、勅免の綸旨を下さると云々。信用し難きか。

三月上旬、山名伊豆守時氏・同右衛門佐師氏等、將軍に叛き、南方へ降參。則ち勅免の綸旨を下さるゝに依り、山名が勢、近日京都へ發向すべしと云々。是に依つて、京都騷動すと云々。亦紀州蜂起。四條隆俊卿を大將とし、已に八庄司等、南方の御方に參り、近日京都へ發向すべしと云々。京都武家邊、以ての外騷動するの由云々。

五月中旬、和田・楠が勢、天王寺邊に充滿。近日必定入洛すべきの由云々。亦山名、已に數千騎を率し入洛。但馬を經て、丹波に入ると云々。京都愈々物騷と云々。

六月五日・六日の頃、南方の官軍吉良・石堂・和田・楠等數千騎、既に八幡へ着陣。篝火をたく。炎氣天を焦す。

是に依つて、京都の帝、山門に行幸すと云々。當代初度の行幸なりと云々。

義詮以下、京都の諸軍勢、京を沒落、東山に取上ると云々。

同八日、南方官軍山名が勢、同時に入洛。午の刻後より、河原に於て合戰。武家方敗北。死人數百人と云々。

十二日、赤松妙善幷に丹波の荻野武藏將監等、武家方として、西山に陣を取るの所、南方の勢山名が勢、發向し合戰。西山の勢敗軍すと云々。大將武藏將監を始め、死人數百人、生捕數を知らずと云々。

同日、京都の帝を具し奉り、義詮等以下、江州に沒落。湖西を北を指し沒落の所、和

仁・堅田の輩、新田の堀口某を大將として、群り來り合戰。京勢又敗北。佐々木近江守秀綱等以下、後陣に沒落の輩、悉く討たると云々。

十四日より、京都は、南方の御治世に依つて、又正平の號を用ふと云々。

七月下旬、將軍、東國より、多勢を率し發向。義詮又濃州にあつて、既に多勢、近日入洛すべき由風聞と云々。赤松妙善以下、亦西國勢を相伴ひ、攝州邊に到着。同じく入洛すべしと云々。

廿四五日の頃、南方の大將四條大納言、俄に進發。攝州へ向ふの由云々。

同日の事か、山名父子・和田・楠・吉良・石堂等、悉く沒落すと云々。

廿七日、和田・楠・吉良・石堂等以下の官軍引退き、今日南都を經て、三輪に赴く。是れ義詮、既に多勢湖水を渡り、赤松が勢、又山崎に到り、猛威以ての外と云々。依つて南方の面々、沒落すと云々。

廿七八日、赤松妙善・中國左衛門佐入道等入洛。其夜義詮、諸事を率ゐて入洛し、常在光院にありと云々。

文和二年九月中旬、持明院の上皇、濃州より還幸と云々。

廿一日、將軍東國より上洛。又文和の號を用ふべしと云々。

京勢既に多勢の間、山名父子追伐の爲め、義詮、西國へ發向し、播州に到り、四國・中國の勢を催すと云々。

下旬、右兵衞佐直冬、頻に南方へ降參の儀を申すと云々。

文和三年南方正平九年正月、仁木左京大夫頼章、京都に於て、武家の執事とすと云々。宰相中將義詮、播磨にあつて、勢を催すと雖も、年々の役に疲れ、諸軍勢應ぜず。空しく月日を經と云々。

四月中旬、義詮、播磨より入洛。去年より發向の所、無勢に依つて延引。所詮其甲斐なきかの由云々。

六月五日、南方の官軍楠等以下數百人、南都を經て、宇治路へ發向。京勢又發向すと云々。

九日、宇治邊に於て合戰。京勢敗北し、死人數千人、或は河に落入り、死する者數を

知らずと云々。

十三日、京勢又發向。合戰ありと云々。

十九日、楠等官軍、八幡へ發向すと云々。

七月三日、南方の勢、東條を經て、歸陣すと云々。

右兵衞佐直冬、中國にありて、南方へ連々降參の儀を申す。山名父子、又執し申すに依り、今度敕免の綸旨給ひ、總追捕使を奉り、諸國守護以下の事、承久以前の例に任せ、執り行ふべきの旨、敕許と云々。南方に於て、洞院右大將、頻に執し申されぬと云々。

是に依つて山名父子、直冬を大將軍となして、入洛すべきの由風聞。

北國桃井播磨守直常・越前の修理大夫高經も、南方へ降參して、直冬と同心すと云云。

九月中旬聞く、直常・高經等、敕免の綸旨を下さるゝの間、愈〻南方の御方として、近日發向すべき由風聞。

十二月中旬、西國・北國より官軍發向。既に國を打立つのよし風聞。京都騷動すと云々。

文和四年南方正平十年正月、近日諸方の官軍、同時に入洛すべき由。京都物騷。朝拜節會等行はれずと云々。

十九日、南方の官軍四條大納言隆俊・左兵衞督泰長・吉良・石堂・和田・楠等以下數千人南都に着陣。般若寺に宿す。近日入洛すべきの由云々。西國・北國の勢、追々入洛すべきの由云々。

廿二日、南方の軍勢、南都より發向。八幡に陣す。夜に入りて篝をたく。炎氣雲を焦す。

廿三日、將軍、京都の帝を伴ひ奉り、江州へ沒落すと云々。此頃、京都無勢なるが故と云々。

同日、南方の御方にて、西國・北國より入洛の輩、悉く京都に入ると云々。四條大納言を始め、南方より發向の勢は、河を越さず、未だ八幡に陣すと云々。

廿四日、右兵衛佐直冬、東寺の宰相寺に移住すと云々。其勢、數千騎と云々。
二月二日、將軍、東國の勢を集め、數萬人を率し、山門に上ると云々。
同三日、宰相中將、又西國の諸兵を率し、山崎の西神南に着陣すと云々。
同四日、山名右衛門佐師氏、數千騎を率ゐ、神南に發向し、合戰數刻と云々。
同八日、持明院の主上、東坂本に臨幸。二の宮の彼岸所を以て皇居とす。山僧等警固申すと云々。
十三日、將軍、山門より東山に下り陣す。則ち軍勢、河原に下り向ふの間、東寺よりも軍勢出向。但し合戰に及ばずと云々。
同十五日、兩方の軍勢、京中に於て合戰數刻。死人多しと云々。
廿八日、東西の軍勢、河原に相向つて、合戰數刻と云々。
三月十二日、又東山の勢數千人下り、京中に於て合戰。午の刻より黄昏に及ぶ。創を被り、矢場に死亡する者、數を知らず。合戰の雌雄決し難く、牛角なりと云々。
十三日、東寺より始め、淀・鳥羽・八幡に陣する所の官軍、悉く沒落すと云々。

是れ合戰勝負のなす所にあらず。別の所存あるかの由云々。
北國の勢は、近江路に懸り、西國南方勢、攝州に懸り退散云々。
廿二日、將軍父子、日來の宿所に歸り住し、人を東寺に遣し、檢知すと云々。
五月上旬、北畠大納言顯能卿、數千騎を率し、伊賀國を略す。所々合戰。
七月中旬、顯能卿の官軍勝利云々。
十一月傳聞す。奥州國司顯信卿の次男左中將守親朝臣、去ぬる頃、國司に補せられて、義兵を擧ぐと云々。伊達・信夫・田村・河村などいふ武士、從ひ附きて、武家方と度々合戰ありと云々。
文和五年（南方正平十一年）三月、京都改元ありて、延文元年と號すと云々。
四月傳聞す。奥州の合戰、春に至りて、猶ほ未だ休まず。所々に於て戰ふと云々。
九月下旬、南方の官軍和田・楠等、數百人騎を率し、攝州に發向。天王寺の邊に陣し、野伏等河を越して、所々を放火すと云々。
十月、京都より仁木左京大夫兄弟・佐々木等以下數千人、攝州に發向す。神崎に陣

四條隆資戰死

す。

廿二日、中島に於て、兩方合戰。京勢敗北すと云々。然れども、神崎の陣を退散せずと云々。

十一月三日、南方の官軍、河内へ歸ると云々。

去ぬる正平七年、八幡合戰に、四條一品隆資卿討死。此頃、南方の帝、勅ありて、左大臣を贈り賜ふと云々。

延文二年南方正平十二年二月、持明院の本院・新院・新々院・東宮、皆去ぬる正平七年、南方へ遷されさせ給ひし所、此頃、南方の帝の免を受け、山中より都へ還幸なりと云々。是れ當今既に卽位の上は、其詮なきかと、南方の僉議ありと云々。

又聞く、洞院公泰公剃髮と云々。

延文三年南方正平十三年二月、京都に於て、故直義禪門七回の忌、諸寺にて佛事を行はると云々。持明院の帝より、從二位の贈爵を賜ふと云々。法體死去の後、此の如き宣下、古より其例なしと云々。

四月上旬より、吉野の帝の御母后新待賢門院、御異例と云々。

同下旬、京都將軍尊氏卿、御不例と云々。傳へ聞く、背に腫物を發す。痛み忍ぶべからずと云々。

廿二日より、南都に於て、御祈の儀を仰下さる。今日より、慈救延命の法を修す。其外諸寺・諸社にて、御祈を致すと云々。

廿八日、吉野の新待賢門院崩ずと云々。帝を始め奉り、何候の公武、悉く哀傷限りなしと云々。

廿九日、將軍尊氏卿薨ず。年五十九歲と云々。

五月二日、都の西山等持院に葬ると云々。寺號は長壽寺。道號は仁山義公。法名は妙義と云々。

葬禮の儀式、壯觀なりと。見物の爲め、貴賤多く群集すと云々。鎖龕は天龍寺龍山、起龕南禪寺平田、奠茶は建仁寺無德、奠湯は東福寺の鑑翁、下火は等持院の東陵たりと云々。

菊池武光兵を擧ぐ

去ぬる正月、筑紫の探題として、一色左京大夫直氏兄弟、京都より發向の所、筑紫肥後國菊池武光、南方の御方として、探題と合戰。探題の勢敗北。死人數百人。直氏兄弟僅に免れ、此頃京都へ逃上ると云々。彼菊池武光は、去ぬる元弘の亂に、後醍醐帝の御方に參り討死せし菊池寂阿入道が末子にて、類なき武勇の者なり。九州の者共、相當る者なしと云々。

六月三日、故將軍尊氏卿贈官位の事、持明院殿にて御沙汰あり。敕使日野左中辨忠光朝臣と云々。後日聞く、其詔に曰

詔、德高者餘芳永傳、功大者遺烈遠覃。舊史之彝範斯著、襲聖之格言聿宣。故征夷大將軍正二位源朝臣、信同ニ金石一、操比ニ松筠一。扶ニ鴻化一而賢行久、備ニ朝之羽翼一掌ニ虎旅一。而振ニ兵威一專爲ニ國之柱石一。是以辨ニ三隊一、殆軼ニ雲臺四七將舊蹤一、總ニ三軍一忽鎭ニ柳營萬里之風塵一。思ニ其徽猷一、盍レ加ニ褒章一。故可レ贈ニ左大臣從一位一。庶飾ニ官階之崇號一、或照ニ泉壤之幽冥一。普告ニ遐邇一俾レ知ニ朕意一。主者施行。

と云々。

同じ頃、筑紫の菊池、勢猛にして、九州過半を攻め從へたりと云々。又曰、京都へ發向すべき由云々。是に依つて、細河式部大輔繁氏、探題として發向。先づ讃岐國に到り、軍勢を催すの所、俄に熱病を煩ひ悶絶。僻地遂に發端より七箇日にして死すと云々。或云、崇德院の御領を兵糧に宛てける御咎の罰を蒙りけるとも云々。

南方にも、去ぬる頃、門院崩じ給ひ、六月十八日、七々日の御忌、如意輪寺に於て、御佛事遂げ行はる。導師頼意僧正たり。帝、宸筆を染められて、法華經御書寫、供養ありと云々。

南都に於ても、御佛事あり。實遍僧正導師たり。敕使右少辨國氏朝臣、參向せらる。去ぬる六月二日、梶井二品親王入滅。山門の悲歎たりと云々。南方の女院御在世の折、御祕藏たるの由。琵琶・御硯等、今日御寄附。國氏朝臣施行。其外種々御寄附。

金堂に於て佛事修行。

導師實遍僧正を始め、僧衆五十口出座。

未の刻、國氏朝臣退座。成實院へ入りて休息。其夜止宿。

十九日辰の刻、國氏朝臣、南都を發し、吉野へ向はる。
二十日、實遍僧正、吉野殿へ參向。
廿五日、實遍僧正、南都歸寺。
廿七日、和田・楠等以下數百騎、南都横行。其意を知らずと云々。

細々要記四終

細々要記　五

延文三年南方正平十三年八月十九日、南山に於て、洞院左大臣實世公薨ず。年五十二。去ぬる頃より、痢病を憂ひて、終に薨じ給ふと云々。南方兩朝腹心の人なりければ、帝を初め奉り、悲歎以ての外と云々。

九月、筑紫より、豪仙律師來りて語る。去ぬる七月、筑紫の宮及新田の氏族菊池武光幷に一類、數千騎を率し發向。少貳・大友等以下と合戰。曉天より黄昏に及ぶ。少貳等敗軍。太宰府へ引退くと云々。

官軍勝利たりと雖も、宮薄手を負はせ給ひ、公卿・殿上人及新田の氏族十餘人、戰死すと云々。少貳方にも、宗徒の者數千人、討死すと云々。去ぬる建武以來、武光が父寂阿入道・兄武重・同武士・武光に到り四代、南方忠義の士なり。且つ紫筑の宮を仰ぎ、其武威九州に輝くが故、新田の一族を始め、伯耆守が一類、其外南方に志ある輩

多く筑紫に下向。菊池に依つて、素懐を達せんと欲する者多しと云々。
十月六日、京都に於て、四條三位高宗卿害せらる。後に聞く、夜討の爲めに討たると云々。
十二月十八日、宰相中將殿、京都に於て、征夷將軍に任ず。年廿九。敕使日野右大辨時光卿と云々。

新田義興討たる

此頃聞く、去ぬる十月、鎌倉左馬頭基氏朝臣及執事畠山入道等謀つて、竹澤右京・江戶遠江守等を僞つて、新田方へ降參させ、其後左兵衞佐義興朝臣をすかし出し、武藏國矢口の渡にて、渡し舟に呑口を明け、水に溺らせ害すと云々。
去ぬる十月、筑紫に於て合戰。度々官軍勝利。菊池大に勢を振ふと云々。
豪仙律師が狀、今日着件の事あり。
延文四年(南方正平十四年)二月、南方に於て、二條敎基公、關白に任ずと云々。
師基公剃髮。光明臺院殿と申すと云々。

北畠親房卿薨去

三月上旬、北畠准后薨ず。年六十七と云々。南方の柱石にておはします上、皇后の

仁木頼章逝去

嚴君なり。帝を初め奉り、顯信卿・顯能卿等、歎限りなしと云々。

四月廿八日、天德院殿親房卿七々日の忌、諸寺にて執行はる。南都にても、御佛事を執行ふ。北畠殿より、阿保大藏大輔參向。御布施等懇なり。十月中旬、京都に於て、仁木左京大夫頼章卒すと云々。

頼章死去に依つて、細河相模守淸氏、執事に補すと云々。

此頃聞く、鎌倉の執事畠山入道以下數萬人、南方へ發向の爲め、近日入洛すべき由。既に尾張の國に至ると云々。

十一月六日、畠山等入洛。見物の爲め、貴賤、粟田口四宮河原の邊、群集すと云々。東國の武士馬物具等以下、風流を盡し、結構目を驚かすと云々。

是に依つて南方の周章、言語道斷。廿四日、吉野の帝、觀心寺へ臨幸。供奉の公卿兩三人・衞府諸司七八人、其外武士百騎計りと云々。大軍襲ひ來るを避けられんが爲めと云々。其外公卿・殿上人等以下、諸方へ沒落すと云々。

關白殿教基公、南都へ御入、東南院へ入御。御供の輩七八人に過ぎず。暫く御滯

居あるべき由云々。

十一月二十日、京都將軍、南方へ發向と云々。持明院の主上より、錦の御旗幷に御馬を賜ふ。敕使左中辨忠光朝臣と云々。

廿四日、攝州尼崎に發向すと云々。

同日、畠山以下の東國勢、追々發向。八幡に陣す。其後河内路へ入るべしと云々。南方には用意種々。和田・楠、赤坂城、福塚・河邊野・橋本・岩郡等平岩の城、佐和・秋山・宇野・三輪等は八尾城、其外龍山が峯にも城を構へ、數百人籠る。

二月中旬、畠山等以下、津々山に發向。其後毎日合戰。畠山が軍勢、死人數を知らずと云々。

三月中旬、東國人軍勢、既に兵糧に盡くるか、神社・佛閣に入りて、亂暴狼藉言語道斷。南都邊迄も亂入の兵士あり。依つて廿一日、軍士を發し警固す。

四月上旬、紀州龍門山に於て合戰。官軍は、四條中納言隆信卿の從兵なり。畠山入道が弟尾張守義深以下、東國の軍勢數萬人發向。暫時合戰。武家方敗北。死人・生

捕數を知らずと云々。

同八日、關白殿敎基公、俄に觀心寺の皇居へ伺候。午の刻、南都を御出。急に召さるゝに依つてと云々。

同十一日、東國の軍勢數萬人、重ねて紀州へ發向。畠山尾張守敗北に依つて、援の勢を乞ふを以てなりと云々。

十三日、龍門山重ねて合戰。官軍の內、武家方へ降參の輩あり。無勢に依り、防ぎ難きか、隆俊卿以下沒落。河瀨河の城に入ると云々。

陸良親王御自害

十八日、故大塔宮の若宮陸良親王謀叛。賀名生の奧銀嵩に取上るの間、敕を受け、二條關白殿、官軍を率し發向。卽時に追伐。陸良親王自殺せらる。其從兵赤松氏範等以下、悉く沒落すと云々。此若宮は、北畠准后の禪門の妹の腹にて、南山の帝も、殊に賴母しく思召して、征夷將軍に任ぜられたりしが、如何なる天魔の所爲にて、斯く謀叛を起されけるぞ。不思議なりと風聞す云々。

去ぬる十二日、住吉の社鳴動す。神前の楠の大木、風なくして折れぬ。楠正儀は、

南方の柱石たり。名稱に付いて、不吉なりと風聞云々。

閏四月廿九日、龍泉城合戰。官軍悉く沒落すと云々。

同晦日、平岩の城合戰。官軍敗北して沒落すと云々。

同日、八尾の城合戰。官軍沒落すと云々。

五月三日、東國の軍勢十萬人、赤坂城を打卷きて攻むると云々。

同八日、城の中の官軍を、夜討すと云々。

其夜、和田・楠等、悉く沒落して、金剛山の奥に入ると云々。

同廿八日、新將軍幷畠山入道以下、諸國の軍勢、悉く京都へ歸る。何故といふ事を知らず。皆人不審すと云々。

六月下旬、和田・楠以下、金剛山より出でゝ、住吉天王寺へ發向。譽田の城を攻むると云々。是に依つて、京都より、畠山入道・細河・土岐・佐々木・武田・字都宮等數千人、發向すと云々。和田・楠等、又金剛山に入ると云々。京勢は、天王寺に陣すと云々。

七月十六日、京都の軍勢、俄に退散して、入洛すと云々。

仁木畠山等合戰

畠山等以下、仁木右京大夫義長と中惡しく、彼者を討たん爲めに引退くと云々。
後に聞く、仁木義長も、其企を聞き知り、新將軍を取込め奉り、畠山以下追伐の御教書を乞ひ受け、一族の勢數百騎を集め、相待つの所、新將軍、畠山等に同心。夜に入りて潛に逃れて、西山谷の堂に入ると云々。是に依つて、仁木が軍勢落ち失せて、殘り留まる者なし。義長氣を失ひ、伊勢の國に沒落すと云々。
七月十七日より後、大和・河內・和泉・紀州の官軍蜂起。京都同士軍あるに依つてなりと云々。
和泉・紀州の中、京都より差置く所の城々の軍勢、悉く沒落して、逃げ上ると云々。
廿三日、紀州春山城合戰。城中の勢、悉く死すと云々。根來寺の衆徒、武家方にて籠りたるなりと云々。
廿五日、熊野合戰。武家方敗北。死人數を知らずと云々。
八月四日の夜、畠山入道逐電すと云々。東國に逃げ下ると云々。
仁木義長・伊勢にあつて、北畠殿に依つて、南方へ降參の儀、頻に申入ると云々。

京都より、土岐・佐々木等數千人、義長追伐の爲め、勢州へ發向すと云々。
其後義長が栖籠る長野の城を、打卷きて攻むると云々。
今年五月より、雨降らず旱魃。五穀實らず。七月より疫癘はやる。疫癘飢饉に依つてなりと云々。
延文六年南方正平十六年三月廿九日、京都改元、康安元年と號すと云々。其夜、四條富小路の邊より失火、數十町燒失すと云々。
四月上旬聞く、伊勢の國仁木義長、南方降參の事、北畠殿より執し申さるゝに依り、此頃、赦免の綸旨を賜はると云々。是に依り、伊賀・伊勢兩國、全く南方の御方に屬す。北畠殿の武威以ての外と云々。
六月十八日の頃より、毎日五七度に至り、大地震。畿内近國遠國に至る迄、山崩れ堂倒れ、傾き損す。南都同樣。金堂・南圓堂破損。
二十日午の刻の地震。天王寺の金堂顚倒すと云々。
下旬の頃、阿波の國高の湊といふ所、高潮俄に滿ち、在家數千軒海に沈み、男女數萬人死すと云々。

廿三日巳の刻、俄に空曇り雪降り、寒氣寒風、身を剪るが如し。去ぬる十九日、天王寺の金堂顚倒の以前、難波の浦より、大龍二つ浮び來り、金堂の中へ入る。其後雷電夥しく、大地震して、金堂顚倒すと云々。南方にも、此天災に依つて、御愼あり。御祈等を仰下さると云々。

京都にも、東寺の金堂顚倒すと云々。

青蓮院尊道親王、敕を受け、內裏にて、大熾盛光の法を行はる。又御祈として、最勝講を行はる。去ぬる貞和二年以後行はれず。召に依つて、南都よりも京都へ向ふ。

初日の問者　山門尋源 東大寺深惠　講師　興福寺盛深 同寺範忠

二日問者　東大寺經辨 同寺長懷　講師　興福寺實遍 山門慧俊

三日問者　興福寺覺成 山門圓俊　講師　圓寺經眞 興福寺覺成

四日問者　興福寺高憲 山門覺豪　講師　山門良賢 園寺房眞

結日の問者　東大寺義寶 興福寺教連　講師　山門良彥 興福寺實遍

證義大乘院孝覺大僧正・尊勝院惠能大僧正たり。

七月中旬、山名時氏父子蜂起。美作の國へ發向。所々合戰、赤松等以下の武家方敗北すと云々。

去ぬる六月、筑紫には、菊池等の官軍、筑前へ發向。所々合戰。少貳・大友以下の武家方馳せ向つて、合戰度々に及ぶ。武家方敗北。死人數を知らずと云々。

九月中旬、和田・楠等以下の官軍、攝州渡部邊へ發向。攝州の守護佐々木等敗軍。秀詮幷弟次郎左衞門尉氏詮以下宗徒の輩、數百人討死。生捕數を知らずと云々。

九月廿二三日、京都俄に騷動、以ての外と云々。後に聞く、細河相模守清氏、將軍へ逆心ありと云々。將軍宅を出て、今熊野の邊へ沒落。是に依つて、持明院の上皇、同じく今熊野へ行幸と云々。物騷いふ計りなしと云々。

同日黃昏、相模守清氏、京都を沒落。若狹に赴くと云々。

廿四日、清氏沒落せしむるの間、京都合戰の沙汰なく、無爲に歸するに依り、將軍、本の館へ歸宅。諸人安堵すと云々。

十一月上旬、尾張左衞門佐氏賴・仁木三郎等以下數千人、清氏追伐の爲め、若狹の國

へ發向すと云々。

十月下旬、若州合戰。清氏敗北沒落。南方へ降參。則ち赦免の綸旨を下さるゝに依り、清氏南方にありて、便宜の軍勢を催すと云々。

十一月上旬、清氏が一族馳せ集り、其勢以ての外と云々。近日南方の官軍、一同に入洛すべきの由風聞。是に依つて、京都騷動すと云々。

此頃聞く、去ぬる九月、東國には、畠山入道道誓、鎌倉左馬頭殿に逆心して、伊豆國修禪寺の城に楯籠り、近國を打從へんとする由云々。

十二月二日、南方より、二條殿下敎基公・四條中納言隆俊・日野中納言邦光卿を大將とし、石堂刑部卿・細河相模守・和田・楠等以下の官軍數千人、住吉天王寺に充滿。近日入洛すべしと云々。是に依つて、將軍、東寺へ居を移されぬ。其勢四五千騎と云云。洛中の周章以ての外と云々。

三日、佐々木高秀・今河・宇都宮等、忍頂寺・山崎・大淀へ發向。路々にて防ぐべき爲めなりと云々。

八日、南方の軍勢入洛。京勢悉く敗北して、總軍京都へ逃げ上ると云々。

同日、將軍、持明院の主上を警固し、苦集滅道を經て、江州へ沒落すと云々。

九日卯の刻、南方の官軍入洛すと云々。

廿四日、將軍、江州にあつて、近國の勢を催し、既に多勢たるの間、勢多に發向して、直に入洛すべしと云々。

廿五日曉天、南方の官軍沒落。悉く南山へ歸參。

廿七日、將軍、江州より入洛と云々。

康安二年南方正平十七年正月中旬、細河相模守清氏、四國を平げんが爲め、渡海すと云々。

二月中旬、越前修理大夫入道道朝の四男治部大輔義將、京都に於て執事となると云云。是に依つて、義將別腹の兄左金吾氏賴、世を疎み遁世すと云々。

三月中旬、持明院の帝、京都に還幸。西園寺實俊卿の館を、皇居とすと云々。

四月十九日、京都の帝、土御門の內裏へ還幸。見物の爲め、貴賤多く參り、群集すと云々。供奉の公卿、さしたる行粧なし。警固の武士・隨兵の輩等、皆あたりを輝か

し、壯觀なりと云々。

筑紫には、菊池等の官軍、以ての外たるの由に依つて、道朝入道の子左京大夫氏經、九州の探題として發向。神崎邊より船に乘る。大將の船を始め、軍勢等船に至る迄、遊女を乘すと云々。

七月下旬、細河清氏、四國に在つて、細河右馬頭賴之と、數日合戰。清氏敗北討死すと云々。

八月十日、和田・楠以下官軍數百人、攝州へ發向。守護代箕浦何某と合戰。武家方敗北。死人算を知らず。

九月中旬、和田・楠、兵庫邊發向。赤松判官光範と合戰すと云々。

南山の帝、去々年より、住吉に皇居。なほ未だ御逗留と云々。

菊池九州に振ふ

九月上旬の頃か、後に聞く、筑紫にて、探題氏經と、菊池等の官軍と合戰數度。探題方敗北。豐後の國へ沒落。纔に城に籠ると云々。

少貳・大友・松浦等以下、同じく菊池が爲めに敗北。悉く沒落し。城に籠りて防ぐ。

菊池、所々の城を打譤して、攻め戰ふ毎に、勝に乘ると云々。
是に依つて、九州過半、官軍に服すと云々、

細々要記五終

細々要記　六

貞治二年南方正平十八年正月、南山の帝、住吉より、吉野に還御ありぬと云々。

去年二月、修理大夫道朝入道の四男治部大輔義將、執事職たるの間、父道朝入道、天下成敗を意に任するの餘り、我意の沙汰多し。就中越前の國河口莊は、南都の所領たるの所、去年より沒收し、家中等に宛行ふ。河口莊は、當寺維摩會要脚たり。殊に一寺の學徒、之を以て朝三の資を得、餐霞の飢をやむ。然るに彼押領して、依つて諸事の要脚、悉く闕如す。是れ一寺滅亡の基たるか。

六月朔日、大衆蜂起。南大門に會集詮議、二日奏狀を捧げ、早く當莊押領の儀を止め、復せしめ給ふべき旨、京都公武へ訴ふ。

八月中旬、東國に於て、芳賀入道禪可、鎌倉基氏に逆心して、武藏國にて合戰。芳野入道敗北すと云々。

周防國大内介弘世、多年の官軍にて、南山忠義の者たり。如何なることにや、武家に降參し、筑紫へ發向。菊池と合戰に及ぶの所、大内介敗北。京都へ逃げ上ると云々。

十月、鎌倉左馬頭基氏、數萬人の軍勢を率し、下野に發向。宇都宮を攻むると云々。

去ぬる六月より、河口莊の事、頻に京都へ訴ふと雖も、公家の敕裁はあれど、人用ひず。武家奉書は、執事に憚りて渡す人なし。是に依つて遲滯するの由。據なきか。

十二月十日、重ねて大衆蜂起。嗷議の若輩、國中の氏人等を發し、神木を捧げ奉り、十一日卯の刻、南都を發し、其日宇治に着。十二日午の刻、神木御入洛。彼道朝入道が宿所の前に振捨て奉り、衆徒歸參す。

同日、公家の沙汰として、神木を、長講堂へ入れ奉ると云々。

貞治三年（南方正平十九年）二月、山名伊豆守時氏・仁木左京大夫義長等、武家に降參すと云々。

七月上旬の頃、上野國に於て、新田の世良田伊豫守義政、義兵を擧げ、鎌倉基氏と、度々合戰ありと云々。

去年十二月、神木御入洛。其後種々の奇瑞ありと雖も、武家の輩、耳外に處して捨て置くの條、言語道斷か。

七月下旬、上野の國合戰。世良田等敗北。義政以下討死すと云々。

八月下旬の頃、道朝入道が宅の近邊、夜震動すと云々。

九月上旬、大鹿二、京中の家の上を走り、長講堂の南門の前、四五聲鳴き、行方を失ふと云々。奇異の事なり。

十月三日、彼道朝入道が宿所七條東洞院、俄に失火。家内の財寶、一つも殘らず。內廐の馬共迄、多く燒失す。其外死人多しと云々。神の御祟なりと、京都風聞すと云々。

貞治四年（南方正平二十年）、五月四日、故尊氏卿後室、卒去と云々。

八月、佐々木道譽・赤松妙善等以下、彼道朝と不和。將軍へ訴へ申す事多し。是に依つて、道譽〔朝カ〕入道非分に極まり、同五日、京都を沒落すと云々。

道朝入道・同義將、越前に沒落し、松山・粟屋の兩城に籠り居る。やがて東都より、畠

山尾張守・土岐・佐々木・赤松等數千人、越前に發向し、二つの城を打卷きて攻むると云々。

道朝入道、沒落せしむるの間、早速越前河莊口を、南都に返し附けらるゝの間、神祈忽ちに落居。

十二日、神木御歸座御出門、卯の刻と相定まるの所、風西に依つて遲滯、午の刻に及ぶ。拜見の爲め、武家の輩を始め、洛中邊土の貴賤群集す。

長講堂の南庭に席を布き、參仕の公卿次第に着座。關白殿(良基公)・九條(忠基卿)・一條殿(房道卿)・大理中納言忠光卿以下着座の後、僧綱等、御座の前に禮を致す。既に出御の前、大衆一人進みて僉議。其後幄屋に亂聲を奏する中、布留の神寶を出し奉る。關白殿以下、悉く席を避け蹲居。其後、神官等覆面、本社の御榊・五所の御正體を捧げ奉る。南門を東へ神幸。樂人等膝を屈し、還城樂を奏す。赤衣仕丁數百人、白杖を持ち、二行に列す、次に白衣神人數十人、榊祓を捧げて行く。次に黃衣神人御先行、御神木、(神主神官束帶)・次に關白殿、前驅四人・殿上人二人、御裾をもつ。隨身十人二行、次

に鷹司殿・九條・一條殿・今出河大納言公直卿・花山院大納言兼定卿・坊城中納言俊冬卿・四條中納言隆家卿・西園寺中納言公永卿・四條宰相隆右卿・洞院宰相中將公頼卿・左中將忠頼朝臣・右中將季村朝臣・右中將親忠朝臣・左中辨嗣房朝臣・左中將基信朝臣・中御門左少辨宣方朝臣・右中辨資康朝臣・左中辨仲光朝臣・左少將爲有朝臣・右少將兼時、次南都大衆二行步行、頭を包み法螺を吹く。次和州の氏人數百人二行。其夜子の刻、南都御歸座。

貞治五年（南方正平廿一年）二月、南方の官軍和田・楠等以下數百人、八幡へ發向。入洛すべくやと云々。

同下旬、京都より、佐々木高秀以下數千人、八幡へ發向。合戰すと云々。

三月十一日、和田・楠等退散。

八月、修理大夫入道道朝、越前に於て卒す。其子義將降參して、上洛すと云々。

道朝死去

貞治六年（南方正平廿二年）正月、嵯峨法輪寺炎上すと云々。

三月廿九日、京都内裏に於て、中殿御會題は、花多二春友一と云々。

同日、天龍寺炎上すと云々。
去ぬる二月、東國宇都宮氏綱幷に平一族等、南方の御方に參り、兵を擧げ蜂起す。
鎌倉左馬頭殿病に依つて、其子金王丸を大將とし、上杉等以下發向。武藏國河越城を打卷きて攻め戰ふと云々。
四月下旬、鎌倉左兵衞督基氏、逝去すと云々。年廿八と云々。
五月、武家の沙汰として、南禪寺造營ありと云々。
六月中旬、南禪寺僧、園城寺の兒を殺害するに依つて、寺門の衆徒鬱憤。數百人南禪寺に發向。僧俗數十人打殺すと云々。
閏六月上旬か、河越の城落つ。平一族等、伊勢の國へ沒落。北畠殿に屬すと云々。
宇都宮氏綱、降參すと云々。
八月十七日、京都內裏に於て、最勝講を行はる。第二日、南都・北嶺、南殿に於て、鬪爭の事あり。堂上血を流し、創を被むる者五十餘人。損命の者、數輩に及ぶ。併ら着座、公卿・僧綱恙なし。希代の珍事、言語道斷。

義詮薨去

九月下旬より、將軍異例と云々。
十月上旬、細河右馬頭頼之、執事職を司る。
十二月七日、將軍逝去。年卅八と云々。
同十二日、衣笠山の麓等持院に葬る。寶篋院と號す。法名は道權。道號瑞山。鎖龕は東福寺義堂。起龕建仁寺周澤。奠湯萬壽寺桂岩。奠茶眞如寺清誾。念誦天龍寺春屋。下谷は南禪寺定山たりと云々。
十二月晦日、持明院の上皇より、從一位左大臣をおくらる。勅使右中辨定顯朝臣と云々。
貞治七年（南方正平廿三年）二月、京都改元、應安元年とすと云々。
四月中旬、細河右馬頭頼之、從四位下に敍し、武藏守に任ずと云々。
九月中旬、鎌倉の執事上椙民部大輔憲顯、卒するの間、同能憲・同朝房、執事の事を司ると云々。
十一月、鎌倉金王丸敍爵。氏滿と號すと云々。

十二月三日、故將軍の男春王殿、征夷大將軍に任じ、從三位左中將に任ず。 勅使右大辨資康卿と云々。

正儀降參の風聞

應安二年（南方正平廿四年）正月、南方の大將楠左馬頭正儀、種々謀を獻ずと雖も、諸卿御許容なきを以て、南方を疎じ、京都へ降參すべき由、內々相約する由風聞。

後村上天皇崩御

二月中旬より、南山の帝、御不豫たりと云々。

三月十一日、南山の帝崩御。 壽四十二と云々。

同十三日、如意輪寺に葬り奉ると云々。

先帝後醍醐御遺敕に依つて、御在世の中、御讓位なく、又御剃髮なしと云々。

帝崩御、悲歎の餘り、北畠右大臣顯信公、剃髮せらると云々。

後龜山天皇御即位

四月廿九日、皇太子熙成親王受禪。 先帝を後村上天皇と追號し奉ると云々。

五月二日、二條左大臣冬實公、關白に任ず。

正儀降參

去ぬる四月中旬、楠左馬頭正儀、終に志を變じ、入洛して新將軍に謁し、南方へ服從せず。 其子正勝・同正元等は、南方へ忠義を存し、父と不和なりと云々。

和田和泉守、又南方へ忠を盡し、正儀と不和と云々。

九月中旬、伊勢の國司内大臣顯能公の軍士、土岐・仁木等と合戰。武家方敗北すと云々。

十月、顯能公、同國三重都に發向、所々合戰、城數箇所を打破ると云々、

十一月、京都の執事細河賴之、法勝寺の延豪僧正を以て、南方へ奏し申す。元弘以前の如く、大覺寺殿と持明院殿と、代る〳〵御在位あつて、神器還幸、南北和講し南帝御入洛あつて、公家・武家本領、元の如く違反あるべからざる旨、奏聞すと云云。併ら南方に、聞召入られず、空しく追上せらるゝの由風聞。

十二月上旬、和田和泉守と、楠正儀と不和。既に合戰に及ばんとすと云々。

同十一日、先帝の御后、近衛關白經忠公の御女、當今の御母后なり。院號蒙らせ給ひ、嘉吉門院と申し奉ると云々。

同十二日、和田和泉守・越智・三輪等以下、官軍數百人、赤坂の城に發向。楠正儀を攻めんとす。正儀和を乞ふ。和田等怒を抑へて歸ると云々。

同廿四日、新將軍義滿公、中納言に任じ、左衞門督を兼ぬと云々。

同廿八日、從二位に敍すと云々。

去ぬる十月上旬、鎌倉氏滿の命を受け、上杉彈正少弼朝房・小山・宇都宮・千葉・佐竹等以下數萬人、信濃國に發向。彼國には、宗良親王、去ぬる正平の初めよりおはしますなり。其國の輩從ひ付きて、數千人を率し、大河原の城に陣して、鎌倉勢と、合戰度々に及ぶ。彼國、元來寒國たるの間、既に十月より雪降り、寒氣甚しきが故、總軍屈して、はか〲しく戰はず、矢軍にのみ日を送ると云々。

同晦日、南方改元の沙汰ありと云々。

應安三年、南方改元、建德元年と號すと云々。

二月、南山の新帝、住吉行幸。諸卿供奉。和田和泉守廷尉たりと云々。津守國量が家を皇居とす。國量、正四位下に敍すと云々。

同廿七日、住吉より御出。西の刻、南都へ入御、招提寺を皇居とす。

廿八日、春日御社參。東大寺・興福寺諸堂御順禮。申の刻、招提寺に還御。

廿九日午の刻、招提寺を御出。其後三輪御社參。

三月朔日、吉野に還幸と云々。

五月廿二日、京都より宇都宮氏綱等、新將軍幷に管領、武藏守の命を受け、數千騎の兵を引率し、南方を討たん爲めに、木津に陣す。明日南都へ入るべき由云々。

廿三日辰の刻、京都の諸軍勢、般若寺に着陣。二日滯留。

廿五日巳の刻、南方へ發す。

今日聞く、南方の大將和田和泉守以下、吉野より發して、來り向ふと云々。

廿六日、三輪に於て合戰數刻。武家方敗北。死人數を知らず。

四月朔日、宇都宮以下京勢、和州を捨て、河内路を經て、紀州へ發向すと云々。

二日、京都より、重ねて遊佐・譽田等以下數百人、宇都宮が後援として、紀州へ發向すと云々。

五月上旬、粉河寺邊に於て、湯淺・山本・恩地・贄河以下の官軍、京勢と合戰。

七月上旬、宇都宮氏綱、紀州の陣中に死する故、京勢氣を失ひ、悉く沒落、官軍追懸

けて、敗軍を討つ。死人・生捕數を知らず。
八月中旬、伊勢の國司顯能公、伊賀の國へ發向。所々合戰。服部・河上悉く降參し、國司の武威以ての外と云々。
九月下旬、顯能公の軍勢、江州へ發向。佐々木等馳せ向つて、信樂に於て合戰。佐佐木敗北すと云々。
十月上旬、國見山の邊にて、重ねて合戰數刻と云々。
十一月中旬、南山の新帝の敕を受け、和田和泉守以下、官軍數千人を率し、楠正儀が赤坂城を打卷きて攻むると云々。
同下旬、和田等が武威以ての外。楠既に敗北。殆ど危しと云々。
同廿八日、楠を援けん爲め、京都より、執事細河賴之幷山名義理・同氏清等以下數萬人、河内に發向すと云々。
十二月四日、和田等の官軍、山名陣を襲うて、合戰すと云々。山名既に敗北の所、細河が勢、後陣より進みて戰ふ。南方の軍無勢なれば、勞れて敗北すと云々。細河跡

洛し、山名氏清は、河内國に留まり、南方の押たりと云々。

細々要記　六　終

細々要記七

應安四年南方建徳二年二月、京都より、今河伊豫守貞世を、九州の探題になさる。貞世、筑紫に發向すと云々。

是れ菊池等の官軍、武威以ての外、九州既に南方に服從するの由風聞。依つて發向すと云々。

三月十一日、南山に於て、後村上帝三回忌の法會、御修行と云々。

廿一日、京都に於て、持明院の帝受禪と云々。

六月、國司北畠殿、同國阿野郡へ發向。土岐世保等と合戰。武家方敗北。北畠殿、阿野郡を領せらると云々。

此頃聞く、信濃國に於て合戰。去々年より當年に至り、雌雄決せず。上杉等屈して退散すと云々。

今河貞世菊池と合戰

十一月聞く、今河貞世、筑紫に發向。其後菊池等の官軍と、所々に於て度々合戰。武家方敗北し、死人數を知らずと云々。

應安五年南方建徳三年三月上旬、國司顯能公、數千人を率し、同國朝明郡へ發向。仁木等と合戰度々。武家方敗北。仁木以下沒落すと云々。

同廿二日、南方改元、文中元年と號すと云々。

四月下旬、管領細河頼之、南方へ發向。八幡に陣す。京都の軍勢、追々發向。既に數萬人に及ぶと云々。八幡に暫く逗留せしむるの中、故あつて頼之執事を辭し、西山西芳寺に蟄居すと云々。

五月上旬、新將軍、赤松入道妙善を以て、頼之を召し返し、本の如く執事職に補すと云々。

今河貞世敗軍

此頃聞く、九州の合戰、武家方敗北。今河貞世、僅に打なされ、既に沒落に及ばんとする由云々。

五月中旬、大内介義弘、九州へ發向。今河等を扶けんが爲めと云々。

八月上旬、和田和泉守等以下の官軍、重ねて楠正儀が城を攻む。山名氏清、去ぬる頃より河内にあり。正儀・氏清發向して合戰。楠・山名等敗北すと云々。是に依つて京都より、細河・佐々木等以下數千人、河内に發向すと云々。
九月六日、雙軍合戰、數刻に及ぶ。南方勢微少。終に敗北すと云々。
十一月上旬、南方に於て、北畠顯能公、右大臣に任じ、從一位に敍すと云々。
應安六年南方文中二年三月、新將軍の命を受け、細河兵部少輔氏春、數千人の軍勢を率し、尼崎に發向。南方へ向はん爲めと云々。
同中旬、細河以下の京都の軍勢、河内へ發向。天野邊に陣すと云々。
和田・恩地・湯淺・山本等以下の官軍、河内に發向すと云々。
六月上旬、大明の使僧來朝して、入洛すと云々。則ち大龍寺に在留すと云々。去ぬる頃より、大明、使を日本に渡す事、三度に及ぶと雖も、筑紫に於て、菊池武政之を押へて、京都に上さず。征夷大將軍宮懷良親王を、日本國王なりとて、使者に謁せしむ。故に遂に京都に至る事なしと云々。新將軍を始め武藏守以下、仰天せらると

風聞。

八月に至り、河內の國に於て、官軍・武家方對陣。京勢、漸く武備緩むを察するか官軍夜討して合戰あり。京勢周章、忽ちに敗北。死人・生捕數を知らずと云々。應安七年南方文中三年正月、伊勢の國司、軍勢を發し、大和に入り服せざる者を討ち、所々合戰。武家方悉く沒落すと云々。

二月十九日、北畠殿、南都へ入り、般若寺に宿陣。

廿一日、伊賀路を經て、勢州へ向はると云々。

三月、京都新將軍、筑紫へ發向すべしと云々。

義滿九州へ發向

十一日、先陣の勢、既に京都を發する由。見物の爲め、貴賤多く參る。

十三日卯の刻、新將軍京都を發す。行粧美麗なりと云々。其勢、二千騎ばかりと云々。

十四日・十五日、後陣の勢、追々發向す。東は駿河より、西、東北・山陰・四國・中國大半發向。其勢十萬人と云々。南方の押として、山名氏淸、又數千人を率し、河內へ發

向。東條邊に陣すと云々。併ら合戰を挑まず。新將軍筑紫發向の間、暫く合戰を相愼む由風聞。
四月三日、南方の官軍楠正勝・同正元・和田和泉守以下、吉野より發して、河内に向ふ。畠山が家僕譽田何某が籠りたる片野の城を攻むると云々。是に依つて山名氏清、後援として發向すと云々。
同九日午の刻、大地震。東大寺の西門顚倒す。其外民家多く破損す。
十二日、片野の城落城。譽田以下沒落すと云々。山名又東條に退く。
十五日、和田・楠、東條へ發向すと云々。其後毎日、野伏軍ありと云々。
十三日、和田・楠等退散。悉く吉野に歸ると云々。
五月、筑紫の菊池が軍勢、長門國へ發向、合戰ありと云々。
八月二日、南山より、和田・楠等以下、南都を經て、八幡へ發向。其勢二千騎計り、今晩木津に宿すと云々。
四日、山名氏淸、河内の國より、八幡へ發向合戰。七日又合戰。兩方死人多し。

十一日、和田・楠等、八幡を沒落。今日南都に到り、招提寺に陣す。

十二日卯の刻、南方の勢、招提寺より吉野へ歸る。是れ合戰敗北の故にあらず。筑紫の合戰、武家既に勝利。殊に近國の武家方、山名が勢に加はり、多勢集まるの間、沒落すと云々。

九月下旬聞く、長門國の合戰、菊池等敗北の間、其勢過半沒落。其筑前・筑後・肥後等の合戰、菊池が勢、以の外現少〔減カ〕、戰ひ難きが故、菊池武政和を乞ふ所、武家許諾せしむるか、和平相調ふと云々。

菊池武政和を乞ふ

十月、新將軍并に諸國の軍勢追々歸洛すと云々。

十一月聞く、菊池和を乞ふといふとも、城々を守り、征西將軍の宮を猶ほ仰ぎて、守護し奉ると云々。然れども菊池が武威、大に衰ふと云々。是に依つて南山方援なく、勢を失ふべきかと云々。

十二月、信濃の宮宗良親王、伊賀路より南都へ入御。東南院へ御入。御供の武士二十騎計りか。東南院に於て、御膳を獻ず。其より春日御社參。諸堂御順禮。中の

刻に及ぶと雖も、直に御出。今晩三輪邊に御止宿かと云々。
應安八年（南方文中三年）二月上旬、南方改元の沙汰あり。天授元年と號すと云々。
三月中旬、京都改元、永和元年とすと云々。
四月下旬聞く、筑紫の菊池・松浦等又蜂起。合戰ありと云々。
五月、和田・楠・恩地・贄河以下の南山の勢、河内へ發向。所々横行。兵糧の料に、麥を取入るゝと云々。山名氏清發向して、少々矢軍に及ぶと云々。
九月下旬聞く、筑紫太宰少貳冬資、京都の命に背き蜂起、合戰ありと云々。
廿二三日、和田・楠又發向。河内國中、兵糧を集むると云々。
廿七日、山名以下の勢發向。合戰所々にありと云々。
永和二年（南方天授二年）二月、京都より、細河兵部大輔氏春・山名義理等、數千人を率し、和州に發向。十日申の刻、南都着陣。
十一日辰の刻、南方へ發す。和田・楠等防戰の爲め、今日吉野より、三輪へ發向すと云々。

十二日、三輪に於て合戰あり。武家方敗北。酉の刻、南都を經て、悉く沒落。手負多しと云々。

三月十一日、南山の先帝後村上帝九回忌たり。如意輪寺にて、御法會御修行。導師賴意僧正務めらると云々。南都へも、御宸筆の法華經一部を納められ、種々御施物あり、勅使右中將具秀朝臣參向。供の武士七八騎。實遍僧正導師たり。其餘僧衆二十口、御佛事修行。

十二日、具秀朝臣、南都を發し、城州笠置へ登山せらる。彼寺、去ぬる元弘元年、後醍醐帝皇居の時、東國の兇徒に燒拂はれぬ。其後建武二年、御造營の御沙汰ありける中、天下大亂に付、中途にして造作を止む。其後亂逆不治に依つて、今に沙汰なし。今年南山の帝御願に依つて、造營の御沙汰あり。具秀朝臣、巡見の爲め發向せらると云々。紀州の山より、材木を轉じ、北畠殿より、人夫を差向けらるべき由云云。十五日、具秀朝臣、南都を經て、吉野へ向はると云々。

五月上旬、北畠守親卿・唐橋經泰卿、南方に於て大納言に任じ、頭能公男顯泰卿、中納

言に任ずと云々。

七月上旬、足利直冬、石見國にありて、京都へ降參すと云々。

永和三年（南方天授三年）三月、和田・楠等以下官軍、和泉路へ發向。住吉天王寺に陣すと云々。

同十九日、京都より、山名修理大夫義理・同氏清以下數千人、攝州へ發向。中島に陣し、毎日野伏軍ありと云々。

三月五日、渡部に於て合戰。武家方敗北。南方の官軍進んで、攝州所々に發向すと云々。

同中旬、細河氏春・畠山等以下、河内へ發向。南山方の通路を塞ぐ。是に依つて和田・楠等沒落すと云々。

七月七日、南山世泰親王薨ず。如意輪寺に葬り奉ると云々。御母后嘉吉門院を始め、悲歎限りなしと云々。

同十七日、南山宗良親王の御子興良王、京都に囚獄せらるゝの所、病に依つて薨ずと云々。宗良親王、悲歎の餘り、長谷寺に入りて出家すと云々。

八月九日、宗良親王剃髮。染衣たりと雖も、敕に依つて北國に發向の由。今日午の刻、南都へ入御。御供の武士二百騎計り、諸堂御順禮の上、伊賀路に向はる。
九月下旬、伊勢の國司顯能公、數百騎を率し、伊賀國の兇徒を討平ぐと云々。
十月、和田・楠以下の官軍、河内へ發向。所々横行、兵糧米を取る。京方の軍士、馳せ向つて合戰すと雖も、官軍戰ひ強く、武家方敗北。多く討取らると云々。

細々要記七冊、興福寺實嚴僧正所記也。其所載、建武元年正月に始り、永和三年十月に終る。興福寺金堂什物也。

天正十九年十月　寫了

細々要記 七 大尾

底倉之記

新田義陸兵を擧ぐ

御越原合戰

文中二年、新田武藏守義宗・脇屋右衛門佐義治二人、上野國新田を出て、信州より山道を經て沒落、四國へ渡り、河野の一族を賴み、潛み居る。義治の男相模守義陸、（母世良田右京亮女なり、）新田に殘り留まる。天授元年十一月、雪中を凌ぎ、俄に奥に赴き、伊達大膳大夫行朝・田村莊司を語らひ、義兵を起さんとす。伊達・田村、元より宮方北畠の麾下にて、忠義を存するの所、北畠沒落の後、勢を失ひ時を待つ折にて、頓て同意して、信夫を催すに、是も一議に及ばず同志す。猶ほ軍兵を催し集め、天授二年正月二十日、相馬へ出張す。相馬顯胤も、（幼名松鶴丸、）常州小田治久父子へ、援の勢を催し討出づる。同廿四日、御越原に於て合戰、敵・味方討死多し。其夜、義陸手勢二百人計り、小田が陣へ夜討す。治久敗軍し逃走す。義陸自ら武勇を振ひ、治久が二男左衛門久將をさげ切にす、其外、首を討取ること多し。伊達・信夫、其形勢に應じて、相馬が陣を討

相馬顯胤敗北

伊達宗朝等歌姫の城を陷る

結城親朝宮方を襲ふ

破る。顯胤敗北す。同廿六日、義陸以下諸軍を率ゐて、相馬が居城高志山を攻むる。城兵能く拒ぎ戰ふ。故に二月七日、義陸・伊達・信夫、相馬を引拂ひ、白河領へ亂入す。田村庄司は、留つて高志山に對し、向陣を取り、顯胤と戰ふ。同九日、白河の結城彈正親朝父子、一萬餘騎を引率し、小見原へ打出て防がんとす。同十一日、宮方伊達二郎宗朝・伊達安房守、一千餘の兵を率ゐて、結城が一族、羽田根備中守が籠る所の歌姬の城を攻むる。同十三日落城、備中守以下戰死す。親朝、後詰とて出てけるが、其甲斐なきを憤り、其夜は歌姫のあなたに、宿陣の體に見せ、十三日の夜の月に乘じ、國見山の峠をはね越え、味方の本陣を襲はんと、未だ明け果てぬ霞がくれを、驀地になりて押寄せたり。味方は油斷の折節にて、陣々、上を下と騷動す。されども村野新三郎・沼山掃部助・垣原右馬允、鎧投げ懸け、大童にて面も振らず、敵の中へ駈入り、戰ひける隙に、面々、鎧投げ懸け打つて出て防ぎ戰ふ。敵、昨日の鬱憤を散ぜんと、命を惜しまず戰ひけるに、味方の先陣、村野・垣原以下、一足も引かずして討ちける間、敵、彌〻氣を失つて、喚き呼んで駈立つる。行朝、後陣より之を

見て、いひ甲斐なき者共かな。彼程の敵に負くるやうやある。いて一軍して見せんぞと、眞先へ馳出でられければ、鷹取内藏助・神保伊賀守・片倉小三郎行綱等、我も我もと駈入りて、右へ追靡け、左へ追靡け、爰を先途と戰ひける。義陸は五六町を隔てゝ、追はれけるが、白河勢不意に起り、伊達が陣危しと見て、信夫勢と一手になり、山の岨を敵の弓手へ押廻し、十王堂の森の陰より、中黒の旗を颯と差上げ、喚き叫んで駈けられたり。白河勢、之を見て、すはや横合より敵のかゝるよと、いふ程こそあれ、色めき立つて見えければ、行朝・義陸、氣に乘つて八方を拂つて蒐りたれば、さしもの大軍、崩れかゝつて敗北す。親朝、大音揚げて、穢し、者共返せ〳〵と、踏み留つて下知しけれども、皆耳にも聞入れず、我れ先にと逃行きける。折節歌姫より引返す伊達二郎・同安房守が勢、前を遮り攻めければ、敵、いよ〳〵散々になつて、討たるゝ者數を知らず。同十九日、白河近く寄せかけたるに、早馬到來して、南部下山の者共、武家方にて伊達へ寄する由、又常州には、小田・佐竹・相馬の後詰に、大軍を催し來る由、告げ來れば、行朝・義陸、三方に敵を受けては、由々しき大事なり。

新田義陸靈山に居城

新田義陸相馬顯胤合戰

義陸敗軍

今度に限るまじ。又こそ出勢致さめと、陣々を引拂ひ、高志の陣へも知らせければ、田村庄司も、相馬の陣を引いて、鷹飼が岡にて一所になり、己が居城へ歸る。新田殿は、國司の故城靈山城を修理し、居城とせらる。是より奥州動亂して、宮方・武家方相交り、所々合戰止む時なし。義陸、奥州に武名ありければ、越後・上野に殘り居つる一族、忍び〳〵に奥州に來る。其人々には、一の井左京亮・堀口四郎・世良田美作守滿氏・同七郎・鳥山彈正少弼・同三郎左衞門・羽河源藏人・同彌三郎・田中兵庫助・舟田長門二郎等ぞ參りける。六月下旬、義陸、一族郎等幷に信夫太郎相語らひ、三千餘騎重ねて相馬へ寄せらる。顯胤も討つて出て、鳥鵜崎にて相戰ふ。七月三日、顯胤、謀つて間道より、密かに五千餘騎を屯なし、信夫郡へ押入り、在々に火を懸け燒拂ふ。義陸、之を聞きて取つて歸し、鉢岡に出逢うて攻め戰ふ。軍半にして、味方討死多く敗軍す。相馬勝つて追討ちける間、鳥山三郎・羽河源藏人・矢島九郎、引返し討死しける間に、義陸、虎口を遁れ、靈山の城に入る。其年も爭擊の間に暮れ、明くれば天授三年正月元日の椀飯、由良上總介獻上す。故新田殿の時、上總介が父、

越前守光氏椀飯しける例なり。三日、信夫太郎來つて新年を賀し奉る。義陸朝臣を始め、一族郎等へ甲冑・太刀・刀・衣服迄、殘るかたなく引參らす。由々しく見ゆ。三月、堀口四郎貞元、(堀口貞滿三男、)忍んで上野に行き、殘り居ける一族を催し、旗を揚ぐべき計略をなす。世良田大炊介政義・桃井右京亮・同和泉守貞(職カ)相共に與力のものを語らふといへども、武家方の威に怕れて、一味するものなく、行くべきこと共見えず。六月半、信夫太郎藤原重信が女の、今年十七になられけるを、義陸朝臣の御臺に迎へらる。義陸、未だ妻室なきに依つてなり。信夫もさる剛の者なり。佐藤太秀鄕九代の後胤、佐藤庄司元治五代の孫、奥州には無雙の弓矢取、殊に宮方無二の者なれば、迎へ給ふとぞ聞えける。同廿五日、吉日とて輿入あり。當參の一族郎等參り集うて饗應あり。伊達・田村、使者を進らせつ。天授四年三月、義陸朝臣、信夫太郎と相共に、三千餘騎にて白河表へ打入り、田北の鄕にありける栗谷新左近入道が館を攻破り、栗谷父子を討取る。結城父子も、頓て後詰に出でけれども、味方足早に軍勢を退けて取合はず。同五年三月初、伊達行朝・同二郎宗朝六千餘騎、靈

新田結城合戰

山城へ參りければ、義陸、其勢を合せ一萬餘騎、伊來洲の渡をして、三日市棚倉を打通り、相馬へ進發す。相馬もさる兵なれば、頓て七千餘騎、寶の原へ打つて出て、兩陣相支へて、未だ戰はざるさきに、顯胤が賴み切つたる郎等、長谷孫六左衞門一族百餘人降參して、宮方の勢に相加はる。味方は物初よしとのぞきて、同十二日の卯の刻に、三手に分れて押寄せたり。先陣は伊達二郎宗朝・豐原九郎左衞門尉・片倉小三郎三千餘騎、射手を左右より進ませて、驅手は後に控へたり。二陣は伊達行朝・田村庄司三千八百餘騎、鶴翼に備へて進みたり。義陸朝臣は、五六町引きさがつて、諸將の命を司り、信夫太郎・同小二郎信春・大江田・鳥山・世良田・桃井・大館以下の一族都合三千餘騎、中黑の旗に十餘旒、山風に吹靡かせ、後陣に備へて進みたり。相馬も兵を三手に分け、魚鱗になつて懸り合ひ、兩陣互に鬨を作り、矢一つ射違ふる程こそあれ。入亂れ追ひつ返しつ戰ひけるに、やゝもすれば、相馬勢、引色に見えければ、得たり賢しと、伊達勢の早雄の者共、我も〳〵と、えいや聲を揚げて、攻立て攻立て揉うだりける。顯胤も後陣の荒手をかつて、千騎が一騎になるまで、引く

な引くなと下知して、今日を限と挑み合ふ所に、行朝、後陣より又兵を進め、義陸朝臣の勢は、馬手の縄手を取廻し引廻らんとするを見て、顯胤、叶はじとや思ひけん、

相馬顯胤敗軍

高志山を指して引退く。味方氣に乘つて、一騎も餘さず討取れと、八方より取込んで戰ふ。中にも片倉小三郎行綱、五尺三寸の大太刀をもて、あたるを幸に切つて廻る。其勢に數千の敵開け靡き、只我れ先にと逃げたりける間、討たるゝ者數を知らず。眞白峠の坂口にて、相馬が一騎當千と賴みたる、金田四郎・千秋二郎左衞門尉・武田孫二郎入道、踏止つて討死しけるまゝ、顯胤、希有に免かれて、高志山へぞ引きたりける。同十四日の午の刻、義陸・行朝、高志山へ押寄せ、持楯・下楯かつぎ寄入り、かへ〴〵息をもつがせず攻め立つる。城兵も爰を破られじと、矢倉より矢種を惜まず射出し、大木・大石を投げかけつゝ防ぎける故、毎日々々手負のみ多く、仕出でたる事もなし。斯くて十餘日過ぎけるが、片倉小三郎が手の者に、小賢しき者のありけるが、所の者を招き、引出物とらせすかして、案内を尋ぬるに、彼の者申す樣、

高志山城の要害

此城三方は、坂なだれ平地に續きたれども、堀深く塀高し。上り越すべき便なく

候。後は山深く道もなし。さり乍ら樵の通ふ道一筋候。其を行けば、城の巽に當る堀際へ分かる難所を頼み、堀も掘らず、塀もさまでに候はずと申しける間、月晴く雨降る夜を待ちて、三月廿七日の夜、雨、篠を突くやうに降り、雷さへ鳴り騒げば、願ふ所の夜と打立ちける。其人々には、大江田左馬助・世良田七郎・舟田長門二郎・大館彌三郎、伊達勢に片倉小三郎・二階堂勘解由左衛門尉、信夫勢に信夫小三郎・下方八郎を始め、英卒を勝つて三百餘騎、案内者を先に立て、山道へぞ分入りける。元より嶮しき難所なるに、雨風烈しく、目ざすともしらぬ暗き夜に、松などをも燈さねば、只先なる者の聲に付きて、木の根・岩角に取付きて、三時計り、辛うじて、三つ過ぐる頃、城の巽の際へぞ着きたりける。聞きしに違はず、堀も掘らず、塀々も低く、是ぞ番の兵よと覺えて淺ましげなる、下部十餘人、篝火のたきすさりたる影に、眠り居たり。頓て堀を乗り越え、所々の役所の軒に火をさし、打散つて鬨の聲を揚げたれば、山彦答へて夥しく聞ゆ。城中思ひ寄らざる事なれば、何所より敵の攻入りたるぞ。返り忠の者こそあんなれと、騒ぎ罵り、鎗・刀に二人・三人取付き、

我れよ人よと引合ひ、繋げる馬に鞭を打たれ、一人敵に討合はんずる者なく、ひた騒ぎに騒ぎ立つて、同士打する者多く、己が太刀・刀に貫かれ、自ら疵を負ふもあり。寄手は、すは相圖の火の手を揚げたるぞ。折合ひて高名せよと、勝鬨を作り攻上る。顯胤、今は是迄と主従廿四人一所になり、向ふ者に走り懸り、命を限に戰ひけるが、猛火、城中に滿々として、面を向くべきやうもなければ、叶はじとや思ひけん。一方を打破り、雜兵に紛れて落行きける。夜軍の事なれば、大將よと見て討留むる者もなく、左右なく相馬を漏しける。去れども、相馬が頼んだる一族に、左近大夫盛胤・御刈屋掃部助・南條伊豆守を始めとして、五百八十餘人討たれける。義陸・行朝、軍に打勝ち氣色ばうて、三日市まで打納め、其所にて又軍評定ありて、白河へ攻入らんと用意しけるが、鎌倉の氏滿、大軍を以て寄する由聞ゆ。さらば足長に打出て、大勢に圍まれては叶ふまじ。待ち軍こそ味方の利なれと、義陸・行朝退いて居城に歸り、猶も兵を集め、矢じりを磨かせ、鎌倉の勢をかへへんとす。鎌倉へは、常陸・奧州兩國の早馬、櫛の齒を挽く如く、新田義陸、奧州に起り伊達・信夫の勢を以

桃井大館等結城の一族を攻む

て、相馬を攻破る由、告げたりける。氏滿を始め、上杉安房守大きに驚き、八州の軍勢を集め、進發せんとせられけるが、其頃、關東八箇國疫癘行はれて、やみ臥すもの多く、其上、死する者多かりければ、一日々々と延引しける。剩へ、八箇國の内、宮方の餘黨蜂起し、所々に軍ありければ、大名・小名己が國を捨て、他國へ出でん事叶はじと、催促に應ぜず。上杉、今は詮方なく、出羽・奥州・常陸三箇國の者共に、義陸を討つて參らせよ。過分の恩賞を與ふべしとぞ、觸れさせける。されども伊達・信夫の間は、無■の宮方にて、誰一人、義陸を討たんとする者なく、其上、相馬落城の後は、勢、近國に振つて、隣國よりも、左右なく寄すべきやうもなし。九月十二日、義陸朝臣、靈山に其身はありながら、桃井治部大輔・大館彌三郎氏忠・世良田美作守兄弟五百餘騎、白河へ打入り、結城が一族に、鷲塚の香草七郎左衛門尉が館を攻むる。香草も大剛の者にて、あり合ふ者二百餘騎、木戸を押開き、むづと渡り合ひ、世良田七郎、一丈計りに見上げたる、樫の木の棒の八角にして、兩方に石突入りぬるを縱横に打振り、敵兵數多打居たり。香草は安からぬ事かな。遁すまじと大太刀

をさしかざして、驀地に討ちかゝり戰ひけるが、香草は、太刀を鍔元より打折られ、世良田は、棒を手元二尺計りに切りなされ、頓て兩方組合ひ、馬より落ち、上を下ところびけるが、世良田若黨、主を討たせじと下り合ひて、香草が首を掻く。大將討たれて殘る勢は散り〴〵になりぬ。味方は香草が館を燒拂ひ、勝鬨作りて引納めける内、廿二日、御臺所、平産、殊に男子におはしますなれば、義陸、斜ならず悦び給ふ。鶴壽殿とぞ申しける。同十月三日、伊豫國より若林九郎入道、忍び下つて去る年、義陸の父君義治朝臣、卒去の由告げたり。路遠しとはいひ乍ら、年隔つる迄、知らざりける事の便なさよと、義陸の哀み給ふ事大方ならず。數多の敵國を隔てたれば、風の便もしがたくて、打過ぎける不孝の程、冥途黄泉にて、如何に父に面を向くべきと、せめての事にはかこたれける。悦の中の悲み、吉凶相雜る。義陸朝臣、普門品卅三卷を書寫し、莊嚴寺にて供養あり。天授六年二月、吉野殿より敕使として、唐橋左馬頭經氏下向、義陸を四位の少將に任ぜられ、出羽・奥州兩國の管領を許さるとの間、早く朝敵追伐の謀を巡らし、宸襟を休め奉るべき由、綸旨を賜

ふ、此經氏は、桓武天皇の後胤、唐橋大納言平經泰の嫡男なり。經泰、(中納言宗經男、)未だ修理亮と申しける時より、北畠顯家に從ひ、奥州にありて度々戰功あり。顯家卿討死の後、顯信に從ひ猶ほ奥州に居す。伊達行朝の妹を最愛して、此經氏を生みける。顯信公奥州退去の時、共に吉野へ參つて、當時南朝に候す。其頃は經氏未だ、幼くて、奥方の事はさだかならねど、伊達は母方に付きて叔父なり。信夫・田村も、經藤とは年頃のむつびありと、强ひてとゞめける故、奥州に留りける。今年も義陸、度々白河へ打出でられけれども、矢軍計りにて、はか〲しき軍はなし。明くれば弘和元年三月、山路の雪消え、長閑になりける頃、結城彈正親朝父子、會津の蘆名盛運と心を合せ、兩勢二萬餘騎、信夫郡へ寄來る。

結城親朝等信夫へ攻寄す

兼ねて其聞えありければ、義陸、伊達・田村を催さるゝ所に、行朝、病に罹つて出陣なり難く、子息二郎宗朝を大將として、沼山掃部助・豐原九郎・片倉小三郎等始五千餘騎、田村庄司二千餘騎馳せ參る。之を彼れ是れ一萬計りにて、義陸、靈山より出て、淺香山に陣を取り、沼澤を前に當て、尾先々々に押出したり。

義陸結城と對陣す

兩陣相隔る事、二十餘町に過ぎず。味方は小勢なれば、鳥雲の陣を

張り、要害に據つて戰はんとす。敵は大軍なれば、平場へをびき出し、取込んで一時に勝負を決せんと、足輕の射手を出し、わざと弱々と見せ引かんとす。斯く睨まへて日を經るに、結城・蘆名相議して、宮方の勢共、大半討出でたれば、信夫・靈山の城には、さまでの者はあるまじ。小道より密に勢を廻し、兩城を攻落すものならば、敵度を失ひ落行くべし。さらば押懸け〱討つものならば、頓て義陸を討取らん事、掌をさすより易かるべしと、親朝、自ら大將にて、究竟の兵七千餘騎、十七日の子の刻計りに打立ち、瀨山越の細道より押寄する。其夜の明方、かう〱と知らせける者ありければ、義陸、大に驚き敵に後を攻められては、由々しき大事なりと、伊達二郎を相伴ひ、五千餘人を引率し、早や打立ち、急げや者共と、揉みに揉んで、松本・白井の谷間の道を通り、十八日の亥子の刻、信夫の城近き小山へ馳着き、城へも告げ知らせ、敵の樣を窺うて、其夜をおそしと待ち明す。敵は十八日の夜、飯原に野陣をえず。十九日のまだ卯の刻、三手に備へて寄せたりける。味方兼ねて三手に分れ、一手は一の井左京亮・桃井治部大輔・鳥山彈正少弼二千餘騎、大道を前に當

結城親朝敗北

て、天神の森を後に當て、先陣に進みたり。一手は義陸・朝日信夫父子・大江田・大舘一千七百餘騎、先陣より四五町引退き、大道をまたげに控へたり。一手は唐橋左馬頭・伊達二郎・世良田兄弟一千餘騎、茂りたる森の中へ引隱れ、先陣よりまた十町計り、敵近く伏隱れて時刻を待つ。かくとも知らず、親朝は七千餘騎寄せけるを、宮方の先陣、矢一つ射違ふる程こそあれ。無二無三に喚いてかゝる。敵も相かゝりにかゝつて、兩陣互に喚き叫んで、爰を先途と戰ひける。義陸の勢も、進み出て矢を放つ。結城に新手を入替へ〳〵、戰に半と見えける頃、伊達・唐橋が一千餘騎起立ち、どつと叫んで、親朝が本陣へ、まつしぐらになりて駈入り、追立て〳〵七轉八倒して、揉んだりければ、餘り強く驅けられて、敵、馬の足を立てかね、引色になつてたゞよへり。親朝、怒つて、きたなし者共、爰を引いて何方へか返るべき。皆死ねや者共と、身を揉んで、自ら大長刀を水車に廻し、馳出てられけるに、流矢來つて馬の大腹へ、ぐつと射立てたり。馬は屛風を返すが如く倒るれば、乘手、かたへに下り立ちたり。敵、引色になり、而も大將、馬に放れたりと見て、宮方の勢、我れ討

取らんと、群りかゝる。結城が郎等、主を討たせじと押へたて、討死しけるまに、親朝、乘替に乘られけり。先陣・後陣、已に一つになつて、崩れかゝつて見えければ、義陸・宗朝勇み進んで、親朝を遁すな殿原、討てや進めや者共と、自ら眞先に進まれければ、誰かは劣るべき。我も〳〵と進みたる。月の輪の渡の邊にて、親朝、已に危く見えければ、結城が勢に、多加谷左近・蜂屋彈正左衞門尉・森寺入道三騎取つて返し、向ふ者五六人薙伏せ、其身も其處にて討たれける。其隙に、親朝を始め、宗徒の者共落ち延びける。されども行先、野伏共、山々・谷々より起り立ち、爰のつまり、彼處のつまりに道を遮り、鎧を剝取り、太刀を奪取りける間、中々に恥ぢがましき目を見んよりはと、自害する者もあり。生捕らるゝも多かりけり。大將を始め落行く勢、たま〳〵命は生きたれども、赤裸になつて、馬にも乘らず、味方の敗軍を聞き、野伏のかさならず先に引くやとて、淺香山の麓にたまり得ず。二十日の夜、會津へぞ引きにける。味方も內々に異議あつて、續いて攻入らん事もなり難く、一先づ靈山へ歸られける。同二年四月、相馬顯胤、小田・佐竹・吉原を相語らひ、一萬六千

新田義陸相馬顯胤合戰

騎、相馬の高志山へ立歸り、城を築く由聞えければ、其儘に置きなんは悪かるべし。蹈散らせよと下知して、義陸朝臣・信夫太郎・田村庄司、六千餘騎にて討出でたり。敵も一日路進み來り、久保田・行原に相支へて合戰し、辰の刻に軍始り、入替り〳〵戰ひける。晩景になりて、小田治久、後陣より新手を驅つて競ひ討つ。味方、終日の戰に疲れたるに、元より小勢なり。入替る勢なければ、つひに討負けて、右往左往にぞなりにける。羽河源藏人・舟田長門二郎蹈止り、時移る迄支へたれども、續く味方のあらざれば、是もそこにて討たれにけり。義陸朝臣も、引行く勢を延さんと所々にて自ら防矢射、矢種射盡して打物になり、敵三騎切つて落し、我身も内甲・籠手をはづし、膝口三箇所切られて、已に討たれ給ふと見えけるに、由良上總介、只一騎取つて返し、向ふ者七八人、弓手・馬手に薙伏せ、義陸朝臣を肩にかけて落行きける。唐橋經氏・信夫小二郎も大勢に取込められ、薄手三箇所・四箇所負ひ、朱になりて終に靈山へぞ引入りける。

新田義陸軍敗る

去程に、相馬・小田・佐竹、思の儘に軍に打勝ち、時をめぐらさず、靈山の城を落せと、五月朔日、三手に分れてぞ寄せたりける。城には義

相馬顯胤等新田を攻む

新田相馬合戰

陸朝臣を始め、宗徒の人々疵を被り、賴みきつたる者共、多く討たれてければ、如何せんと色を失ふ。されども、城近く敵の寄す先に、快く出合つて勝負せよと、大江田左馬助・大館彌三郎・世良田兄弟・田村庄司以下三千餘騎、富山の鄕にて打つて出て、敵、かゝれとぞ招きける。相馬・小田・佐竹が勢、此頃の軍に打勝つて、氣を揚げける上、纔の小勢と見ければ、何かはきゝ逃すべき。三方より鬨を作り、引包んで一人も餘さじと打ちかゝる。大江田・世良田も、相がゝりにかゝり、一足も引かじと戰ひける。味方小勢なれども、命を惜まず面を振つて打合ひける故、けつく大勢、馬を立兼ね、負色に見えける所に、佐竹が勢に、堀勘解由左衞門・中溝小二郎とて、强弓の精兵、矢つぎ早のありけるが、立並んで差詰め引詰め射ける矢に、羽河三郎・田村庄司太郎・下方八郎を始め、宗徒の人々と、三人射すくめられて動き得ず。射立てられてたゞよふ所を、敵、氣に乘りて、八方より潮の湧く如く、攻懸りければ、味方、討たるゝもの數を知らず。漸々靈山へぞ引入りける。寄手彌〻勇み進んで、城の四方を十重・二十重に取圍み、楯を突きよせ、堀際近く攻めたりける。城にも、櫓より

伊達行朝新山を援ふ

伊達相馬合戰

狹間を開き、矢種を盡して射出し、大石を投懸け、爰を先途と支へたり。靈山、已に取圍まれて、事難儀に及びぬと。追々伊達へ告げたれば、行朝、大きに驚き、即時に軍兵をかり催し、五月十日、靈山に向ひたる荒金山にぞ着きたりける。後詰の伊達勢、近付きぬと聞き、寄手、攻口を差置き、相馬・佐竹・富山の鄕へ張出し待ちかゝる。行朝も、十一日午の刻、富山へ打寄せ合戰す。敵・味方、互に命を限に戰ひけるが、暫ありて引分かれ、人馬の息を休め、又入亂れ、追ひつ返しつ揉合ひたり。今日も片倉小三郎・豐原九郎、先陣の敵數多討取りけり。かくして日も西山に傾けば、兩陣互に引退き、明くるを待ち、其夜、佐竹が手の者三百騎計り、靈山城へ夜打に入り攻戰ふ。城兵世良田七郎、武勇を振ひ、例の樫の木棒を、片手打に討つて廻りけるに、矢庭に二三十人、尻居打居ゑられて働き得ず。自餘の兵も恢へ兼ね、ばつと引いてかへりければ、追打に討つて、宗徒の者少々討取りけり。同十二日、城兵、後詰の勢と牒じ合せ、十三日の卯の刻、城中より數を盡して二千餘人、包み連つて討つて出づれば、伊達勢も同時に敵陣へ寄せたりける。武家方も、兼ねて期したる事なれ

ば、一勢々々討出て〳〵、追ひつ卷くりつ、煙塵を卷いて戰ふ中、世良田七郎、今日も眞先に進んで、當るを幸に薙立つる。或は甲を微塵に打砕られ、或は中天へずんと打上げられ、馬・人共に打倒さるゝもあり。暫時に五六十人、朱になつて半死半生に打ちなやまされける間、小田が勢、其荒になびき、又も一所に集り得ず。後足を踏んでたゞよひ居たり。大江田・桃井、之をすかすな者共と、どつと叫んで蒐りたりければ、敵、怺へかね、右往左往に散亂せり。行朝も、城兵勝軍せしと見て、士卒を勇め、揉みに揉んで進まれければ、相馬・佐竹も、共崩れになつて敗軍、味方氣に乘りて、先日の恥辱を雪がんと、我も〳〵と爭ひ進んで、手負・死人を乘越え踏越え、何所迄も遁さじと、追詰め〳〵討ちたりける。引立つ大勢なれば、返せといふとも聞入れず、捨鞭打つて逃げ行きける。餘り強く追詰められ、是非なく生捕らるゝもあり、甲を脱いで降參するもあり、手負ひて自害するもあり。眞白峠の坂中にて小田治久、百騎計りにて取つて返し戰ひけるが、山良上總介が、能く引いて放つ矢に、治久が鎧の栴檀の木のはづれを、羽ぶくらせめて射とほされ、馬より落ちて死にた

相馬顯胤常陸に沒落

鎌倉攻の評定

りける間、相從ふ勢、一人も殘らず骸を竝べて討死す。宮方の勢は、彌〻勢に乘りて、舍弟の高志山へ寄する。顯胤防ぐべき力なく、佐竹へ賴み、常州へ落行きければ、同年九月、新田下野守行胤は、引分かれ降人になりて、宮方の勢にぞ加はりける。同武藏守義宗男、越後守貞方、上野より奧州に至る。義陸、斜ならず悅んで、總領家にておはすれば、東國の大將軍に仰ぎ申すべしとありければ、貞方、いかで某など左樣の器に當り申すべき。御下知を受けてこそ、進退をいたさめと、大江田・世良田などと、同席しておはしましけれど、國人も崇敬し、兩大將とぞ仰ぎける。斯くて一兩年は、はか〴〵しき軍もなく、野伏軍に過ぎ行きぬ。元中三年の春の頃、南部・下山の一族、武家方として連年、伊達・田村と合戰しけるが、今度和睦してける故、行朝、奧州の障あき、義陸・貞方に議して、鎌倉へ攻上るべき評定あり。是に依つて、若林九郎入道を上野へ差遣し、一族與力の勢を催し、同じく鎌倉へ攻入るべしと、觸れ送る。同四月、南部修理大夫・下山出羽守、靈山に來つて兩大將に謁す。八月十一日、若林入道かへり參つて、越後・上野・駿河の一族與力の人々、同時に義兵を擧ぐべき

由を申す。其人々には、上野に、世良田大炊介政義・桃井和泉守・同右京亮・田中丹後守・堀口四郎。越後に、里見二郎・同越前守・鳥山左近藏人・仁科掃部助・甘糟太郎。駿河に、鈴木越後守兄弟・井出彈正少弼・田貫二郎・同左京亮・宇津越中守を始めとして、一同に旗を上げ、鎌倉を攻むべしと相圖をなす。元中四年二月、伊達・信夫・南部・下山・田村庄司・岩城刑部大輔忠門・相馬下野守以下、靈山に會合して、着到の勢二萬七千餘騎、義陸・貞方兩大將として、白河へ發向す。親朝、之を聞き、今度は宮方目に餘る大軍なれば、平場の懸合は叶ふまじ。難所に引籠り、討出で〳〵防ぐべしと、白河の關を差し固め、渡り櫓・高矢倉、三十餘箇所にかき竝べ、强弓の精兵をすぐり上せ置き、堀裏に大木・大石を積み蓄へ、用心嚴しく待ちかけたり。味方の勢は、三月一日、白河近く寄せたれども、敵、出合はざれば、大勢に氣を呑まれ、臆病神に付きたるぞ。一勢に揉み破れと、さしも嶮しき坂道を、えいや聲を出してぞ上つたりける。關近くなりける時、木戸を押開き、眞先に結城の一族、佐原備前守と名乘つて、龍頭の五枚甲を猪首に着なし、あらひ皮の鎧に、五尺六寸の大太刀を拔きそばめ、

我と思はん者共は、出合ひて手並の程を見よやといふ儘に、大勢の中へ打つて入り續く兵五百餘騎、一樣通連つて喚めいて、切つてぞ出てたりける。宮方の一陣に進んだる南部が勢、遙の谷へまくり落され引退く。二番に岩城・相馬入れ替つて、追ひつ返しつ戰ひける。城兵も佐原討たすな者共と、二千餘騎入替つて戰ひけるに、岩城・相馬二百騎（脫字アルカ）せて引退く。三番に伊達二郎・田村庄司三千餘騎、喚めき叫んて討つてかゝる。中にも片倉小三郎、先に進んで當る敵三騎切つて落し、猶ほ大勢の中へ割つて入り、此處彼處に追詰め追立て、切つて廻る勢、燦然として見えければ、城兵支へ兼ね、木戸より内へばつと引く。伊達が勢、氣に乘りて、矢がかり近く攻寄せたり。初めに懲りて、城より外へ、敵一人も出合はざれば、寄手楯をかざし、射向の袖をさしかざし、一時に打落さんと、揉に揉んで攻立つる。射違ふ矢の雨の如く、喚き叫んで、聲、山に響いてとゞめきたり。されど究竟の要害なり。親朝、大勢にて、しかも爰を先途と支へたれば、容易く落つべきやうなし。夜晝三日攻めたれば、手負死人夥しく出來ければ、四日の朝より攻め、日をつくろいて、諸大將評定あ

つて、此城、中々一時には落つべからず、行末長き戰に、味方を多く討たせて叶ふまじ。兵少々此所に殘し、親朝を押へ置き、總勢は鎌倉へ押通らんと、議せられける所に、蘆名盛連、會津より一萬餘騎、白河の後詰に押寄すると聞えければ、いや〳〵先づ、後の敵を破つてこそ、鎌倉へは通らめと、衆議一決して、白河の攻手に、南部・下山一萬餘騎を殘し置き、自餘の勢は、刀禰原迄引返し、道を遮りて陳を取る。蘆名勢も六日夜、貝塚へ着きたりけるが、宮方の大勢、刀禰原にありと聞き、其夜、座頭ころばしの難所を越え、二日市迄ぞ寄せたりける。明くれば七日の辰の刻、兩陣相近づき、矢合のかぶらを、射違ふる程こそあれ。一陣・二陣入替へ〳〵、討ちつ討たれつ戰ひける。敵は蘆名伊賀守・猪苗代左京亮・朝倉九郎入道等、勇氣を勵し、一足も引かじと、諸人を勇めて競ひ懸る。味方には、岩城・相馬、宮方になりて初度の軍なり。引いて味方に笑はるゝなと、士卒を恥ぢしめ、身命を惜まず挑み合ひたりける程に、日、西山に傾く迄、互に陣を敗られず。敵・味方の討死屍は、積んで山の如く、血は流れて楯を漾はす。戰疲れて、兩陣、東西へ引分かれ、又も一所に打寄る。

そこにて軍は止みにけり。其後、毎日互に足輕の射手を出し、矢軍ばかりにて、挑挑しき軍もなかりしが、同十九日の早旦に、相馬下野守行胤・岩城刑部大輔忠將が陣より、足輕の射手を出し、今日も亦、敵を引きけるが、蘆名勢には、永尾九郎・黒河新左衛門尉等、五百餘騎計り討つて出て、かけ立つる所を、兼ねて期したる事なれば、岩城・相馬が陣より、ひた甲一千騎、くつばみを竝べ、ひしと亂れ合ひて戰ひたり。敵の眞先に進みたる永尾九郎、矢庭に討たれて、其勢、立つ足もなく引退くを、會津の陣より先陣討たすな。つゞけやと聲々に呼ばはつて、朝倉入道新手を率して、打出で〳〵戰ひける。陣の敵、之を見て、出合うて味方を助けよと、我も〳〵と討つて出て、敵味方を二萬五千餘騎、東西へ追ひ靡け、南北へ追立て、煙塵天を掠め鯨波地を動かす。主、討たるれども、郎等は助けず。親、討たるれども、子は知らず。只我れ先にと、手負を乘越え蹈越え、千騎が一騎になる迄も、互に引かじと揉み合うたる。唐橋左馬頭經氏・世良田美作守兄弟は、初めより打出でず。馬手にありける岡山の後を廻り、廿餘町あなたへ打越え、思寄らぬ敵の後より、鬨を作り喚いて

かゝる。激しき軍の習にて、跡を顧みるに間なき折、思ひがけなき後よりかけられて、すはやといふ程こそあれ。先陣・後陣、一所になつて崩れかゝる。宮方は得たり賢しと、爰に追詰め、彼所に追詰め、一人もあまさず討取れと、短兵急に取ひしぐ。蘆名勢に、朝倉入道・槇島藏人・工藤新兵衞尉、穢し返せと、引く味方を押返し、百騎計り命を輕んじ、爰を最期と振舞ひける。彼等が武勇に辟易し、宮方の勢、進み兼ねて見えけるを、大館彌三郎・由良上總介三百餘騎、東西より引包んで討ちかゝる。朝倉・槇島、少しもひるまず向ふ者に逢ひ、手を嫌はず打合ひ〳〵、切つて落すものあり。落さるゝもあり。死生知らずに戰ひけるが、朝倉・槇島、其身鐵石にあらざれば、數箇所疵を被り、今は是迄ぞと呼ばはつて、敵に引組み〳〵、百餘人同じ枕に討死しければ、自餘の勢は、會津を指してぞ落行きける。今朝卯の刻に、軍始つて午の刻の下り迄、討ちつ討たれつする程に、蘆名勢二千餘人は討たれにけり。宮方にも、手負・死人、千三百七十人とぞ記しける。斯くて又、白河へ寄すべしと、宮方の人人、二十日午の刻、刀禰原を立つて、廿一日、白河へ陣を寄す。扨鎌倉へ通るべきぞと

伊達行朝病死

評議して、用意する所に、義陸朝臣・行朝・經氏、邪氣に犯され、身心惱亂しける故、暫く白河に滯留してありけるに、五七日過ぎて、終に果敢なくなり給ひければ、義陸、奥方兩大將を始め、諸軍勢も氣を落し、呆れ果てゝぞ居たりける。其上、義陸朝臣・經氏病惱、甚だ危き氣色に見えければ、先づ一旦歸陣して、療治をも心靜かにし給へかしと、諸人勸め申しければ、兩大將其議に同じ、四月三日の早旦に、白河表を引拂ひ、心靜かに退きける。顯胤、敵の樣を窺ひ、追討にせんと出てたりけるが、世良田兄弟一千餘騎、二十町引後れ、敵かゝらば一軍せんと、些とも疑義せず、引きけるを見て、いや〳〵愁に追駈けて、仕損じては見苦しと、結城も白河へかゝりけり。斯くて追駈くる敵なければ、宮方の勢、事故なく、靈山の城に歸り入り、義陸朝臣の病惱を保養し、醫療、手を盡して聞えけるが、秋に至り、漸く平癒の氣色に見え給ひければ、諸人安堵の思をなし、悦ぶ事限りなし。伊達は、行朝死去の後、宗朝相續して、忠義たゆまず二心なく見えける間、義陸、奥方頼もしく思しける。扨、鎌倉の進發を急がれけれども、今年は奥方飢饉にて、兵糧の用意乏しく、異議さま〳〵あり

て事行かず。只今日よ明日よと延引して、元中五年になりにけり。春になりて、愈、鎌倉へ進發あるべき爲め、諸軍勢を催し集め、三月朔日、門出せんとする所に、結城親朝・蘆名盛連兩勢合せて二萬餘人、去年の鬱念を散ぜんと、逆寄に寄せ來り、安達が原へ打出て、黑塚に陣を取り、兵を分ち方々へ差遣し、在々所々燒拂ふ。宮方も願ふ所の敵の働よ。蹈散らさんと、世良田美作守・同七郎・大江田左馬助・信夫小二郎・伊達安房守師宗・相馬下野守・下山太郎相集つて七千餘騎、月の輪の渡を刎越え、福島の宿の端より、敵の本陣へ無二無三に懸つて、打破れと見つくろふ。打散つたる敵共、驚いて急に一所にならんと、騷ぎける間、結城・蘆名が本陣も騷動し、色めきけるを、得たり賢しと、味方、眞白幕になつてかゝつたり。伊達二郎宗朝も、三千餘騎にて打出てけるが、淺香山の麓を押廻し、一本松の東より、一手になつて、敵の後へ喚いて、どつと懸りたれば、白河勢、一戰にも及ばず、只我先にと引きける。結城勢の中に、佐原備前守・中村孫六、二騎取つて返し、防ぎ矢射けるが、矢種盡して、打物になりて、當るを幸に切つて廻り、矢庭に十騎計り、屍を竝べて切伏せた

結城蘆名再敗

れば、宮方の兵、此勢に恐れ、近付く者もなかりけり。佐原・中村、猶も進んで蒐入りけるを見て、蘆名盛連三百騎計り、取つて返し、佐原討たすな。中村を助けよと、喚き叫んで戰ひたり。味方餘りに長追して、兵、まばらになりてありける故、動もすれば追立てられ、すはや又、負色になりぬと見る所に、伊達二郎が勢に、精兵の射手多かりける間、十餘人立竝べ、矢種を惜まず、散々に射たる矢に、中村孫六、内甲を箆深に射させ、眼くるめき、片へにどうと倒るれば、信夫が郎等、走り寄つて首を取る。其外の者共も、矢二筋・三筋、射つけられて動き得ず。盛連も叶はじとや思ひけん。佐原備前守が、手負ひて引兼ねたるを助け、五十騎計り一つになつて、れつれつと引退く。味方も戰ひ勞れ、さのみ長追無益なりと、勝鬨を作り引納めける。結城・蘆名、二度の負して退きければ、宮方は、勢、遠近にふるひ、勢のつく事雲霞の如く、同十一日、義陸・貞方、安達が原へ打出て、着到を付けらるゝに、都合三萬五千餘騎とぞ記しける。さらば此時をはづさず、白河を一攻して、親朝を討取れよと、先づ白河へぞよせたりける。かゝる所に、相馬・小田・佐竹・吉原、常陸より二

萬餘騎にて、久保田迄寄せたりける由、早馬、頻波を打つて告げたりければ、後に敵ありては、味方、度を失ふべし。爰をば打捨て、常州の寄手を討破り、常陸・下總を攻取り上らんも宜しかるべしと議して、義陸、諸軍を引返し、伊來洲の渡を前に當て陣を取る。同廿一日、常州勢、寄來り、河を隔てゝ陣を取り、互に射手を出し、矢軍して爰を渡せと招きける。此河、さまでの大河ならねど、此頃春水に、水濁りまして、渡るべきやうも見えざりけるを、伊達宗朝、先陣にありて兵を下知し、いつ迄、睨み合うてあるべきぞ。馬强なる若者共、渡せよやと五十餘騎、犇と河端へ打臨み、同時に馬を打入れ、漲り落つる瀨枕に、逆浪を立てゝぞ泳がせける。敵は渡させじと、河端に射手を揃へ、差詰め引詰め散々に射る。伊達勢、安藤彥三郎・水股十郎等、河中に射落さる。されどもひるまず、えいや聲を出し、流を切つて向ふの岸へ喚いて上る。相馬顯胤三千餘騎、相がゝりにかゝつて戰ひたり。義陸朝臣、後陣より河は淺かりしぞ。渡せ〳〵と下知せられければ、三萬餘騎の大軍、一度に河へ打入つて渡したれば、人せきにせかれて、水分れ、中々河は淺かりけり。敵も上

げ立てじと、一同に討つてかゝり、爰を先途と支へたり。討つもあり、討たるゝもあり。互に命を惜まず、一足も引かじとぞ振舞ひける。義陸朝臣、自ら先陣へ進み、兵を下知してはしける所に、流矢一筋來つて、馬手の足、膝の節を裲つぼへ、つと射通し、馬の太腹へ、うらかく迄ぞ立ちたりける。さしもの猛將なれども、痛手なれば馬より眞逆さまに落ち給ふ。傍にありける由良上總介、馬より飛んで下り、引起して馬にかき乘せ引退く。味方の兵、是に氣を落し、戰はんとする者なく、我先にと引退く。敵は勇み進んで、大將義陸を討取りたるぞ。進めや〳〵と、聲々に叫んで追蒐る。河内へ追入れられ、討たるゝもの數を知らず。たま〳〵返して戰ふ者は、續く味方なければ、勞れて其處にて討死し、手負ひて生捕にせらるゝもあり。世良田七郎、味方の甲斐なく討負けたるを、よに無念に思ひ、只一騎河端より取つて返し、追駈くる大勢の中へ割つて入り、蜘手十文字に駈通り、巴の字に切つて廻り、縱横無盡に駈立てたるに、敵あしらひ兼ねて、只此處彼處に立渡り、十方より雨の降る如く、矢を射かけゝれば、世良田も今は是迄ぞと、鎧に立つ所の矢、三

筋・四筋折かけて馬を返し、廿餘町馳付き、味方の勢に加つて、靈山を指して引きにけり。世良田が武勇にて、敵さまで追はざりける故、宗徒の人々、一人も討たれず、無異にこそは引かれけれ。されども手負・死人二千人に餘り、重ねて戰ふべき樣なかりしかば、皆如何せんと驚きける上、義陸朝臣の手疵、以の外苦痛し、飲食共にすたれければ、諸人一向に呆れ果て、さしたる義勢もなし。此時常陸勢、足をもためず押寄せたらば、宮方、靈山に一怺もあるまじかりけるに、小田・佐竹・相馬等、中々異論出來て、佐竹は常州へ引返し、小田も疑義して進まねば、相馬計りは無勢なり。兎角する中に、いよ／＼異議多く、小田も國へ引退けば、相馬は高志山の城を修理して栖籠り、暫く軍はせざりけり。かゝりける間に、宮方の兵、氣をなほし、義陸朝臣の手疵も、日數立ち漸く平癒に赴くにぞ、皆人、安堵の思をなせり。然れども、今年も夏以來雨晴間なく、秋になれば大風吹きて、奥方一向飢饉にて、兵糧の用意もなかりければ、他國へ進發の事は、とても叶ふまじと、城々に兵を籠め、敵に寄られぬ謀のみなり。元中六年七月、打續き凶年にて、敵も味方も只軍を止め、我身をだにも、

南北兩朝御和睦の風聞

首陽の餓に臨まんとす。元中九年十月、南朝勢、いそぎ北朝と和睦あり。後龜山院入洛まし〳〵、三種の神器も、北朝へ渡されし由聞えければ、義陸朝臣を始め、諸大將力を落し、暗夜に燈火を失ひし心地して、呆れ迷ひ居給ひける。いつしか人の心も替りて、南部・下山の一族も、武家の招に應じ、宮方催促に應ぜず。相馬下野守も兄胤顯が招きに隨ひ、高志山へ一所になり、返つて靈山を攻めんとす。岩城刑部大輔忠將も、鎌倉の御敎書に隨ひ、再び武家方となり、宮方に敵の色を立て隙を窺ふ。爰に、下野國に、小山若犬丸とて無雙の兵あり。北朝應永二年、鎌倉の命に背き、小山の城に楯籠りけるをば、鎌倉氏滿、東八箇國の大軍を率ゐ、攻め圍みけるを、小山少しも恐れず、度々討出て、かけ破りたれど、大勢に取卷かれ、力盡きせん方なく、主従廿餘人、奥州へ落下り、田村庄司を賴み、義陸朝臣に謁す。義陸、小山が武勇を愛し、伊達・信夫・田村計りぞ、舊盟に違はず宮方の與力して、無二の心をぞ顯しける。一方の大將に賴まれたり。去程に、鎌倉氏滿・上杉安房守・千葉・宇都宮・武藏七黨・坂東の八平氏・小田・吉原・佐竹・武田・小笠原八州の軍勢、十萬餘騎にて白河城に着く。

催促に應じて、蘆名・相馬・岩城・南部・下山・最上、仙道出羽・奥州の勢五萬餘騎、己が國より直に靈山の城へ攻めかゝらんと、同日に居城を立ち、諸方の早馬、櫛の齒を挽く如く、靈山へ告げ來りければ、兩大將も、今は九死一生の合戰なるべし。しかし對揚すべき勢ならねば、とても懸合の合戰は叶ふまじ。銘々城に籠り、敵の進退する時を待ち、時分を見合せ、追拂ふべしと評定あつて、先づ靈山の城に、義陸・貞方兩大將として、相從ふ人々には、唐橋左馬頭經氏・大江田左馬助・世良田兄弟・由良上總介以下、三千餘騎にて固めたり。赤館の城に、伊達宗朝嫡子松犬丸。大佛城に、田村庄司・大館彌三郎。二本松に、小山若犬丸・一ノ井左京亮。伊佐の城に、桃井治部大輔、伊達勢に豊原九郎栖籠る。七箇所の城々、堀を深うし塀を塗り、所々に櫓をかき、射手を勝つて上せ置き、大木・大石を堀うらに犇と竝べ、敵かゝらば、一度に切つて落さんと、用心稠しく待ちかけたり。鎌倉勢は、八月十日、白河にて十萬餘騎を七手に分けて、七つの堀へぞ向はれける。一方には蘆名盛連・同左京亮直盛一萬餘騎、二本松の城へ向はる。結城親朝父子一萬餘騎、伊佐の城を取圍む。四保の

城へは、千葉・宇都宮が勢、一萬二千餘騎押寄する。信夫へは、武藏の七黨に、上杉左馬助憲光、大將にて一萬餘騎差向けらる。大佛の城へは、最上仙道出羽一國の勢二萬餘騎向けらる。赤館の城へは、南部・下山・岩城・相馬・坂東の八平氏、三萬餘騎にて取圍む。靈山へは、上杉安房守大將軍にて、佐竹・武田・小笠原・小田・吉原を始めとして、都合三萬八千餘騎、靈山の城を百重・千重に取圍んだり。管領氏滿は、三萬餘騎にて、浮勢になつて、弱からん方の味方を助け、入替らんと又白河に控へたり。同十七日の卯の刻より一同に軍始り、寄手も城兵も喚き叫んで、此所を先途と攻戰ふ。射違ふる矢は、夕雨の軒端を過ぐるより猶ほ繁く、打違ふる太刀の鍔音、矢叫びの音は、百千の雷の一度に鳴落つるかと思しく、七手の寄手、三日が間、晝夜息をも繼がせず攻めたりけるに、未だ塀の一重も破り得ず、手負・死人夥しく出來ければ、暫く攻口をくつろげ、心靜に向陣を取つてこそと、相議して軍を止め、面々陣屋を作り、帷幕を引き、逆茂木を結びて、敵をもらさぬ樣に拵へてけり。二本松の城にありける。小山若犬丸・一ノ井左京亮に向つて申しけるは、後詰の賴みもなく、此

城にいつ迄、怺へたりと、さしたる事もあるべからず。後には兵糧に盡きて、思ふ儘にも戰し、又いひ甲斐なく自害せんより、城外へ打出て、敵を散らすか、散らさるるか、死生知らず軍して、討勝つたらば、勢に乘り、諸方の寄手を追捲り、味方の英氣を助けんは、如何あるべきといひければ、一ノ井も、實にも仰の通りにさむらふ。いつ迄惜むべき命ぞよ。九死一生の合戰して、運を天に任すべしと同意して、明くれば九月朔日、城中の老若、數を盡して二百三十餘人、一足も引かず討死せんと、神水を呑んで、辰の一天追手の木戸八文字に押開き、大聲に喚き叫んで、敵の陣へぞ駈入りたる。すはや城中より逆寄せに寄せたるぞ。我一に高名せんと、寄手、四方より馳集り、追取りこめて、餘すな泄すなと、攻戰ふ。小山も一ノ井も、とても生きては歸らじと、兼ねて期したる事なれば、東西へ駈通り、南北へ追廻し、命を塵芥より輕んじて、今日を限と戰ひけるが、討ちつ討たれつする程に、三百餘騎に討ちなされ、小山・一ノ井、一所に馬を打寄せ、暫く息を休め、駈入らんとしける時、小山、一ノ井が耳に口を寄せ、さゝやきければ、左京亮、實にもと同じ、轡をならべ、又敵

の中へぞ駈入りける。寄手は大勢なり、新手を入替へ〳〵戰ひたる。七八度が程、追ひつ捲りつ駈合ひしに、三百餘騎と見えしかど、生殘る勢、五十騎計りには足らざりけり。今は是程ぞと、小山・一ノ井、一手になり、一方に簇立つたる敵五百騎計りを、三方へ追捲り、北を指してぞ落行きける。遁すまじと追ひかけゝるを、恥ある者共、取つて返し討死しけるまに、小山・一ノ井、落延びて會津の若松へぞ入りにける。四條の城に楯籠りたる田村庄司も、大館に談じて、十死一生の戰をなし、運を天に任せんと、八月三十日、城中より打つて出て、千葉・宇都宮が勢と戰ひけるが、大敵、凌ぐに難くして、纔に討ちなされ、今は自害せんとしけるに、大館、暫しと留め、とても死なんずる命なり。爰を討破り、白河へ押寄せ、氏滿に逢うて差違へんといひければ、田村も尤と同心して、討殘されたる者共六百餘人、一方の寄手を駈破り、白河へ向つてぞ進みける。寄手共、後より追懸くれば、大館、後陣に引さがり、防矢射て、兎角して白河近く迄打寄せける。鎌倉勢、之を見て大將の命をもまたず。我れも〳〵と打出でたり。田村と大館と顔を見合せ、につこと笑うて、左右よ

り些とも疑義せず、大勢の中へ割つて入り、蜘手十文字に駈通り、つと駈拔け、隙あらば、氏滿の本陣へ蒐入らんと見つくろふ。敵も遁すまじと、一勢々々打寄せ〳〵追取込んで攻戰ふ。大舘・田村、心は矢武にはやれども、附從ふ兵も、殘り少なに討ちなされ、我身も痛手負ひて、叶はじとや思ひけん。いざや死出三途も、共にこそ參らめと、二人刺違へて死にければ、相殘る勢三十餘人、皆向ふ者に走り懸り、引組引組み討死して、一人も殘らず失せにけり。二箇所の城已に落ちければ、諸方の寄手、愈〻重つて夜晝分たず攻動かす。伊佐の城の桃井も、とても叶はじと思ひて、城に火を懸け紛れ出て、靈山の城へ荅みければ、大佛の城にありける安達安房守も同じく城に火を懸けて、其紛に忍び出て、赤舘の城へぞ入りにける。かゝりければ、鎌倉勢、勇み進んで靈山・信夫・赤舘の城の四方に、三里が間、充滿して打圍んだる事、幾千萬といふ數を知らず、大軍の喚き叫ぶ聲は、天地を動し、山川是が爲めに動搖す。城中の勢は、此勢にも恐れず、命を惜まず防ぎける間、寄手も攻めあぐみ、後には只遠攻にしてぞ居たりける。然れども城は小勢なり。打出てゝ一戰に追拂ふ

迄の事叶はず。今年も戰ひ暮れぬ。明くる應永三年も、籠城に月日を送り、春立ち秋暮れ、又應永四年になりにけり。小山若犬丸・一ノ井左京亮は、兎角して會津邊に身を隱して、時を待つて居たりけるが、いつまで斯くてあるべきと、忍び〳〵に、與力の兵を語らひ、二月の初つ方、五百餘騎を相催し、俄に蘆名留主城を攻取り、近邊を押領しければ、氏滿、蘆名眞盛を信夫より呼返し、討手に差遣しける。眞盛一萬餘騎にて、卽時に會津に立歸り合戰す。小山・一ノ井、勇氣を勵まし、數度敵を驅破りけれども、小勢なれば、次第に軍勢少くなり、四月三日の合戰に、卅二騎に討たれたり。しかも皆、薄手・重手負はぬ者もなかりければ、いざや是迄ぞ　心よく自害せんと、或民家に立入り、思ひ〳〵に腹掻切つて、同じ枕に重り伏し、名を滅亡の跡に殘せり。應永七年三月、信夫の城、兵糧盡き城主太郎重信・同小二郎父子、幷に一族郎從討殘されたる者共、三百七十人自殺し、城に火をかけたれば、一片の煙と燒上りぬ。哀といふも愚なり。明くる應永八年九月、靈山の城も數年の籠城に疲れたる上、是も兵糧に盡きて、皆人首陽の餓に臨む。初は飼ひたる馬共、殺して食

ひけるが、是も程なく喰ひ盡しぬ。食を絶ちて早や二三日にも及びければ、日頃は大功の者と呼ばれたるも、弱り果て足立ち難く、中々に敵と打合はん事、叶ひ難くぞ見えたりける。此體を見て、由良上總介、兩大將の御前に參り、今は如何に思召すとも、此城にて運を開かん事、叶ひ難く覺え候。されども名將、やみ〳〵と御自害候はんも、餘り本意なく候。赤館の城、未だ怺へてある由、承り侍る。今夜、いかにもして忍び出でさせ給ひ、伊達が居城へ兎角して入らせ給ひ、暫く世の有樣を御覽候へと、勸め申しければ、兩大將、暫く思案して、汝が申す所、さる事なれども、抑〻當城に楯籠りしより、七年の春秋を經、行末賴もしからず。我々に忠義を存じ、千辛萬苦せし各へ、恩賞は與へずとも、せめての事に、二人共に自害し、首を敵へ渡し、士卒の命を助くべし。敵へ其由を通じ、攻口をくつろげさせ、各は何方へも、一先づ立忍びて給はれかしと宣ひければ、其座にありける一族郎等、皆感涙を流し、左程迄士卒を哀れみ給ふ事の有難さよ。かゝる名將も、運の盡くれば、かゝる果にはなり給ふかやと、思はず涙に咽びける。唐橋經氏も、兩將の御言葉、理に當つて覺え

候。さり乍ら、古より生は難く死するは安しと、申す事も候。南朝の皇統、未だ京都におはしませば、何とぞ命を全うし、時を待ち、再び義兵を起し、朝敵を討亡さん事こそ、願はしくはんべれ。如何にもして、一先づ落ちて御覽候へ。叶はぬ時、自害せんは安かるべし。いざさせ給へと、餘儀なく勸め申されければ、大將を始め、皆此議に同ぜられけり。されども、世の常にては叶ふまじ。兩大將自害し、自餘は命を赦され、出城致すべき由、敵陣へ申遣し、欺いてこそ闈を出づべけれと、由良上總介、高櫓に上り、寄手に向ひ、城中力盡き、義陸・貞方、士卒の命に代り自害すべく候間、籠城の軍勢を、事故なく出し給はり候へと、呼ばはりければ、寄手の大將、上杉を始め諸大將、之を聞き、士卒の命を助けん爲め、御自害のやう感じ入り候。籠城の軍士は、相違なく見遁し申すべしと、返事したりければ、城中にては大に悅び、扨は欺き易かりけりと、用意をなす。義陸・貞方自害の體を、敵に見せては、敵、闈を開くまじ。我と思はん者は、御命に代り自害して、敵をたばかり候へといへば、世良田美作守・桃井治部大輔二人進み出て、某等、御命に代り參らせ、自害致すべしと申

す。兩大將は、御志の程生々世々忘れ難く候とて、我等、永らふべき命にも侍らず。死出三途にて待ち給へ。運盡きて遁れ得ずば、追付き參らせんと、涙に暮れてぞ宣ひける。落ち行く勢、一所には惡かりけん。分かれ〳〵になつて、落付くべき所は、赤館の城といひ合せ、義陸朝臣、嫡子太郎義行、幷御臺所を連れ參らせ、由良上總介世良田七郎彼是十一人。貞方に從ふ人々には、大江田左馬助・田中兵庫助以下十二人なり。相殘る者共は、思ひ〳〵に、五人・七人一群になり、木戸を開き出でんとす。世良田・桃井二人は、追手の櫓に上り、清和天皇の嫡流新田相模守義陸・同越後守貞方、士卒の命に代り自害するぞ。首取つて勳功の賞に預れと、高らかに呼ばはり、押肌脫ぎ、腹十文字に搔き切つて死にたりけり。寄手共、我先に首を取らんと、爭ひ集まる所を、搦手の門より、兩大將を始め士卒に紛れて落行きけり。唐橋左馬頭經氏は、落行く人々の跡を見送り、見る程の事は見たり。今は是迄ぞと獨言し、緋縅の鎧に、五枚甲の緒をしめ、大長刀を小脇にかい込み、搦手の木戸、八文字に押開き大音揚げて、桓武天皇十八代の後胤、大納言經泰嫡男、左馬頭經氏ぞ。我と思はん

者共、討つて高名にせよやといふ儘に、群つたる敵の中へ打つて入り、思ふ程戰つて、射立てられたる矢、簑毛の如く折立ち、立すくみになりてぞ死せられける。天晴剛の者かなと、惜まぬ者こそなかりけれ。去程に、義陸朝臣は、伊達の赤館へ落ち行きて見給へば、是も敵、百重・千重に取圍みたれば、中々入るべき樣もなし。斯くては叶ふまじ。如何にもして、舟にて伊勢へ上り、北畠殿を賴み參らせんと、海邊へ廻り出でたれども、用意の舟もあらざれば、乘るべきやうもなし。野伏共も、見咎めて怪し者よ、落人よと追蒐けゝれば、由良上總介以下、取つて返し討死しけるまに、虎口を遁れ、何所ともなく、あちこちと立忍び、憂き月日をぞ送られける。明くれば應永九年、赤館の城は、未だ支へて戰ひけるが、去年の秋、靈山の城沒落の由、漸く春になりて聞えにけり。義陸・貞方、自害し失せ給ひたりなんどいふ沙汰しければ、宗朝、諸人を集め、靈山落城して、兩大將討たれ給ふ由、聞ゆるなれど、義陸は心賢き人なり。よも討たれ給はじ。何方へぞ落行き、立忍び給はん。此城、いつ迄怺へたりとて、詮なき事に何かせん。一先づ和睦して命を全うし、義陸の行方を求め

重ねて會稽の恥を雪ぐべしとて、寄手へ使者を立て、和睦の儀を申されければ、寄手も數年の戰、疲れに疲かれ、伊達降りなば、奥州は靜謐たるべしと、衆議一決し、氏滿より本領安堵の御敎書を出され、圍を解いて、寄手、皆己が國々へ歸りければ、伊達は本意ならねど暫く安堵をぞしたりける。時に宗朝、和歌を詠ず。山家の雪といふ心を、

　中々に九十九折なる道絶えて雪にとなりのちかきやま里

應永十年春の頃、義陸朝臣は、未だ奥州の內、爰の禪院・彼處の山寺に使を求め、二夜・三夜隱れ忍びておはしけるが、如何にもして、伊達へ行きて、宗朝を賴まんと度度立出でけれども、鎌倉より義陸・貞方、未だ此世におはする由聞きて、相馬・岩城稠しく探し求めける間、見咎められて到り得ず。さらば伊勢へ上りて見んと、立出でける。女性を伴ひては叶はじと、御臺所には、是迄附添へたる侍二人附き參らせ、道を變へて落しやり、義陸父子、世良田七郎只三人、心細くも、上方を指して上り給ふ。御臺所に從つて行きける者共、とても叶はじとや思ひけん。何所ともなく二

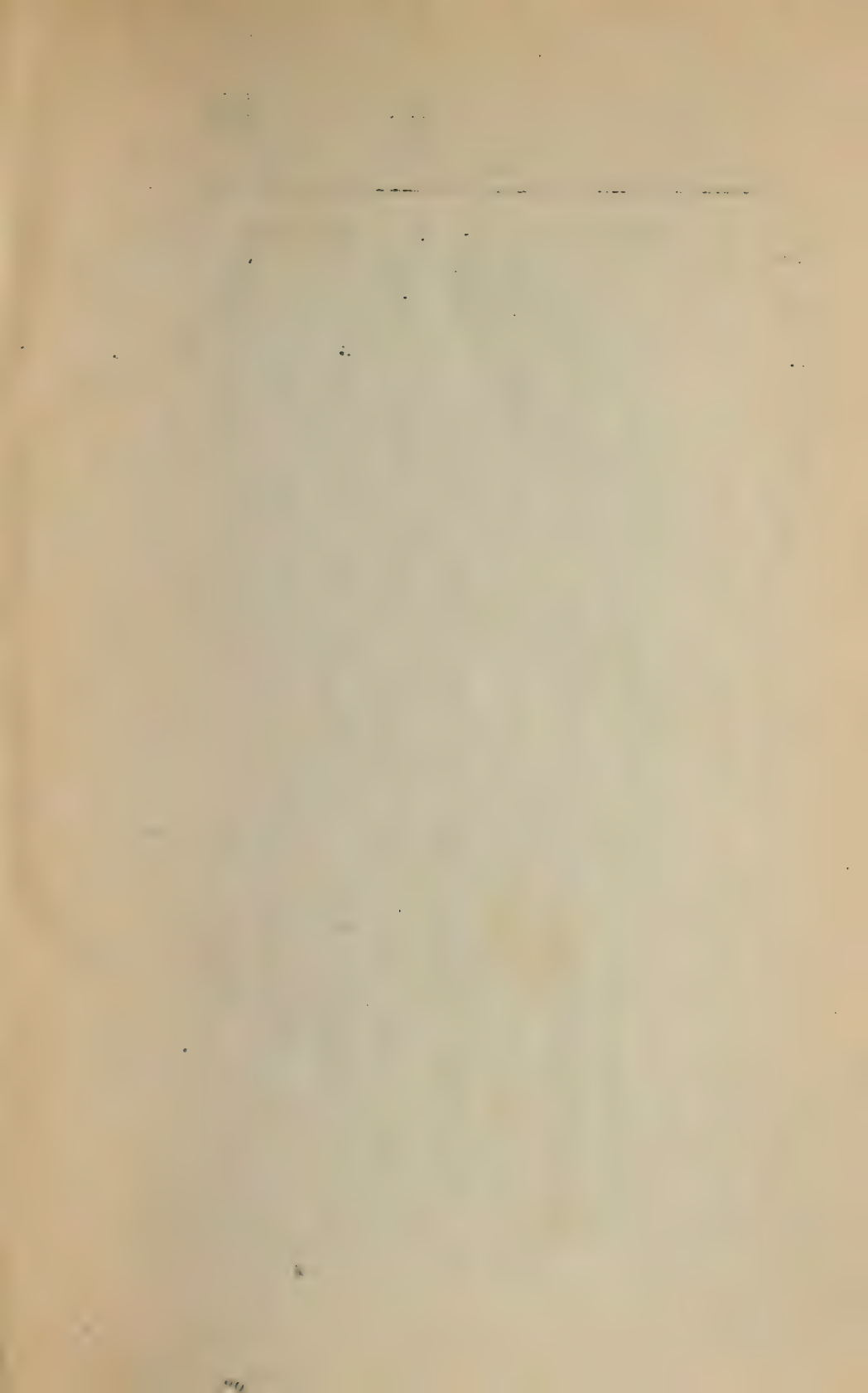
義陸底倉温泉に病を治す

人とも落失せければ、御臺所、詮方なく、あちこちさまよひ給ふを、情ある者のかくまひて、信夫へ送り、世々の墳墓のありける寺にて、翠の髪を剃下し、傍に庵を結び討死せし人々の後世菩提をぞ、弔らひ給ひける。義陸父子は、かくとも知らず、道道の艱難を經て、漸く相模國箱根山迄ぞ落着き給ひける。此所に木賀彦六左衛門とて、故脇屋義助朝臣に、從ひける者の子なるが、ありと聞き、尋ね行きて賴み給へば、父のゆかりとて、おはしましけるこそ有難けれと、世に賴もしくうけがひて、密かなる所に宿し置き、二心なくぞ見えたりける。然るに義陸、いつぞや伊來洲の渡にて、射られたる矢疵再び發し、行歩叶ひ難かりければ、主の彦六左衛門敎へて、底倉の溫泉に浸り給はゞ、疑なく卽時に、平癒し給はんと申しければ、夜に入りて、密に彼湯に浸り給ひけり。所狹き山中なれば、木賀が家に、怪しき人こそあんなれと、誰いふともなく、呼きあへり。其邊の奉行に、鎌倉より置かれたる安藤隼人介、之を聞付け、五月二日早旦に、五千餘騎にて寄せたりけり。世良田七郞一人從ひ居たりけるが、得たりと、太刀を拔いて躍り出て、向ふ者七八人、諸膝ないて打倒し、

義陸父子自盡

世良田七郎自盡

倘も大勢の中へ割つて入り、此處に現はれ彼所に出て、獅子の怒をなし、虎の勢を奮ひ戰ひけるが、其身、鐵石にあらざれば、數箇所疵を被り、とても叶はじと引入りて見れば、義陸父子、人手にかゝらんよりはと、差違へて死し給ふを、首を敵に渡さじと、戸板・障子二三枚、上に打重ね、家に火を懸け、煙の內にて腹掻切り、炎の中へ飛入りてぞ失せにける。討手の者共、初に懲りて、左右なく討入らざりけるが、家に火をかくるを見て、我れも〳〵と込入りたれど、あたりへは、恐しくして近づきかね、跡にて火を打消し、燒けたゞれたる首を拾ひ出し、鎌倉へぞ參らせける。貞方朝臣は、兎角して遁れ廻りて、おはしましけるが、應永十七年、千葉介が爲め、捜出され生捕にせられ、由比ヶ濱にて切られ給ひにけり。天、忠信の誠を照らさず、空しく小人の手に死給ふ。哀なりし事共なり。

底倉之記　大尾

大正五年二月廿二日印刷
大正五年二月廿五日發行

不許複製

國史叢書
安見太平記　全
芳野拾遺物語　全
櫻木物語　全
三人法師　全
細々要記　全
底倉之記　全

定價金一圓

編者　黒川眞道
發行者　國史研究會
代表者　小瀧淳
東京市本郷區駒込林町二二四番地
印刷者　福山福太郎
東京市牛込區西五軒町五二番地
印刷所　福山印刷製本所
東京市牛込區西五軒町五二番地

發行所　國史研究會
東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番